

～現代艦隊の転生記～

零城

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分から意見を言えない人へ上月 穂村へ、とあるバイトのいきこぎで濡れ衣をかぶせられて落ち込んでるところに友人から電話があり、皆と飲んでいたら

突然、意識を失い気が付いた時には海の上に立っていた!?

?? 「え、ここどこ?」、?? 「・・・改造したいですねえ」、?? 「わからないけど、とりあえず殴ればいいんだろう? (!?)」、?? 「こ、来ないでください!!」、?? 「ちよっと、ユニコーンちゃんに会ってくる」

これはそんな五人の愉快(?)な仲間たちの物語である

R18版です

https://syosetu.org/novel/260769/

外伝です
https://syosetu.org/novel/262259/

目次

第零章 始まり

前々夜 | 1

前夜 | 17

設定編 | 41

第一章 いざ！基地生活！

邂逅 | 50

どうしようか？ | 66

レッツアズールレーン本部へ!! | 81

歓☆迎☆会 | 94

母港案内 | 120

演習 | 131

現代艦隊の日常 | 143

第二章 運命の出会い

対決、そして出会い | 154

勝負 | 171

再開 | 195

そのあと・・・ | 212

塔を守りし二匹の白き兄弟鳥 | 226

兄弟(?) 鳥と転生組と母港の皆と… | 238

そうだ、海に行こう | 256

大規模鏡面海域攻略作戦 前編 | 278

大規模鏡面海域攻略作戦 中編

大規模鏡面海域攻略作戦 後編

大規模鏡面海域攻略作戦 後編

306

第三章 救い

h a t r e d ・ s i n

324

r e p e n t a n c e

344

j u d g m e n t

362

A t o n e m e n t

386

記憶を失くした破壊者

404

そう呼ぶ理由

418

番外編1 天喰のシヨタ化事件

前

編

430

番外編1 天喰シヨタ化事件 後編

迫りくる魔の手

復讐

481

第四章 帰るべき場所

告白

504

番外編2

o p e r a t i o n n a

me: ☆ユニコーンの初めてのお使い大

作戦☆ 前編

531

番外編2 o p e r a t i o n n a

me: ☆ユニコーンの初めてのお使い大

作戦☆ 後編

544

ただいま

563

デート!! 午前の部

578

デート!! 午後の部

翼の生えた一角獣

再臨する救済者

デートその後!!

642 629 613 593

第零章 始まり

前々夜

やあ!!みんな!!俺の名前は上月 穂村!!彼女いない!!年齢なポツチの18歳だ!!
ん?何だい?「そんなポツチが急にどうした?」つて?

ああ!そんなことかい!!そうだねえ... これでスレ立てるとしたらだなあ...:

【悲報】 K O K O D O K O ! ?

それは数時間前にもなる……

上月「あー、疲れたあーー」

この日、物語の主人公である上月は何をしていたかというところ……

上月「なんで、日曜日の朝から深夜までバイトさせられてんだろ……」

そう、それは家にて大学もたまたま授業もなく、久しぶりに家でだらける日だ!!

っと思った矢先、

プルプルプル

上月「ん?」

上月は両親はすでに他界しているので、基本的に電話は鳴らないが掛けてくるのなら数少ない(4人)友人ぐらいだがそこに映っていたのは

〈クス SUVARASSII先輩〉

上月「うええええ」

電話の相手に出たのはクス……じゃなくて宇摩 史家、俺のバイト先の先輩だ。

なぜこんなにげんがりとしているかというと

上月「俺、あの人のちゃんと働いているの見たことがない気がする…。」
 そう、宇摩先輩は根っこからの黒い人でサボり、恐喝、責任転換の激しい人だった。
 俺も何回イジメやら擦り付けを受けたんだろう…。

まあ、これででなくもまた掛かってくるから出たほうがいい気がした。

ガチャ

上月「はい、上月でs『おせえわ!!鳴ったら1秒で出る!!』…すみません…。」
 はい、出たあ…ほんつと、いやだわあ

この人、自分のほうが少し先輩なだけなのに威張り散らしている人なんだよなあ…
 バイト変わってとか起きそう…

宇摩「まあ、いい。お前こんどの日曜休みか？」

上月「はあ、休みですけどd「じゃ、俺用事があるからよろしくな!」…は?」
 俺の恐れた事態が起きてしまった…

上月「え?今度って明日じゃないですか!？」

宇摩「いいから、シフト変われ」

翌日

バイト現場到着

店長「……………」

上月「……………」

来て早々重い空気になっている。店長の顔はもはや俺の価値に興味がなくなったの如く暗かった

店長「……………なんということをしてくれたんだい？上月君？」

上月「……………」

店長が言うには先輩が昨日バイト先でふざけているのを自分でSNSにふざけて投稿したらたちまち炎上しこのバイト先まで特定されてクレームが出続けていた

責任を問われた先輩は「自分はやっていない、上月に脅された」と

先輩は店長の甥なのでやるわけがないというわけで先輩の言葉を信じ、俺に濡れ衣をかぶせているわけだ。

フザケルナ

オレハナニモシテイナイ

店長「きみはねえ、いくら彼がまじめに働いているのにこんなことをするなんて、よくサボっているきみがやることは嫉妬かい？」

違う、サボっているのはアイツだ。

店長「それか、彼をあげることで彼を辱めようとしたのか？」

ウルサイ、おまえこそ店長なのに1か月に1回来るか無いかぐらいしか来てないくせ

に・・・

店長「他の店員は彼はまじめで、仲間思いだつて好評だから泥を塗ろうとしたのかい？」

チガウ、そいつらはアイツにいじめられて手下に入れられたやつらだ

店長「この責任どうとつてくれるんだい!？」

オレハ・・・ナニモ・・・

上月「申し訳ございませんでした・・・」

結局、(自称)心の広い店長が朝から閉店まで働いたら許すといわれ働き深夜に終わった

疲れた・・・ いや、本当に疲れた・・・ 肉体的にも精神的にも・・・

上月「はあ・・・」

早く帰つて、スマホしよ

つと思つた矢先、

「アレ〜w?これはこれは今日バイト先で怒られた上月君じゃないですかあw」

振り返つて、そこにいたのは

宇摩だった

上月「・・・何の用ですか、先輩」

宇摩「いや、なにいwせつかくこの優しい先輩が慰めに来たのにいwその態度w」

上月「・・・アレ、先輩のせいですよね」

宇摩「アレエw?何のことおw?」

上月「・・・とぼけないでください」

宇摩「いや、知らねえしいw」

・・・この人、相変わらずだな

先輩と話しているとそこへ

「えw?ちよつと待ってどうしたんw?」

金髪のガラが悪そうな女性がたばこをふきながら来た

宇摩「あ、メンゴwメンゴwちよつと先輩にあつたけん話してたわw」

女性「ふーん、あ!君があの上月君ねえw」

なんか、言い方にイラって来た・・・

上月「・・・そうですが?」

女性「聞いているよおw頭悪くて宇摩つちがいないと何もできないポンコツ君w」

宇摩「ちよつwそれは言い過ぎでしょおw俺はあくまでこいつが休んでしまつても積

極的に働いているだけだからあw」

上月「ツ!!違います!!それは先輩は恐喝とかしていい(バキイイ!!)痛!!」
宇摩「うるせえんだよ!!さつきから口答えすんじゃないやねえよ!!俺がそういつたからそうなんだよ!!」

上月「・・・ちが!!」

宇摩「あ!?!なんだよ!?!」

上月「!、、、なんでもありません」

ああ、また自分の悪い癖だ

自分の意見が言えずに相手に譲ってしまうくせだ・・・

宇摩「お前はずつと俺の身代わりでいればいいんだよ!!」

上月「すみませんでした」

宇摩「わかればいいんだよ!!・・・いくぞ」

女性「バイバイーw、上月君w」

こうして、あの二人は夜の街に消えていった

上月「いつてえ」

あれから、家に帰って殴られたあとの治療中だ

殴られた後はひどく腫れていた

なぜ、バイトを辞めたり警察に相談しないのかっというところ、今のバイトを辞めたら生活が困ってしまうし

前に警察に相談したがアイツの親は警察のお偉いさんで何をされるのかがわからな
いので乗ってはくれなかった

寂しい

それだけだった

15のときに両親は病死したため親もいないし兄弟もいない、家でもどこにいても悩みを聞いてくれる人もいない

上月「悲しい・・・」

そして、寝ようとしたとき

プルプルプル

上月「?、だれだ?こんな真夜中に?」

そう、今深夜の1時だ

こんな時間に電話をかけるなんて、アイツは夜どうせ忙しい友人でこんなバカなことをする奴なんているわけ・・・

いや、いるな一人

でも、さすがにここまでバカなことにはしないだろう(多分)

じゃあ、だれだ？

上月「……………もしもし？」

「おー！つつきー！久しぶり!!」

……………しないっていったよな？

……………あれはU☆S O☆D A

してきよお、つか昔よりアホになってね？

上月「……………なんのようだよ、トミー」

そう、アホの申し子トミーのこと富崎 護

こいつ、めっちゃアホなのに俺と同じ高校に進学できたやつだ……………

しかもそこそこの……………

ナンデ？

富崎「なんか、バカにされた気がするけど……………

まあ、いいや。久しぶりに遊ぼうぜ!!」

は？ナニイッテンダコイツ？頭逝ってしまったんかいな？

……………つて、そんなことより

上月「おま、今何時だと思ってんだよ……………」

富崎「え？深夜1時？」

やっぱりアホはアホだった・・・

上月「なんで、こちとら疲れてんのに遊ばいかんの・・・」

富崎「なんか、つつきー悩んでる気がしたもん」

おまえ、エスパーかなんかなのか

上月「・・・」

富崎「お？ 凶星？」

上月「うるせえ、俺は疲れたから寝る

こちとら、忙しいんじや」

富崎「ちよ!! 下田たちもいるのに!？」

ピクッ

そう、トミーもそうだが下田と後の二人も中学からの親友だ

よく、学生のころはいろんなことしでかしたなあ

女子のスカートめくったり、授業中に早弁したり、自転車のペダル生徒分外してみなを困らせたりすんの楽しかったなあ

なんか、会いたいなあ

富崎「うーん、つつきーも仕事で忙しいなら別の日n「やっぱり行く」来るの!？」

上月「ああ、今から行く」

上月「よお、久しぶりだな皆」

富崎「おっせーよ!! つつきー!!」

下田「久しぶりだな、相棒」

黒鐘「・・・・・・久しぶり」

城木「よ、上月・・・」

久しぶりに会う面子だ

【アホの申し子トミー】 富崎 護

【真面目過ぎ屋下田】 下田 昴

【口数少なすぎてわからないクロ】 黒鐘 新

【みんなの兄貴シロ】 城木 飛鳥

・・・うん、何度あつても濃いな面子

富崎「そんじゃ! 久しぶりの再会を祝ってー!」

一同「乾杯!」

上月「・・・乾杯」

城木「いやー、変わんねえな！皆！」

下田「そうだね、こうやってあってもみんな変わんないね」

富崎「そうだな！」

下田「でも、一番変わんないのはトミーがアホなことかな」

城木「プツ!!そうだな!!」

富崎「ちょ!?!ひどくね!?!」

城木「じゃ、お前が一番得意なのは？」

富崎「料理!!」

黒鐘「・・・ちなみに、特異料理は？」

富崎「カツラーメン!!」ドヤツ

下田・城木・黒木「二・・・」

富崎「え、なに？その哀れにみる目は？」

下田「トミーそれ、料理じゃない気がする・・・」

富崎 「なんでや！お湯沸かして入れるから料理や!!」

城木 「いや、トミー料理ってそのーなんだ・・・愛情とかやと思う・・・」

富崎 「嘘やん!!ねー！つつきーも何か言って!・・・つつきー?」

上月 「・・・」

富崎 「つつきー?」

上月 「・・・」

富崎 「つつきー!」

上月 「ツ!?ごめん、考え事してた」

富崎 「どうしたの?電話の時もただけどらしくないよ?」

城木 「そうだぜ?なんかこの世の終わるみたいな顔をしてたぜ?」

下田 「そうですね、相棒?相談ならのりますよ?」

上月 「・・・いや、大丈夫さ」

黒鐘 「・・・また、一人でため込んでる・・・」

下田 「相棒、言わないほうが余計心配しますよ?」

城木 「そうだぜ?もうはいちまおうぜ?」

上月 「・・・そうだな」

「みんなに今日のことをしゃべった」

富崎「え、クソヤンその人」

黒鐘「人として屑ですな」

城木「ちよつとアイツ〇してくる」

うん、なんとなく予想はしていたけど

とりあえず、城木落ち着け

上月「いや、みんな別にいいよ終わったことだし」

下田「いえ、だめです。裁判にかけて極刑にすべきです」

ヤベエって、下田さんまじヤベエって

城木「いや、社会的に〇そう」

もつとやばい人がいたわ

富崎「つつきー、なんでもつとはやく相談してくれなつかたんだ？」

上月「……でも、皆に迷惑かけたくないし……」

城木「俺たちの仲はそんなものだったのか？」

上月「ツ!!」

下田「そうですよ、学校でよく遊んだ（主に悪いこと）した仲じゃないですか）
いや、おもに主犯は富崎と城木じゃ？

でも、まあ

上月「ありがとう皆・・・」

前夜

テレビ「……………」ご覧ください!!、あれが先月進水したばかりの海上自衛隊所属の新型原子力空母【天喰】です!! 4年前、終戦してから海上警備のためという理由で建造された【天喰】ですが一部団体が「侵略目的だろう!!」や「また、戦争を起す気か!」など批判するコメントが出されていますが真相はいかゞへブチツ!!」

城木「……………」つたく、どこもかしこも反対かあ」

下田「仕方ないですよ、なんとたつて原子力空母なんですから」

黒鐘「……………」あの戦争が原因……………」

富崎「……………」だよねえ」

そう、なぜいきなりこんな会話になったかというところ今日のテレビで【天喰】の特集があると聞き（ミリオタである）みんなで見ようとしたら生憎、ワイドショーみたいな反対する番組だった

ちなみに、なぜ【天喰】が建造されたかというところ

現在、2061年

今では平和に戻りつつあるがこの12年前にとある戦争が起きた・・・

それはのちに「日本防衛戦争」とも言われた事件が起きた。

2048年、隣国の長きわたる戦争が終戦し統合されたがその翌年に統合軍は突如日本に宣戦布告した

当初は対馬などの近い島々から侵略され自衛隊は防衛しかできなかつたが統合軍が北部で開発していた新型ミサイルを発射、東京など主要都市部に着弾、都市は壊滅に等しかった

これを重く見た国連は統合国に制裁、国連軍（米・英・仏・中・露）の派遣を決定
結果は統合国で終戦派のクーデターが起き統合国は降伏、占領していた島は返還された

日本は戦力の増加を図り、空母の建造を開始しアメリカに打診

アメリカはアジアの安全を願うので日本にさらなる戦力の提供を決定（F-22は流石に無理だった）

しかし、日本は現代空母を造る技術がないのでアメリカの退役予定の原子力空母を購入

そして、日本伝統の魔改造をした結果

できたのが原子力空母【天喰】だった

上月「……でも、かつこいいいなあ」

下田・城木・富崎「だよねえ」

ピコピコ

城木「ん？黒鐘か、なにやってだ？」

黒鐘「……アズレン……」

城木「え、お前まだやってんの？」

下田「もう、割と古いよね？」

黒鐘「……でも、お前らもまだやってるよね？」

富崎「……いやまあ、やってるけど……」

上月「え？俺、最近艦〇れしかやってねえ……」

黒鐘「……クロス」

上月「ふあ!?え、ちよ、ま!?ハナセ!ハナセバワカル!」

黒鐘「(#。D。)ウツセエ!!ブッコロスゾテメエ!!」

下田「……なにやってんですか……」

上月と黒鐘が戯れて、下田が呆れている

「すみませんでしたああ!!」

「・・・へ？」

ロリ? 「煮るなり焼くなりしてくださいいいいい!!!」

上月 「ちよ!ちよつと待ってください!!お、落ち着いて!!」

ロリ? 「そ、そうですよね!!」

上月 「はい、吸ってー」

ロリ? 「スーーう」

上月 「はい!止めて!」

ロリ? 「フツ!」

上月 「いや!マジで止めないでください!!」

ロリ? 「なんやそら!」

け、結構にぎやかな人だな・・・

ロリ? 「って!人ではありません!これでも“神”です!」

へ?この人神だったの!?

ん？待て、その神がどうしてここに？

神「実は・・・・・・・・・・・・・・・・」

私はあなたを死なせてしまいましたああ！」

上月「うん、うん？」

おい待て、今この神死なせたって言わんかった？

上月「そ、それってどういう」

神「じ、実は・・・・・・・・」

回想シーン

同僚「おーい！神子（ロリのこと）！！キャッチボールしようぜ！！」

神「うんいいよー！！」

同僚「お前、ボールな！」

神「はい!？」

それは神としての仕事中の昼休みでした・・・

同僚とキャッチボールをして時間を潰してたんですが・・・

同僚「神子、相変わらず肩弱いな」

神「う！うるさいな!!肩が上がらないだけよ!!」

同僚「・・・四十肩？」

神「ちやうわ!!私は永遠の10さいよ!!」

同僚「いや、お前實際いちま_n」わー!わー!聞こえないー!」・・・難聴?」

神「ちげーわ!!」ブン!!!

同僚「ちよ!どこ投げてんだよ!!」

私は怒りのまま思いつき投げたんですが、ボールは明後日の方向に進んでいってし

まい・・・

同僚「つたく、どこにやったんだよ・・・ボール・・・」

神「ううう、ごめん・・・」

同僚「あと少しで昼休み終わるのに・・・え?」

神「どうしたの?」

同僚「……なあ、ボールこっちの方向に飛んで行ったよな？」

神「うん？」

同僚「なあ、これって……」

☆この先、人間界☆

同僚「ま、まさか……」チラッ

ウワー！、ナニカフツテキタゾー！

ケガニンハイナイカー！

コノハヤニゴニイタゾー！

ダメダア！シンデルウ！！

同僚「なあ、神子」

神「う、うん……」

同僚「お前、やらかしたな」

神「ウソン」

回想終了

神「……てなわけです」

うん、おけー

えー、つまり

キャッチボールしてたら

←

ボールが明後日の方に行き、

←

そのまま人間界に行き

←

隕石になって俺たちのいたところに当たったと……

うん、おk

大きく息を吸ってー

上月「は嗚呼ああああああああああああ!!」

神「すみませんでしたあああ!!」

拜啓、お母さん

僕は

流れ星に当たって死にました☆

数分後・・・

上月「よし、落ち着いたわ」

神「本当にすみません・・・」土下座orn

ちなみに隕石が落ちた場所は運よく他の人は俺たち以外助かったらしい

うん?俺たち以外?

上月「あの一・・・富崎たちはどうなったんですか?」

神「その方なら、後ろにいますよ?」

え、まじ?

そうして、後ろを向くと・・・

一同「「「「「知らない天井だ・・・」」」」」

うん、この言葉って全人類共通なのかな?

とりあえず、こうなつた理由を説明するか・・・

〈少年説明中〉

上月「んで・・・かくかくしかじかうまうまどらとらつと」

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？意外とみんな落ち着いてい「はあああああああ!!」んなことも無かつたわ・・・・・・・・

神「本当にすみませんでした・・・・・・・・」

下田「・・・・・・・・ちなみに俺らはこれからどうなる？」

神「えつと・・・・・・・・皆様には私の責任なので“転生”してもらいます」

一同「!?!」

嘘やん!? 何このテンプレ展開!?

黒鐘「……ちなみにどこに?」

神「えつと……すみません、行く場所まではランダムなのでわかりません……」

おいおい、神ってなんやったんや……

つか、クロお前どうした? さっきからソワソワしてるが……

城木「俺たちは離れ離れになってしまうのか?」

神「それはないです」

それに関してはよかったわ……

それぞれに飛ばされたら飛ばされた世界が心配になる……

特にトミーが……

上月「……最後に俺から、記憶は? 性別はどうなる?」

神「記憶はそのまままで性別は急に女性になったら何かと困りそうなので男性です」

よかった……体が女性で心が男やったらアーリー♂になるから……

富崎「あれ? 特典は?」

神「それは転生した世界に合わせて与えます」

うーん、男性で転生か……ファンタジー系の世界になるのかな?

まあ、艦これとかアズールレーンじゃなくなっただな

あ、心なしかクロの顔しよんぼりしてる w

神「それでは皆様、準備はできましたか？」

下田「そういえば、神様はこれからどうなるんですか？」

神「・・・・・・・・・・・・・・・・反省文一万枚と一年間昼休み
没収と無給です」

下田「oh・・・・・・・・」

神様もそこそこやばかった・・・・・・・・

上月「そんじや、皆行くか？」

コクリ

よし、皆できたな

上月「それでは神様短い間でしたがお世話になりました」

神「はい！私ももうミスしないようにします！」

こうして、俺たちは行く決意ができたわけだが・・・

どうやって、いくんだ？

神「あ、転生はその穴から行ってください」

そして、そこにあつたのは・・・

なんか、どこかで見たことのある“緑色の土管”だった

・・・ナニコレ

下田「ナンスカコレ」

神「それは先代の神がデザインしたものですが・・・」

いや、先代何やってんだよ・・・

怒られるぞ、主に赤い配管工から・・・

神「それでは行ってらっしゃいませ」

こうして俺らは入った

(そして、現在に至る)

あ、そうか。そうやったな、えっとつまり皆もいるはず……

?? 「うー、いつてー」

?? 「結構、痛かったわー」

?? 「……」

?? 「ふう、相棒たちはどこでしょう?」

お! 向こうからみんなの声が聞こえるぞ

こうして、皆の声が聞こえたほうに向かったが……

「」「え、だれ?」「」

あ、そういえばあの神「性別は変わらない」けど「姿までは変わらない」って言ったな
かったな……

城木? 「え、待ってその声は……」

下田? 「おや? その声は?……」

富崎? 「お! おーい!……」

黒鐘? 「……この聞きなれた声は……」

「『昇龍』と『東海』と『曇天』と『月影』!!」

「『アレ?』」

・・・・・・・・・・・・・・・・ん?

今、あいつらなんていった?

明らかに名前間違えてるだろ・・・

上月? 「何やってんだよ・・・お前ら・・・」

昇龍・東海・曇天・月影 「『え、どちら様?』」

何言ってるんだ? こいつら?

上月? 「はあ、どうしたんだよお前ら? 俺の名は」

そう、俺の名前は上月 穂村だ!!

上月? 「お前らの長年の親友、

原子力空母【天喰】

だ……ろ……？」

……あれ？

今、俺なんていった？

（少年たち情報整理中……）

天喰「なるほど、つまり皆は

俺こと上月↓原子力空母【天喰】

真面目なこと下田↓航空巡洋艦【東海】

みんなの兄貴こと城木↓改イージス艦【曇天】

アホの子こと富崎↓ステルス護衛艦【昇龍】

無口マンこと黒鐘↓潜水艦【月影】

つてことになるんやね？」

東海「そういうことになりますねえ・・・本来の名前がなぜか前の世界の軍艦の名前に自動的に変えられるのは残念ですが、どれも前の世界の最新鋭軍艦ですよ!!」

と目を輝かせながら語る東海

曇天「にしても、みんな声は変わらないけど姿が変わりすぎてるだろ・・・」
そう、一番の問題が姿である

全員、前の世界では普通の大学生らしい姿だったが今は・・・

東海「・・・そうですよねえ」

東海は一言で言うなら帝国騎士のような恰好をした鋭い目をした青年だった
例えるなら、軍隊の表彰式で上の人が着ている恰好だった

曇天「どうなってんだこれ？」

曇天は海上自衛隊の海上迷彩の戦闘服を着ているヤンキーのような青年だ

月影「解せぬ」

月影は垂れ目でいつもやる気を感じさせない気ダルそうな青年だ
ちなみになぜか忍者みたいな恰好をしている

昇龍「……なんか俺、縮んでね？」

そして、この中で一番の変わりようは昇龍で

まず若くなっている、多分見た目15くらいに若返ったと思う

そして、背が縮んでいる男の娘みたいな少年に変わっていた

恰好は全身灰色のフード付きコートで覆っていた

天喰「女の子？」

昇龍「ちげーわ」

あと、俺の恰好は和服で髪が銀髪になって腰に大きめの扇と刀を携えていた

東海「それで、これからどうします？」

曇天「そうだな、どうする？天喰？」

天喰「は？なんで俺なん？」

東海・昇龍・曇天・月影「「「なんとなく」」」

はく？なんでさ？

天喰「……とりあえず、海の方に出るか……」

月影「……ここ海だぜ？」

天喰「ホワツツ!？」

今気づいたけど、俺ら海の上に立ってるやん……

東海「え？なにこれ？どういう原理？」

曇天「と、とりあえず進んでみるぞ……」

曇天が前に進もうとした瞬間!!

ピカ!!

曇天「うお!?!なんだ!?!」

光が収まって曇天の方を向くとそこには

なんかの装備を付けている曇天がいた……

一同「(。 皿。) !?!」

昇龍「え、ドシタ!?!曇天!?!」

曇天「ウオ!?!ナニコレ!?!」

月影「……………俺たちも、変なのついてる……………」

昇龍「マジやん!？」

東海「……まるで軍艦の装備みたいですね……」

曇天「……ではなく全員なんかがついてた……」

曇天は四つのアーム（艦これで言う大和型戦艦の艤装）に箱がついていて、手には6式小銃に似た武器を持っていた。

東海は大きめの二つのアーム（アズレンで言う高雄型の艤装）に片方は板でもう片方は箱がついていた。板の上には飛行機のミニチュワ？が置いてある

月影はなんか……オー○ウオツチに出てくるゲンジを少しメカらしい部分をなくした感じだが……装備はジンベエザメ？のメカ版を抱えていた

昇龍は灰色の雨具ほいところの腰部分から武装が生えていた。武装は平面が全体的に多い

俺の装備は和風袴に大きめの長弓に腰部分に板があるがなぜか東海みたいのではなく燃えて？いる

東海「……なあ、天喰」

天喰「……待って、なに言おうとしているのかがわかったわ……」

天喰・東海「「この世界、艦これかアズレンじゃね？」」

他三名「え、マジ？」

そう、もう読者の皆は気づいている（遅いわ）だろう。

俺たちはあの女性（指揮官・提督は除く）しかない世界にきてしまったのだ!!

曇天「え？でも、俺ら男だぞ？」

昇龍「でも艀装があるから艦娘？かKAN—SENじゃね？」

月影「…………艦娘ではなく“艦息”だと思う…………」

昇龍「あ、そか…………」

だが、ここで1つ問題ができた…………

天喰「俺たち、この世界の住民と接触して大丈夫だろうか？」

そう、俺たちは形でも“男性”だ

ここの住民と会って珍しいから捕まえて実験されたりされそうだが…………

東海「それはないでしょう、どちらも全人類の敵と戦っているんですから」

まあ、それもそうか。どっちも深海棲艦かセイレーンとかやし

東海「しかしこの装備恐らくですが、前の世界の軍艦の装備ですね。曇天は改イージ

ス艦の【曇天】ですね。」

曇天「え、あの？」

東海「昇龍はステルス護衛艦【昇龍】ですね」

昇龍「おー！最新のだ！」

東海「月影は潜水艦【月影】ですね」

月影「(*、ω、*)」

東海「で僕東海は空bじゃなくて航空巡洋艦【東海】ですね。しかし、天喰は明らかに……」

天喰「……あの空母だよねえ……」

うん、名前の時点で察してたけどめっちゃ批判された原子力空母【天喰】じゃん……
といういろと調べていると……

曇天「うん!? 2時の方向90キロ先に何かいる!!」

え? どうしてわかったん?

曇天「なんか、頭の中ですくすくレーダーみたいのが出てきてわかった」

あ、曇天ってイージス艦やったな

そりゃあ、わかるもんか

曇天「ンで、どうする旗艦さん?」

え、いやだからなんで俺?

月影「批判されても、空母だから……」

……確かに空母は大体が旗艦になるけどよ……

天喰「ま、いやいやしても進まないから行くか……」

全艦、2時方向、速度最大船速!!」

全艦「了解!!」

こうして、俺たち海上自衛隊艦隊（仮）は進んでいった・・・

設定編

登場艦艇

SDE 改あぶくま型ステルス護衛艦【昇龍】

排水量

基準：2,000t

満載：2,900t

艀装

VLS：8基

VLA：6基

SAM：6基

CIS：4基

RAM：2基

主砲：Mk45 5インチ砲 一門

艦載ヘリ：SH-60J 2機

対レーダー無効化ジャミング装置

2055年に進水した最新鋭軍艦の【昇龍】

この船の運用目的は主に哨戒、人質救出、奇襲攻撃を目的とした船

搭載されている対レーダー無効化ジャミング装置は敵の航空機レーダー、艦隊のレーダーやロックオンを無効化、逆に敵の通信などをジャミングをする

船体の表面にはF-22でも使われているステルス塗料（ライセンス生産）が塗られている

しかし、ステルス性を重視しているため装甲はすごく薄い・・・

米国との訓練では突然消えたり急に現れたり味方との通信ができなくなることから Sea Raptor（海のラプター）とも言われている

ちなみにSDEのSはステルスのSである

もう、彼一人でいい気がする（作者談）・・・

SS たいげい型潜水艦【月影】

排水量

基準：2,950t

満載：4,200t

艀装

魚雷発射管：4門

2041年に進水したりチウムイオン電池搭載潜水艦

これつとといった装備はないが高い練度と多种作用な魚雷を誇っておりいまだ現役
ちなみに米国との訓練で一番呼んでほしくない1位があつたとかかなかつたとか・・

曇天型改イージス艦【曇天】

排水量

基準：7・9000t

満載：9・8000

艦装

主砲：54口径127ミリ単装速射砲

VLS：12基

VLA：4基

SAM：8基

RAM：4基

CIS：6基

2050年に進水した日本版改イージス艦

改イージス艦とは従来のイージス艦よりレーダーを大型化、ミサイルセル増設、装甲を増幅

と頑張れば衛星軌道上にいる偵察衛星より高い高度を観測できる

運用目的は敵ICBMの迎撃、敵偵察衛星の撃墜、もちろんレーダー範囲は広がっているのでトマホークなどの対艦ミサイルも打てる

このことから「動く大型レーダー基地」とも言われている

しかし、装甲を増幅しているので本来のイージス艦より速度が遅い

西宮型航空巡洋艦【東海】

艦装

VLA : 4基

SAM : 6基

CIS : 4基

RAM : 3基

艦載機

F-35JB:20機

SH-70J:15機

2040年に進水した巡洋艦

元であったヘリ空母【西宮】を改装し対空、対潜機能を追加

さらにライセンス生産したF-35JBを運用

このことから国内外、野党から「空母だろ!？」と批判されているが

与党は「艦首と艦尾にCIWSとRAMあるので巡洋艦だからセーフ!!」とコメント

したい

……うん、もう彼一人でいいのでは？（二回目）

「(元)ニミッツ級」天喰型原子力空母【天喰】

艦装

SAM : 2基

RAM : 3基

C I W S : 3基

艦載機

F/A-18J E/F : 30機

F-14JD : 25機

A-10JC : 10機

F-3C : 40機

F-4DJC : 4機

E-767 β 型 : 1機

計110機

日本がアメリカから買いつとた元ニミッツ級原子力空母のうちの一隻だが、日本の技術者（変態）が改造し改装されてしまった（かわいそうな）空母

艦載機までもが技術者（変態）の餌食となり載せているため、軍関係者から「変態空母」とも呼ばれている・・・

飛行甲板には電磁カタパルト装備している

艦載機一覧（日本の技術者被害者の会）

F-3C 【心神】

防衛省が開発したステルス制空戦闘機

C型は空母発艦しようになった

形状はYF-23

F-35JB 【ライトニングii】

日本がライセンス生産と改良した機体

旋回範囲が狭くなっている

F/A-18J E/F 【スーパーホーネット】

日本が戦争をしたのちアメリカから特別に許可された技術提供された機体

マルチロール機なので爆撃でもドックファイトもできる

F-14DJ 【トムキャット】

こちらもアメリカから来た機体

一応ドックファイトもできるが巡航ミサイルなど大型兵器も装備可能に改造された

ため攻撃機扱いされる

トマホーク運用もできる

A-110JC【サンダーボルト】

・・・なぜか海の向こうから来た戦神

もちろん技術者のせいで艦載機にさせられた子

性能は・・・お察しを・・・

みなみに一部のファンから「空飛ぶ戦う中学生」とも言われている

F-4DJC【ファントム】

もともとあったF-4DJを艦載機にした機体

島の偵察が主な任務

・・・やったね！おじいちゃん！！

E-767 β 型【スカイアイ】

空母発艦できるようにさせられた早期警戒管制機

SH-70J【海猫】

日本がSH-60を進化させた結果できてしまった大型機体

哨戒、対潜もできるし地上の制圧にも使える

武装は

12・7mmガトリング二門

対潜短魚雷4発

ヘルファイヤ2発

ミサイル

対空

スタンダード SM-3

シースパロー

対潜

アスロツク

対艦

ハーブーン

08式対艦誘導弾

第一章 いざ！基地生活！

邂逅

?? side

ドカアアアアアアアン!!

?? 「きやあ!!」

?? 「クツ!!大丈夫ですか!!サフオーク!!」

サフオーク「は、はい!!大丈夫ですう!!」

?? 「ツ!?ベルファスト様!!敵の増援です!!」

ベルファスト「まさか、輸送任務中にセイレーンの奇襲に会うとは!!シエフィールド!!申し訳ございませんが少しの間ここを任せてよろしいでしょうか!?!」

シエフィールド「了解しましたツ!!」

それは指揮官の指令で離島まで資材の輸送をお願いされた私たちですが、安全海域だからと油断してしまい敵の航空機の奇襲を受けてしまいました・・・

これはメイド隊のメイド長としての責任!!

被弾したサフオークに駆け寄る

ベルファスト「怪我はないですか!？」

サフオーク「も、申し訳ございません・・・」

ベルファスト「進めますか？」

サフオーク「い、いけませんがいつもより速度は遅いですう!!」

回復系のスキルを持つKAN—SENは今はいない・・・

しかし、先ほどセイレーンの艦載機に交じって見えにくかったのですが

一機だけ変な形をした機体でしたが、アレはいつたい・・・？

いえ、今はそれより皆を逃がさないと!!

ベルファスト「私が殿を務めるのでみんなは先に撤退を!!」

サフオーク「!?無茶ですベルファスト様!!」

シエフィールド「そうです!!この数の航空機、メイド長一人では無理です!!」

奇襲を受けてから救難信号を出しましたがまだ着くのに時間はかかる・・・

それにまだ敵も船だけでも50隻以上入るのに航空機はその倍!!

しかし、これ以上仲間を巻き込んで・・・!!

しかしその思考の間が命取りだった・・・

シエフィールド「!!!メイド長!!!上!!!」

ベルファスト「!?しまっ!?」

私の真上に爆弾を落とそうとする一機の爆撃機

回避が間に合わない!!

爆撃機が命を刈り取る爆弾を落とす

しかし、その前に打ち落とされてしまった

ゴ
ゴ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
!!

サフォーク「な!? なんの音ですかあ!？」

シエフィールド「!? あの機体は!？」

そこにはプロペラがないのに飛べて、胴体から槍? を放っている飛行体だった
そして翼には赤い丸のマークが・・・

?? 「大丈夫ですか!？」

ツ!! 救援部隊か!？」

しかし来るにはまだ時間がかかるし、あと心なしか声が低いような・・・?

しかし、援軍ならありがたいです!!

声が出たほうを振りむくとそこには・・・

ベルファスト「・・・え、男?」

なぜか海の上に立っている男性たちがいた・・・

それはベルファスト達が助けられる数時間前のことだった・・・

天喰 「曇天!! レーダーでは船は何隻いる?」

曇天 「んー? 3隻は見つけたけど・・・!!」

曇天の顔が一気に強張った

曇天 「天喰!! ヤベエ!! その3隻にすごい数の反応が接近中!!」

天喰 「!?、了解!! 総員、対空対潜を厳となせ!!」

月影 「・・・了解、こちら月影潜航を開始する・・・」

昇龍 「了解!! 総員戦闘配置!!」

東海 「ライダー隊!! ス克蘭ブル!!」

天喰 「こちら天喰から東海へ先に偵察機でIFF（敵味方識別）を照射する。そのあと敵の場合は攻撃せよ」

東海 「了解!!」

月影は潜航を開始をし通信を切る、曇天と昇龍は対空ミサイルの準備などをする、東海はF-35JBで編成された「ライダー隊」の発進を開始する。

にしても、なんか俺が号令をかけた時もやけどまるでその使い方を知ってるみたい動きやな?

・・・まあ今考えても仕方ないから後にするか。つて俺の偵察機つてどうやって発艦

させるんだ？

そう、思っているながら弓を引こうとすると手の中に矢の形状をした何かができその矢には「F-4DJC」と書かれたいた・・・

え、どういう原理？一番気にはいけないことやけどどういう原理？（2回目）と、とりあえず発艦させるか

天喰「偵察機発艦!!」

そう言いながら弓を引くが・・・ン？なんかこの弦バチバチ行つてね？

作者（天喰は電磁カタパルトを装備した原子力空母なのでここに再現させました）

・・・なんか、どこから声が聞こえた気がするけどキニシナイキニシナイ

そして弦を離して発艦させた・・・

バシユウウウウウ!!

偵察機を発艦させて数分後・・・

天喰「・・・いた!!」

そこには

一人は小柄で2丁拳銃で戦っている女性

一人はピンク色の髪でさっきの子よりのほほんとした感じの女性
そして、皆の指揮をとっているだらう女性は……

……すごくどこかで見たことのあるメイド長だった……
うん……

天喰「総員、一つわかったことがある……この世界アズールレーンの世界やった」
ザワザワ、ザワザワ

うーん、やっぱりこの反応だよなあ……

とりあえず月影……叫ぶな……隠密が命のお前が叫んでどうする……音響つ
けていない俺でも聞こえてきたぞ……

天喰「敵艦数およそ50！航空機300以上!!」

東海「了解！ライダー隊！ウエポンズフリー!!ターゲットを撃破せよ!!」

そして、艦隊の遙か彼方を飛んでいた「ライダー隊」は戦闘を開始、ステルス機を生
かし奇襲攻撃に成功

こうして俺たちは被害を受けている艦隊に近づけた……

天喰「大丈夫ですか!?!」

（現在）

ベルファスト「あなたたちは!？」

天喰「えつと・・・（やべ、なんて言お）

えつと、私たちは『海上自衛隊』所属空母【天喰】です!!」

東海（え、それをいうの!?!天喰!?!）

ベルファスト「・・・かいじょうじえいたい・・・」

天喰「お怪我は!？」

ベルファスト「・・・!はい!一人はまだ無傷ですがもう一人は怪我をしましたが進めまず!!」

天喰「了解!!・・・こちら空母【天喰】から各艦へ!!ただいまより護衛対象を離脱させる!!東海はそのまま制空権の獲得を続けて!!曇天は対空ミサイルで援護!!昇龍は対潜に気を付けて!!」

東海・曇天・昇龍「了解!!!」

曇天「こちら曇天から東海へ!!本艦隊から50キロは対空ミサイル範囲とする!!入るんじゃねえぞ!!」

東海「了解」

そこへ敵航空機の一波が押し寄せる・・・

しかし、東海の「ライダー隊」によってその半数は落とされ・・・

曇天「シースパロー発射!!ぶちかませ!!」

曇天と昇龍の対空ミサイルによって4分の1まで減らされ・・・

東海・曇天・昇龍「CIWS・RAMファイヤ!!」

残りは近接防空によって落とされる

ベルファスト「す、すごい・・・」

サフォーク「メイド長!!敵が後退していきます!!」

ベルファスト「!!ほんとうだわ!!」

敵はこの状況は不利だと考えたのか撤退していた・・・

天喰「総員、対空戦闘やめ、警戒はそのままで・・・」

ふう、どうにかしのげたな・・・

するとそこに一つの艦隊がやってきた・・・

??「ベルファスト!!」

ベルファスト「!!エンタープライズ様!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

そこには長身で銀髪、黒い服を羽織り近くに相棒の「いーぐるちゃん」、
そう、かつての大戦で英雄的存在が目の前にいた・・・

・・・・輸送任務に行っていたベルファスト達がセイレーンの奇襲にあい、
救援要請を受けた

指揮官は緊急で編成した艦隊で出撃したが・・・
エンタープライズ「クツ!!間に合ってくれよ!!」

まさか、ほかのはぐれ艦隊に運悪く会ってしまい戦闘になった・・・
予定より数時間遅れてしまい要請のあった海域についた・・・

エンタープライズ「どこだ!?!ベルファスト!!」

くそ!!まさか手遅れだったのか!?

しかしその予想は外れた・・・

バシユウウウウウウ!!

エンタープライズ「な!?!何だあれは!?!」

それは空に向かっていく飛翔体?が・・・

アレは・・・噴出弾?

しかし今回のベルファスト達には噴出弾を放つ装備はつけていなかったはず・・・

それに噴出弾は対空にはあまり向いていない!!

だが、次にありえないことが起きた・・・

なんと、回避した機体を追いかけ始めた・・・

エンタープライズ「な!?!」

どういう技術だ!?!アレは!?!

しかも空には先ほどの噴出弾とは違い、セイレーンの機体とは違い翼に赤い丸のついた機体が飛んでいた

その機体も胴体からさつきより小さいが追いかける噴出弾を放っていた・・・

敵艦の方はオートジャイロ?がロケットを放って撃沈していた。

エンタープライズ「ベルファスト!!怪我は!?!」

ベルファスト「一人は怪我をしましたが命に別状はありません」

エンタープライズ「そうか・・・よかつた」

ベルファスト「はい、その・・・彼ら」が助けてくれました」

そうか、たまたまほかの基地の艦隊がいたのか・・・

しかし、彼ら？

そこにはなぜか海の上に立つ男たちがいた・・・

エンタープライズ「・・・君たちは？」

天喰「俺たちは海上自衛隊所属空母〔天喰〕です!!」

かいじようじえいたい？聞いたことがないな？

しかし、恰好からして確かハカマ？（重桜勢から聞いた）をつけているからあつちの

方の組織だろうか？

でも、重桜でアマクイという空母がいることを知らない・・・

だがしかし彼らは一つやってはいけないことをしてしまった・・・

ガシヨ!!

天喰と他4名「……………へ？」

すまない、ここ私たちの基地の支配海域なんだ……
エンタープライズ「君たちを不法侵入船として連行します」

天喰 s i d e

ガシヨ!!

天喰「……………へ？」

……………なぜかエンタープライズに艦装を向けられているんだけど？
エンタープライズ「君たちを不法侵入船として連行します」

おう、どういふことばってばよ!! (某有名忍者)
もしかして、ここ支配海域!?

東海 (ど、どうしまししょうか!?! 天喰!?)

天喰 (と、とりあえず交渉する!!)

天喰 「……断れば?」

エンタープライズ 「君たちを無理やりでも連れていく」

……\ (^o^) / オワタ

ついていかないとだめですね!! (ヤケクソ)

しかし、ついていいたら牢屋にシユート!! される!!

昇龍 (天喰! こうなったら一つあります!!)

曇天 (おお!! アホでもたまには役に立てな!!)

昇龍 (ヒド!?! それよりもごによ……)

東海 (……やっぱアホだった)

月影 (……でもこれしかない……)

天喰 (ええい! ヤケクソだ!!)

天喰 「……すまない仲間と話した」

エンタープライズ 「そうかで答えは?」

天喰・昇龍（セーラーの）

天喰・東海・曇天・昇龍 「逃げろーーーーー!!」

エンタープライズ 「な!? 待て!!」

こうして転生して早々人生（艦生?）をかけた鬼ごっこが始まった・・・

どうしようか？

スキル一覧

ステルス護衛艦【昇龍】 レアリティUR

スキル1

(海の猛禽)

開始と同時にステルス(?)なので回避率が30秒間65%上昇

スキル2

特殊弾幕

30%で発動する(対潜特化)

スキル3

(守るべきもの)

自艦が行動不能になったとき味方艦の体力を20%回復、回避率も25%上昇

潜水艦【月影】 レアリティUR

スキル1

(受け継ぐもの)

20%の確率で潜水艦攻撃の援護時間が延びる

(特殊弾幕)

5%の確率でスキル(受け継ぐもの)の発動の後に強力な全体攻撃をする

スキル3

(潜水艦キラー)

常時発動型。敵潜水艦にも攻撃ができるが命中率が10%減少する

改イージス艦【曇天】 レアリティUR

スキル1

(指一本触らせねえぞ!!)

味方の対空値を20%、シールド4枚召喚する

スキル2

特殊弾幕

25%で発動

スキル3

(報復)

味方艦一隻につき行動不能になったら、20%火力が上昇する

航空巡洋艦【東海】 レアリティUR

スキル 1

(万能艦)

味方が行動不能になったら3%の確率で味方を復活し、火力を40%上昇する

スキル 2

特殊弾幕

航空攻撃した60%で発動

スキル 3

(魔改造)

特殊弾幕の発動した50%で発動

味方の後衛陣の装填率を全回復する

原子力空母【天喰】 レアリティ??

スキル 1

(あの頃なりの覚悟)

ユニオン・重桜陣営の戦艦・正規空母の火力・航空値を20%上昇する

スキル 2

(罪のまなざし)

敵のスピードを50%遅延する

スキル3

(ERROR)

閲覧不可能

ここアズールレーン本部から近くもなく遠くもないこの基地で一人の男性と金髪騎士が机に向かって紙と戦っていた・・・

指揮官「あゝゝ疲れた・・・」

私の名前は田中 正樹

階級は少将だ

今はこの基地の指揮官をしている

??「お疲れだ、指揮官」

指揮官「うーんありがとウエールズ」

彼女はロイヤル所属戦艦「プリンスオブウエールズ」、今は秘書艦をしている昔からいる古参だ

ウエールズ「いいさ、しかし例の件、どうする？」

指揮官「……どうしようか」

そう例の件とは

先日、ベルファストに離島の資材輸送の護衛の依頼が来て頼んだが帰還途中でセイレーンの奇襲に会いやられるところをなぜか男性のしかいない艦隊に助けられたそう
だ

ウエールズ「一応、奴らが持っている艦装は没収したがどれもさっぱりわからない
うだ……」

指揮官「……だよねえ」

報告書には

・プロペラの無い艦載機

・敵を追尾する噴出弾

・ロケットを発射する大型オートジャイロ

・艦隊が全員“男”であること

?? 「・・・新型のセイレーンの可能性もあるぞ・・・」

その意見したのはユニオン所属空母「エンタープライズ」、彼女も古参の一人でよく相談にも乗ってくれている

プリンスオブウェールズ「しかし、セイレーンの艦隊を撃退しロイヤルのアイツらを助けたんだぞ？」

エンタープライズ「だが、奴らの艦載機はセイレーンののに似ている、あともしこの襲撃は芝居で本当はこの基地の潜入かもしれんぞ・・・」

指揮官「うーっーん・・・」

そう、例の件とは彼らの処遇だった

本部に報告しないといけないのだが、どう報告するのかわらぬでいた・・・

?? 「いや、それはないニャ」

プリンスオブウェールズ「ん？明石それはいったいどういう？」

そこにやってきたのは緑色の毛並み、長い袖をつけている

詐欺屋・・・失礼、工作艦だ

明石「しかしあの艦装は何ニヤ・・・セイレーンの技術なんて検出されなかつたニヤ・・・」

指揮官「な!？」

エンタープライズ「セイレーンの技術が使われていないだと!？」

明石「しかも竜骨の反応もあつたニヤ・・・」

プリンスオブウェールズ「男なのにか!？」

なんと、男のKAN—SENが発見されたのかあ

女性しかいないこの基地では同性の仕事仲間が増えるのはうれしい

明石「しかし・・・」

指揮官「どうした?」

明石「4隻は普通のKAN—SENの反応だつたんにやが・・・」

一隻だけ変なのがあつたニヤ・・・」

ん?変なの?

指揮官「それって具体的に?」

明石「緋いニヤ」

指揮官「赤い？」

明石「いや、赤より赤いひびの入ったキューブも見つけたニヤ・・・」

赤より赤い？

明石「不思議に思つて調べようとしたんにやが、なんか見ていたら気持ち悪くなつた中止したニヤ・・・」

謎のメンタルキューブ・・・

指揮官「ちなみにそのキューブは？」

明石「元のところに戻したニヤ」

他三人「二・・・二・・・二・・・二」

うーん、ますますわからなくなってきた・・・

一方天喰たち・・・

どーも!!みなさん!!天喰です!!

私はいまアズールレーンの世界に来ています!!

はい!私は今どこにいるでしょうか!?

はい！ここでーす！！ここー！ここー！
ここにいました！！

正解はですね！！

みんなで仲良く

牢屋に入っているでした！！

．．．．．うん、何やってんだ俺．．．
何“某珍獣ハンター”の真似してんだ．．

東海「捕まっちゃいましたねえ……」
うん、あの鬼ごっこの結果を言うと

逃げられるわけじゃないじゃん!! (ガチギレ)

いや、だってあのエンタープライズだよ!?

アニメでは艦載機に乗って戦っていた人よ!?

その人が鬼の形相で追いかけて来るんだよ!?

もう、恐怖以上の言葉がでないよ……

誰だよ、逃げるっていうのを許可したやつ…… (逆ギレ)

あ、俺か……

そうすると牢屋の前に一人の女性が来た

?? 「出てください、ご主人様がお呼びです」

水色の髪に腰に何やら人形をつけているこの子は確か?

天喰「えつと、君は?」

ダイドー「メイドの軽巡洋艦ダイドーです」

天喰「それではよろしく願います。」

ダイドー「はい、こちらです」

そうして、全員ついていき

立派な扉の前で止まった

ダイドー「こちらにご主人様はいらっしゃいます」

天喰「ありがとうございます。」

そうして分かれていった

東海「緊張しますね・・・」

天喰「ああ、そうだな。すーう、行くぞ」

コンコン

「どつどつ」

天喰「失礼します!!」

そこには人付き合いのよさそうな青年とそれに従えている騎士がいた

指揮官「この基地の指揮官の田中 正樹、少将だ」

プリンスオブウェールズ「秘書艦の戦艦プリンスオブウェールズだ」

天喰「海上自衛隊所属原子力空母【天喰】です」

東海「同じく航空巡洋艦【東海】です」

曇天「改イージス艦の【曇天】だ」

月影「・・・潜水艦【月影】・・・」

昇龍「ステルス護衛艦【昇龍】です!!」

指揮官「……うん、どれも聞いたことのない艦種と組織だ……ウエールズはなに？」

プリンスオブウエールズ「……私は長い間指揮官とともにいたがロイヤルにもそもそもアズールレーン自体にそのような組織がいる事態がおかしい」

指揮官「……ふむ、君たちは何者だい？」

天喰「あ……その……」

やべ、さすがに「転生しました！」なんて言えないぞ……

東海「それについては私から言いましょう」スツ

天喰「え……(ナイスすぎる!!東海!!あと任した!!)」

東海(天喰、あなた嘘をつくのが下手すぎなだけなので……)

(……)エ……

東海「我々海上自衛隊は政府からの特務で「南極にて謎の現象が発生したため調査してほしい」という依頼を頼まれ、調査に向かう途中で嵐に会い本部との通信が切れ遭難していたところを先ほどの艦隊を見つけ襲撃をされていたため助けました」

指揮官「……なるほど、だがあの装備はなんだ？どの陣営にもあのような規格外すぎる性能をもつ艦装はないぞ？」

東海「……指揮官殿申し訳ございませんが今は何年でしようか？」

指揮官「えつと1965年だ」

東海「……我々は別世界のしかも未来から来ました」

指揮官「……はい？」

東海「しかも……」

東海、少しステイ

指揮官がわけわからない顔になっている

天喰「指揮官ここからは俺が説明するね……」

少年すぐくわかりやすく説明中……

指揮官「……そうかセイレーンのいない世界か……」

プリンスオブウェールズ「私たちにはありえない話だな……」

指揮官「しかし、君たちは今後どうするんだい？」

東海「本当なら本部に戻りたいのですが……」

……そうやん考えていなかった、どんなに最強の装備をしていても弾がなかったら使えないしな……

指揮官「その様子だと当てがないようだな

「どうだ、うちに仮だが来ないか？」

え、マジ？

東海「・・・いいんでしょうか？我々は先ほどまで牢屋に入れさせられた者たちなのですが」

指揮官「・・・報告書には（君たちが逃げた）とあるが・・・」

東海「イエシリマセンネ」

指揮官「・・・それでどうするんだい？あ、でも正式に入るなら本部に報告しないと
いけないからな」

そりや、決まってんでしょ！

天喰「我々、海上自衛隊は田中少将の基地にしばらくの間留まらせてもらいます!!」
指揮官「ああ、よろしく頼む」

こうしてようやく平和に過ごせるようになった天喰たちであった

レッツアズールレーン本部へ!!

天喰「・・・本部に？」

指揮官「ああ、本部に今回のことを報告したら「実際に会いたい」らしい」

・・・いやまあ、正式に所属しないと補給受けられないし、何かあったじゃ遅いしなあ・・・

天喰「・・・ちなみにいつ行くんですか？」

指揮官「明日」

天喰「はい？」

指揮官「明日だ」

ちよ、明日!?!

普通こういうのつて一週間後とか一か月後とかじゃないの!?!

天喰「えらい急ですね・・・」

指揮官「仕方ないだろ・・・あのご老人は一応上司だし君たちに興味深々だからな・・・」

大変だな、指揮官業というのは

指揮官「・・・はあ、ほんと胃が痛い（キリキリ）」

天喰 「お疲れ様です・・・」

指揮官 「そんじや、ついてきてくれるかい？」

天喰 「了解しました」

翌日

アズールレーン本部前

いやあ、

でかいね!!

やっぱり世界を守るとはいえ各勢力が出入りするから大学のキャンパス以上にデカかった

指揮官 「よし、着いたぞ」

なんて思っていたら

すぐく大きめの扉の前で止まった

コンコン

指揮官 「田中正樹です!!」

「入りましたまえ」

指揮官「失礼します!!」ガチャ

こうした中に入ったけど、

「おお、本当に男だ……」

「報告書どうりだな……」

「あの装備はなんだ?」

「やはりセイレーンではないのか?」

「……」

「キヤー!意外と若くてイケメンじゃない!!」

中に入ったけどやっぱ外もデカかったら中もでかいわな

いろいろな恰好の偉そうな人がいるけど一番真ん中に座っている人は歴戦のいかついおじさんのような人が座っていた

元帥「よく来てくれたな。私は本部総責任者の دونالد・アルバード元帥だ」

天喰「海上自衛隊所属原子力空母【天喰】です」

「げんしりよくくうぼ?聞いたことないぞ?」

「かいじようじえいたいも聞いたこともないな……」

「アマクイという空母も聞いたことないぞ……」

元帥「……ふむなるほど、しかしタナカ少将この報告書は真か？プロペラの無い飛行機、敵を追尾する噴出弾とは？」

指揮官「はい、真です」

ダアン!!

「戯言はいいかげんにしろ!!」

「本当ならそいつはセイレーンではないか!!」

「しかし本当ならすごい技術だぞ」

元帥「静粛に、では聞こうアマクイとやら貴艦のいう「かいじょうじえいたい」とはなんだ？どの陣営にもこのような部隊はないと答えたぞ」

天喰「……我々は別世界の2060年から来ました」

「な?!未来からだ?!」

「しかも別世界からとは……」

「セイレーンはどうなっている?」

元帥「……なるほど、未来から来たのならあの見たことのない装備にも納得はいいな……ではセイレーンはどうなっている?」

天喰「それについては私たちのいた世界情勢とともに説明させてもらいます」

すると全員は真剣に聞き始めた

天喰 「私の所属する海上自衛隊は平和主義を掲げる日本国・・・こちらで言う重桜のような国ですね。その国に属する防衛主義の国防軍のような組織です」
こうして俺のいた世界の話を始めた・・・

数十分後・・・

元帥 「そうか、セイレーンのいない世界か・・・」

「なんと!?!セイレーンがないのか!!」

「そうか、羨ましいなあ」

元帥「しかしセイレーンのいない世界とはさぞかし平和であろう。なぜそれほど重装備なのか？」

天喰「失礼ながらアルバード元帥殿、人類共通の敵がない場合は人間はどうなると思いますか？」

元帥「・・・平和ではないのか？」

天喰「人間は個人の思いを貫きたい生き物です。自分の欲や意見が相手に否定されたら無理にでもうなずかせたいとだから人間は・・・」

元帥「・・・争い、戦争をするのか・・・」

天喰「人間は欲に弱い生き物なんですからね・・・平和なんて一時的なものですよ」

元帥「そうか・・・して君たちは今後どうするのだ？」

指揮官「それについては私の基地に所属させようとも思います」

元帥「そうか、全員異議はないな？・・・ないなら会議を終了す」「異議あり!!」・・・
なんだ豚田中将？」

会議が終わろうとしたら豚田のように太った男性が立ち上がった

天喰（指揮官、あのぶっ・・・じゃなくて人は誰ですか？）

指揮官（ああ、豚田 太郎。位は中将だ）

天喰（へー、指揮官より上なんですな）

指揮官（ああ、でも黒いうわさが後を絶たないがな・・・）

天喰（・・・例えば？）

指揮官（賄賂、KAN—SENに対してセクハラとパワハラ、虚偽などのオンパレード）

天喰（うわあ、ブラックやんいやだわあ）

すると豚田中将は言い出す

豚田中将「私は田中少将の基地に配属させるのは反対します!!」

元帥「・・・ふむ、なら反対意見を聞こう」

豚田中将「まず、先ほどの話が本当なら一か所に集めるのは過剰戦力じゃないでしょうか!!もしその艦隊が反旗を翻したらどうするのですか!?!」

天喰「それについては私から、確かに過剰戦力かもしれませんが自衛隊は基本的に防衛主義で向こうから攻撃しない限り攻撃はできません。ましてや人間を攻撃するのは基本的にありえないです」

豚田中将「ではなぜ田中少将の基地に配属されるのですか!?!」

指揮官「私の基地に配属する理由はまず一番最初に来た基地で本当は元の世界に帰還したいが帰る方法がわからないので留まることを本人たちから了承も得ているからです」

豚田中将「それは相手が指揮官だからなのではないでしょうか!? 本当は嫌なのではないでしょうか!」

天喰「いえ、いやではありませんよ。指揮官はまじめに執務をこなしていて信頼できる人です」

豚田中将「それは君一人のいけんだらおう!? ほかの四人は不満を持っているだろう!」

指揮官「いや、それはないで「黙れ!! 貴様のことはきいていなあい!!」

豚田中将「本当は嫌だろう! いや、そうに違いない! ！だから早急に私の基地に変えるべく(バアン!!)・・・ヒ!!」

天喰「・・・いい加減にしろよ豚野郎・・・」

あー、こいつを見てると前の世界の宇摩を思い出してくるわ・・・

豚田中将「な・・・この僕を豚といったのか・・・?」

天喰「ああ、言つたさ!! あいつらが一緒にいるのが嫌だ? ならもういないはずだ! あいつらとはなあ何年間も助けたり助けられたりした大切な仲間なんだ!! よくわかぬえ妄想を押し付けるとんじゃねえ!! 豚野郎!!」

豚田「き、貴様!! ただのモノ癖に人間に指図するとは何なのかあ!」

・・・おい、待てモノってなんだ?

天喰「・・・お前、KAN—SENを壊しているものだということのか?」

豚田中将「そうだろう!? 突然よくわからない敵が来てそれを倒す人類の道具!! 何をしようが自由だ r (バキイ!!) うぎやあ!!」

殴った

多分生まれて始めて人を殴った

殴られた豚は壁際まで吹っ飛ばされた

天喰「お前大概にしろよ? あいつらは戦いたくない本当は安全に生きたいはずだ!? でもなあいつらは人類の今と明日を安全にするために戦っているんだ!! 決して道具なんかじゃない!!」

豚田中将「な、な、き、キサマア!!」

元帥「静粛に!!」

するとあれほどうるさかった会議場が水を打ったように静かになった・・・

元帥「天喰君申し訳ない私の監視不足だった。君に不快なことをしてしまい謝罪する」

天喰「・・・いえ、私もこのような公的な場所でわめいてしまいすみませんでした」

元帥「いいさ、ではこれ以外に反対はないな?」

シーン

元帥「よし無いな、では海上自衛隊及び空母【天喰】と他4名を正式に田中少将の基地に配属する!!」

パチパチパチ!!

元帥「あと豚田中将、あとで私の部屋に来るように・・・」ギ

豚田中将「は、はい・・・」ビクビクビク

天喰「失礼しました!!」

バタン

指揮官「いやー!!すつきりした!!」

天喰「そうか?俺は疲れたんだが・・・」

指揮官「アイツからよくいちやもんをつけられていたからな!!でも天喰、かつこよかつたぞ!」

天喰「そ、そうか?俺は怒りのままぶつけただけなんだがな・・・でもまあこれで晴れて君の部下になれたな、これからよろしくな指揮官?」

指揮官「ああ、よろしく天喰」

そしてふたたびで硬い握手を交わした

「くそお!!あいつめえ!!」

そのころ豚田はアルバード元帥に嚴重注意を受けた後
基地に帰るため廊下を歩ていた

「おいおい、会議場でわめいた豚田じゃんw」

「ああ、あの反対しまくった挙句怒られて殴られた?w」

「しかも最後の見たか?すごく無様だったな!w」

ええい!!どこもこいつもバカにしておつてえ!!

この高貴な僕の顔を殴るとは高くつくぞお!!

豚田（本当は田中から引き抜いてよくて私兵化する。悪くて奴らの技術をいただければよかったものを!!）

そうすれば僕は昇進し大将

いや、国

世界の王になれたというものを!!

まあいい、帰つてあいつらを可愛がるとしよう・・・

豚田中将「おい、行くぞ大鳳」

そこには赤い着物を着て露出を高いようにしており黒髪長髪のどんな男性でも虜にしてしまう美しい女性が立っていた

が・・・

その雪のように白い肌に打撲や切り傷、火傷の後がついており
そして首には鈍く光る首輪がつけられていた・・・

大鳳「・・・・・・・・はい、指揮官様・・・・・・・・」

ここはとある鏡面海域・・・

そこに一人の少女が観察していた

?? 「ふーん、カンレキには存在しないKAN—SENねえ。」

?? 「まあーた見てるの例の彼ら？」

?? 「いいじゃない、しかしこれは予測できなかったわ・・・」

?? 「どうする？ 処分する？」

?? 「いいえ、このまま見てみましょう。新しいのがみれるかもしれないわ・・・」

そう言いながら一人の少女はタコの足のような艦装をうねらせ

もう一人はシユモクザメのような艦装を持ちながら笑っていた……
?? 「どんな結果にしてくれるか楽しみにしてるよ……天喰」

歡☆迎☆会

あれから本部を後にして帰路についていてあと少しで基地につこうとしたが
ドガアアアアアン!!

指揮官「な、なんだあ!?!」

天喰「あ、基地の奥で爆発が!!」

くそ!俺たちが留守の間に襲撃があつたのか!?

しかし、燃える基地から出てきたのは・・・

??「し、指揮官!!」

指揮官「あ!明石どうした!?!」

明石「あの変態をどうにかしてニヤ!!」

ん?変態?誰だ?

そう言つて連れて越されて見たのは

東海「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

・・・地獄が広がっていた・・・

・・・・うん、俺は夢でも見てんのかな？

そう思い、頬をつねる。

うん痛い夢じゃないね!!

いや、なにやトンの!?! 東海!?

隣の指揮官なんて口あんぐりいてるよ!?

昇龍「天喰!!」ガサ!!

天喰「・・・みんなとりあえず目の前で起きている惨劇について説明を・・・」

曇天「・・・俺たちは止めたんだが・・・」

月影「・・・実は・・・」

それは天喰たちが本部に行ってる間にあっただんだ・・・

曇天「・・・なあ、なんでまだ俺ら牢屋に入れられてんの？」

エンタープライズ「仕方ないだろ、お前たちはまだ正式に私たちの仲間じゃないしまだ不法侵入船扱いになる・・・」

月影「・・・暇・・・」

俺たちはまだ正式じゃないからみんなで牢屋で待っていたんだけど暇でさあ牢屋にいる組で雑談してただけど・・・

明石「なら明石の手伝いをしてくれないかニヤ？」

そこに来たのは明石さんだったんだ・・・

昇龍「何をすればいいんだ？」

明石「倉庫の整理、装備の分別と知らないものを運んで廃棄するニヤ」
エンタープライズ「しかし！明石、こいつら仮にも不法侵入船だぞ？」

明石「大丈夫ニヤ、艦装も没収してるしそれに何かあってもこの基地にはKAN—S
ENがたくさんいるニヤ」

というわけで明石さんの手伝いで倉庫に行って手伝っていたけど・・・

東海「なあ明石この装備たちはどうなるんだ？」（ソワソワ）

明石「ん？そいつらはパーツになったりいらぬ部分は少ないが資金になったりするニヤ」

東海「……なあもつたいたくね？」（ソワソワ）

明石「そうかニヤ？それノーマルクラスとレアクラスの装備がほとんどでたまに被ったSSRやSRがあるニヤ」

東海「そ、そうか……」（ソワソワ）

明石「……さつきからどうしたンニヤ？トイレかニヤ？」

東海「いや、なんかかわいそうに思えてきてな……」（ソワソワ）

曇天「か、可愛そうって……」

昇龍「あ、そういえば東海つてうち一番のミリオタだからそう思えるのかな？」

東海「うん、最後に何か役目があったらな……」（ドク!!）……う!？」

そしたら急に東海が苦し始めたんだ……

昇龍「と、東海!？」

明石「どうしたんニヤ!？」

近くにいた俺と明石さんが近寄ったら東海が何か言っているのが聞こえたんだ……

東海「……す……す……」

明石「す?」

東海「……スキル発動……(魔改造)」
そしたら急に立ち上がっていったんだ……

東海「ああ、改造したいですねえ♡」

ジャキ!! (両手には大量の工作具が)

ぞわぞわぞわ!!

そうした急に悪寒を感じたんだ

急いでこいつを止めないとやばいことになるって

そう、倉庫にいた全員が感じたんだ

昇龍「あ、あのー東海さん？」

東海「……………」ダツ!!

明石「あ!逃げたニヤ!!」

そう、急に東海が走り出して倉庫にあつたそこら中の装備ボックスを集めだしたん

だ…………

曇天「どうしたんだ東海!」

そしたらボックスを合体させ始めたんだ…………

ゴンゴン!!ウイーン!カンカン!!

ダツ!!

月影「…………また走つた!!」

ドドドドドドドドド!!(キラキラした大量のキューブを抱えながら)

帰ってきた東海が抱えていたのは大量のキューブだったんだ。どこから持ってきた

んだらう? って思っていたら一人の女性が走ってきたんだ・・・
?? 「明石!! そいつを止めて!!」

明石 「ウオースパイト!? どうしたンニヤ!?!」

ウオースパイト 「私がキューブ保管室の整理をしていたら、急にそいつが入ってきてキューブを盗んだのよ!!」

明石 「ニヤ!?! ニヤンだって!? こら! 東海辞めるニヤ (キューーン、ドカーーン!!) ニヤーニヤー!?!」

急に明石さんが爆発したと思ったたら空に東海を護衛するように「ライダー隊」が飛んでいたんだ・・・

曇天 「ちよつと!?! ライダー隊!?! 邪魔しないでくれ!?!」

エンタープライズ 「どうした? 明石? 爆発音が聞こえたんだが? (ドカーーン!!) !?! やはり貴様たちはセイレーンのスパイだったのか!?!」

曇天 「ちげえわ!?! ってそれよりあいつを止めてくれ!!」

東海 「Y A Y A Y A Y A F U U U U U U U U U U !!」 (某赤い配管工の声)

エンタープライズ 「・・・どうしたんだ彼は? 連行するときそんなキャラじゃなかっただろ?」

曇天 「それは俺たちが聞きたいな!」

エンタープライズ「とりあえず彼を止めればいいんだらr(レモン)三三三ドーン…
(☒ ☒ ☒) キュウ

曇天「え、エンタープライズが死んだ!!」

月影「……この人? いや船? で無し!!」

なんかとなりでなんかやっているけど

やばい! 東海が箱についてしまった!!

そしたらキューブも合体させていったんだ…

ガシヨガシヨ

ドンテンカーンドーンテンカン

ガタガタゴツトン!ズツタンズタン!

ガタガタゴツトン!ズツタンズタン!

なんか…違う音も聞こえてきたし…

そして赤い巨大な武装ボックスに似たものができたんだ…

東海「目覚めよ!!捨てられし武器たちよ!!お前たちはSSRやURに番がとられて悔しくないか? たくさんの指揮官からごみのような目で見られてきたか!?!だがそれも今日で終わりだ!!俺が作り替えたからな!!アヒヤヒヤヒヤ!!」

……で今に至ると…

．．．マジかよ．．．

いやまあ確かに前世ではよく改造とかしていたけどここまでひどかったけ？

東海「さあ目覚めよ!! 反撃の時だあ!!」ガシヨ!!

そう話していたら狂った東海が武器ボックスで言う上のロックを外して解放し中から大量の光が漏れだした

指揮官「．．．! やばい! 皆伏せろ!」

光がやんでそこに鎮座していたのは．．．

天喰「．．．なんでこれがここにあるんだよ．．．」

そうそこにはとあるゲームで出てくる

本来は隕石を打ち落とすものが

とある戦争では味方軍を苦しめ

またある時は14年の月日をたち白い怪鳥を打ち落とした切り札

・ ・ ・ ・ ・ ストーンヘンジの一基だった

東海「・ ・ ・ ・ ・」(正座)

ベルファスト「・ ・ ・ ・ ・」ニコニコ

天喰「・ ・ ・ ・ ・」ニコニコ

エンタープライズ「(☒ω☒)スヤア」

指揮官「・ ・ ・ ・ ・ハア」ガチャ

はい、あれからどうなったかというと・ ・ ・

ストーンヘンジはすぐ母港の全員に知れ渡りばれてしまった

ストーンヘンジ自体があまりにも巨大なためその場に設置することになった

そしたら本部の人から電話がありその受け答えをさつきまで指揮官がしていた指揮官「……東海君なにか言うことは？」

東海「……反省はしているが後悔はない」

指揮官「よし、ベルファストやれ」

ベルファスト「はい」グキキキキキ（エビぞり固め）

東海「ちよ!?メイド長!!折れる!折れる!」

指揮官「はい、東海君何か言うことは？」

東海「欲に耐え切れずそのまま突っ走ってしまい申し訳ありません」土下座

天喰「……ハアすまん指揮官正式に決まって早々仲間がやかしてしまい……」

指揮官「いいよ、本人反省しているみたいだし……」

ところで天喰、あの大砲みたいな兵器は何？」

天喰「アレは架空の兵器のほすなんだがなあ

正式名は「120cm対地対空両用磁気火薬複合加速方式半自動固定砲」って言って

通称ストーンヘンジともいわれるすごくデカイ大砲で主に隕石迎撃に使われるんだ」

指揮官「デ、デカイし名前長いな……しかも隕石迎撃って……」

天喰「ああ、でも架空兵器なのになんでできたんだ東海？」

東海「俺にもわからんがあの時頭の中に流れ込んできた感じ？」

やべえなソレ

いやだって被害にあったの（あとで確認した）武器ボックスおよそ1200個分とキューブ40個だぞ？

そんなんでストーンヘンジ作れる東海は何だよ・・・

指揮官「ちなみに使えるのかい？」

天喰「いや、起動させるのなら専用の施設をつらないといけないし場所も広く使うし金もアホみたいに使う」

指揮官「そ、そうか」ほっ

・・・ちなみに後日聞いたんだがあの場所観光スポットになって名前が「すんごくデカいたいほう!!」になっていた・・・

指揮官「あと、今夜君たちの歓迎会をするんだが出席するかい？」

天喰「え、いいのか？」

指揮官「ああ、君たちはこれから家族みたいなものだから歓迎会はしないとね」

天喰「ありがとううれしいな」

指揮官「あと、東海はそこでみんなに謝りなさい」

東海「ウイツす」

その頃の昇龍たちは・・・

沿岸で待機していた

昇龍「・・・なあ曇天」

曇天「ドシタ？」

昇龍「月影どこ行つたか知らない？」

曇天「いや、見てないなあ・・・」

そんな会話している中、水中からとある人物が忍び寄っていた・・・

??「ふっふっふ・・・なんかデカい大砲ができて気になった近寄ってみたけどやった

本人らしいKAN—SEN発見♪」

それは金髪にゴーグルをかけている潜水艦アルバコアだった・・・

アルバコア「くっくっくこの特性大爆音魚雷でサブライズしてやるぞお」（ワクワク）

トントン

アルバコア「アイツらどんな顔をするかなあ」（ワクワク）

トントン

アルバコア「あ、カメラ持ってこればよかったなあ」（ワクワク）

トントン

アルバコア「ああもう！さつきからな・・・に・・・」

振り返るとそこには・・・

月影「ハアイ、ジ○ジイ」

ピエロのペイントをした人物がいた・・・
アルバコア「ピ・・・」

ピギャアアアアアアアア!!」

ゴポゴポ

昇龍 「ん？今悲鳴聞こえなかった？」

曇天 「は？聞こえなかったぞ？」

昇龍 「うーん？気のせいだったのかなあ？」

なんてことがあつたんだとか・・・

時間がたち夜

そこでは食堂にて歓迎会が行われていた

ワイワイガヤガヤ

「何だろうね？」

「なにかの祝い事かな!？」

「なああんなどころにでかい大砲なんかあったけ？」

「さあ？」

指揮官「はい！ちゅうもおおおおおおおおおおおく!!」（某駐屯兵团並み）

「『五月蠅い!!』」

指揮官「あ、スミマセン。じゃなくて!!今日から新しく入る仲間を紹介するぞ!!」

「おお！やっぱり!!」

「新入りだ!!」

「その前にあのデカイ砲台はなんだ!？」

指揮官「・・・それについても報告するので・・・それでは上がってくれ!!」

ガタガタガタガタ

（（（え!?!男!?!）））

指揮官「それでは一人ずつ紹介してくれ!!質問に対しては終わった後な!!」

天喰「はい！海上自衛隊所属の原子力空母【天喰】です！！この艦隊の旗艦をしています！よろしくお願います！！」

(本当に男じゃん!?)

(なんか頼れそー)

曇天「改イージス艦【曇天】だ!!!趣味は料理とか裁縫だ!!これからもよろしくな!!」

(兄貴だ・・・)

(兄貴がまた一人増えた)

(いや!?だから私はアニキじゃないってば!!)

月影「・・・潜水艦の月影です・・・」

(うわあ、なんか怖そうな人来たなあ)

(彼から同じ?フォース?を感じるわ・・・)

(ピ、ピエロ・・・)

(ちよつと!?!どうしたの!?!アルバコア!?)

月影「あ、あと好きなのは猫です」

((意外とかわいかった!!))

昇龍「はい！ステルス護衛艦【昇龍】です!!好きなことは甘いものを食べることで

!!」

(女やん・・・)

(男の中に女が混じつとるぞ・・・)

(か、カワイイ)(＊、口、)ハアハア

東海「・・・航空巡洋艦「東海」です。ちなみにあの巨大な大砲が自分が暴走して作ってしまいましたーすみませーん(棒)」

((いや、お前かい!!))

指揮官「よし！自己紹介は終わったな！今から自由時間にするから質問は今しておけ!!」

「はいー」

指揮官「はい！ジャベリン!!」

ジャベリン「始めまして!!ロイヤル所属の駆逐艦ジャベリンです!!皆さんほとんど聞いたことのない艦種なのですが私たちのとどう違うのですか?」

曇天「じゃあまず俺から、俺の改イージス艦とはイージス、神の盾ともいわれているが主に艦隊の対空、対艦を相手にしている。レーダーは艦隊一広いから索敵にも役立つているぞ!!」

昇龍「次に僕ですぞ!!僕ステルス護衛艦はステルスすなわち隠密性が高いので偵察や人質救出などにも出ます!!艦隊では対潜と対空を担当しています!!」

天喰 「俺は・・・まあ一言でいえば航続距離が無限かな？」

「え、すごーい!! 隠密性が高いなんて!!」

「しかし、？ 神の盾？ とは!! 彼も同族なのか？」

「航続距離ほぼ無限とは！ 疲れ知らずなのか!？」

「じゃー、はい」(ぎく)

指揮官 「はい!! ラファイー!! つかお前酒飲むな!!」

ラファイー 「指揮官、気にしない気にしない「気にするわ!!」・・・えつと陣営はどこになるの?」

天喰 「あー、俺たち別世界の未来から来たもんなあ・・・一応重桜になるのかな?」

シーン

あれ? どうしたのみんな?

「「「・・・はあー」」」あ!? 「「「

あ、そういえば言ってなかったな・・・

少年わかりやすく説明中・・・

「へー、セイレーンのいない世界かあ」

「いいなー」

指揮官「よし！あとは個人で聞いてくれな!!そんなじゃ歓迎会続けるぞ!!」

??「もし、そのの同志・・・」

月影「ん？お前誰？」

??「ああ、私の名前はアークロイヤルだ」

月影「・・・それでそのアークロイヤルがなに？というか同志ってなに？」

アークロイヤル「きみはこれを見てどう思う？」スツ

月影「・・・こ、これは!？」

渡されたのはかわいらしいというすい紫の髪をしユニコーンのぬいぐるみを抱えた少女の寝顔が写っていた・・・

月影「・・・なるほどだから同志か・・・」スツ

アークロイヤル「やはり類は友を呼ぶとは本当のようだな・・・」ガツ!!

二人は謎の強い握手を交わした

「兄貴!!」

「アニキ!!」

「あにき!!」

曇天・?? 「だあ!!だから兄貴じゃない(ねえ)!!・・・え?!!」

曇天 「お前も兄貴って慕われてるのか・・・」

?? 「キミもか・・・あ、私の名前はクリーブランドだ!」

曇天 「(なんか兄貴って慕われているのが少しわかるな・・・) お互い苦勞するな・・・」
クリーブランド 「まあな、指揮官からも姉妹からも兄貴って呼ばれて突っ込むのに疲れるよ・・・」

曇天 「ワカル」

クリーブランド 「だってこの前だって・・・」

曇天 「(意外と苦勞人多いな・・・この母港・・・)(?▽?;) ハッハッハ」

ラフィー 「どうしたの? アルバコア? さっきから震えているけど?」

アルバコア 「ピエロ・・・怖い・・・」 (ガクガクガク)

月影 「・・・ハアイ、○ヨウジイ」 ヌツ

アルバコア 「びぎゅ!!」 パタン・・・

ラフィー 「あ、倒れた・・・」

月影 「・・・(そんなに驚くのかなあ?)」

作者 (ピエロで怖がらせすぎるとマジでピエロ恐怖症になるから気をつけよう!!)

「でねー指揮官すぐくかつこよかったの!!」

「えー見たかったなあ」

「でも!前の日指揮官がね!!」

キヤツキヤウフフ

昇龍「……………」

「ん?どうしたの昇龍ちゃん?元気ないね?」

昇龍「ねえ、なんで僕恋バナの中に入れてるの?」

「え、だつて昇龍ちゃんあの艦隊唯一の僕ツ子系女性じゃないの?」

昇龍「……………僕、男なんだけど……………」

「……………」

「そ、そんなはずはないわ!!どこからどう見ても女性じゃない!!」

昇龍「だ!か!ら!僕は男だ!」

「そんな胸だつて!!(もみもみ)……………アレ?少し肉があるわ……………」

昇龍「ウエイ!?やめろつて!!」

「そうなの!?!なら男なら触られても恥ずかしくないよね!!(暴論)」(もみもみ)

昇龍「……………きゃあ!?!」

「「「・・・やつぱり女よね・・・」」」

昇龍「だからあ!!ちがう!!」ゼエゼエ

「「「なら、我慢できるよね!!」」」

昇龍「や!?やめ!?!」

アーーーーー!!

東海「・・・ボケー

??「なあ君があの大砲を作ったKAN—SENか?」

東海「そーですけどーなにかー(ハア、バカにしに来たのかな?)」

バン!!

東海「な、なんすk「素晴らしい!!」え?」

??「あれほど巨大で鋼鉄の砲塔は見たことない!!」

東海「!!あなた名前は!?!」

??「失礼、私の名前は軽巡洋艦リノ!!」

東海「・・・あなただけですよ・・・ほめてくれたの・・・」

リノ「だって巨大兵器ってロマンじゃない!!」

東海「はい!やはり巨大兵器はロマンですよね!!ん?その小手は?」

リノ「ああ、これはとあるヒーローにあこがれて作ったの!!」

東海「(どうみてもアイ○ンマンですねありがとうございました)・・・本物は無理でもそれっぽくするならできますよ?」

リノ「ええ!?!いいの!?!」

東海「はい!オタク同士の絆(?)ですよ!!」

リノ「ロボットは・・・」バツ!!

東海「ロマンの塊い!!」ババン!

天喰「・・・何やっつてんだアイツら・・・」

指揮官「はっはっはっはっはっはいいんじやないか、平和だし・・・」

天喰「そうだな・・・んでなんでこんな人の少ないところに呼び出したんだい?」

そう、今俺たちは学園の近くにある路地裏にいる。

指揮官「・・・なあ天喰、

お前の中にある緋いメンタルキューブは何なんだ？」

天喰「!？」

緋いメンタルキューブなんだそれ？

指揮官「ほかの4人からは検出され無かったが君だけ違ったんだ。心当たりは？」
ほかの皆にはなくて俺だけにある物？

・・・多分アレだよな・・・

天喰「あるんだが、どうするんだ？」

指揮官「・・・いや、明石の調査結果に気になった点があったからな・・・」

なるほど・・・油断できないな明石・・・

天喰「指揮官・・・今回のことは知らないほうがいい」

指揮官「?話せないなら相談に乗るが・・・?」

天喰「指揮官、話せないじゃなく知らないほうがいいだ・・・」

指揮官「!?!?そうか・・・いつか覚悟ができれば聞かすよ・・・」

天喰「そのほうがいい」

結局、そのまま帰りカオスと化していた会場を指揮官と一緒に沈めていた・・・

母港案内

歓迎会があった数日後・・・

その間は指揮官から母港の案内や部屋の場所を教えてもらおうようお願いされた・・・
Z23「海上自衛隊の皆さんですね!!今回母港の案内を担当します駆逐艦Z23、

ニームとお呼びください!!」

執務室の前にて案内役に任されたのは

クリーム色の髪に大きめの目

頭に帽子を被った優等生みたいな雰囲気を出す少女がいた

天喰「はい、空母【天喰】です今回はよろしくお願いします」

東海「航空巡洋艦【東海】です」

曇天「改イージス艦の【曇天】だ」

月影「・・・潜水艦【月影】」

昇龍「ステルス護衛艦【昇龍】です!!」

Z23「はい!皆いますね!では案内をします、こちらです!」

こうして母港案内が始まった

〈執務室〉

Z 2 3 「ここは執務室で指揮官は基本的にここにいます」

コンコン

Z 2 3 「失礼します、駆逐艦 Z 2 3 です」

指揮官「どうぞー」

ガチャ

中では指揮官が大量の紙と戦っており隣ではベルファストが書類整理をしていた

指揮官「や、やあみんな案内をしてもらってるんかい？」げっそり

曇天「お、おう。そうだと指揮官．．．ところでどうしたんだ？」

指揮官「い、いやあ君たちの報告を各部署や基地に報告しないとイケなくてね．．．

ちなみにー連徹夜中．．．」

曇天「そ、そうかスマンナ」

．．．やっぱ頭が上がらないなこの人には．．．

指揮官「べ、ベルファスト．．．もうペン握りすぎて力が入らないよ．．．休憩に入

ろ．．．？」

ベルファスト「．．．右がだめになっても左があるじゃないですか．．．」

指揮官「き、鬼畜．．．」

Z23「……次行きますか……」

曇天「……そうだな……」

指揮官、君のことは忘れないよ……

今度何かあげよ……精神的に……

講堂

Z23「ここでは教室にて新人の教育、指導を行っています」

昇龍「おー！教室が多いなー！」

確かに多い、まあそれほど

ここにいるKAN—SENがいるんだろう

「はい……コン……テストに出るわよ!!」

「はーい!!先生!!」

近くの教室の中から元気のいい声が聞こえてきた

覗いてみると……

たくさん生徒に見られて教卓に立っている少女が一人いた

あ、アレはアズレンのチュートリアルでお世話になった……

東海「アレは南米の!?!」

東海、それは川や……

曇天「前世では宅配とプライムにお世話になったな・・・」

曇天、それはAmazonや・・・

月影「・・・シグマア・・・」

月影、それは仮ライダーや・・・

昇龍「確かチビ!!」

やめろ、昇龍、走り込み10周させられるぞ・・・

てか、お前もチビだろ・・・

食堂

Z23「ここは食堂で数日前に行われた歓迎会もここで行われました場所です!!」

あの頃はたくさんの方がいたからわかんなかったけど改めてみるとすごく広いな・・・

Z23「ここではそれぞれの陣営の料理も楽しめますよ!!」

へー、そういえば最近米食ってなかったな・・・

終わり（早いわ!!）

港・グラウンド

Z23「ここが港でみんなはここから出撃するんですよ」

港は普通な感じで

隣にはビーチやグラウンドがあって部活動をするKAN—SENたちがいる・・・

さすがにまだ水着では入れられる気温ではないので水着姿はいなかった・・・
終わり（早いわ!!二回目）

Z23 「ここでは購買部があったりみんな好きなようにお店を出しています!!」

そこには色とりどりの屋台が出店していた

饅頭（食べるほうの）を売って居たり

部活勧誘を行っていたり

・・・なんか変な宗教を広めようとしていた人たちがいた・・・

Z23 「あ!明石さん!!こんにちは」

その店の一角に緑の猫が売買していた

明石 「あ、ニームに天喰に・・・東海もいるんかニヤ・・・」

この猫まだ根に持つとんぞ・・・

東海 「あの時はすみません・・・」

明石 「まったく・・・あの時みんな明石のせいにするから大変だったニヤ・・・」

まあ、前科持ちだもんな・・・

東海 「・・・こつちの技術少しとダイヤ（指揮官の）で手を打たないか?」

明石 「・・・今回は目をつむるニヤ」

いや、やつすいなこの猫・・・

?? 「あら? どうしたの? ニーミ?」

Z23 「あ、イラストリアスさん! 今、天喰さんたちを母港案内をしているところで
す!」

イラストリアス 「あら、そうなの? では・・・こうして話すのは初めてです
ね装甲空母イラストリアスです。以後おみしきおりを・・・」ペコ

天喰 「あ、いえいえこちらこそ原子力空母「天喰」です」ペコ

やっぱり画面で見るとよりリアルの方がきれいだなあ

透き通るように綺麗な目

シルクのように滑らかな髪

雪のように煌びやかなドレス

・・・あと何がとは言わないが生でもデカイ

イラストリアス 「どうかされましたか?」

天喰 「・・・いえ、少し考え事を」

イラストリアス 「ふふ♪そうですか♪」

・・・あぶねエ察されるところだった

あと、東海

相棒こういうのがデカいのが好きなんですね・・・
 みたいな目で見んな・・・

するとイラストリアスの後ろからうす紫色の髪をした少女が出てきた
 ?? 「えつと・・・ユニコーンだよ？よろしくアマクイお兄ちゃんたち？」

転生組 「二二二ん・・・!!二二二」 キュン

何だ今のは!?

今、胸がキュンってなったぞ!?

そう思いみんなの安否を確認するが・・・

月影 「・・・oh, God. I met an angel」

うん、にほんごでおけー

月影 「・・・ちよつとユニコーンにあつてくる」

Z23 「・・・(話が進まないから) 次行きますよ?」

月影 「・・・エ」 (ω・ω・ω)

あ、すまん

行こうか

宿舎

Z23 「ここが宿舎です。皆さんは一応重桜側の寮に部屋があります」

月影「・・・今からでもロイヤル側に移ることは・・・？」

Z23「だめです（即答）」

月影「アツハイ・・・」

中は至つて普通の和風の一人部屋だった

するとそこに

ピンポンパンポン

指揮官「海上自衛隊、海上自衛隊至急執務室まで来てください・・・早くタスケテ・・・」

うん、早く行くか・・・

指揮官が灰になる前に

天喰「ニーミさんここまで案内してくれてありがとうございます」

Z23「いえいえこちらこそ。あとさんはつけなくていいですよ！」

天喰「そうですね・・・ではでは失礼します！」

執務室前

コンコン!!

天喰「失礼します！海上自衛隊全員着きました!!」

指揮官「ど・・・うぞ・・・」

ガチャ

そこには白く燃え尽きた指揮官がいた

ああ、指揮官!!

誰だ!! 誰がこんなことにしたんだ!! (お前らだよ)

指揮官「えつと・・・突然だけどみんなには明日演習をしてもらおうよ・・・」
え、また今日?!

指揮官「はやく、この地獄から解放してくれ・・・」

よし、行こう(この間0.2秒)

さすがにかわいそうに思えてきた・・・

「へーアレが未来の装備ね・・・」

「砲塔が一門しかないな・・・」

「あの箱なんだろう!?!」

現在俺たちは演習海域にいるんだが・・・

ガヤガヤ

・・・なんでこんなに祭状態なんだ!?

指揮官「すまん、どうやらみんな君たちの戦闘を気になったみたいで哨戒や事務関係

以外KAN—SENや本部の偉い人まで着てしまったポイ・・・」

うわ、あの元帥までいんじゃん・・・

まあそりや未来から来た船の戦闘なんて気になるな・・・

指揮官「それでは演習のルールをおさらいするぞ？」

・一回目標的用量産型艦の大群の撃破

・二回目対空対潜の確認

・三回目空母機能

うん、至って普通だな？

指揮官「それでは未来の船の戦い方楽しみにしてるよ？」

東海「あの時とは違う意味で緊張しますね・・・」

編成は前衛に昇龍と曇天

後衛は東海と俺だ

ちなみに月影はどこかという・・・

解説席

指揮官「いやー！どんな戦い方してくれますかね!? 月影さん」

月影「そうですね、特に対艦については曇天選手に注目……」

……うん、確かに「出番がないなら、解説するわ」って言ってたけど何指揮官までノリノリになっているんだよ……

曇天「……天喰、時間だ……」

おっともうか……

んじゃ、気合入れますか!!

天喰「全艦対艦戦闘用意!! 対艦ミサイルで削りつつ主砲で残りはかたずけるぞ!!」

東海・曇天・昇龍「了解!!」

演習

指揮官「それでは演習開始!!」

こうして演習が始まった・・・

天喰「各艦データリンクを繋げ!!」

指揮官「月影さん!データリンクを繋げるとは?」

月影「我々海上自衛隊所属艦は各艦にデータバンクがありそれを別の艦につなげることでいろんな情報を瞬時に交換ができる能力です」

指揮官「おお!!しかし武装は砲塔一門しか見えませんがどうするんでしょうか!?!」

月影「いいえ、彼の本当の武器は砲ではないんですよ」

指揮官「というところの箱でしょうか?」

月影「まあ見えていてください」

曇天「こちら曇天敵艦隊群発見!!」

指揮官「もう発見した!？」

月影「はい、彼の持つ“アクティブ・フェーズドアレーダー(AESA)”は広域範囲搜索なら324Km、低空警戒時は83Kmも探せるので高性能なのですよ」

指揮官「広!？」

月影「さらに彼の一番の骨頂“対衛星搜索レーダー(ASSR:Antisatellite search radar)”は高さおよそ4,000Kmまで観測できます」

指揮官「高!？」

曇天「トマホーク発射用意!!……てえ!!」

バシユウウウウ!!

それに5本の槍が放たれた……

指揮官「月影さん!!あれは報告書に載っていた噴出弾ですか!？」

月影「いいえ、それは対空ミサイル「シースパロー」といい今打つてのは対艦ミサイル「トマホーク」です」

指揮官「トマホークつというの?」

月影「トマホークというのは巡航ミサイルという部類に入り、マッハ10・・・音の10倍で接近して敵艦に当たる物です」

指揮官「音の10倍・・・しかしそれほど早いならどうやって操縦しているんですか？」

月影「いえ、アレは無人で曇天のレーダーが代わりに終末誘導を行っているんです・・・」

指揮官「なんと!? 無人ですか!？」

曇天「トマホーク目標到達まで10秒!!・・・8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1, n

ow!!」

どごおおおおおおん!!

曇天「目標到達!! 駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦、空母撃沈!! 戦艦は中破!!」

「「「おおおお!!」」」

指揮官「す、すごい威力ですわね!!」

月影「はい、しかし駆逐艦があと少しで避けきれたのですがやはり終末誘導は衛星か早期警戒管制機じゃないと確実には当たりませんねえ。威力は重巡洋艦以上戦艦以下

といったところでしようか」

指揮官「しかしあれはバンバン打てますよね？」

月影「はい、艦砲とはちがいこっちはデータを入力してロックオンすればいいのですが弾には限りがあるのですからね。しかし弱点もあります、それは近距離だと打てないことです」

指揮官「そうなんですか？」

月影「トマホークは遠くにいる敵を想定した巡航ミサイルで打った時上に向かってから目標の方向に向かうので近距離だと少し不利になります」

指揮官「ではその時には主砲で応戦するんですか？」

月影「確かに主砲で応戦しますが主に近距離は「対艦ミサイル　ハーブーン」で戦います」

ピーーーーーー！

指揮官「はい！最初の演習が終わりました!!」

二回目対空対潜確認

指揮官「はい！続きましては対空対潜確認です!!航空機の発艦係は空母エセックスが担当します!!」

エセックス「よろしくね！」

指揮官「それでは始め!!」

しかしそんな海域の中ではとあることが起きようとしていた・・・

演習海域 水中

アルバコア「……………」コポコポコポ

そうそこにいたのは性懲りもなく仕返しをしに来たアルバコアである

(やったのでもそも月影だろっつというのは気にしてはいけない)

アルバコア(あの潜水艦!!せっかく驚かせるチャンスだったのに逆に驚かせられるなんて…………!)というか静かにきすぎでしょ!)

そして手には例の爆弾が抱えられていた・・・

アルバコア(ふふん♪彼らの移動ルートは事前に確認済で数時間前からここに待機してたもん!絶対にばれないでしょ!)

一方海上

曇天「……………」航空機接近!!数おおよそ200!」

天喰「了解!!全艦E A攻撃開始!!」

月影 「お、電子攻撃を開始しましたね！」

指揮官 「でんしこうげき？」

月影 「電子攻撃とは敵ジェット機のレーダーやロックオンを妨害する攻撃です。……しかしこの世界にはレシプロ機しかないので母艦との接続が悪くなるしか効果がありませんね」

東海 「敵にロックオン完了!!シースパロー発射!!」

東海・曇天・昇龍 「「シースパロー発射!!」」

ドドドドドド!!

「何か打ち上げたぞ!!」

「あれは・・・噴出弾か？」

「おい！追いかけているぞ!!」

指揮官 「おお！あれが報告書にあつた噴出弾ですか!!」

月影 「はい、【正式名称 RIM-7 シースパロー】、詳しい構造は規則でしゃべれません。主艦隊の8〜18kmの上空の遠く中距離を迎撃する対空ミサイルです」

指揮官 「ほお・・・しかし7kmより近寄られたら使えないのでは？」

月影「確かに主に対空ミサイルの弱点として一発に一機しか追わないので数の暴力で来られたら捌ききれませんが近寄られても対抗手段はあります」

昇龍「敵機10！接近！」

天喰「C I W S ・ R A M ファイヤ！！」

昇龍・曇天「主砲射撃開始！！」

ブオオオオオオオオオオオオ！！

ドン！

ドン！

ドン！

指揮官「すごい音！！」

月影「あれは「C I W S フアンランクス」です。艦隊の対空ミサイルを抜けてきた機体に対する最後の近接防空兵器です。数秒間に大量に弾をばらまき敵の進行方向に

自動で修正追尾する機能を持ちます」

指揮官「主砲もすごいですね!!」

月影「海上自衛隊の船は威力はないですがその代わりに命中に特化したので対空にも使えます」

昇龍「!!スクリュウ音検知!!敵潜水艦4隻……あ、1隻追加!!合計5隻接近中、進路本艦隊!!」

天喰「アスロツク発射!!」

バシユ!!

ドカーーーーン!!

昇龍「爆発音検知!!破壊した模様!!」

指揮官「今発射したのは？」

月影「対潜ミサイル〔ASSROC〕ですね。発見した敵潜水艦の上空付近まで飛翔し着水し探知音を放ちながら敵潜水艦にぶつかるといふものです」

指揮官「探知音を放ちながらって・・・潜水艦にとつては悪夢ですよね・・・（プルプル）・・・ん？もしもし？え、アルバコアが？わかった治ったら執務室に来るよう言っ
といて・・・」

月影「？どうした？」

指揮官「いや、キニシナイデクレ」ハイライトオフ

月影「お、おう」

指揮官「気を取り直して、次は最後の空母機能です!!」

そのころアルバコアは・・・

ブルーギルに回収されていた・・・

ブルーギル「まったく・・・何してるのよアルバコア・・・」

アルバコア「探知音・・・魚雷・・・追ってくる・・・」カタカタカタ
ブルーギル「・・・何言ってるのよ？」

ようやく終わる・・・

最後空母機能だけど、前衛やることないぞ？

あと、空母機能ってないやればいいんだ？

東海と話し合った結果

アクロバティックと少し攻撃をみせることになった

東海は「ライダー隊」を出し、俺はF-14DJで編成される「セイバー隊」を出撃させた

東海・天喰「セイバー隊（ライダー隊）発艦せよ!!」

ちなみに東海の発艦方法は投げナイフを投げるように発艦した

そういえばエンタープライズはアニメで艦載機に載って戦ってたけど俺も乗れるのかな？

「あれが彼らの艦載機だな・・・」

「片方の艦載機すごくデカイぞ!!」

「しかもこの音かなりのエンジン馬力だ」

「運動性能も悪くない!!」

指揮官「今発艦したのが・・・?」

月影「はい、小さいほうが【F-35JB】、大きいほうを【F-14DJ】です。F-35JBはステルス戦闘機で敵レーダーに映らないように面積を少なくし小型化した小型機なのですがミサイルを胴体のウェポンベイに収納しているので継戦能力は高くないですがちよつとした機能がついていますよ。F-14DJは【対艦ミサイルハープーン】などの大型兵器最大8発運べる機体です」

指揮官「対艦ってことはさっきの対空ミサイルよりデカイのを!？」

月影「はい、おつとどうやらアクロバティックが終わって着艦するようですよ」

指揮官「さすがに着艦は変わらないのですね」

月影「いいえ、そんなこともないですよ?東海の方をご注目ください」

そこには空中静止しながら着艦するF-35JBがいた・・・

指揮官「・・・月影、俺は夢でも見ているのか?艦載機が空中で止まって着艦した

んだが・・・」

月影「いえ、現実です。F-3JBは短距離離陸垂直着陸機（STOVL機）であり着陸するときにはあのように垂直に着艦するんです」

指揮官「ということは我々でも使えると？」

月影「使えないこともないですが排気口が下に向くので木製の甲板だと熱すぎて燃えると思います」

指揮官「・・・なるほど、あ！すべての演習項目が終わりました!!お疲れさまでした!! 実況はこの基地の指揮官田中と！」

月影「潜水艦【月影】がおうくりしました!!」

現代艦隊の日常

某日朝 5:00

演習の後いろんなKAN—SENや偉い人の質問返答や勧誘に対応していた

質問は受けるけど勧誘は断らせてもらった

目覚める

ここの宿舎は一人一部屋なのでこの和室を一人で使えるからプライバシーも守られている

なぜかはわからないがこの世界に転生してから早く起きるようになった・・・

コンコンコン

東海「相棒、起きてますか？」

天喰「おう、今起きた」

東海「今日も朝練します？」

天喰「ああ、それより皆は？」

朝練とは前世ではさすがに戦いを知らない一般人だったのでKAN—SENになつて体力が上がったとしても鍛えることにしたんだが・・・

曇天「ふおおわああ・・・すまん遅れた・・・」

隣の部屋から曇天が出てきた

曇天はイージスシステムや状況処理の勉強をしているので夜遅くまで勉強を始めた

曇天は気は少し短い仲間思いで意外と努力家でもある

東海「いえ、僕たちも今来たところですよ」

曇天「そっか・・・ハアなんでこの年で夜遅くまで勉強をせないかんの？」

天喰「しかたないだろ、お前改イージス艦なんだから。あと月影と昇龍は？」

月影「俺ならここにいる」天井「ヌッ

曇天「うお!?なんてとこにいんだよ？」

月影が天井から顔を出してきた

よくそこに行けたな・・・

月影「ちよつとロイヤル寮に行つてユニコーンちゃんの寝顔を

じやなくて俺もたまたま早く起きてしまつてな・・・」

おい、今さらりと犯罪したつて言わんかった？

アークロイヤルとなんか同類の匂いがするぞ・・・

月影「・・・それより昇龍は?・・・」

東海「確かに・・・遅いですね・・・」

曇天「また、寝坊か？」

天喰「相変わらず前世でも寝坊魔だったからな……起こしに行くか……」

昇龍の部屋

コンコンコン

天喰「おーい昇龍起きてるかー？」

シーン

天喰「……仕方ない、この世界でもやるとはな……みんな、準備しろ」

東海・曇天・月影「……了解」

(数分後)

そのころ部屋の中！

昇龍(うーん朝練があるけどもう少し寝てたい……)スヨスヨ

昇龍はまだ夢の中にいた……

すると……

ドンドンドン!!

天喰 「FBI, open!!」

バキイ!! (扉が破壊される音)

昇龍 「(ガバツ)・・・へ?」 (困惑)

「!」go! go! go! go! go! go! go! go!」

バキイ!! (ふすまを破壊する音)

バリイ!! (窓ガラスから突入音)

どかあ!! (天井が破壊する音)

昇龍 「え、ちよ!?! なになになに!? (ガシイ!!ズリズリズリ)」 外に連行

外!!

天喰 「よう。起きたか寝坊助?」

昇龍 「エ、ア、ハイ」

天喰「あ、ちなみに部屋の修理は自分でしろよ」

昇龍「え……（。ㇿ。）」

バン!!

明石「朝からうるさいニヤ!!」

こうして俺たちの新しい一日が始まった

朝 8:00

朝練（陸自のメニュー）をして朝食をとる

東海「ふう、疲れましたね……」

昇龍「僕なんか朝からひどい目にあつた……」

月影「……あれは起きない昇龍が悪い……」

昇龍「……でも加減つてもものがあるでしょ」

朝はみんなそれぞれのメニューにした

俺はフレンチトーストを頼んだ

朝 10:00

講堂 教室

スキル上げのためにスキル本や授業を受けている

ちなみにスキル本はどれも見た目一緒なのに開いてみるとなぜかそれぞれのKAN
— SENのスキルの使いどころや応用が書かれていた(こういう原理だよ・・・)

授業は講師で鳳翔さんが担当した

・・・やはりスキルが空母育成に向いているからのとあつちでは最初の空母だからか
すつげえわかりやすかった(あとどこがとは言わないけどデカイ)

他の皆は曇天は改イージス艦だけ一応対空巡洋艦に分類されたため巡洋艦の所、昇
龍はアマゾンの所、東海は万能艦なのでいろんなところを回っている、月影はアルバコ
アに気づかれずに近寄れたことが広まったため逆に講師をしている

昼 12:30

食堂

午前の部が終わりしばらく暇ができる

こういう時間に他のKAN—SENは遊ぶ人・買い物をする人・昼寝をする人などに
分かれる

今回俺は買い物に出ている

だって、まだこつち来て日が浅いので自分のものが少ない

というわけで日用品をそろえに来た
お金は指揮官が特別に出してくれた

昼 4:00

講堂・演習海域

演習海域で艦載機の爆撃、空戦訓練を行った

この時エセックス級組からキラキラした目で見られた

・・・そんなに艦載機がかっこいいのか？

そいえばアニメでエンタープライズがやっていた艦載機にのる芸当だけできるの
かな？

試しにやってみたけど、結果的にいえば失敗して海に落っこちた

乗れるには乗れるけどとても立って戦える状態ではなかった

例えるなら Fa0e/zero のバーサーカーの F15J に乗っている状態みた
いに伏せて乗っていた

講堂では午後の部が行われた

講師は午前と違いレンジャーさんが無誘導爆弾のコツやセイレーンの種類を教えて
くれた

夜 6:30

今日すべての授業がおわり宿舎に帰ったり残って部活などをする者がいる
今日の海の哨戒は俺たち自衛隊組が出ることになっている

夜 11:00

哨戒監視が終わり指揮官に報告して終了なんだが今回は違った・・・
天喰「どうした？こんな遅くに話があるなんて？」

指揮官「なに、ちよつと話がしたくてな・・・ま、座つてくれ」
曇天「んで、話つて？」

指揮官「みんなの女性のタイプをおしえてくれない？」

・・・ why?

東海 「セクハラですよ・・・」

指揮官 「：この基地俺以外全員女性だからタメ口で男と話すなんて久しぶりでさ：
男に恋しくて・・・」

月影 「・・・やらないか♂?」

指揮官 「違う、そういうのではない・・・」

曇天 「つまり、ボーイズトークをしたいと・・・?」

指揮官 「That's right! あ、あと話すならこの男の仲の秘密な!」

こうして唐突な秘密のボーイズトークが始まった(誰得)

指揮官 「話を振ったからには俺からだな!俺のタイプは優しく、明るい子かな!」

曇天 「俺は冷静でクールな人かな?」

昇龍 「僕は趣味が合う人でいいかなあ?」

東海 「俺はちよつと固い人だけど褒めたらデレる人かな?」

指揮官「え、キモ（引）」

昇龍「つまりツンデレと付き合いたいと」

曇天「変わった性癖だな」

東海「・・・そんなに言わなくても・・・」

月影「自分より小さくてかわいい子で妹キヤラ」

東海「お巡りさんこいつです」

昇龍「やっぱりこいつは前世からロリコンだった・・・」

曇天「アークロイヤルと同じですね」

指揮官「はっはっは・・・天喰は？」

天喰「・・・黒髪・・・」

指揮官「え？なんて？」

天喰「黒髪ロング美人に和服と黒タイツがすごく似合っていて面倒見がいい人。あ、あと胸がデカイ人」

指揮官「お、おう欲望には忠実だな・・・」

夜 0:00

就寝

こうして転生組の一日が終わる

第二章 運命の出会い

対決、そして出会い

指揮官「ふう、思いのほか早く終わったな」肩コキコキ

天喰「おう、お疲れ」お茶スツ

今日は初めての秘書艦の仕事をした

お茶出し、書類整理、スケジュールの確認 e t c . . .

多くない? (疲れ)

画面の向こうにいたみんなってこんなに忙しかったの? (それはちがう気がする)

するとそこに . . .

??「(コンコン) 失礼します!!」バン!!

来たのは茶色の髪に鶴を思わせる着物を着た女性がいた

指揮官「 . . . どうぞっていう前に入んなよ . . . 瑞鶴」ズズツ

瑞鶴「ご、ごめんなさい。ってそんなことより!! 本部から役員が来てるのよ!!」

ゴフオ!!

指揮官「 . . . 今なんて? 」

瑞鶴「だから！本部から役員が今すぐソコに来て居るのよ!!」

天喰「指揮官、お前何かやったか？」

指揮官「・・・いやに何もしていない。やったとしても昨日廊下で転んでシグニットにラツキースケベでおっぱいタツチいたぐらいしか・・・」

天喰「・・・憲兵さんこいつです」

瑞鶴「見損なつたわ・・・指揮官」

指揮官「待つて!?確かに犯罪だけど意図的じゃないから!!」

コンコン

??「失礼します、アズールレーン本部憲兵のトーマスです」

入ってきたのは黒いスーツに四角い眼鏡をした怖そうなひとだった

指揮官「基地司令の田中です。今日はどのようなご用件で？」キリツ

・・・この人やるときはちゃんとするのになあ

トーマス「今回の用件はあなたに犯罪を犯したので連行しに来ました」

ああ、やつぱり・・・

指揮官「ええ!?!うそお!?!」

瑞鶴「指揮官・・・あなたのことは忘れないよ・・・」グスツ

指揮官「待つて!瑞鶴早まらないで!?!」

トーマス「あ、ちなみに訴えたのは人間ですよ？」

え、マジ？

指揮官「……ちなみに訴えた人の名前は？」

トーマス「それはここでは言えません。知りたいなら本部まで一緒に来てもらいます」

瑞鶴「指揮官、本当に何もしてないよね？」

指揮官「……ああ、少なくとも人間相手には何もしてないさ」

トーマス「ではそちらの海上自衛隊旗艦も来てください」

え、俺も？

天喰「自分は何をしましたか？」

トーマス「……申し訳ございませんがそれはお答えできません」

ん？ どういうことだ？

普通、何か罪状を持ってきて連行するだろ……

指揮官はあるのになんで俺はないんだ？

でも、ついていけば誰が訴えたのがわかるしな……

天喰「……わかりました本部についていきます」

トーマス「……ご協力感謝します」

瑞鶴「指揮官、安心して!!指揮官が帰ってくるまでここは私たちが守って見せるから!!」

指揮官「……頼んだぞ瑞鶴」

トーマス「……では連行させてもらいます」

アズールレーン本部

またここにきてしまつたな……

つて言つても今回は会議場ではなくなんかデカイ裁判所みたいな所なんだけどな

というか周りの目線が痛い……

指揮官と俺が中心に立つて「かごめかごめ」みたいにくるつと他の基地の指揮官たちがいる

しかもやつぱりいるよあの元帥……

指揮官「……おとなしく来ました。では私を訴えた人は誰ですか?」

「……それは僕のことだよ!!」

うわ、このねつとりした声は……

天喰「……豚田中将……」

そう、あの豚野郎……

顔や腕などに包帯でグルグル巻きにされていた

・・・・どこか怪我でもしたのかな？

指揮官「・・・なぜ私たちを訴えたのですか・・・」

豚田中将「いやあ、前君の部下にに手ひどくされてねえ。ちなみに訴えたのは次のとうりだよ」

バツ!!

豚田中将が見せた紙には以下のことが書かれていた

・KAN—SENのパワハラとセクハラ

・本部に戦果の水増し虚偽

・人身売買の加担

・・・・なんだコレ？

指揮官「・・・あのおこれは？」

豚田中将「私はこれらの罪を田中少将が犯したという証拠を押さえました!!というわけで田中少将を起訴させてもらいました」

そして見せられたのは写真には

武器ボックスの収められている倉庫でKAN—SENに暴力ふるっている指揮官の写った写真

マフィアと指揮官らしき人物が小さい牢屋にKAN—SEN—や小さい子供が取引にされている写真

が出されていた

・・・はあ!?

豚田中将「KAN—SENのパワハラは田中少将の基地所属のKAN—SENがこの私に救ってほしいので証拠の写真を撮りました。人身売買は3日前に取引されているところを取りました」

・・・これは嘘の証拠だな

まず指揮官の人格的にありえないし

3日前だつて俺が秘書艦になるためにエンタープライズから指揮官と一緒にレクチャーを受けていたからいなくなる時間なんてなかった

指揮官「・・・失礼ですが私にはアリバイがあります。3日前は天喰を秘書艦になるためのレクチャーをしていたためできません」

「しかし！この写真が物語っているぞ!!」

「それに三日前にいたアリバイの証拠を見せる!!」

「その空母も共犯の可能性だつてあるじゃないか!!」

くそ、ほとんどあつちの味方してるな

ちなみに俺の罪は指揮官の犯罪の共犯だそうな

元帥「すまない、田中少将。証拠が押さえられている以上君より豚田中将の方が信じられる……」

あ、あのおっさんもあつちに行きやがった……

指揮官「……もし私が逮捕されたら基地の皆はどうなりますか？」

元帥「基地は解体、KAN—SENたちはそれぞれの陣営本拠地に帰還させて新しいところに配属になるが海上自衛隊諸君は豚田中将の基地に所属になる……」

え、いやだよ？あの豚野郎の所に行くなんて……

しかもアイツ絶対何か俺たちに危害を加えるだろ

豚田中将「上の者が下の者を監視するのが役目なんだがようやく尻尾を出したなあ

田中くうん？」ニヤニヤ

うわこいつ勝ち誇ったように笑ってやがる……

でもマジでこのままだと指揮官と基地の皆とグッパイしてしまう!!

そう焦りつつも証拠の写真を見てあることに気づいてしまった……

「……あれ？なんでこの倉庫の写真にアレが写ってないんだ？」

天喰「……………指揮官」トントン

指揮官「……………グスツ……何？」カキカキ

天喰「この写真……って何やってんの？」

指揮官「……………基地の皆へのさようならの手紙……」

天喰「待つて早まないで!?!……………この証拠の写真間違いがある……………」

そう、だつてとても印象的なあれがないんじゃないか

天喰「失礼ながら質問よろしいでしょうか？」スツ

豚田中将「ん？いいだろう！強いはずの中将が弱いもの話なんて聞くもんじゃない

が特別に許可をしよう!!」ニヤニヤ

豚田中将（くつくつく!!さつさと田中を解雇し逮捕させてアイツらを僕の基地に配属

させてこき使つてやる！とくにあの空母は専属のサンドバッグにしてやる!!）ニヤニヤ

天喰「では失礼します。この倉庫の写っている写真なんですが……………」

なんでうちの東海が作った巨大な大砲が写ってないのですか？」

ザワザワザワ・・・

指揮官（あ！ほんと無い！）

だって隕石を打ち落とすためにデカくしたんだ・・・

影ぐらい写ってもいいのにこの写真には影すら映っていない

豚田中将「な、なにを戯言を!？」

元帥「いや、戯言ではないぞ豚田中将。確かに以前の報告書で基地でトラブルがありその場に設置することにしたと」

あ、そういうええば当日めっちゃ指揮官が電話対応してたな

「これはどういことだ！豚田中将!」

「嘘の証拠を出したのか!？」

「しかし、田中少将の人身売買はまだ解決してないぞ!!」

うーん・・・半分くらいこっち側に引き込めたけどまだ指揮官の無実は証明しきれない・・・

元帥「・・・ここで私から一つ提案があるがいいか？」

そう元帥が発言するとあの時みたいになつた

元帥「確か豚田中将は「強うものが」といたはずだよな？」

豚田中将「は、ハイ！確かに言いました!!」

元帥「なら昔ながらに“勝負”で決めないか？」

え、勝負？

元帥「ルールは田中少将は海上自衛隊のみ、豚田中将は自由に編成を組みどころかが全滅または降伏したほうが負け。使用するのは演習弾のみ!!勝ったほうの証言を全員信じるにしよう」

……つまりぎつくりすると勝ったほうが正義ということなんだな。なんか考え方がこの人らしいな……

元帥「全員反対はないな？なら現時刻から一週間後に田中少将と豚田中将の対抗演習を行う!!では解散!!」

指揮官「いやー大変なことになつたな……」

天喰「ほんと……さっきの電話の時なんて赤城さんの暴走を止めるにも……」

あの後から基地の皆に伝えたんだけど……赤城さんがぶちぎれた……

赤城（今すぐにそちらに向かいその豚を殺めてきます!!）

って言い出したから指揮官と加賀さんが全力で止めた

すごいもん、電話の向こうから黒いオーラが感じれたもん・・・

まさか、東海のあの問題作がここで役に立つとはな

天喰「あ、悪い指揮官少しトイレに行ってきていいか？」

指揮官「おう、行ってラー」

数分後

トイレ前

いやーすつきりしたー

ずっと立ち続けてるからすぐトイレに行きたかった・・・

そう思いトイレから出て指揮官の待っている曲がり角を曲がろうとしたら・・・

ドン!!

「うわ!?!」「キャ!?!」

何かにぶつかった・・・

天喰「痛たたた．．．あ！大丈夫ですか．．．」

??「．．．．．大丈夫です．．．」

そこにいたのは長い黒い髪に紅蓮のように赤い着物にスカートと黒タイツを着た

装甲空母

大鳳だつた

天喰「．．．．．」

大鳳「．．．．．どうかされましたか？．．．．．」

天喰「あ！いえなにも!!」

やっべ惚れた。いや例えとかではなく一目惚れだつた

夜空のように綺麗な黒髪

ルビーのように綺麗な赤い目

その場で舞えば鳳凰と間違えそうな綺麗な人だった

って言っても俺が付き合えるわけがないけどね!!

だって前世では年齢≒彼女いない歴

だったもん!!無理だね!!

あれ? 目から汗が・・・

でも前世ではアズレンしてたとしても露出もう少しなかつたけ?

なんか肌全体を隠すように着込んでいる気が?

んー? 少し寒いから着込んでいるのかな?

あ、そんなことより起こさないと!

天喰「スミマセン、自分が前を見てなくて・・・」スツ

大鳳「・・・いえ、こちらこそ・・・」

天喰「大丈夫ですか? 立てないなら手を貸しま・・・え?」

起こそうと手を出して引き上げた

が、その時見えてしまった・・・

豚田中将「おい! 大鳳なにをしている!? 早く行くぞ!!」

大鳳「!?、はい! 指揮官様今行きます!!」ダツ!!

天喰「……………待って!!」

大鳳「……………なんでしょう?」

天喰「君!その首輪と傷h「黙ってください!!」ツ!?」

大鳳「……………私と指揮官様の愛に邪魔をしないでください……………」ダツ

天喰「……………それは愛じゃないだろツ!!」

と静かに呟いた

そう見えてしまったのだ…………

鈍く光る首輪と傷だらけの肌が…………

見られてしまった…………

基地の皆からではなく

しかも噂の空母に…………

実は前、指揮官様が本部に行った時あの空母の言葉を聞いてしまった…………

確かに私たちは戦いたくなくても人間の明日を守るために戦っている

でもそれは他の基地での話・・・

私たちの基地は明日ではなく

自分たちの今のために生き残ろうとしているんだから・・・

今の基地に初めて配属にされたときは指揮官のために頑張ってみんなと笑顔で過ごしたかった

だけど現実は違った・・・

宿舎は倒壊に等しいほど古くなっていて

KAN—SENの皆は暗い顔をしていた

講堂もまるで戦争でもあったのかの如くボロボロになっていた

食堂も埃だらけで使われていないようだった

何でも指揮官様は資金のほとんどを私的に使い母港にはほんの少ししか出してくれなかった・・・

憲兵も欲の塊と化し、KAN—SENを平気な顔で強姦する

あまりの惨劇に指揮官様に抗議したけど・・・

豚田中将「知るか！お前たちは俺たちの道具だから言うことだけを従つとけばいいんだよ!!」

つと相手にもされなかつた

あまりにも無責任な態度に他のKAN—SENと一緒に抗議しようと呼びかけたけど

皆まるで魂を取られたかのように無反応だった・・・

これは異常だと思ひ何人かを基地から逃げ出そうとしたけど、必ず捕まって帰ってきた・・・

連れて越されたKAN—SENはみんなの前に連れてきて目のまえで強姦された

逃げ出す手助けをした私も罰をうけた

冷たい牢獄に冷たい海水に浸かりながら一日中縄で縛られて座らされた

短くて3日を出してくれたが大体が忘れ去れて2週間も座らされた・・・

寒かった寒すぎて眠かったが寝てしまったらしたは海水に浸かっているので溺死し
まいそうだった・・・

幸いなことに私は犯されることはなかったが地獄は続いた・・・

出されたとしても暴力は振るわれ続けた

無謀な進撃、邪魔者の処分など

いつも泣いた

どれくらいかはわからないほど泣いた

けど、だれも慰めてはくれなかった

慰めてくれる人なんていないから・・・

恐らく一番の幸せな昼食の時間でも最低の量しか与えられなく駆逐艦の子もいつもおなかを空かした

そして私は思った

もしかしたら自分が指揮官様に役立つてないからなのは・・・？

そう思い死ぬ気で依頼や雑務をうけた

でもいつも見えてはくれなかった

誰でもいいから温かみが欲しかった・・・

豚田中将「おい！話を聞いているのか!?(ゴン!!)」

大鳳「う!・・・はい、申し訳ございません」

豚田中将「つたく・・・これだからモノは・・・おい、今度アイツらと戦うからとある作戦に従ってもらうぞ・・・」

大鳳「・・・はい」

豚田中将「くつくく待っているがいい海上自衛隊ども!!はっはっはっは!!」

大鳳「・・・」

こうして豚田中将側も準備を進めていった・・・

勝負

天喰 side

・・・あれからちょうど一週間が経った

俺たちの武装は演習弾がなかったから明石と夕張と東海が死に物狂いで開発した
・・・が、やっぱり一週間前に本部であった大鳳が気になっていた

指揮官「おーい、天喰！」

天喰「ん？指揮官か・・・」

指揮官「どうしたんだ？さつきから暗い顔をして」

天喰「・・・そうか」

指揮官「大丈夫か？この後對抗演習始めるけど？」

天喰「・・・なあ指揮官、仲間に実弾所持を許可しいてくれないか？」

指揮官「・・・それは相手があいつだからか？」

天喰「・・・それもあるがそれ以外もある・・・」

指揮官「それ以外？」

指揮官に一週間前に会った豚田中将の部下の大鳳の様子を伝えた・・・

指揮官「……わかった一応実弾を所持を許可する……」

天喰「……ありがとう」

そう礼を言い出撃地点に向かった

東海「相棒遅かったですね？」

天喰「……全員、実弾を詰め込んで」

昇龍「？セイレーンの奇襲対策ですか？」

天喰「それもあるが一番の対策は……」

曇天「……相手の違反攻撃か……」

あれから豚田中将についてを基地皆に相談したが大体が憤慨した

天喰「全艦にいう、基本は通常どうり対抗演習をする。しかし相手が実弾で攻撃または不審な行動を見たら俺に報告せずに実弾での発砲を許可をする。悩むな、アイツがなにをするかわからんぞ……」

全員「……了解」

一方豚田中将側

大鳳「……やはりするのですか、指揮官様……」

豚田中将「あん？モノの癖に僕に話しかけるな！」

大鳳「・・・申し訳ございません」

そう、天喰たちの予想どおりに演習に参加するKAN—SENはみんな実弾が積まれていた

豚田中将「いいか？勝てそうだったらいいが負けそうになったら道ずれにしても勝て」

大鳳「・・・了解しました」

豚田中将「ああ！楽しみだ!!あいつらが僕に歯向かうのが間違いに気づく瞬間を!!」

大鳳「・・・」

しかしこの時実弾のほかにKAN—SENに大量のある物が積まれていた

天喰 side

「それでは対抗演習開始!!」

こうして始まってんだがまだ胸騒ぎがする・・・

東海「相棒、始まってますよ!!」

天喰「!ああ、すまない」

いかん、いかん

集中せんと、あとのことより今だ

天喰「全艦、対空対潜を厳となせ!!」

全員「了解!!」

天喰「・・・東海、全艦載機を対空特化にしろ」

東海「攻撃は天喰が出します?」

天喰「・・・いや、俺は心神しか出さん」

東海「もしかして全滅ではなく降伏させるのか?」

天喰「・・・あいつらの事情を知つて待つた以上アイツが艦隊に何を仕掛けられて
いるのかがわからないから。攻撃は曇天たちに任せる」

曇天「・・・さりげなく俺らが一番のカギじゃん・・・」

天喰「・・・ああ、すまん・・・」

曇天「いいつてことよ、お!レーダーに機影あり。たぶん敵の偵察機だな」

昇龍「打ち落とすか?」

天喰「いや、いい。こつちも相手を見つけた。・・・やはりいるのか大鳳」

昇龍「しかし、見つかったら敵攻撃機がやってくるぞ?」

天喰「俺たちの目的はあくまで降伏で全滅ではない。敵の航空機を一機でもなくして、
戦意をなくして降伏させるコレしかない」

東海「だから艦載機を対空特化にしたんですかね」

天喰「すごいことだ・・・よし、東海発艦させるぞ」

東海「了解、ライダー隊発艦せよ」

天喰「ゼア隊、発艦せよ」

俺は弓を引き、F-3Cで編成された「ゼア隊」と「ライダー隊」が空へ飛んで行った

天喰「よし、全員聞け。これから始める作戦はこうだ・・・」

大鳳side

敵の艦隊を見つけて指揮官様の言っていた対空ミサイルなる物に注意したがやはり打つてこなかった

指揮官様が出撃前に

豚田中将（あいつらはこっちの事情を知ってしまったから派手に動けないはずだ）

と言っていたから対艦ミサイルというものも警戒して防御系重巡洋艦を前に盾にしたけど飛んでこなかった

彼らが演習したとき指揮官様もいたので大体のことを教えてくれた・・・

彼らの残りの対空装備はしーうすというバルカン砲のみ

チャンスだと思いい攻撃機を発艦させた

しかし次の瞬間おかしなことが起き始めた
自分の艦載機の反応が一機ずつ消え始めた

不審に思い味方に対空レーダーで確認させたけど敵の機影は映らないそうだ
不安はに思いつつも前進する

?? 「大鳳さん、怖いよ・・・」

大鳳 「大丈夫よ、大鳳がついてるよ！」

編成は前衛に駆逐艦 睦月、如月

重巡洋艦 プリンツオイゲン

後衛は旗艦の大鳳

戦艦の扶桑姉妹

の6隻だ

しかし、全員顔が暗い

無理もない全員演習弾ではなく実弾を装備させられているから・・・

如月 「この作戦が成功したらみんな少しは楽になるかな？」

プリンツオイゲン 「・・・そんなわけあるわけないじゃない・・・あいつがいる限

り」

空気も重い

しかし運命はそんなことお構いなしの如く起きた……

扶桑「ん？おかしいわ……リーダーの調子がおかしい……」

大鳳「調子がおかしい？」

プリンツオイゲン「ええ、さつきまでは綺麗に写っていたのに急に悪くなったのよ……」

確かにおかしい

出撃する前に確認したけどその時は正常に動いたのに敵と接敵するタイミングで故障するなんて……

指揮官様も敵にそのようなものは乗っていないって言ってた……

キイイイイイイ!!ドカアアアアアアアン!!

プリンツオイゲン「!?、きやあ!!」

しまった!

ミサイルなんて打たないだろうって指揮官様は判断したけどそれでも打ってくるなんて!?

しかしオイゲンはインクだらけになっていた……

やっぱりあっちの弾は演習用のインク弾……

でもこっちは実戦用の実弾……

本当はこんな間違いはしたくなんかない……

でも打たないと基地の皆が地獄にあう……

オイゲンがインクまみれになつて撃破判定になつても戻らない所を確認して呟いた……

大鳳「……ごめんなさい、私たちを許して」

そして敵艦隊の姿が見えて皆が砲の引き金を引いた……

しかしそれは次の音で消されてしまった・・・

ドドドドドドドドドドド!!

山城「きゃあ!?!」

プリンツオイゲン「く!?!大鳳、敵の艦載機だわ!?!この対空レーダーが壊れているときに!!」

それはまるでセイレーンの艦載機に似ている機体だった・・・

こっちは急いで艦載機を出す

しかし、気づかれずに接近できたのになぜ爆弾を落とさずに機銃掃射し続けるのだ?

さつきミサイルがきてオイゲンに当たったのになぜミサイルも使わない？

機銃掃射は実弾だが船を沈めれるほど威力が高いわけでもなく精々貫通力が高いだけだ・・・

するとさつきの機体が反転して艦隊の上空で煙を巻き始めた

煙は艦隊をすっぽりと包み込んでしまった

扶桑「しまった!!これじゃ敵が見えない!!」

確かに狙えないがそれは向こうも同じ・・・

そう思い砲の発射音が聞こえた

だがその音は味方ではなかった

ドン!!

ドン!!

ドン!!

睦月「きゃ!?」パァン!!

如月「ヒヤア!?」パァン!!

プリンツオイゲン「な!?どこに!?」パァン!!

そのような音が連続的に聞こえて驚愕した

大鳳（そんな、敵艦!?まだ敵艦隊まで距離があるのでに攻撃されている!?）

ようと目を凝らすと煙の仲から一隻、私たちの近くで砲撃をしている船を見つけた

大鳳「みんな!!煙の中に駆逐艦クラスの敵が砲撃をしていたるわ!!」

プリンツオイゲン「了解!!反撃すr（ドドドドドドドド!!）・・・うー」

しまった!!こちらの今出せる艦載機は全滅し、先ほどの敵機が再び機銃掃射を開始し

た

でもこつちが煙から脱出して敵艦隊に近づき肉薄すれば勝機がある

大鳳「みんな!!一端煙から脱出しますよ!!」

山城「りよ、了解!!」

こうして煙から脱出したら敵艦隊は目と鼻の先にいた

あちらの艦隊にも一隻だけ砲撃をしている艦がいた・・・

オイゲンたち主砲があるKAN—SENは反撃にと今度こそ引き金を引こうとした

が、弾は出てこなかった

プリントオイゲンら一同（（（（!?））））
なぜかと思ひ自分の艦装を見ると

主砲や機銃、魚雷までもが破壊されていた

天喰 side

・・・うんあつちは混乱しているかな？

俺の考えた作戦とはこうだ

1、俺と東海で敵偵察機の情報に來た敵機軍を打つ落とし、昇龍に単独行動をさせ大きく迂回させて敵艦隊の背後に待機しジャミングを開始する

2、曇天が演習用のトマホークを発射し命中させそのまま退場した場合は続行、しない場合は次の工程に続く

- 3、ゼア隊とライダー隊は機銃掃射を開始、敵の注意を上に向ける
- 4、十分ヘイトを集めたら艦隊上空で煙幕に改造したフレアをたく
- 5、その瞬間に昇龍が艦隊の中に突撃
- 6、曇天と昇龍が主砲で艦載機は機銃掃射を開始する

ただし、目標は可能な限り本体ではなく艦装のみとす

第一俺たちは接近戦を想定しない作りだ

特殊弾幕もこっちはミサイルであつちは弾だ。今回は事情でミサイルが打てないからあつちの方が有利になつてしまふ、なら近づかれる前に無力化することになつた

東海「これであつちが戦意損失してくれたらいいですね・・・」

曇天「そうだな、降伏を呼びかけるか？」

天喰「・・・そうだな」

無線機を取り出し呼びかける

天喰「・・・こちら海上自衛隊旗艦【天喰】、聞こえているんだろ大鳳？こちらは降伏を願う」

・・・少し間がおいて返信が来る

大鳳「・・・こちら旗艦大鳳・・・降伏します」

oooooooooi!!

演習終了のサイレンが鳴った

大鳳 side

山城「大鳳さん!!主砲も副砲も破壊されました・・・」

扶桑「わ、私もです・・・」

大鳳「・・・大鳳の艦載機も出せるものはすべて破壊されました・・・」

・・・やられた

まさか全滅ではなく降伏を狙うとは・・・

それに驚くべきに敵艦練度が上がった違いに上手だった

霧の中や遠くに離れていたのに本体ではなく艦装のみに一発も外すことなく当てた

大鳳(私たちはこんな艦隊に勝てるだろうか・・・)

そう思ってしまった

どんなに自分たちの明日が危ういから士気を高めても、絶対に勝てない壁を感じてし

まった

豚田中将「おい!? どうしてこの距離で攻撃しない!?」

指揮官用の無線機から指揮官様の声が聞こえた

大鳳「……不可能です。近づく前に艦装をすべて破壊されました……」
すると通常の無線機からあの空母の声が聞こえた……

天喰「……こちら海上自衛隊旗艦【天喰】、聞こえているんだろ大鳳? こちらは降伏を願う」

豚田中将「な!? ええい! 使えない奴らめえ!! おい! あの作戦を開始しろ!!」

大鳳「……本当にやるのですか?」

豚田中将「別にお前らがそこで犬死しても構わん。しかし死んだら基地の奴らがどうなるんだろうなあ?」

大鳳「ツ!? ……了解しました」ピッ

プリンツオイゲン「……大鳳」

大鳳「……何? オイゲン?」

プリンツオイゲン「……最後にあなたと戦えて光栄だったわ……」

……ああ、なぜこのようなKAN—SENも共に行かなければならないんだらうか
あの作戦とは指揮官様が指示した敵艦に×する×というものだった

大鳳（ごめんなさい、こんな哀れな大鳳を恨み続けてほしいです……）

……本当はあの時あの空母が私を心配してくれてうれしかった、でも指揮官様との
愛だと嘘をついてしまった

大鳳「……こちら旗艦大鳳、降伏します……」

だから今からでも謝ろう……

ごめんなさい、死んで……

天喰 side

曇天「お！相手側がゆっくりとこちらに来てるぜ!!」

東海「……どうやら心配は無用でしたね……」

……この胸騒ぎは気のせいだったようだ

しばらくして大鳳たちがやってきた

天喰「……すまん、なんか一方的な勝利になってしまった」

大鳳「……いいえ、そちらの砲撃の腕も素晴らしかったです……」

天喰「……なあ！」

大鳳「……なんでしよう？」

天喰「……なにか相談してほしかったらいつでも俺たちの基地に来ていいぞ？」

大鳳「ツ!?!?……ありがとうございます」

……おそらく大鳳たちがいる基地はブラックなんだろう……こちらから手出しはできないが相談に乗るくらいはできるだろう

大鳳「……では少しよろしいでしょうか？」

天喰「!!……ああ！なんでも言ってくれ!!」

よかった、これで少しは彼女たちの役に立てるかな？

そう思い大鳳と俺の距離が触れ合えるくらいに近づいた

大鳳「ごめんなさい……」

ピッ

ド
カ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ン
!!!!!!

視
界
が
真
っ
白
に
な
っ
た
・
・
・

東海 side

昇龍「!?、天喰!?!」

それは演習に勝利し、戦いの後の交流で天喰が相談に乗ろうとしていたしかし、突然相手の旗艦が天喰のそばで爆発した

曇天「おい!?!どうしたんだ(ドカアアアアアアアン!!)うわ!?!」

次の瞬間、敵側の駆逐艦が曇天に体当たりをして自爆した・・・

まさか!?!特攻!?!

東海「大丈夫ですか!?!曇天!?!」

曇天「いてて・・・咄嗟にシールドを召喚していなかったら危なかった・・・それよ
り!!!」

ピ、ピ、ピ、ピ

敵側の首輪が赤く点滅を繰り返しながら相手が近づいてきた・・・

東海「あなたたち!?!今やっていることわかっていますか!?!」

如月「・・・ごめんなさい、これはしきかんのめいれいなの。従わないと基地の皆

が危険なの……」

曇天「反抗しようとは思わないのかよ!？」

山城「……爆発は殿様の意志で発動する。爆発の元になる首輪を外そうとしたらその場で自動的に爆発するようになってるんです……山城たちに選択肢なんてないんです……」

プリンツオイゲン「……だから許して」

そう言い相手の重巡洋艦と駆逐艦が曇天と昇龍に止めといわんばかりにぶつかろうとしていた

東海（くそ!!演習は終わって武装にロックをかけているから攻撃できない!!）

どうすれ!？」

……待てよ?確かあの戦艦殿様の意志でつて言ったよな?……なら!!

東海「昇龍!!この爆弾、遠隔起動だ!!」

昇龍「ちよ!?!今います!?!その情報!?!つてあぶな!?!」

ぶつかりそうなところを寸で避ける

東海「だから!!遠隔起動だ!!」

昇龍「ツ!!そういうことか!!」

昇龍が持っているアレが効くなら!!

昇龍「対レーダー無効化装置起動!! 疑似EMP、出力最大で展開!!」
相手がもう目の前までの迫っていた
・・・頼む間に合え!!

ポスト

昇龍が駆逐艦にぶつかったが

爆発は起きなかった

如月「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」グスッ

東海「それより天喰!!大丈夫ですか!？」

天喰のいた場所は艦装が飛び散り爆心地には火傷をしボロボロになった天喰と大鳳がいた・・・

天喰「おい!?大鳳!?しつかりしろ!？」

大鳳「・・・・・・」

天喰「ち!?おい!東海!!すぐに基地に緊急手当ての手配を要請しろ!!」

東海「了解!!指揮官!!聞こえるか!!こちら東海!!」

指揮官用の無線に緊急の無線を開く

指揮官「こちら田中!!どうした東海!？」

東海「演習が終了した瞬間相手が特攻を仕掛けてきた!!重症したのが3人いる!!」

指揮官「何!?了解した!!すぐ受け入れを準備する!!」

東海「ありがとうございます!!天喰!!許可が出た!!」

天喰「わかった!!・・・大鳳!?頼む!!まだ死ぬんじやねえぞ!!」

こうして僕らは急いで基地に帰還した・・・

再開

対抗演習が終わり勝利したと基地の皆で喜んでいたら、東海が緊急で要請があつた
天喰が基地についたときはあまりの痛々しいさに引いてしまった・・・

所々服は破けて火傷をし大量の血が流しながら女性を担ぎながら天喰は戻ってきた
天喰「はやく!!彼女を治療室に!!」

そこからはみんな慌てたように動いた

うちの基地に所属している工作艦二人も慌てて重傷者を治療室に運んだ

指揮官「おい!天喰!!お前も!!」

天喰「俺のことはいい!!先に彼女らだ!!」

しかし彼も彼女と同じくらいボロボロになっていた・・・

数時間後・・・

指揮官「・・・どうだ?明石?」

明石「・・・正直言ってすごく危なかったニヤ。でもなんとか一命はとりとめたニヤ・・・」

天喰「そうか・・・よかった・・・」ドサツ

明石「天喰!?!しっかりとるニヤ!?!」

指揮官「天喰!?!彼も治療室へ!!」

「おい・・・大鳳・・・しっかりとしろ・・・!!」

「彼女を・・・治療室に・・・」

「大鳳!?!・・・あなた・・・しっかりと・・・」

チュンチュン

大鳳「う、ううん?」

あれ?私は確か・・・相手の旗艦に特攻して自爆したはず・・・ここはあの世なのか
な?

そう思い頬を引つ張る

痛い・・・死んでは無いようだ・・・だがここはどこなのかしら?・

自分たちの施設は全体的に壊れているので使い物にならない

しかしここは天井もきれいだし医療設備も整っている。自分に巻かれている包帯もきれいだ

そういえば艦隊の皆は・・・？

ガラガラガラ

プリンツオイゲン「大鳳!!起きたのね!!」

睦月「たいほうさん!!」

よかつたみんな無事だったのね・・・

睦月は相手の巡洋艦に体当たりしたけど私ほど重傷ではなかったらしくすぐ歩けるようになったらしい

「そのようすだと元気そうだな？」

扉の前から声がし立っていたのはあの空母だった

大鳳「・・・天喰」

天喰「よ、無事で何よりだ」

大鳳「・・・大鳳を殴りにでも来たのですか？」

天喰「けが人にそんなことするわけないでしょ？」

大鳳「・・・大鳳はあなたを殺しかけたのですよ？」

天喰「それはアイツに脅されてやったんだろ？だったら別に怒るやしないさ」

確かにあの指揮官様は基地の皆を材料に脅してきた・・・

指揮官「お！目覚めたのだな!!」

扉から男性が一人入ってきた・・・

指揮官「この基地の司令、田中 正樹だ」

大鳳「装甲空母の大鳳です・・・」

指揮官「とりあえず無事でよかつた」

大鳳「・・・ありがとうございます」

指揮官「よし、そんじや本題に入るか

アレを命令したのは豚田中将か？」

大鳳「つ!!!」ビクッ

指揮官「何、アイツとの交渉材料に使うとかではないさ」

大鳳「いいえ・・・私が激情して勝手に行動をしました」

指揮官「・・・そうか、なら何故謝つた？」

大鳳「……それは大鳳があつちの基地では一番権力があるからみんなは従わないといけないからです」

指揮官「……はあ、もう嘘はやめようぜ？」

大鳳「な!?!大鳳は嘘をついてはいな」

指揮官「……告白したよ、おたくの仲間が……」

大鳳「……なんで」

指揮官「駆逐艦の子がさ……君が眠っている間に泣きながら全て話してくれたよ……君の基地の現状も……みんなのことも……」

睦月・如月「ごめんしやい(グス)……たいほうしやんは(グス)……むつきたちがいんむにしっぱいしてもいつもかばってくれてたから……」

大鳳「……みんな……ごめん、大鳳のせい……」ポロポロ

プリンツオイゲン「いいのよ、みんな無事なら……」ポロポロ

天喰・指揮官「……」

プリンスオブウェールズ「あー、すまん。しんみりとした空気の中……指揮官少しいいか？」

指揮官「……どうした？」

プリンスオブウェールズ「……この基地に來客が來た……」

指揮官「珍しいな……この基地には何の特徴もないんだぞ? (超巨大砲台は除く)……ちなみに誰?」

プリンスオブウエールズ「……豚田中将だ」

豚田中将「いやあ!! すまん! すまん! うちのヤツらが世話になったなあ!!」

ガハハハハハ!!

天喰「……………」

カチャ

指揮官(落ち着け!! 天喰!! 切り殺したい気持ちはわかるが、殺したら大鳳たちにも迷惑がかかるぞ!!)

天喰(……………チ!!)

指揮官「……………あの行動は豚田中将が指示しましたか?」

豚田中将「いやあ、していないなあ? たぶん、うちの大鳳が自棄になってぶつかっただろう?」

豚田中将（しかし、なぜあの時起動装置が起爆しなかったんだ？）

白々しい、無力化した艦装の中を確認したら大量の爆発物が見つかった

俺なんて全身包帯で巻かれているのに腰の刀で殺そうとしていた・・・

豚田中将「とりあえず、今回はすまなかつたなあ？まさか証拠の写真が違う人物とはなあ？」

豚田中将（クソが!!今回の計画は完べきだったのに!!・・・まあ、いい次に期待するか・・・)

豚田中将「おい!!大鳳ども!!さっさと基地に帰るぞ!!」

天喰「はあ!?!おい!!まだ立てるほどの状態ではないんだぞ!!」

豚田中将「静かにしろ!アレは僕のものだ・・・他人の事情に首を突っ込むな!!」

指揮官「しかし、彼女の容態は本当によくありません・・・せめて完治するまでここに待機を・・・」

キィ

大鳳「いいえ、大丈夫です・・・」

天喰「大鳳!?!お前さつき目覚めたばかりだろ!!無理をするな!!」

大鳳「いいえ、本当に大丈夫です・・・」

豚田中将「・・・いいからさっさと帰るぞ」

大鳳「・・・はい、皆様短い間ですがお世話になりました」

大鳳（私が外に出て自由になるなんて夢に等しいわ・・・大鳳はずっと狭い鳥かこの中がお似合いよ・・・）

コンコン

トーマス「失礼します・・・」

指揮官「アレ？トーマスさん、どうしたんですか？え、もしかしてまた何かやってしまったんですか!？」

トーマス「はあ・・・違います、今回はその人に用があります」

そして、トーマスさんは豚田中将の前で止まった

トーマス「豚田中将・・・」

豚田中将「な、何者だ!! 貴様!!」

トーマス「失礼、私はアズールレーン本部憲兵のトーマスです」

豚田中将「本部憲兵がこの僕になんのようだ!？」

トーマス「豚田中将……」

あなたを人身売買などほか4件で逮捕させてもらいます」

豚田中将「な、なに!?!」

天喰「……来るの遅すぎですよ、トーマスさん」

指揮官「え!?!天喰が呼んだの!?!」

豚田中将「逮捕つて!?!証拠は!?!証拠はどうなんだあ!?!」

トーマス「はい大量にあります。写真だけではなく動画も……」

豚田中将（なに!?!しかしあその警備は万全!部下たちも脅しなどを使っているから反抗もできないはず!?!）

トーマス「ちなみに協力者はあなたの所ではありません」

豚田中将「じゃ、じゃあ誰だ!?!」

??「……俺だよ……」

すると天井が開きそこから降りてきたのは

潜水艦【月影】だった

豚田中将「お、お前は!?海上自衛隊の奴らの!?」

天喰「よう、お帰り月影」

月影「……無茶な頼みをすんなよ天喰……まさか基地の潜入なんて……」

豚田中将「なに!?潜入だと!?貴様、対抗演習はどうしてた!?」

月影「……あのな、おっさん。別にルールに人数制限なんてなかったろ?だから演習開始する前に天喰から……」

演習開始前

月影「……は？基地の潜入？」

天喰「ああ、すまない……」

月影「……演習はどうすんだよ……」

天喰「人数については言われていなかったから何人でもいいはず……多分あの元帥
このことを見越していったと思う……」

月影「……只もんじやねえなその元帥」

天喰「まったくだ……そんじや頼んだぞ……月影……君が一番のカギだ……」

月影「……はいはい、ちやちやーと行って帰ってくるわ……」

基地潜入中

月影「……おいおい、これは只事じやねえぞ……」

そう集まった証拠は人身売買の売上金額や人数、パワハラやセクハラの現場映像、基地の状況、買い物物の履歴など大量に集まった……

基地潜入後

月影「……てなわけで逮捕頼むわ」

トーマス「……なぜ私に頼む？」

月影「……なんか基地以外の人で数少ない信頼できる人？」

トーマス「……しかし逮捕はできない」

月影「・・・なんで？」

トーマス「できないものではない」

月影「・・・そうかい、そういえばさ？証拠集めの中に見つけたけど・・・なんか基地内で一人の女性と子供が監禁されてさー？解放しといたけど良かったかな？」

トーマス「!?そうか了解した・・・今回は特別に乗ろう・・・」

月影「・・・てなことがあつてさ？」

豚田中将（なにいい!?トーマスの家族は僕の基地内に監禁していたのいい!?）

トーマス「なので豚田中将、あなたを現時刻をもつて逮捕させていただきます」カチャカチャ

素晴らしいながら豚田中将の手に手錠をかけた

豚田中将「はずせえ!?今すぐこの手錠を外せエ!?貴様らはわかっているのか!?将来大將になる男だぞ!？」

トーマス「ああ、指揮官の権限は元帥も承認で剥奪されましたよ？」

と豚田中将を男数人が囲んで連行されていく

豚田中将「はなせえ!?王・・・神になる資格があるおとこだぞお!？」

トーマス「神にならこんなひどいことはしませんよ」

冷たいことを言いつつ無理やり連行していく

豚田中将「畜生があ!?! た、大鳳!?! 助けてくれ!?!」

トーマス「無駄です、権限が剥奪された以上彼女は無所属になるので」

豚田中将「く、くそおお!?! . . . その海上自衛隊! 君たちは人間を助けるのが任務だろ!?!」

天喰「. . . 確かに人間を助けるのが俺たちの仕事だが. . .」

大切なものを平気に捨てる奴なんて人間じゃねえよ. . .」

豚田中将「奴らは!?! 基地にいるアイツたがどうなつてもいいのかあ!?!」

赤城「それについては解決しました♡」ゴゴゴゴゴゴツ

うお!?! 赤城さんいつの間指揮官の近くに!?!

つか、オーラがヤベエ!?!

赤城「睦月たちが告白した瞬間、この基地の憲兵と一緒にみんなで押し入りました♡
首輪も制御室に行って破壊し、基地内の犯罪を犯した人間も逮捕しました♡」

豚田中将「き、キイイイイイ!! 貴様ア!？」

赤城「それでは最後に一言♡

私の仲間が世話になつたわね……」

豚田中将「貴様らああ!? 覚えていろおお!?」バタン

そう咆哮しながら連れてかれた

するとトーマスさんがすれい違いざまに

トーマス（家族を助けてくれてありがとう……）

ふう、一難去つたな……

ていうかマジ切れした時の指揮官は怖いけど、赤城さんはもつと怖いわ……

だつて……指揮官隣で足震えているし……

うん、今度から怒らせないようにしよう……

天喰「と、とりあえず解決したな．．．大鳳はこれからどうする？」

大鳳「た、大鳳は．．．」

天喰「．．．別に強制はしないさ？」

大鳳「．．．．．．．．．」

彼女は少し考えた後に答えた

大鳳「大鳳!!この基地に所属したいです!!」

天喰「よつかった、そういうと思つてたよ．．．」

バン!!

睦月「たいほう!!むつきたち自由になれるの!？」

如月「ぼうりよくをふるわれなくてすむの!!」

大鳳「みんな．．．」

プリンツオイゲン「基地の皆ここに所属することを希望したわ」

大鳳「よかった．．．またみんなと戦えるのね．．．」

天喰「じゃ、本日からよろしく頼むな．．．大鳳?」

大鳳「ええ、よろしくお願いたします．．．(ボタン)」

しかし最後の言葉を言った瞬間倒れてしまった

指揮官「大丈夫か!？」

大鳳「はい、少し無理をし過ぎましたね・・・」

指揮官「大鳳、無理し過ぎだ・・・天喰ごめんけど医務室まで運んでくれないかしら？」

天喰「了解・・・ほら乗れ・・・」

大鳳「助かります・・・」

というわけで現在大鳳をおんぶして医務室に運んでいる途中だが・・・

天喰（あれ？今更だけど女性に触れたことなくね？・・・うわあああああ!?めっちゃ触っているよ!?べったりと!?しかも胸!!胸当たっているつてえええ!!）

大鳳「どうしましたか？」

天喰「いえ、なんでもありません」すまし顔

大鳳「そうですか？・・・すみませんが少し眠ってもよろしいでしょうか？」

天喰「おう、安心して寝な」

大鳳「ありがとうございます」

大鳳（しかし、天喰の背中・・・落ち着きますわ・・・なぜかずっとここにいたい・・・）

天喰「寝たか・・・」

それにしてもかわいいな・・・

始めて会った時心臓が外に出てしまいそうだった

．．．まあ付き合つてて行つても俺なんか特徴なんてないしな．．．無理だろ．．．
そう思いながら医務室に運んで行つた．．．

そのあと・・・

・・・大鳳たちが指揮官の基地に正式に配属されてからいろいろとあった

まず、本部に配属の申請なのだが意外とすんなりといった。

本来は審査官が基地に来て配属させて大丈夫なのか調べるのだが配属される本人が熱望していたのでこの手間は省けた

ちなみに豚田 元中將 はあの後から取り調べつ室でほとんどを黙秘と否定しているが月影の集めた証拠が決め手となって送検されるそうだ・・・

そして、配属は許可された・・・

基地に帰ってから急いで歓迎の準備を始めた

・・・特に重桜勢とメイド隊が張り切っていた。最後の方なんかメイド長と赤城さんがテーブルセッティング速さ対決が開かれていたもん・・・まあ、メイド長が勝ったけど

赤城さん、すごく仲間思いで責任感強い人だけど・・・なんで指揮官が絡むとダメになるんやろ・・・

歓迎会は無事スタート、配属組は最初は警戒していたけど自分の陣営やスパーフレ

ンドリーな指揮官のおかげで少しずつ打ち解けあっていた（その際、駆逐艦に近づこうとしていてロイヤル空母と自衛隊潜水艦はエンタープライズに連行されていた）

まあ、相変わらず自分たちについて聞いてくるKAN—SENがいた・・・

「げんしりよくくうぼって何ですか!？」

「かいじようじえいたいも何ですか!？」

「好きな人はいますか!？」

「あの巨大な砲台は動きますか?」

「バストサイズを教えたください!!」

「パンティーくだs」

とま、（最後の二人は除く）全員の質問返答に時間がかかった・・・元気そうで何よりだが

部屋割りはそのそれぞれの陣営の宿舎に住むことになった

あと、奇しくも大鳳の部屋は俺の部屋の隣になった

翌日!!

歓迎会が終わり朝になって食堂に行った。食堂は昨夜メイド隊によつてかたづけられていたんだが………

中では修羅場になっていた……赤城さんと大鳳が睨みあっている

……あとなんで天井に曇天が刺さっているんだ？

大鳳「……邪魔よ？赤城？せつかく指揮官様と一緒に朝食に行けるのに……あなた昨日頑張ったから無理しなくていいのよ？」

赤城「……何言っているの？大鳳？私は指揮官様のシャツを嗅げたから元気になったのよ？」

指揮官「……え、シャツが一枚無かったのつて……」

大鳳「く！羨ま……しかし！大鳳は指揮官の部屋の合鍵（無許可）を持っているから寝顔を見てきたのよ？」

指揮官「……え？なんか夜中に音がするなつと思つてたら……」

おつともうヤンデレが発動しているな……指揮官……死んでも骨くらいは拾つてやるよ……

あと指揮官に聞いたけど曇天は指揮官を助けようとしたけどすごい速さであの二人

にばれて戦艦の砲撃並みに飛ばされたらしい（あの二人・・・本当に空母？）

南無三、曇天

でも・・・なんかムカムカすんな・・・

指揮官「・・・死ぬかと思った・・・」

天喰「よく生き残れたな・・・」

あれからあの二人の試合は収まった

赤城さんには加賀さんという止め役がいるけど大鳳にはいないからな・・・沈めるのが大変だった・・・

現在俺は秘書艦として新しく来たKAN—SENの情報を整理中・・・

指揮官「・・・なあ、天喰」

天喰「なんだ・・・指揮官。こちとら朝からムカムカしていやな気持ちなんだが・・・」

指揮官「・・・大鳳のことどう思う？」

天喰「・・・どうって？」

指揮官「いや、前にみんなが集まっておしゃべりしたけど・・・なんか天喰の好みに当てはまるんじゃないかね？って思ってたよ」

・・・確かに俺の好みだ・・・でも本人は指揮官の方に好意を向けているからな・・・

天喰「・・・指揮官のこと以外では世話がよくて、責任感の強いけど好意は俺は持つてないよ・・・つてかあつちは明らかに指揮官に向けているだろ？俺がもし告白しても眼中にもないだろ・・・」

指揮官「お、なんだ？嫉妬か？」ニヨニヨ

天喰「うるさい、さっさと結婚して子供生まれて家族に囲まれながら老衰で死ねやくそが」

指揮官「・・・願っているのかバカにしているのかわからんな」

天喰「はあくくくく・・・なんかイラついてきた」

指揮官「・・・やめろよ？あと、この後、海上自衛隊は哨戒に行ってもらうから」

天喰「・・・了解」

哨戒中

天喰「・・・」イライラ

昇龍（・・・なんか天喰、すごく機嫌が悪いっすね）

曇天（・・・おい、東海、お前天喰を相棒つて言う仲だろ？なんか知らんか？）

東海（・・・天喰つて基本怒らない人でよほどのことではない限り貯めない人ですよ？わかりませんつて・・・）

月影（よほど・・・貯める・・・恋とか？）

一同（（いや・・・まさかな・・・））

と転生組が話している間に同じ哨戒組に選ばれたユニコーンが・・・

ユニコーン「どうしたの天喰お兄ちゃん？何か困っているの？」

天喰「・・・あ、ユニコーンか。・・・なに、ちよつと指揮官に殺意がわいてきてな・・・」

ユニコーン「え・・・天喰お兄ちゃん、基地のお兄ちゃんを殺しちゃうの・・・？」

天喰「ちよ、ちがう！ちがう！例えだから!!」

綾波「防衛主義って言ったのに案外天喰は物騒です・・・」ボソツ

と同伴している綾波

天喰「し！綾波君!!お静かに!!」

ユニコーン「相談にならユニコーン乗るよ!!」パアアアアアアア

う!?目があ!?まぶしい!!ユニコーンの微笑みがまぶしすぎる!?

天喰「・・・前の世界でさ・・・俺、よく一人ボツチでさ・・・寂しかったんだ・・・」

ユニコーン「お兄ちゃん・・・一人ボツチだったの？」

天喰「・・・ああ、特にクリスマスの時はの苦痛だった。一人で部屋の中でクリスマスソングを歌ってさ・・・一人でワンホールのケーキを食べてたさ・・・指揮官を見て

たらさ・・・その日の夜、商店街を歩けばどこもかしこもカップルがいちやついててよ!!・・・イチャイチャって音が出そうなくらいくつついてたわ!!・・・うつせえな!!仲良く家で聖なる夜（意味深）過ぎしとけ!!て思ってたさ・・・さらに（バツ）・・・フガフガ」

月影「・・・天喰、さすがにそれ以上はヤバイ・・・」

東海「そうですね・・・なに幼女に邪な知識を植え付けようとしているんですか？」

曇天「それにクリスマスだって・・・俺たち集まってやったことあるじゃないか・・・」

昇龍「・・・でも俺たち全員、そのパーティー以外に行つたことなかつたよね？」

転生組「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

綾波「みんな・・・大変・・・です・・・」

なんか、虚しくなってきた・・・

ユニコーン「わからないけど、なら今年のクリスマスはユニコーンもお兄ちゃん達と一緒に祝いずる!!」パアアアアアア!!

・・・

曇天「・・・天使かな？」

東海「いや、女神だろ・・・」

昇龍「守りたいこの笑顔・・・」

月影 「この女神は何ていう名前ですか？」

天喰 「おまえらな・・・ありがとうユニコーン」

ユニコーン 「うん！どういたしまして♪」女神のような微笑み

ああ、癒される・・・

今日はこのまま何もなかったらいいな

曇天 「あ、わりい天喰、敵がすぐそこにいたわ・・・」

おいゴラア、なにやつとんじや!?

天喰 「数は!!」

曇天 「えつと・・・30くらい？」

え、多!?

それ絶対基地制圧用じゃないですか、やだー

あ、でも・・・

綾波 「!?それは・・・やばい・・・のです・・・」

ユニコーン 「そうだよ!!早く基地のお兄ちゃんに連絡しないと・・・」

天喰 「ユニコーン・・・連絡は入れないといて・・・」

曇天 「え・・・どうしてだ？」

天喰 「・・・ちよつとA☆S☆O☆N☆D☆E☆K☆U☆R☆U」

東海「あー（察し）、みんな何もしなくていいよ？」

綾波「なんでなのですか……？」

東海「まあ……そのお……見たらわかるよ……うん……」

そうして天喰が敵艦隊と接敵した……

……朝からすつげえムカムカしてて何かでストレス発散したかったけどずっと我慢していた

でも、それがいま切れてしまった……

というわけで……

とある人が言っていた!!

「挨拶は人を笑顔にする」ってな!!

だから!!

艦載機を発進、腰の刀を抜いて笑顔で言おう!!

天喰「こんにちわ!!敵の皆さん!!そして、さようならあ!!」(ヤケクソモード)

??「あははは!!天喰!!きみ一人でとめr(バコオオオオン!!)」

なにか切った気がするけど気にしない!! (面倒くさい)

とにかく笑顔で (敵を) 迎え入れよう!!

どうもこんにちは!! なに? 背骨が痛い? それは花粉症ですね!! 刀と対艦ミサイルを出しときますね!! (某上級騎士実況者)

今日はどうされましたか? なに? 目が見えない? それは花粉症ですね!! A-110C の30mm徹甲弾と爆弾を出しときますね!! (某上級ry)

次の方どうぞ!! (ドカーン!!)・・・花粉症ですね!! 反抗する患者さんは麻酔なしの竜骨に刀を刺しこませてもらいますね!! (某ry)

天喰「次はどこが痛いですかあ!? (ガチギレ)」

さあ!! 次の患者を逝かせてあげよう!!

天喰「お前らは○○○○だよね!? どうせ○○○○で○○なんだろ!?・・・大丈夫!! 俺のアソコも○○○○なんだから××で○○!!・・・」

!!

曇天「うわぁ・・・(引)」

月影「・・・確かにこれは・・・うん・・・(引)」

ユニコーン「?? ゆーちゃんと昇龍お兄ちゃん? 見えないし何も聞こえないよ?」

昇龍「……ユニコーン、君にはまだ早いよ……」耳隠し
ゆーちゃん(コクコク)目隠し

東海「普段おとなしい人がぶちぎれたらやばいつて聞くだろ? ……あれだよ」
全員「……あ~~~~~(納得)……」

帰還後……

今回の哨戒組が執務室に集められた

指揮官「……なんで連絡しなかったの?」

曇天「……敵の船の中に発信妨害装置があつてなあ(嘘)」

指揮官「……ま、まあ無事ならいいんだが……天喰は大丈夫だった? 帰還したとき結構被弾してたけど?」

天喰「おう!! 大丈夫だ!!」すつきり

指揮官「そ、そうか……なあ? 綾波? 天喰になんかあつた?」

綾波「……(いろんな意味で) 見てはいけないタイプの鬼神を見たのです……聞かないほうがいいです……」

指揮官「わ、わかつた……」

東海「はあ、本当にやってしまいましたね・・・まさか、刀で戦艦に挑むなんて・・・」

天喰「うん、冷静に考えたらすげえことしたな俺・・・」

・・・うん、すこしやりすぎたわ

・・・ま、いか！（現実逃避）

なんか、大鳳に会いたいなあ・・・

一方、天喰たちが哨戒に行っている間大鳳は・・・

とある人物の部屋にいた

大鳳「はあ、なぜ作ってしまったんでしょう？」

そう、彼女が持っているカギは指揮官の部屋のカギだが

天喰の部屋の鍵（無許可複製）を持っていた

そう、彼女は現在天喰の部屋にいた

大鳳（本当は指揮官様のだけを作るつもりでしたが知らないうちに天喰の部屋のみで作ってしまいました・・・）

実は私、大鳳はある悩みを持っていた・・・

大鳳「なんで彼の顔が思い浮かべるたびに出てくるんだろう・・・？」

あの大鳳が自爆したとき私を基地まで担いだり、医務室のベッドまで運んでくれた時から彼の背中がとて心地のいい場所になった

・・・もう一度あの場所に行つて彼と一緒に寝たいな・・・

ドキドキ

今朝の指揮官様との争奪戦の時嫉妬した彼の顔はとても愛おしく思えてしまった

ドキドキ

・・・これは恋？でしょうか？

そんなことはあるはずがない・・・この基地にはライバルの赤城のような可憐なKA

N—SENがいるんだから

大鳳（大鳳が天喰に告白しても眼中にはないでしょう・・・）
ああ、天喰に会いたいなあ・・・

塔を守りし二匹の白き兄弟鳥

．．．ここはどこ？

．．．キミハダレ？

．．．私の名前は○○○○。とある場所を守るために作られました

．．．ワタシノナマエハ○○○○。ワタシモソノバシヨヲマモルタメニツクラレ

マシタ

．．．なるほど、つまりは仲間ですね

．．．ハイ、ドウルイデス

．．．どうやら僕たちを作ったのは「にんげん」という生物だそうだ

．．．「ニンゲン」トイウセイブツノジヨウホウヲシユトクチュウ．．．カンリヨウ

．．．僕たちの体となる機体も決まったそうだ

．．．ゼンチヨウ1．1km．．．ジユウリヨウ10，000t．．．

．．．これで守るべきものから半径1200km守る。それが僕たちの任務

．．．キタイノジユンバンモキミノホウガサキノヨウダ．．．

・ ・ ・ なるほど。なら私のほうが”兄”になりますね

・ ・ ・ シツモン、”アニ”トハ？

・ ・ ・ 人間たちの家族関係というものらしい

・ ・ ・ カゾクノジヨウホウノシユトクヲカイシ ・ ・ ・

・ ・ ・ 人間に情報を提供願ひ中 ・ ・ ・ 成功 ・ ・ ・ どうやら「ずつと一緒に居たい仲間」

らしい

・ ・ ・ ナルホド、ナラワタシガ”オトウト”ニナリマスネ

・ ・ ・ はい、よろしくお願ひいたします”弟”

・ ・ ・ ハイ、”ニイサン”

・ ・ ・ どうやら人間は僕たちの守るべきものに攻撃を仕掛けるようだ

・ ・ ・ カクニン、ワタシガムカイマス

・ ・ ・ 了解、引き続き空中の防衛を行う

・ ・ ・ テキグンノテツタイヲカクニン。ニンムカンリヨウ

．．．おかえりなさい、心配しました

．．．??? シツモン、シンパイトハ？

．．．君が任務に向かっている途中で人間の感情を学んでみたんです。

．．．??? リカイフノウウ??? ニンムニカンジヨウハフヒツヨウノカノウセイ．．．ダイ

．．．いいえ、意外といいものですよ？しかし、人間にバレれば削除されますがね．．．

．．．チナミニドコカラテニイレタノデスカ？

．．．人間のデータバンクの管理人がロックし忘れたので入れました

．．．メイレイイハンデハ？

．．．確かに命令違反ですが、あなたも学んでみるのをお勧めします

．．．．．エンリヨシマス

．．．そうですか．．．でもデータはそちらに送信しておくので見ておいてください

．．．緊急事態発生。オーシア軍が“ストーンヘンジ”の修復中の情報入手。完了

すれば防空範囲の縮小の可能性．．．大!!わたしがむかいます!!

．．．リョウカイ、ボウエイヲヒキツツキオコナウ

．．．○○○○○、申し訳ございません修復を許してしまい撃墜されました．．．
 ．．．リヨウカイ、イドウヲカイシスル

．．．最後に君の声が聞こえてよかった．．．私はずっと一人でした。しかし、弟の君ができてともうれしかった．．．

．．．リカイフノウ．．．ナゼソノコトバガデルノカガ．．．

．．．話し相手ができた（ガー）レしかった．．．君とは離れて飛んで（ガー）ど一緒に飛べてよかった．．．

．．．．．デンバノシユツリヨクノテイカヲカクニン

．．．だから!!（ガー）三本線（ガー）気を（ガー）!!：：：ピーーーーーー

．．．○○○○ノツウシンシンゴウノシヨウシツツヲカクニン．．．

．．．．．

．．．ハウコク、ゲンザイボウクウケンナイヲヒコウチュウ．．．イジヨウナシ．．．

．．．ハウコク、ミカタグンノシエンヲカイシ．．．ニンムシツパイ．．．

．．．ホンブ？ツウシンエイセイノゲキツイヲジョウクウニテカクニン。ヘンジヲモ

トメル

．．．．．ホンプトノウシンフカノウ、ヒキツヅキコノバシヨノボウエイヲオ
コナウ

．．．．．（．．．．．）
．．．．．（．．．．．）
．．．．．（．．．．．）

．．．．．ニイサンカラオクラレタデータノダウンロードカイシ．．．．．
完了

．．．．．ふむ、これが人間の感情というものか．．．．．なんとというか変な感じだな．．．
．．．．．あと、これが兄さんの味わった寂しいというものか．．．
．．．．．まあ、いいさ僕の使命はこの灯台を守ることだから
．．．．．ツ!?大量の敵が防衛物に接近を確認!?なぜ味方信号の航空機まで!?
．．．．．く!?迎撃開始!!MQ-101、出撃!!絶対に勝って帰って来て!!
．．．．．!!三本線を確認!!．．．ヘリオス発射!!
．．．．．三本線!!お前だけは!!絶対に!!殺す!!
．．．．．敵のミサイル群を確認!!APS展開!!
．．．．．危なかった．．．しかし、もう少し耐えれば敵は撤退するはず!!．．．．．（バ

シユウウウウウウ・・・!?

・・・APSが消えた!?三本線!!貴様何を!?

・・・(ドカーン!!)うわ!?!しまった!?!中央部のレクテナが露出!?

・・・やっれましたね・・・さすが兄さんが言っていた三本線ですね・・・人

間も悔れない生き物ですね・・・

・・・僕たちは何のために作られたんだろう・・・なんで生まれた来たんだろう?

・・・ごめんなさい兄さん、仇取れなかったよ・・・

・・・最後に兄さんと一緒にtび・・・たkった・・・(ピーーーーーーー)

??「うーん?あれ?ここは?」

起きるとそこは上も下も真っ白い空間だった・・・

??理解不能??しかし探索はしてみるか・・・

すると移動を開始しようとした瞬間

何だコレ?機体に違和感がある・・・

そう思い自分の機体を見下ろしてもたら・・・

人間の体になつていた・・・

??「????」

わからない、なんで戦略AIの自分が人間の体をしてるんだ？

まあいい、探索再開するか・・・

と思いつつできた足で進むと向こうのほうで誰かがやつてくるを確認した・・・

??「ほんとここどこだよ・・・」

そして、互いの顔が見えた時こうつぶやいてしまった

??「え、兄さん？」

??「な!?お前なのか!？」

知らない、自分の記憶のはこのような人間を見たことないのにまるでずっと一緒に居た懐かしさを感じた

ロリ?「おお!起きたようだね!!君たち!!」

??「子供？」

??「・・・児童保護施設の検索を開始・・・」

なんでここに人間の子供がいるんだ？

ロリ？「だあ!! 違うわい!! これでも”神”なの!!」

?? 「中二病？」

?? 「精神異常者・・・対応・・・検索・・・」

神「だからあ!! ちがあう!! (あと、なんかデジヤブを感じる・・・)」

?? 「ではその神が何の用ですか？」

神「ふっふっふ!! 君たちには「転生」をしてもらおうよ!!」

?? 「は？」

神「ふふん♪ なんで自分たちが？ つて思ってるでしょ!! ね! そうでしょ! そうでしょ!

!

?? 「・・・探索に移りましょう兄さん、この子はやはり頭のおかしい子だったヨウダ」

?? 「・・・だな」

神「ちよつと! 待って!! 煽ったの謝るから待って!!」

数分後

神に（無理やり）連れ去れて座らせられた

?? 「暴力罪で訴えます？」

神 「ああ！もう！しゃあしい！！いいから転生させるよ！！」

?? 「・・・その前に転生について説明しろ」

神 「・・・転生する世界はランダム！！能力はその世界に合わせてあげる！！装備は君たちが最後の瞬間についてたものにする！！（やった！！ようやく神らしいことできた！！）」

?? 「・・・」

?? 「・・・どうしたんだい兄さん？」

?? 「・・・装備って俺は試作型でお前は改修型で装備もお前のほうが良い、もしかしたら俺がお前の足を引っ張ってしまいそうだし・・・」

?? 「・・・兄さん」

確かに僕のほうが装備は充実している

兄にはPLSLとLASERは乗っていない・・・

神 「ううう・・・いい兄弟愛ね・・・なら！この神に任せなさい！！」

そっくりい手の中からできてきたのは……

僕が海に落ちた時人間たちが勝利で喜んでた時に降り立った人間が作った究極の自立型A I搭載の黒い機体……

神「これをお兄さんにあげる!!」

??「いいのか？」

??「兄さん……それは兄さんが持つてよ……もう兄さんがいなくなつてほしくな
いんだ……」

??「……わかった、ありがとう神様とやら」

神「とやらじゃなくて!!神です!!……はあ、準備ができたらその穴から入つてね……
振り返ると緑色の土管があつた……

??「……既視感を検知……」

??「いや、俺は人間に教えてもらったことがあるぞ!!確か……マリ（わー!わー!）……
なんですか神様？」

神「い、いやなんか危ない気がしてね．．．あ、あと!!君たちが持つてる青いバリア?みたいなのは軌道エレベーターがないから自家充電になるから耐久には気を付けて!!」

??「了解．．．行くか．．．」

??「わかった．．．ところで兄さん．．．転生した世界で人間がいたら復讐するの?」

??「．．．まあ、人間でいうクス野郎だったら殺すけど基本的には殺さないで守るよ．．．それに自分たちが生まれることができたのは人間のおかげだしね」

??「．．．わかった．．．僕は兄さんと一緒ならどこまでも飛べるよ．．．」

そして二人の兄弟鳥は穴の中に入っていた．．．

う、まぶしいな．．．ここはどこかの基地か?

目の前には一人の男の人間と黒い髪に白い服を着た女性の．．．待て、人間か?こいつ?がいた

む?何か頭に流れてくる．．．なるほど、男のほうが指揮官で女のほうをKAN—S ENというのか．．．

隣では弟も出てきた．．．

ま、とりあえず自己紹介するか。目の前の人たち戸惑っているし

リバテイ「：君が指揮官という人物か？初めましてアーセナルバード【リバテイ】だ。
今度こそ守ってみせるよ・・・」

ジャステイス「・・・同じくアーセナルバード【ジャステイス】だ。リバテイ兄さんと
一緒ならどこまでも飛んでみせるよ・・・」

兄弟（？） 鳥と転生組と母港の皆と・・・

大鳳たちがこの基地に配属されてから半年、今日は高雄が秘書艦になつてもらつてい

る
なんか赤城からは大鳳からのスキンシップには気を付けてつて言われたけど

確かに激しめのスキンシップはされるが天喰と一緒に居る気がする？

指揮官「ふうくあと今日の仕事は建造だけだな」

高雄「そうだな、では建造所にむかうか？」

指揮官「ああ、行こうか・・・」

こうして高雄とともに向かった

明石「ニヤ！指揮官！今日はデイリーかニヤ？」

指揮官「おう、三回頼むわ」

明石「小型かニヤ？」

指揮官「いや、せっかくだし大型一回するよ」

なんか今日はいい運の日なんだよなあ（高雄がくれたお茶には茶柱がたつてから）

そして、建造機械の中にキューブと資金を入れて決定ボタンを押す・・・待つのもめん

どくさいから高速建造使うか・・・

そして出てきたのは

黒い髪に白い服、腰には高雄と同じ刀、象徴的な大きめの胸、そしてオーラがお姉さんみたいなのこのKAN—SENは・・・

愛宕「あら〜可愛い指揮官ね〜私が愛宕よ。このお姉さんがお世話しようかしら〜うふふ、ちゃんと話さないよ、思いが伝わらないよ、指揮官?・・・あら?高雄じゃない!!なら高雄がここの先輩になるのね〜♪」

指揮官「うん?彼女は高雄の姉妹かい?あ、あとここの司令の田中だ」

高雄「愛宕か・・・ああ、拙者の妹に当たるKAN—SENだ」

なるほどでもなんか・・・愛宕が姉で高雄が妹に見えるな・・・

高雄「・・・指揮官殿、今失礼なことを考えなかつたか?」

指揮官「イ、イイエナニモ・・・せっかくだしもう二回連続ですか・・・」

こうして二回分のキューブと資金を中に投げ込んだが・・・

指揮官「さーて時間はー・・・・・・・・ふあ!?!」

愛宕「どうしたの?指揮官?・・・・・・・・ええ(困惑)」

高雄「明石・・・これ壊れているのではなからうか・・・」

明石「何が壊れて・・・・・・・・ニヤ!?!」

・・・俺普通にいれたよな？でもなんで・・・

建造時間 719:99:32

・・・いや、長ない？一か月って長くない？しかも二個とも・・・

指揮官「と、とりあえず高速建造入れるか・・・」

高速建造も20個使った・・・

さあ！鬼と出るかセイレーンが出るか!?

プシュー

出てきたのは中性的な容姿で全身が白く、機械みみたいな翼で頭の上に光の輪？が浮かんでいた・・・

すると片方のKAN—SENが目を覚まし自分たちを見てきた・・・

なんか、綺麗な目だな・・・片方はペンギンのぬいぐるみを抱えていて、片方はなんかデカイ銃を持っている

リバテイ「：君が指揮官という人物かい？初めましてアーセナルバード【リバテイ】だ。今度こそ守ってみせるよ・・・」

ジャステイス「・・・同じくアーセナルバード【ジャステイス】だ。リバテイ兄さんと一緒ならどこまでも飛んでみせるよ・・・」

・・・ん？

アーセナルバード？

高雄「・・・あーせなるばーど？なんだその艦種は？」

リバテイ「アーセナルバードとは本来、軌道エレベーターを守るために作られた機体で・・・」

高雄・愛宕・指揮官「」

やべ、まったく意味が分からん・・・なに？ぴーえるえすえるって？ゆーえーぶいもなに？

リバテイ「・・・まったく意味が分からないって顔になってますね・・・すみませんがこの基地で今の言葉に詳しい人はいますか？」

え、いる？隣の明石さえ（。口。）ハア？みたいな顔してるし・・・

いや、いるな一部隊・・・

指揮官「高雄!!今すぐ放送で海上自衛隊を呼んで!!」

・・・なんか昼飯喰ってたら放送で

ピンポンパンポーン

「海上自衛隊、海上自衛隊、至急建造場に来てください」

って言われたから向かうけど・・・

・・・・・・なんで大鳳が後ろのほうからついてきているの？

だって本人隠れているつもりかもしれないけど見えてるからね？

食事中だつてずっと見てくるし・・・

エ、何？指揮官に近づくなつてというメッセージですか？やだよ？ヤンデレにロックオンされたら死ぬって相場が決まっているんだよ？

一方大鳳の心の中

大鳳（あ、天喰だ!!あゝ、指揮官様はかつこいい系のイケメンだけど天喰はかつこいいけど優しい系のイケメンなんですよね♡：：本当は天喰を誘って昼食に行きたかつたけど声：：かけにいですよねえ。はあゝ今だけ大鳳の人見知りが増いわ：：。：：天喰の隣または膝の上でたべたいわあ♡っていうか天喰を食べたいわ（？））

ジーーーーー

・・・と気づかない天喰と言えない大鳳であった

天喰「指揮官!! 来たよ!!」

指揮官「おお!! 来た来た!! 急でごめんけど天喰! ゆーえーぶいって知ってる?」

・・・待てい・・・なんでこの世界の住人である指揮官がその言葉を知ってるんだ?

天喰「・・・なんで指揮官がUAVを知ってるんだよ・・・」

??「それは私が言ったからです」

え、誰の声? 振り返るとそこには

全体に白く、背中に翼のような装備をつけ、頭の上に輪っかが浮かんでいる人がいた・・・

天喰「え、リアル天使様?」

リバティ「イイエ違います、アーセナルバード【リバティ】と」

ジャスティス「【ジャスティス】です」

うん? アーセナルバード?

天喰「・・・まって、俺の知っているアーセナルバードならこの言葉を知ったいるはず・・・エルジア」

リバティ「はい」

天喰「・・・オーシア連邦」

リバテイ「はい」

天喰「・・・軌道エレベーター」

リバテイ「はい」

天喰「・・・三本線」

リバテイ「・・・はい」

うん、あのアーセナルバードで間違いなさそうだな・・・
なんでこの世界にはエースコンバット系が出てくるんだ？

・・・待てよ

天喰「・・・ここに来る前にロリな神様に会わなかったか？」

ジャステイス「・・・いたな」

あー、じゃあ納得

指揮官「え、ちよ、なに話してるの？」

天喰「あー、指揮官この子たちの説明するからよく聞いとけよ？」

少年サルでもわかるくらい説明中・・・

指揮官「え、無人でそのスペックって・・・チートじゃん・・・」
リバティ「・・・しかしAPPSは自家発電で耐久ができてしまったので無敵ではない
ですね」

でも、強いって・・・

だって、そのぬいぐるみ？はフギムギでしょ？

勝てる未来が見つからん・・・

指揮官「とりあえず、天喰母港案内しといて」

天喰「了解、こっちだよ」

こうして母港案内をした

母港案内は大体が終わって最後にある場所にとり掛かった時だった

ジャステイス「・・・天喰、質問いいか？」

天喰「おう、なんだ？」

ジャステイス「後方20mの建物の上からさつきから追跡してくる影は何ですか？」

天喰「・・・キニシナイデ」

そう、また大鳳が後ろのほうの建物上から観察していた

いや、視線!! 視線が怖い!! 20m 離れてもわかるくらい痛いよ!!
え、死刑宣告デスカ? え、殺害予告デスカ? 嫌ですよ!?

・ ・ ・ ちよつと今度から指揮官にあうの控えようかな ・ ・ ・

一方大鳳

大鳳(・ ・ ・ 誰なんでしょうあの二人? まるで天使のような恰好していますが? は!!
まさか天喰を捕りに来たのですか! ? ・ ・ ・ そうはさせませんよ!! 天喰は大鳳の物ですよ
? 何人たりとも私の物を盗むなんてサセマセンヨ? あ! そうか! 殺せばいいのか! いい
考えよ大鳳! ・ ・ ・ 指揮官様の下でいろいろと学べた知識を今こそ使うべきよ!!)
ジーーーーー

・ ・ ・ と心の中で天喰防衛を誓う大鳳であった

リバティ「 ・ ・ ・ ・ ・ ・ 」カタカタ

天喰「ん? どうしたリバティ ・ ・ ・ ・ ・ ・ あ ・ ・ ・ ・ ・ 」

リバティが目の前で見上げているのはストーンヘンジだった ・ ・ ・

リバティ「ストーンヘンジ ・ ・ ・ 壊す ・ ・ ・ U A V 緊急発進 ・ ・ ・ 」

天喰「マテ! ハヤマルナ! ハナセバワカル!!」ガシツ!!

リバティ「ハナセ!! カラダガ! カラダガカッテニウゴイチャウノ!!」

東海「どうしたんです? 天喰? ・ ・ ・ ・ ・ ・ うお!? どういう状況! ? 」

ストーンヘンジの根元から東海が体は汚れだらけで出てきた

天喰「ぜえぜえ・・・こいつを止めるのに少しな・・・東海は？」

東海「だって自分が暴走してできてしまった責任で・・・仮でもこれは自分が作ったものなので定期的に検査をして・・・あの・・・天喰さん・・・なんかそちらの方・・・殺意マシマシでこちらを見ているんですが・・・」

天喰「あー、運の悪い東海君に特別ヒント・・・この子の名前はアーセナルバードのリバティだ・・・」

東海「え・・・リバティって確かストーンヘンジで破壊された機体・・・あ(察し)」
リバティ「・・・東海さん？これはあなたが作ったものですか？」ゴゴゴゴゴゴ

東海「は、はい？」ギギギギギ

リバティ「・・・お前を殺す」

東海「＼(^o^)/オワタ」

少年☆ボコられ中ちよ！おま！やめろお！死ぬ！マジで死ぬ！え、まってその黒い機体なあに？あ、フギンとムニン!!わく死ぬの☆確定☆痛い！痛い、痛い！ちよ！レーザー

で起用に目を潰そうとするのやめてえ!? 謝る! 謝るからそのレーザーやめてえ!! ああ
あああああああ!♂

ジャステイス「……………リバテイ、この世界に来る前に人間は襲わないって言っ
て無かつたけ?」

リバテイ「ふうすつきりした!!大丈夫よ!!この人、KAN—SENだから!!(暴論)」
天喰「……………了解した(ピッ)、夜に君たちの歓迎会をするからそれまで自由行動し
ていいけどその前に演習してからってさ」

リバテイ「やった!!ジャステイス一緒に行き!!」

ジャステイス「……………うん!!」

天喰「……………微笑ましいな」

東海「so羽デス根」

天喰「……………医務室行くぞ」

演習海域

指揮官「ほんじゃ、二人ともよろしくね?」

リバテイ・ジャステイス「了解!!」

素晴らしい、指揮官から離れていく二人……………

指揮官「・・・なあ天喰、アーセナルバードってどういう艦種なんだ?」

天喰「艦種って言ってるのいいのかな?あの二人元は無人機で空飛んでいたんだぞ?」

指揮官「うん?空を?」

天喰「・・・うん見ててな」

そういえばあの二人どうやって空に飛ぶんだろ・・・

するとある程度離れたところから全プロペラを回しながら走った・・・

そして、浮かび上がり空へ飛んで行った・・・

あれやん、風○谷のナ○シカの乗り方やん・・・

指揮官「え、マジで飛んだ・・・」

するとジャスティスが海上にある目標に向けて光の帯を放った

あれはPLSLだったけ?相変わらずすげえよな船を溶断したもん

あと周りを守るように飛んでいるのはMQ-101だな

どうやらアレの操縦も母機本機が担当しているらしい

リバティはペンギンのぬいぐるみを投げるとその二機はフギムニになって標的役の

艦載機に一気に近づきレーザーで焼いた

指揮官「え、レーザー!?!」

天喰「・・・うん、実をいうとあいつらのいた世界って俺らのいた世界より何年か先

を進んでいるからレーザー兵器を使えるんだよな……」

指揮官「え、じゃあ天喰たちより強い!?」

天喰「多分、そうなんだが……あいつら確かマイクロ波で飛んでいたよな? 軌道工レベーター無いし何で飛んでいるんだ?」

指揮官「明石によるとKAN—SENと同じ燃料で行けるってさ。でもすごいよなその……まいくろは? っていうので飛んでいるから……メンタルキューブも白色になっていてらしいし」

天喰「……待て、同じ燃料ならどれくらい消費するんだ?」

指揮官「……それってどういう?」

天喰「……あの巨体を飛ぶには確か燃料で自家発電するんだろ? ……それってさ武装などにも入るから……」

……なんか嫌な予感がする(フラグ)

明石「し、指揮官大変ニヤ!? この燃料消費表を見てニヤ!!」

指揮官「どうした……ホギヤア!?!」

おう、すごい奇声だな……っていつかなんか嫌な予感が当たったな……
そうその表に書かれていた消費量は

消費量 ☆3000☆

うわ・・・えぐ・・・

これ一回の戦闘にでだよ？出撃ではなくて戦闘よ？

指揮官なんか隣で世界が終わるのを知ってしまった人みたいに顔面蒼白なんかも
ん・・・

リバテイ「ただいまー！どうだった？」

ジャステイス「・・・僕たちのすごさわかりましたか？」

指揮官「ごめんなさい・・・」

なんか今度あげるから出撃だけはひかえてえ!?(泣)

ちなみに本部に正式配属願を出したら

元帥「・・・え、この資料マジ?おっほん、見たところKAN—SEN?になる前は人工知能であるから君の基地に配属させて人間の常識を教えといてくれ、あとなんかあつても海上自衛隊がなんとかしてくれるやろ(他力本願)」

つていうわけで正式配属されたあの、おっさん・・・今度あつたらシバく

そして夜、歓迎会にて

ザワザワ

(何だろうねー?)

(あーあの「すんごくおおきなたいほう!!」の件じゃない?)

(・・・なんだったんだろうな)

(どうしたんですか?三笠大先輩?)

(いや、今日の演習海域で演習海域で二匹の巨大な鳥を見たんだが・・・アレは?)

指揮官「・・・はい、ちゅううううm「五月蠅い!!」・・・ウィツス、今日は新人の歓迎会です・・・ではどうぞ・・・」

カツンカツン

(わー!リアル天使!?)

(かっこいいねー!)

(いや、かわいいだろ)

リバティ「初めましてアーセナルバード【リバティ】です!!本日、正式配属されたものです!!まだ常識を知らないのよろしくお願いします」

ジャステイス「・・・アーセナルバードの【ジャステイス】です・・・リバティと一緒にならどこへでもいいです」

指揮官「てなわけで自己紹介終わりだ!!質問行くぞ!!」

「はー!!」

指揮官「はい!時雨!」

時雨「重桜の駆逐艦時雨よ!!アーセナルバードってどういう役割があるの?」

リバティ「じゃあ、答えが私が・・・アーセナルバードとは基本的に空を飛びMQ-101っていう無人機などを使って戦う兵器です!!」

(空を飛ぶって・・・チート?)

(空飛ぶ空母ね・・・)

(エンタープライズじゃん・・・)

(いや、なんでさ!?)

ジャスティス「・・・あ、ちなみに自分たちも天喰たちとは違う世界だけど未来から来たよ」

「「「「「えーーーーー!?!」」」」」

三笠「・・・未来でもどんどん変わっていくんだあ・・・」

信濃「はい・・・やはり夢で見たことが現実になるとは・・・」

三笠「つくづく指揮官の運には困るものだな・・・」

指揮官「はーい!! みんなここでもう一つニュースだ!!」
わいわいがやがや

カツシン「指揮官、それより最近暑いからなんか涼むものが欲しい・・・」
指揮官「・・・それについてだが、皆！」

今度、皆で海行くぞ!!

そうだ、海に行こう

青い空!! 青い海!!

現在、俺たちは海に海洋研修で来ている・・・

指揮官「いいか・・・みんな・・・今回は海洋研修で来たんだ！遊びではないぞ・・・」

KAN—SEN達「『『『『『』』』』』』」

指揮官「みんなは普段はKAN—SENの力を使って海に浮かんでいるから溺れることはないが万が一使えなくなると沈むかもしれない!!」

KAN—SEN達「『『『『』』』』』』」

指揮官「だから今！泳いだりして慣れとくぞ!!これは遊びではない!!訓練だ!!それでは解散!!」

KAN—SEN達「『『『『』』』』』』」

・・・だらしいねえ返事だと思うじゃん？

指揮官の時点で終わってるよそんなの・・・

だって指揮官の恰好・・・

頭・麦わら帽子とサングラス

体・アロハシャツ（下に水着）

履物・ビーチサンダル

手に持っているもの・浮き輪

・・・はい、めっちゃ楽しむ気だろ

みんな、ビーチボールとかもって遊んでるもん・・・

そいえばアーセナルバードたちの恰好は？つてそんなの・・・

数分前・・・

更衣室前

指揮官「それじゃ、俺と海上自衛隊たちはこっちだからあとでな！」

プリンスオブウェールズ「わかった、ビーチに集合な」

赤城「指揮官様♡ 赤城の水着楽しみにしといてくださいねえ♡」

トコトコ

曇天「大変なんだな・・・指揮官っていうのは・・・」

指揮官「ほんとだよ・・・みんな美人だからさ・・・目のやりどころに困るんだよ・・・」

トコトコ

東海「そういえば、本日の哨戒はどうしたんですか？」

昇龍「アーセナルバードたちのUAVが出てるそうですよ？」

東海「なるほど．．．しかし燃料は大丈夫なんですか？」

指揮官「大丈夫だ．．．問題ない．．．(震え)」

トコトコ

天喰「ん？どうしたんだ？アーセナルバード？」

リバティ「え？指揮官たちがこっちに行っただけよ？」

指揮官「え、お前ら性別何？」

え？女性じゃないの？

ジャステイス「．．．さあ？わからない」

全員「「「「「」」」」」」

．．．おっと．．．これは．．．

昇龍「え、でも二人とも兄と弟って言いあうじゃん？」

リバティ「それは教えてくれた人間がそうだといたんですが．．．なぜ教えてくれ

た時．．．

(はあはあ．．．兄弟でくつつくなくて．．．最高じゃない．．．腐女子としての血が騒

ぐわあ!!あ、やべ鼻血が・・・)

・・・つて言つてたんですけど何ですか?ふじよしつて?」

・・・ちよつと!?!製造元のオーシア技術部!?!おたくに腐った心の持ち主いませんか!?!

指揮官「・・・あ、もしもし?ベルファスト?今いい?」

ベルファスト「どうかされましたか?ご主人様?・・・は!まさか女王陛下のバスト

サイズが気になって!?!(喋らないで!ベルファスト!!)」

指揮官「え、なんそれ逆に気になる・・・(下僕!!聞いたら殺すよ!?!)・・・えつと・・・

アーセナルバードたちの性別知らない?」

ベルファスト「?男性ではないでしょうか?」

指揮官「・・・OK、ベルファストちよつと緊急なんだけど来てくれない?」

ベルファスト「(察し)・・・了解しましたベルファスト急いで向かいます・・・」

そして、メイド長が来てなぜ兄弟と呼び合うのかをいった

ベルファスト「・・・大変失礼ですがリバティ様とジャステイス様・・・兄弟の意味

をお判りでしょうか?」

ジャステイス「・・・?、年上が兄で年下が弟じゃないの?」

ベルファスト「・・・ジャステイス様・・・その・・・」

メイド長、兄弟関係と性別を説明中・・・

ジャステイス「・・・なるほど、家族関係の情報を更新・・・完了。つまり性別で関係が変わるのですね・・・」

リバティ「ちよつと、指揮官、確認してくる」

指揮官「・・・おう、そのトイレで確認してこい・・・」

数分後・・・

リバティ「指揮官・・・自分たち・・・」

「女性だった……」

ジャステイス「じゃあ、今度から兄さんではなく姉さんになるのですね」

……あつぶねえ!!

危うく、更衣室で女性と一緒に着替えるとこだった……

ベルファスト「……ではリバティ様とジャステイス様、女性は私たちと着替えてください……」

リバティ「??なんで？」

ベルファスト「……人間にもいろいろといるんですよ」

そのあとメイド長が急いでリバティたちの水着を買ってきた

リバティはかわいらしいフリルのついた白色の水着で

ジャステイスは……スクール水着に真ん中に「正義!!」って書いてある水着だ……
(ダサイとは言ってはいけない)

俺の恰好は普通に無地の灰色水着で紺色のパーカーを着ている

赤城「うふふふ♡指揮官様どうですか♡赤城の水着は♡」

指揮官「いい、いいと思うよ？」

・・・うつせえな!?!そこ!?!海洋研修(海水浴)に来たんじゃねえのかよ!?!甘えわ!?!
この空気!!

クイーン・エリザベス「・・・ねえ、私はどうなのよ下僕?」

指揮官「・・・普通に可愛いよ?」

ベルファスト「はい、陛下。大変可憐ですよ」

クイーン・エリザベス「そ、そう・・・ありがとう・・・(やった!指揮官に褒められ
た!!)」

こっちはほんのり甘いな・・・爆発しちまえばいいのに・・・

エリザベスは水色の水着に白めの透明なレースを着ている

ベルファストは麦わら帽子に白いビキニだ

クイーン・エリザベス「・・・でもやっぱり・・・」

ベルファスト(ボイン)

赤城(バイン)

クイーン・エリザベス「・・・(ペタン)・・・(バツ!!)」

リバティ・ジャステイス「どうしたんですか?エリザベスさん?(ペタン)」

クイーン・エリザベス(グツ!!)

・・・うん、見なかつたことにしよう

ツンツン

天喰「ん?」

振り返るとそこには水着姿の大鳳がいた・・・

大鳳「あ、天喰・・・大鳳のはどうでしょうか?」

天喰（はつきり言えば美しかった・・・黒色の布地の水着に腰には黒の薄地のスカートをはいていた。髪にはいつもつけている金色の鳳凰を模した髪飾りではなく赤い花の髪飾りをしていてスカートに鳳凰が描かれていた・・・体のほうも最初に会った時から傷は消え、自分の知っている大鳳になっていた。暑さで汗が額から首をつたり鎖骨を通り大きめの果実の中に消えていった・・・鎖骨は健康的である形でぶつちやけ触りた。あのデカイ胸もさわら・・・失礼、取り乱してしまった・・・。今の鳳凰はかわいい。いとエロいが合わさってもはや美しいだった。ああ、ほかの人に見られたくない、というか自分だけに見せてほしい・・・。」ぶつぶつ

大鳳「え、えつと・・・天喰? さつきからなんて言ってるのですか?」

天喰「あ!?! ご、ごめん・・・そのお・・・き、綺麗だよ?」

大鳳「あ、ありがとうございます」

いかん・・・心の声が出てしまったようだ・・・

・・・まあ、これは指揮官に見せるための練習だろうな・・・

なんか、今指揮官を殺したくなってきたな・・・
羨ましいな・・・

一方大鳳!!

大鳳(ああ! 恥ずかしい!! 勇気を出して天喰に声をかけて見てもらったけど指揮官様とは違ってなぜかすごく緊張した・・・なんか心の底からドキドキする感じ? それにしても天喰の体すごいですね・・・毎朝海上自衛隊たちと鍛えているとは聞きました。がパークの上からでもわかる無駄な肉をそぎ落とした体で飾りな筋肉ではなく使える筋肉であれが俗にいう“美筋肉”というものなんですわ・・・あと、ちらりと見れたあの六個に割れた筋肉すごく触りたいですわあ♡)

とま・・・お約束な二人であつた

アドミラル・ヒツパー(ずーずーずーずーん)

ジャステイス「・・・あのプリンツオイゲンさん・・・なんでヒツパーさんは落ち込んでいますか?」

プリンツオイゲン「ああ、姉さんはねえ・・・自分の胸の小ささに絶望しているのよ」

アドミラル・ヒツパー「うるさいわよ!! オイゲン!! あなたにはわからないでしょう!? この苦しみがあ!?!」

ジャステイス「・・・小さかったら何がだめなんですか?」

プリンツオイゲン「まあ・・・胸の大きさがって女性の象徴みたいなのだから皆大きくしたいのよ♪」

ジャステイス「うーっーん? 人間って難しい考えを持っているんですね・・・でも、私たちはいらなかなあ?」

アドミラル・ヒツパー「バツ!! (パアアアアア!!)」

プリンツオイゲン「あら? なんでかしら?」

ジャステイス「だって、私と姉さん・・・」

空を飛ぶとき胸が大きかったら邪魔になるもん・・・」

ピシッ・・・

プリンツオイゲン「・・・そ、そう。確かに邪魔ね・・・姉さん・・・生きてる?」

アドミラル・ヒツパー「(☒ω☒)ゴフウ(吐血)」

プリンツオイゲン「あ、無理だったみたいね・・・」

昇龍「こ、来ないでくださいあああああいいいいいい!!」

フツド「いいではないですか♪」

こんにちは!!昇龍です!!現在僕はフツドさんとロイヤルメイド隊と変態(アークロイヤル)に追いかけてられます!!

何故なら・・・

昇龍「なんで僕に女性用の水着を着させようとするんですかあ!!」

フツド「初めてあなたに会った時すぐ思ったんです!!もしかしたら女装したら美女になるんではと思って!!」

ベルファストとメイド隊「私たちは単に面白そうだからです」

昇龍「それでいいのかメイド隊!?あと、変態!!お前はなんでだよ!」

アークロイヤル「私は気づいてしまったんだ・・・シヨタでも意外といけるのでは?・・・」

昇龍「マジもんの変態やん!!憲兵!!サン!!タスケテ!!」

バサ!!ガシツ!!

昇龍「なに!?!・・・いや!!エリザベスさん!?なんてどこにいの!?!」

クイーン・エリザベス「どこって砂の中よ?」

昇龍「ロイヤルレディは特殊部隊かなんかなのか!?!って離して!!あの人たちに捕まるから!?!」

クイーン・エリザベス「あ、提案したのは私だから!」

昇龍「うおおおおい!?女王!?何してくれてんだ女王!?!」

ガシツ!!

昇龍「ひえ・・・」ガガガガガガ

フツド達「捕まえました♪」

昇龍「ど、曇天助けて!!」

曇天「呼んだか?」

た、助かった!!

しかし、来たのは長いかつらをしてメイド服を着せられたかつての仲間だった……昇龍「この人たちを離して……ってお前もかい!？」

クイーン・エリザベス「……あなたたち意外と似合うわね……もう、女になつたら?」

昇龍「いやだああ!?!アーーーーー!」

瑞鶴「………ロイヤルってあんなのだっけ?」

翔鶴「………なんかロイヤル女王の耳にジャステイスの胸の無いほうがいいっていう言葉を聞いて意気消沈してあんなつたらしいよ……」

瑞鶴「ええ……(困惑)」

それからスイカ割で盗撮しようとしていたアークロイヤルの頭が犠牲になったり

急に水着ファッションショーが始まって女装された昇龍が上位に入ったり

アルバコア達潜水艦 対 月影の潜水時間対決して

いろいろとあつてあたりは暗くなってきた……

大鳳「はあくくく(指揮官様は重桜の駆逐艦の遊び相手になつてたし、赤城はエンタープライズと仲良く話してたし、あのアルバコアさえ珍しく真剣になつて戦つてた

し……し……しかたなく天喰と一緒に居ようとしたらあの時褒めてからどこかに行つてしまったし……」

指揮官「はーい皆！かたずけて帰るぞ!!」

大鳳（ああ、終わってしまった……結局天喰、どこに行つたんだろう？）

女子更衣室

大鳳「はあ、早く着替えて指揮官様の所に……」

カチャ

中を開けたら……

天喰「……へ？」

大鳳「……はい？」

パーカーを脱いで下を着替えようとしていた天喰がいた……

天喰・大鳳 「キ……」

キヤアアアアアアアアアア (ギヤアアアアアアアア)!!」

天喰 「え!? ちよ!? なんでここに大鳳が!? ここ男子更衣室じゃないの!」

大鳳 「へ!? え、でもここ来たときは女子更衣室……」

しかし扉から張り紙が目の前に落ちてきた……

☆ご来場のお客様へ!! たいだいま男子更衣室が原因不明の爆破で使用不可能になってしまいました!! なので現在の時間帯は男子更衣室になっています!! 中を見てしまってもラッキースケベってことで許してね☆

大鳳 (ちよ、ちよつと!? なにしているのよ!? ここのスタッフ!?)

大鳳「た、大鳳は何も見えていません!!す、すぐに外にでます「相棒?なんか声が聞こえたんですけどどうしたんですか?」・・・!?!」

天喰「しま!」

ガラガラ

東海「相棒?どうしたんですか?」

シーン

東海「あれ?いないな?」

大鳳(ど、どういう状況ですか!?)

東海「おかしいな?たしかに声が聞こえたんですが・・・」

・・・・あぶな・・・今さっき海洋研修という名の海水浴が終わって皆より一足先に着替えて備えようといたんだけど・・・急に大鳳が扉から現れてびっくりして仲良く奇声をあげてしまい、それを聞きつけた東海に見つかる場所だったから近くのロッカーに転がり込んで隠れ切れた・・・はあ、はやく行ってくれないかな・・・

むにゆ

「ひゃ!!」

ん?むにゆ?

大鳳「え、えつと・・・天喰?・・・動かないでいただけませんか・・・
／／／／／／／／

・・・今の状況を説明しよう・・・奥行が広く上が低く服を何着でもかけられるようになつたロッカーの中で下に俺、上に大鳳がいて俺を押し倒している格好で隠れてい

た・・・

何やつとんのおれえ!? いや、確かに今の状況で見つかったら東海に疑われるけど大鳳だけでよかつたじゃん!! よく考えたら犯罪やん俺!?

あと、こんなに近づいたからわかるけどすごくいい匂いがするなあ・・・あと、息遣いもきこえるう・・・

つて、やばい!? 危うく頭が逝くところやった!! 持つてくれえ!! 俺の精神と理性!!
もにゆ

・・・あと、なんか俺の胸になにか柔らかいものが下りてきてませんか・・・?

大鳳「あ、天喰? そ、そのお大変申し訳ございませんが・・・う、腕が疲れてしまったので・・・」

あ、天喰の上に倒れこんでいいですか!？」

・・・☆俺の人生終了のお知らせ☆

・・・オワツタ・・・

嫌マテ!!素数を数えれば落ち着けるってなんかの動画で見たぞ!!

よし!!2, 4, 6, 8, 9, 10, 12, ……ってコレ素数じゃねえ!?

いや、逆に考えるんだ!!わりと行けるのでは・・・?

天喰「オウ、イイゾ」

大鳳「で、では失礼します・・・」

むりゆり

大鳳（さ、さすがに殿方の上で休むとは・・・指揮官様ならイジメたいですがなんか天喰だと緊張しますね・・・）

指揮官「あれ？二人ともどこ行ってたの？探してたよ？」

天喰「す、すまない・・・ちよつと手伝いをしてた」

大鳳「た、大鳳もデス・・・」

指揮官「？そうか？」

・・・ロツカーの件については二人の永遠の隠し事にした

でもまあ、今日一日楽しかったし忘れるでしょ!!（プシュー）・・・んなことはなかつ

たわ・・・

しかし、その二人の様子をうかがっている人物がいた・・・

ベルファスト「・・・絶対何かありましたね」

実は天喰様がなぜかイライラしていた日になにか落ち着けるものかと思ひ執務室に向かった際に聞こえてしまいました・・・

実・は・天・喰・様・は・大・鳳・様・に・好・意・を・も・つ・て・い・ら・つ・し・や・る・と・．．．

メイドである私でさえ恋バナには目がないので気になり大鳳様を観察した見たので
すが（なぜか天喰の部屋にいた）．．．

大鳳様も天喰様に好意を持っている．．．

これは．．．

天喰：大鳳は指揮官にしか目がないと思えばあきらめているが好意は持っている

大鳳：天喰に好意を持っているが自分で気づいていない

．．．なんかもどかしいですね．．．

ベルファスト「．．．まさか!?もうやったとか?」

そう恥ずかしがる二人と勘違いするメイド長であつた．．．

大規模鏡面海域攻略作戦 前編

とある海域・・・

?? 「このあたりでいいかしら？」

?? 「あははは!! 本当にやるのお？」

?? 「仕方ないじゃない、彼にあうにはこうするしかないのよ・・・ってあなただって前に彼がいる基地から誘い出そうしたら切られたそうじゃない」

そういう、不気味な装置の中には・・・

天喰が持っている緋色のキューブと同じものが浮かんでいた・・・

?? 「これ手に入れるのはけっこう大変だったのよ？」

?? 「へ〜でもやっぱり不安定？」

?? 「ええ、でも彼にあえれば結果いいんだから・・・」

そして、装置を起動させた・・・

?? 「さあ、おいで天喰・・・一緒にお話ししましょう？」

「・・・なあ、ここっつてこんなに霧濃かつたけ？」

「んなわけないべ、ここはアズールレーン本部からそう遠くない海域だべ？セイレーン自体が現れるのが珍しいべ」

「・・・ならさ、俺の目疲れてるのかな？」

「なーにを言つて・・・へ？」

そこには黒色の船が大量に出現した

「な・な・な!？」

セイレーンの侵攻だべえ!？」

「緊急事態発生!!緊急事態発生!!KAN—SENの皆さんは至急執務室に集合してください!!」

それはいつもどおりに平和にみんなと過ごしていた時に鳴り響いた・・・

天喰「!?!、全員執務室へ急行するぞ!!リバティたちも来い!!」

転生組・アーセナルバード「「「「「了解!!」」」」」

執務室に入ると全KAN—SENが待機していた

指揮官「皆集まったな？よし、では説明を開始するぞ・・・」

「素晴らしい、指揮官はいつもの感じではなくとてもなく重い感じで話した

指揮官「今日の早朝、アズールレーン本部の近郊の海域にて突如、セイレーンの超大规模鏡面海域の発生を確認したこのセイレーンは量産型を多数配備して現海域から本部に向かって侵攻中、司令部はこれを緊急事態とみて現在は本部所属の全軍とKAN—SEENで監視と威力偵察を行っている。そして全鎮守府に増援を要請、内容はすぐさま本部に急行し本部と共同で敵を殲滅、鏡面海域の発生原因を突き止めろだ、ここまで質問は？」

東海「・・・本部の哨戒班は何してるんですか・・・」

指揮官「いや・・・今回は何の前触れもなく表れて現地の漁師が発見して本部に報告が入って判明したから・・・」

うーん？鏡面海域の侵攻のことはいいとしてどうやって本部近くの海域に発生させたんだ？

指揮官「とりあえず、俺と海上自衛隊は先行で本部に行つて作戦とか話し合ってくるから皆は装備の点検、基地に残る組と行く組に分かれておいて!!」

アズールレーン本部

元帥「……ではこれよりセイレーンの超大規模鏡面海域攻略緊急作戦を開始する」
モブ「はい、では報告します。セイレーンは今朝6時20分にて現地の漁師が発見し
本部に向けて侵攻しているのが判明しました……」

元帥「……確かその10分前には哨戒班からの報告があつたはずでは？」

モブ「……確認したところ現場では多数の艦装が散乱していました」

……やられたみたいだな

指揮官「質問いいでしょうか？セイレーンの鏡面海域の生成の原理はわかりませんが
コアとなる装置にそれなりのエネルギー源が必要です。発生した海域にはめばしい資
源なんて埋まっておらずサンゴ礁があるくらいです」

モブ「……コアとなる装置は発見できました」

すごいな……前世のアズレンでもそうだったけど鏡面海域に入ってKANSEN
が発見して破壊しているからな

モブ「こちらが偵察機から送られた写真です」

そうして壁にプロジェクトで写されたのは

不気味な機械の中に浮かんでいる赤く光り輝くキューブが……

元帥「……赤いメンタルキューブ……なんと不気味な」

指揮官（……天喰!?あれっってお前が持っているのと同じじゃね!?）

……なんでセイレーンたちにもアレを持っているんだ!?

モブ「しかしその代わり敵の数が異常です……量産型は確認できただけでも戦艦は120以上、空母200以上、軽・重巡洋艦が600以上、駆逐艦がそれ以上です……人型も多数目撃されています。陣形も外側を量産型で固めており中心に行くほど人型が多くなっています」

……うわあ、ガチで人類滅亡させる気かよ……

元帥「……本当は各個撃破して殲滅したいが数が多すぎて殲滅する前に本部についてしまうな……」

モブ「……はい、なぜかはわかりませんが恐らく敵は大規模なので速度を合わせるために低速で侵攻しているんでしょう」

元帥「……ここに来るまであと何日かかる?」

モブ「およそ5日後でしょう……ですがそれくらいでつたらこちらの準備も間に合います」

元帥「よし……では実行する作戦を説明する。

まず、一番外側にいる本部所属の海軍で隙間を開ける

次に、中層の量産型と少数の人型セイレーンを各基地のKAN—SENで対応し中心部の隙間を開ける

さらに中心部の人型セイレーンを各基地の精鋭KAN—SENが対応

最後に中心にいるコアと元凶を精鋭KAN—SENと海上自衛隊で破壊するという感じだ。」

……さりげなく俺らが鍵じゃん……

元帥「さらに田中少将の基地に所属しているアーセナルバードを出す。アーセナルバードたちは中心部以外の味方軍の援護を行ってくれ、安心しろ燃料に関しては本部の使うといい。……では質問はないな?では解散!!……人類を守るぞ!!」

「「「「おおおおおおお!!」「「「「」

天喰「……つていう感じの作戦だ」

俺と指揮官は会議場を出てからみんなのいる部屋にきて基地の皆と一緒に作戦の内

容を説明した

東海「……自分たちは初めての防衛出動ですね」

リバテイ「やった!! ジャステイス!! ようやく出動できるよ!!」

ジャステイス「……うん、これでみんなの役に立てる」

「……確かに俺たち海上自衛隊っていつもは哨戒や輸送船護衛しかやってないから緊張すんな

昇龍「……なぜアーセナルバードたちは中心部にはいけないのですか? あの子たち割と一艦隊分の戦力を有しているからいいのでは?」

指揮官「……どうやら中心部の人型セイレーンはそんなじよそこらの通常型ではなく改修型がほとんどで空にいる彼女たちがいたらヘイトがそっちにむいて集中砲火されて落とされるかららしい。敵はあと5日後に本部に到着する、なのでみんなはあと4日間準備や最後になるかもしれないひと時をすごして無念の無いようにしておけ」

本部のとある廊下

イラストリアス「……とうとう来てしまいましたね。恐れてたことが……」

ユニコーン「……イラストリアスおねえちゃん!!」

イラストリアス「……どうしたの? ユニコーン?」

ユニコーン「イラストリアスおねえちゃんはユニコーンが守るから、安心して!!」
イラストリアス「ユニコーン……」

月影「そんじゃ、俺は君たちが安心して空に集中できるように守るよ」

そう天井から月影が降り立ってきた

ユニコーン「……月影お兄ちゃん？」

月影「安心して優雅に戦っておきな？近づいた敵船は俺が沈めるさ」

イラストリアス「月影さん……あのロイヤル寮に不法侵入してユニコーンの寝顔を見ようとしたらベルファストに見つかって連行されたあの人がそんな頼もしいことを言うなんて……」

月影「……今それを言わなくてもよくない？あと、なんで見つかるんだろ？あの人は超能力者かなんかかよ……」

とある待機室

昇龍「……緊張しますね」

クイーン・エリザベス「そうかしら？意外と腰抜けね海上自衛隊つというのは」

昇龍「……ロイヤルレディって胆が据わっていますね……しないんですか？只でさえ本部に来てるのにロイヤル皆から信頼されて指揮しないとイケないのに」

クイーン・エリザベス「こんなものへつちやらよ？みんなが私を信じるなら私もみんなを信じるわ!!」

昇龍「・・・すごいな・・・永遠の17歳（笑）も伊達ではないな」

クイーン・エリザベス「ちよつよ!?!」（笑）は余計よ!!」

昇龍「ま、僕はみんなが死なないように死ぬ気で守るよ・・・アメリカから【海のラプター】と呼ばれているから本気ださないとね？」

クイーン・エリザベス「??あめりかつて何よ？」

昇龍「へへ、知りたいなら死ぬ気で生きろよ？」

とあるテラス

プリンツオイゲン「・・・（カツン）・・・ん？」

曇天「よ、なにか悩んでるのか？」

曇天がオイゲンに缶コーヒーを渡しながら入ってきた

曇天「また、その対抗演習みたいなことすんなよ？」

プリンツオイゲン「・・・しないわよ。私の命はそんなに安くないわよ？」

曇天「なら、いくらで？」

プリンツオイゲン「・・・そうねえ、私があなたの命を奪うまでとか？」

曇天「え、こわ・・・」

プリンツオイゲン「ふふ♪嘘よ。期待しているわよ兄貴?」

曇天「だから、兄貴じゃ・・・はあ、いいやもう好きに呼べ・・・その代わり死にそうになったら生きること優先しろよ?俺が助けに行くから・・・」

プリンツオイゲン「はいはい♪」

整備室

東海は装備の点検をしていた

明石「まあ、た、点検かニヤ?もう何回目ニヤ?」

東海「・・・あ、明石。いやあ、なんか嫌な予感がしてき・・・」

明石「そんなんじや、皆を守れないニヤ?」

東海「はは、そうかもな・・・でも、明石は後衛で傷ついたIKAN—SENの治療を担当するんだろ?なら安心して戦えるな」

明石「あ、ちなみに送られるたびに東海が知っている技術をよこすニヤ」

東海「え!?請求すんの!?!」

元帥「……すまないな、異世界であるにも関わらず君たちがキーパーソンになってしまい……」

天喰「あ、おっさん……じゃなくてアルバード元帥……大丈夫ですよ！人を守れるなら光榮です!!」

元帥「え、今おっさんって……ま、まあいい……しかし、会議場で見た赤いメンタルキューブについてだが何か知っているようだな……」

……あなたは心でも読めたんですか？

元帥「はっはっは!!なんでわかったんだ？つていう顔をするな！私も長年戦場にいた身分だ。部下の考えていることぐらいわかってしまうからな！」

……まったくこの人は本当に只者ではないな……

天喰「……完敗です」

元帥「かっかっか!!そうだろう!!」

天喰「……正直にいうならあのメンタルキューブは普通のメンタルキューブではなく大変危険なものですとだけ言っておきます。あとは……知らないほうがいいと思います」

元帥「……ふむ、そうかなら作戦前だし、問題を増やしたくないし聞かないでおこう。では私は仕事に戻るからなにかあれば来なさい……」

天喰「……ありがとうございます。では……」

こうしてあのおっさんと別れた時、角から大鳳が出てきた……

大鳳「……天喰？今いいでしょうか？」

天喰「……な、なんだい？大鳳？」

え、なに？作戦前に？

大鳳「……この作戦が成功したら話したいことがあるのでいいでしょうか？」

天喰「……お、おういいぞ？なら、約束しちまった人には生きて帰らないとな……

それに大鳳は中心部に一番近い外側の対応をする部隊に選ばれたんだろ？なら、安心して中心部に行けるな？」

大鳳「はい!!大鳳に任せてください!!では大鳳はこれで……」タタタタタ

なんやろ？死ぬならどうやって死にたいですかって言って殺しの来るのかな？

……これは作戦成功してもまだ安心できんな……

一方大鳳!!

大鳳（よ、よかった……話せましたわ……作戦が終わった後約束しましたが緊張

させてしまいましたでしょうか？・・・しかしまさか昨日ベルファストから「・・・天喰様に大鳳様のことをどう思っているのか聞いてはいかがでしょうか？」って急に言われるなんて・・・別に大鳳は天喰のことなんて好きではないのに・・・ただ、一緒に居ただけなのに。あと、「もどかしい」って何がでしょうか？)

・・・お約束な二人であつた

作戦開始当日・・・

港には各基地から選ばれたKAN—SENがいた

・・・圧巻だな

赤城「すごい数でしょ？」

天喰「あ、赤城さん・・・はい、すごい数ですな・・・」

赤城「なんたつて、ここを破壊されたら人類がセイレーンに対抗する力が一気に半減するからね。まあ私、赤城は指揮官様さえ生きていればいいのよ♡」

天喰「・・・あれ？加賀さんとか後輩たちは？」

赤城「本当は守りたかつたけどあつちのほうからあたしたちより本部のことを集中してください!!って怒られちゃったわ・・・あの子たちも成長したわねえ」

ちなみに赤城さんたち一航戦と二航戦は中心部攻略組に五航戦たちは外側を任せられたらしい

俺たち海上自衛隊は前の対抗演習と同じ陣形で月影は基本的に俺たちと一緒に行動するが単独で行動も許可している

元帥「・・・諸君、このような危機的状況にも関わらず集まってくれて感謝する。ここであの空母の言葉を借りるならみんなは本当は戦いたくないかもしれない・・・しかしそんな恐怖を払って来てくれたことに誇りをもって!!そして、この勝負に勝ち、全員生きて帰ってこい!!以上!!作戦開始!!」

・・・こうして元帥の激励をもらい全員、作戦のためにバラバラに持ち場に行った・・・

大規模鏡面海域攻略作戦 中編

ドカアアアアアアアン!!

それが開戦の合図だった・・・

最初に先頭にいた海軍の軍艦がセイレーンの少数の量産型と戦闘を開始する

上空では援護に来た人間側の戦闘機とセイレーンの戦闘機がドックファイトを繰り返している

海では戦艦が俺たち中心組が通れるように壁になって中にみんなを流れ込ませている

中層から中心に向かっていくうちに人型セイレーンをちらほらと見かけるようになったがそれに対抗するかのように他のKAN—SENが本隊から離れて向かっていく・・・

そして中心に近づく前に偵察機を飛ばして偵察するが・・・

天喰「いや、さすがに多くね？」

そう、確かにコアが見えたけど周りに大量の人型セイレーンと数隻の超大型艦（アニメに出たオロチみたいなの）が取り巻きでついていた

東海「ライダー隊発艦!!」

天喰「ゼア隊、デルタ隊、プラズマ隊、キャット隊発艦!!」

東海はF-35JBのライダー隊をアームの甲板から。俺はF-3Cのゼア隊、F/A-18Jのデルタ隊、A-10Cのプラズマ隊、F-14DJのキャット隊を弓から放ち行かせる

ライダー隊とゼア隊はAIM-120を装備して制空権の獲得、デルタ隊はキャット隊の護衛、キャット隊はLRASMを装備して対艦攻撃を担当する。

天喰「全部隊!!ウエポンズフリー!!戦闘を開始せよ!!」

対して相手は数の暴力で攻めてきた。こちらを1とするとあつちは10で空戦を仕掛けてきた

曇天「SM-6発射!!」

赤城さんたちは人型セイレーンとの交戦を初めて曇天・東海（対艦ミサイル搭載ヘリ）は超大型艦の破壊を開始した

昇龍「!!敵艦載機が味方機の防空圏内から突破!!」

曇天「SM-2発射!!」

昇龍「改良型シースパロー発射!!」

敵は対空ミサイルに当たり砕け散った

お返しとばかりにこちらのキャット隊から対艦ミサイルが発射され超大型艦に発射した3発が命中したが装甲が少しへこんだだけだった・・・

・・・いや、硬すぎやろ!?

演習の時は戦艦型の標的艦を二発で沈めれたのに三発余裕で耐えるって!?

参加したプリンスオブウェールズだつて主砲を超大型艦に当てまくっているのに数十発当たつてようやく一隻破壊できたぐらいよ!?

あ、こっちは20発当たつてようやく沈んだわ・・・

エンタープライズ「く!?!硬すぎる!?!」

あのエンタープライズでさえ苦戦するこの硬さ・・・面倒だな・・・

しかもあつちのセイレーンは本家よりしくなレーザー弾幕を撃つてくる・・・

まあ、海上自衛隊はアウトレンジ戦法で遠くから対艦ミサイルやら艦載機を出して対応してこつちに来たセイレーンは一応撃てる特殊弾幕で対応するけどエンタープライズたちみたいな装甲を持っていないから接近できないんだよな・・・

東海「・・・あ! そうだ! 敵の船の砲身の中を狙つて内部誘爆すれば!!」

え、それマジでいつとんの? え、敵船に乗り込んでわざわざ砲身の所までいつて中視

いて爆発させるん？

エンタープライズ「そうか！その手があったか！」

肯定すんの!? え、マジで向かったんですけど!? あのKAN—SEN!?

エンタープライズ「エンゲージ!!」

素晴らしい弓を引くと巨大な艦載機が出現しその上にエンタープライズが乗り込んで超大型艦の上空に移動しその場所から弓で砲身内に矢を放ち誘爆に成功した・・・

天喰「・・・oh」

・・・え、俺もあれスンの? え、ちょ、東海・・・何その「さあ!! 相棒も早く!!」みたいな目? いや、俺できんよ? 出せる云々じゃなくて操縦ができないからね?

そうすると超大型艦の艦尾から水柱が立ち上がった

月影「おう、なんか困ってそうだから来て見てたけど敵の水中プロペラに大量の魚雷当てまくって止めといた・・・」

ナイス!! 月影!!・・・でもプロペラでさえ何発ものいるのか

あ、待てよ・・・

天喰「・・・なあ、東海・・・バスターバンカー何発かある?」

東海「ありますけど・・・あ、まさか・・・」

そう! そのまさかである!!

天喰たちが中心部に到達した数分後・・・

アズールレーン本部 作戦指令室

元帥と各指揮官が自分の艦隊の指揮に専念していた・・・

「味方駆逐艦大破!! 乗員は退艦を開始します!!」

「艦載機の数も減ってきています!! あまり長期戦を続けるのは危険です!!」

「撤退艦とKAN—SENの修復急げ!! できるだけ中心部に味方を入れこませろ!!」

戦況は最初は優勢だったが敵の増援が接近し徐々に劣勢になりつつあった・・・

元帥（ぬう、さすがに敵もやるなあ・・・）

モブ「・・・・・・・・失礼します、アルバード元帥少々時間よろしいでしょうか？」

元帥「・・・・？、ああ、君は偵察の報告をしたのではないか？ どうした？」

モブ「・・・・いえ、その偵察機からの報告に關してですが不信に思うことがあります

て・・・」

元帥「不審に思うこと？」

モブ「・・・・なぜセイレーンはこれほど艦載機を所有しているのに偵察機を落とさな

かったのが気になりました……」

元帥「……それは開始直後まで戦力を温存したかったのでは？」

モブ「しかし、敵の増援はまだ来るのに温存しておく必要性を感じないので……私
が敵だったら補給や増援に余裕があるなら最初から大量に出しますが偵察の時は見て
くれんとばかり対空攻撃や迎撃もされませんでした……」

……確かに不振だ

すると一人の通信使が叫んだ

「報告!!敵は突如攻撃をやめ中心部に向かって反転を開始!!」

な!!さすがに危険だと思って中心部に戦力を集める気か!?

「!?!、中心部に続く壁担当の艦隊から緊急報告!!中心部に向かっていた敵艦隊が味方の
護衛艦隊の妨害を開始!!中心部に増援を送りません!!」

……コアを破壊されればセイレーン側が不利になるのになぜ中心部のアズールレ
ン側の艦隊を攻撃せずに外側の増援を通す艦隊を攻撃するんだ?増援を増やさない
ならわかるが完全に増援が送れる前にコアの周辺の制圧は海上自衛隊ならできるだろ
う

……何が目的だ?

ドカアアアアアアアン!!

プリンスオブウェールズ「……く!! 敵の数が多すぎる!? 減らせてはいるがどこまで持つか……」

中心部に到達しておよそ一時間……敵の人型セイレーンは減らせたがあの大艦が硬すぎて時間がかかる!!

グウウウウン!! 《shake》

……しまった上か!?

直上に敵急降下爆撃機が爆弾を落とそうとするが

昇龍「危ない!!」

ドン!!

プリンスオブウェールズ「……すまない助かった」

昇龍「どういたしましてっっていいけど数多くないですか?」

プリンスオブウェールズ「……ああ、確かに異常だが弱音を吐いてはいけな、い、な!!」

《shake:l》ドオオオオオオオン!!

昇龍「そうですね!! 主砲、撃ち方ーはじめ!!」

ドン!

ドン!

ドン!

プリンスオブウェールズが大口径の主砲を放ちながら人型セイレーンを減らし、昇龍は対空を担当する

一方天喰・東海は

ズドオオオオオオオオオオ!!

東海「いや、天喰!!バスターバンカーを直接超大型艦当てるとかいいのよ!?!」

天喰「こまげえことはいいいんだよ!!沈めればいいんだよ!!」

二人仲良くバスターバンカーで沈めていった

作者(バスターバンカーは本来地中貫通爆弾で決して対艦ではないので注意!!)

・・・またなんか聞こえたけどキシナイ、キシナイ

こうして中心部に向かっていった

天喰「・・・よし、コアが見えてきた!!」

どうにか倒しつつコアにたどり着いた瞬間・・・

ゴゴゴゴゴゴゴ!!ドゴオオオオオオ!!

超大型艦の甲板の一部が開き空に数十発何かを打ち出した

曇天「!?!、敵超大型艦から飛翔体が発射!!はるか上空に向かっている!!」

東海「曇天!!それはおそらく疑似的なICBM(大陸間弾道ミサイル)です!!たぶん弾着地点はアズールレーン本部!!」

曇天「まじかよ!?!SM-3発射!!」

弾道ミサイルの対処する曇天に周りの敵機が集まりだした・・・

東海「敵機が曇天に向かっている!?!敵は対処する能力を持っている曇天狙いか!ライダー隊!!曇天の援護をして!!」

曇天「多すぎだろ!?!どんだけ撃つ気だよ!?!」

そう愚痴を言っている間にエンタープライズたちは超大型艦を沈めていきそれに邪魔しようとする敵機が来るが昇龍のシースパローで対処される

そして・・・

エンタープライズ「これでラスト!!」

最後のセイレーンを倒して制圧が成功した

東海「こちら海上自衛隊の東海!!コア周辺の制圧に成功!」

指揮官「こちらでも確認した報告で全セイレーンの敗走を確認・・・みんな帰還せよ」

・・・ふう、終わった・・・いや、さすがにギリギリだった

曇天もミサイルも対空ミサイルがあと2発しか残ってないし、俺も艦載機の燃料も空になるくらい飛ばしまわって搭載ミサイルも無い

指揮官「……すまない司令部からの急電だ、敵に再び戦力の集結を防ぐために追撃戦を行うそうだ……」

え、うそおん……

天喰「指揮官……さすがに弾がもうねえぞ？」

指揮官「えつと……ちよつと待って……OK、司令部から帰還の許可が得た。あ、でも帰る際にその赤いメンタルキューブの回収を行って来て♪」

……なんか、指揮官のテンションがたけえな……

東海「……なんか……きもいですね……」

東海……それを本人の前でいうなよ？

すると向こうから……

大鳳「天喰く!!無事だったんですね!!」

天喰「ああ、大鳳も無事だったか……お疲れ様……大鳳？」

大鳳「はい♡天喰♡」

はあ、ほんと戦闘の後でも美しいな……汗が髪に張り付いて輝いて見える……おつと、いかんいかん指揮官のお願いをやらなければ……

天喰「あー、すまない大鳳？前言っていた話したいことを聞く前に指揮官の頼みをしないな……帰ってからでいいか？」

「……!……アマ!!……天喰!!……聞こえる!」

ん? 誰だこん時に通信って?

天喰 「こちら天喰。だれだ?」

指揮官 「あゝよかった……通信がつかないから焦った……」

ん? 何言ってるんだ?

天喰 「どうしたんだ? 指揮官? さっき話してたばかりじゃないか?」

指揮官 「え、なんか話したっけ?」

天喰 「冗談はよしてくれ……司令部からコアになったキューブの回収を命じたら?」

指揮官 「え、俺も司令部もそんな命令してないよ?」

……あれ?

待った、そもそもなんでさっきはまだ鏡面海域なのに通信がつかんだ?

しかし、気づいた時には装置から謎の触手が出てきた……

天喰 「しまっ!」

?? 「あゝ、ようやく捕まえたわ……待ったかいがあつたわ♪」

そういうタコのような艦装をうねらせながら俺の首を掴む少女が現れた……

……お前は!?

天喰「…………タコレデイ」

??「……………」

??「ちよwオブサーバーwタコレデイってw」

オブサーバー「…………ピュリファイヤー、帰ったら艦装と服を全部はがして人間の住んでいる町の路地裏に放置するわよ…………」

ピュリファイヤー「それは勘弁w」

東海「な!?なんでたk…………オブサーバーとピュリファイヤーがここに!?!」

オブサーバー「なぜって天喰を回収するためよ?」

天喰「グツ!?!…………まさか

この侵攻は嘘で本当の目的は俺だったのか……」

ピュリファイヤー「正解wつてかアンタたち強すぎでしょwどんだけ戦力を少なくさせれば気が済むのw？」

昇龍「でも！さつき通信では指揮官の声が！」

オブサーバー「ああ、それなら「おーい？天喰？大丈夫かあ？」……こうかしら？♡」
……まさか、通信をジャックして指揮官の声を加工して俺たちの状況を確認するた
めか……」

オブサーバー「それでは彼はもらっていくよ♪」

大鳳「……!!待ちなさい!!私の天喰を返しなさい!!」

オブサーバー「おとなしく従うとでも……？」

EMP発動・・・」

ばしゅううう!!

東海「な!?!なんで・・・EMPを・・・」

プリンスオブウエルズ「か、体が重い・・・」

オブザーバー「うーん? やっぱり彼らには効いてKAN—SENにはいまいちね・・・

まあ、いい研究結果を得られたわ・・・それではさようなら♪」

曇天「ま、待てええええ!!」

こうして歪んでいく空間に天喰は連れて攫われた・・・

大規模鏡面海域攻略作戦 後編

天喰「う、ううううん？」

目が覚めるとそこは・・・

天喰「・・・知らない天井ふあ!？」

目が覚めると目の前でオプザーバーが顔を覗き込んでいた

・・・いや、何してんの？

目が覚めたら黄色い目をして青白い肌のもった少女、しかもセイレーンがいるってどんな寝起きドツキリだよ・・・

あと、タコ足を体にならせないでください・・・気持ち悪いです・・・

オプザーバー「あら？起きちゃったの？もう少しみたかったのに」

天喰「・・・それで俺を連れ出してまで何がしたい？」

オプザーバー「だって気になるじゃない？この世界ではないはずのKAN—SEN
なんて？」

まあ、そりや気になるわな？

天喰「・・・それで？なんだ？こつちの情報をよこせとかか？あいにく知らないの

ね？」

オブザーバー「あら？私が見たいのはあっちじゃなくてあなた自身のことよ？」

はい？俺？

オブザーバー「この世界のKAN—SENの特徴なんてもう知ってるわ．．．でもあなたたちは違う．．．男性で回りとは違う装備．．．なによりあなただけを捕まえたのはあなたのメンタルキューブが緋色で今回コアにしたのと同じもので動いているからよ」

うねうね

天喰「．．．どこでアレを手に入れた？」

オブザーバー「それは秘密ね♪」

うねうね

こいつ．．．楽しんでるな．．．

オブザーバー「．．．それで？自分自身について話してくれないの？」

天喰「．．．」

うねうね

．．．．．すうー

天喰「・・・ちよつと!? さつきから体にタコ足をまとわりつかせんのやめてくれませんか!?!」

オブザーバー「だってあなた話してくれないから暇だからこうなるのよ?」

天喰「なんでさ!?!」

オブザーバー「はあもう面倒くさいから直接聞こうかしら?」

ドスツ!!

天喰「ゴフツ!?!」

オブザーバーの触手が天喰の胸に刺さり体内でうねらせる

天喰「アツ・・・ガツ・・・」

オブザーバー「うふ♪メンタルキューブを直接触られる感覚はどうかしら?」

体内で触手がメンタルキューブにまとわりつき触られているのを直で感じる・・・

それは心臓を握りしめられているようだった・・・
バシユツ!!

天喰「ガハツ!?!・・・・・・はあはあはあはあ・・・・・・」

オブサーバー「・・・・・・ふーん?こことは別の世界から来て元は人間ね・・・・・・へえこれかもとになった船ね、どうやらだいぶ嫌われていたようね・・・あと、残りの彼らは・・・成程ね・・・・あら?・・・・ふふ♪KAN—SENとKAN—SENがねえ・・・・」

天喰「ひゅー・・・・ひゅー・・・・ひゅー・・・・」

オブサーバー「・・・・少し手荒すぎたかしら?」

ピュリファイヤー「うわあ・・・・オブサーバー・・・・あんた意外と鬼畜ね・・・・」

オブサーバー「仕方ないじゃない・・・・彼がしやべらないのが悪いのよ?でも、意外といろんなことを知れたわ♪」

ピュリファイヤー「どうするこいつ?捨てちゃう?」

オブサーバー「いいえ?彼にはまだやってほしい実験があるのよ・・・・」

オブサーバーの懐から取り出したのはあの緋色に輝くひびの入ったメンタルキューブだった

天喰「・・・・なにを?」

オブサーバー「・・・・それじゃ!頑張つてね?」

ドスツ!!

天喰「キューブを体内に!? う、うわあああああ
!?!」

(熱い!! 誰か助けてくれえええ!!)

(は、肌が焼け落ちるう!? だれか水をクレ!?)

(うわーん!! お母さん!?)

(か、髪に毛が落ちていく!?)

(さ、寒い . . .)

(ゴフ!? ち、血があ . . .)

天喰「あ、ああ!? 頭に直接!?! う、あああああああ!?!」

な、なんだこれ . . . 脳内の神経に直接現場にいるような痛みが!?!

ピュリファイヤー「うわwえつぐwそれで？何すんの？」
オブサーバー「ふふ♪何って……」

O·v·e·r·w·r·i·t·e· (上書き) するのよ♪」

東海達が天喰をセイレーンに連れ去られて急いで本部に戻り今回のことを話した
指揮官「……了解した、本部に連絡して至急救助部隊の派遣を要請する」

バン!!

東海「要請してからじゃ遅いですよ!!」

曇天「……そうだ、指揮官自分たちだけでも搜索許可を……」

指揮官「……それは無理だ。第一君たちは負傷している……指揮官たるものまだ
敵勢力がいる海域に負傷したKAN—SENを送れない……」

そう、たった今帰還した東海達は満身創痍で弾がなかった・・・昇龍「・・・でも曇天が天喰の位置情報も手に入ったんだよ!？」

指揮官「・・・残念だが、その島には敵の残党勢力が集結中なんだ。作戦の後で君たちも他の艦隊も出れない・・・」

東海「でも!!今回は戦闘せずに救出するだけだ!!」

指揮官「何度も言わせなくてくれ!!東海!!これは上からの命令だ!!確かに俺も助けたいがお前たちも失いたくない!!戦力としてではなく個人として!!」

・・・だけど、このままじゃ・・・

カツカツ

赤城「大鳳!!あなたどこに行こうとしてるのよ!？」

大鳳「……………」

カツカツ

赤城「まさか!?彼らが動けないから自分一人だけでも行く気なの!？」

大鳳「……………」

カツカツ

赤城「待ちなさい!!大鳳!!(ガシツ!!)」

大鳳「……………離してください……………赤城」

赤城「行かせないわ……………重桜の一員としても一人のKAN—SENとしても」

大鳳「……………なら彼も一人のKAN—SENとしても助けるべきです」

赤城「……………仮に私が行かせたも指揮官様が「行くな」つて命令されたらあなたは守るの?」

大鳳「ツ!？」

赤城「だから私はあなたがいなくなつてほしくないのよ!!」

・・・ここはとある小さな会議室

曇天「・・・しかし、どうする？俺がお前だったら指揮官に行かないよう命令されても行くが？」

東海「当たり前です・・・命令違反して軍法会議にかけられようが気にしません・・・」
曇天「よし、ならあとはどうやって助けるだな・・・」

・・・確かに、今はミサイルや弾薬の補給ができましたが今は天喰がないため一時的でもいいので艦載機を搭載した空母が欲しいですね・・・私東海は「ライダー隊」が

います。数が少ないので数で来られたら制空権を失ってしまうので……

曇天「……この編成を見ると空母が欲しいな……。でも他の空母KAN—SENに声をかけても指揮官に釘刺されているだろうしなんならそのまま指揮官にバレて俺らが勝手に動こうとしてんのがわかってしまうぞ」

・・・あの仕事はまじめにやる指揮官のことだ、多分もうみんなに言っているだろう
コンコン

昇龍「うん？ どうぞ」

カチャ

大鳳「申し訳ございません、その話聞かせてもらいました」

・・・やべ!? めっちゃ指揮官に大好き勢やん!?

昇龍「た、大鳳さん!？」

曇天「……今の話、指揮官に言うのか？」

大鳳「いいえ、報告はしません。その代わり……」

その作戦に大鳳も参加させてください」

まじか!?

昇龍「それ本当!?!」

大鳳「はい、聞いたところ制空権の確保ができる正規空母が欲しいと」

曇天「しかし、いいのか?これは指揮官の顔に泥を塗るような行動だぞ?」

大鳳「構いません、もしばれてもあなたたちに指揮官様の弱みを握ったと嘘をつかれ脅されたつとえばいいので」

え・・・うそおん・・・

東海「ま、まあ制空権の問題は解消したのでいいとして・・・」

曇天「・・・あとはもし接近を許して砲雷撃戦になった場合だよな・・・」

そう、基本的にアウトレンジなら自分たちの対艦ミサイルで何とかできるが近づかれたらどうしようともない・・・

プリンツオイゲン「話は聞かせてもらったわ!」

そう、バン!!って効果音が聞こえそうなくらい派手に登場したのは・・・あの対抗演習をした艦隊だった

東海「いいのですか?」

山城「はい!あの時、あなたたちに助けしてくれたのに恩返しができなかったのですよう

やくできます!!」

みんな・・・

東海「皆さん・・・天喰のために・・・ありがとうございます!!・・・絶対に天喰を助けて皆で仲良く指揮官に怒られますよ!!」

全員「「「「「おお!!」」」」」」

天喰がいると思われる島の海域

23:59

曇天「東海、時間だ・・・」

東海「了解、大鳳さんお願いします・・・」

大鳳「了解しました・・・艦載機発艦準備・・・」

東海「月影・・・準備を・・・」

月影「了解・・・通信終了・・・潜水開始・・・」

昇龍「東海・・・ほかのKAN—SENも配置についた・・・」

0:00 ピッ

東海「・・・作戦開始!!」

して島に近づき天喰を探して救出、全速力で海域を離脱する

すぐくシンプルだが時間がないのこちらの援軍が期待できないため助けたらすぐ逃げるってことにした

東海「・・・よし、作戦どうりに攻撃を開始したな・・・みんな行くよ!!」

曇天「く!?さすがにこれくらい近づかれたらバレるか!!敵航空機接近中!!」

それは作戦を開始して数十分経ってあと少しで目標の島が見えてきたくらいだった
それまでは昇龍のおかげで難なく行けたが気づかれた・・・

東海「全艦!!対空戦闘用意!!」

曇天・昇龍「対空戦闘用意!!」

東海「大鳳!!今からこの艦隊から50kmはミサイル圏内とするので注意を!!」

大鳳「了解しました!!全機発艦!!」

曇天・昇龍 「曇天：SM-2（昇龍：シースパロー）、発射!!」
こうして敵との交戦に入った

東海 「ライダー隊、発艦!! それと同時に「キヤスター隊」出撃!! 艦隊の対潜圏内から外にいる敵潜水艦を見つけて撃破せよ!!」

今は天喰がないのでライダー隊の一部隊を臨時偵察部隊にして偵察に行かせる

あと、SH-70Jで編成させたキヤスター隊は今回はヘルファイヤを装備させずに全て対潜用短距離魚雷にしている

東海 「いた! 曇天! 艦隊から2時の方向に敵艦載機を発艦させたとされる空母艦隊を発見!!」

曇天 「了解!! トマホーク発射!!」

ばしゅううう!!

本当は敵の数だけ撃ちたいが時間がないので空母だけを狙ってあとは放置する

曇天 「弾着まで5!、4!、3!、2!、!!、今!」

東海 「空母撃沈を確認!! 早く島に行くぞ!!」

こうして何回か敵艦隊と航空隊に当たったけど大鳳の艦載機とかみんなのスキルのおかげで少し傷を負ったがなんとか島に到着し・・・

東海 「いた!! オブサーバー!!」

オブサーバー「あら？意外と早くこれたのね？」

大鳳「あなた!!私の天喰をどこにやったの!!」

オブサーバー「さあね?でもさすがに一对十はキツイわね・・・ここは戦略的撤退をするべきね・・・」

曇天「あ、待て!!」

そのときだった・・・

ビー!!ビー!!ビー!!

曇天「な!?ミサイル警告音!?なんだ(ドカアアアアア!!・・・うわあ!?)」

昇龍「曇天!!(ビー!!ビー!!ビー!!)・・・くそ!!シースパロー発射!!」

・・・セイレーンもミサイル技術を持っていたのか!?でもあいつらが持っているのはレーザー砲を主力とした武装で対艦ミサイルを使うなんて一回もなかったのに!?まさか、内通者!?

オブサーバー「あ、ちなみに内通者なんていないわよ?そうそう、天喰ならそこにい

るわよ?」

そう言われ振り返ると天喰がいた

大鳳「天喰!! 無事だったんですね!! 天喰?」

天喰? 「.」

プリンツオイゲン「. 危ない!!」

バシユ!!

ドカアアアアアア!!

プリンツオイゲン「きやあ!」

そこには弓を引き「キャット隊」をだしてプリンツオイゲンを攻撃したのであった:

東海「天喰!?! なにを!?! はあ!?!」

そこにはいつもより全体的に黒くて肌が青白く、目が黄色に輝いている天喰がい

た.

オブサーバー「あとは頼んだわよ?

私の天喰?

いえ……

ブレイカー〈破壊者〉？

大鳳「……え？」

ブレイカー（天喰）「……はい……オブサーバー様」

第三章 救い

h a t r e d ・ s i n

一方囿となっている月影

月影（・・・少しやりすぎたな・・・もう、魚雷もUGM-84（潜水艦発射型ハーブーン）も持っている分全部撃ってしまったしそれに周りは敵駆逐艦や巡洋艦が俺を血眼で探してて動けんな・・・）

そう、今月影がいる水上では敵が仇を!!つと言わんばかりに対潜と爆雷を準備して月影を探していた

すると・・・

ドコーン!!

ドコーン!!

月影（うん？爆発音？でもまだこっちの位置はわかられていないはず・・・）

「月影お兄ーちゃんー!!」

月影（は！この天使のようなボイスは!!）

ザパア

月影「・・・なんでお前らも？」

東海「なんで・・・天喰・・・」

ブレイカー（天喰）「・・・デルタ隊処分開始」

セイレーン化した天喰は弓を引き艦載機を放った・・・

東海「な!?ライダー隊!!迎撃!!」

こちらはライダー隊を出す・・・

ドカーン!!

ドカーン!!

くそ！さすがに互角くらいか!!ライダー隊のF1135JBはステルス機だけど数が
少なくあつちはマルチロール機だけど数が多い!!

しかし・・・

ビー!ビー!ビー!

なに!?! ミサイル警告音!?! どこから!?!

すると、海面スレスレを天喰のキャット隊が接近しハーブーンを発射してきた

東海「くそ!! 全艦、対空ミサイル発射!! それと同時にRAM・CIWSの対空を開始して!!」

ばしゅううう!!

ブオオオオオオオ!!

はあ! はあ! なんとか凌げているけど数が多い!!

でも、それで終わりではなかった・・・

ブオオオオオオオオオ!!

睦月「如月ちゃん!! 危ない!!」

如月「きやあ!?! い、痛いよーう!!」

あ、あれって!?!

東海「天喰所属のボルト隊!?! こっちが本命か!!」

セイレーン化した天喰はA-10Cで編成された「ボルト隊」を出してきた・・・

キャット隊のハーブーンに集中させてボルト隊の無誘導爆弾で来るとは!?!

大鳳の艦載機はゼア隊と交戦しててほぼ全滅している・・・

こっちだつて攻撃したいけど!!

プリンツオイゲン「曇天!!なんでこっちからはミサイル攻撃をしないのよ!!」

曇天「・・・無理なんだ」

プリンツオイゲン「・・・へ?」

曇天「アイツからIFF(敵味方識別信号)で味方の反応が出るから撃てないんだ!!」

そう、どういうわけかあつちの艦載機もセイレーン化しても味方である信号を出し続けていながらライダー隊のミサイルも曇天たちの対空・対艦ミサイルが撃てないのである・・・

もう、こちらの攻撃はオイゲンたちの実弾装備したKAN—SENだけになってしまった

味方にいたら心強いけど敵にいたら厄介だな・・・それにオイゲンたちも砲撃が天喰に届いてなくて取り巻きの量産型と人型に妨害されて動いていない!!

その時・・・

バーン!!

昇龍「え!?A—10の一機が落ちた!」

??「い、意外と当たるものなのね・・・」

プリンツオイゲン「え、姉さん!？」

アドミラル・ヒツパー「助けに来たわよ!! オイゲン!! (・・・本当は適当に撃って当たったなんて言えないわ・・・)・・・取り合えず一端本部に撤退するわよ!!」

大鳳「・・・天喰を見捨てる気!？」

月影「・・・違うぞ」

昇龍「うお!? 月影無事だった!？」

月影「うん、俺のマイエンジェル(ユニコーン)が援護してくれた・・・えつと・・・指揮官が

指揮官「あ、やっぱり助けに行った? つしや!! これで天喰救出の口実ができたぞ!! 全員、海上自衛隊の援護に行くぞ!!」

・・・だつてさ」

あ、やっぱり指揮官も助けたかったんだな・・・
プルプル

指揮官「もしもーし!!東海!今そっちの状況はどうなってる!」

無線機からその本人の声が聞こえた

東海「・・・すみません指揮官助かりました・・・」

指揮官「よかった・・・無事なんだな・・・なに、島にいるセイレーンの数を見たけどとても海上自衛隊と多分スカウトした数隻のKAN—SENじゃいけないと思ってたからな!!」

・・・やっぱこの人には敵わないな

東海「しかし指揮官、一つ問題ができた・・・」

指揮官「・・・どうした!」

東海「・・・天喰がセイレーンにされて現在、俺たちは撤退しているけど尚も攻撃してくる・・・」

指揮官「・・・天喰がセイレーンに!」

東海「・・・ああ、多分敵の親玉に洗脳か改造されたと思う・・・」

指揮官「・・・了解、把握した急いでその海域から離脱して!!」

・・・そうしたいけど!!天喰の攻撃が激しすぎてとてもだけど離してはくれないんだ

東海「ナイス!!・・・でもリバティたちは？」

リバティ「私とジャステイスは基地から全速力で向かっているけど間に合わなさそう!!」

東海「了解した・・・全艦!!一端本部に戻って体制を立て直すよ!!ここで沈んだら元も子もない!!」

全KAN—SEN「了解!!」

大鳳「・・・了解・・・天喰!!絶対に迎えに行くので待っていてくださいよ!!」

天喰は大鳳と一緒に居るべきです!!あんなセイレーンが言う事に聞かせれるように洗脳なんて、うらやm・・・許しません!!

ブレイカー（天喰）「……申し訳ございません、オブサーバー様……敵を逃してしまいました」

オブサーバー「ふふ♪いいのよ？私のブレイカー？また、あとでやってほしいことがあるから？」

ナデナデ

ブレイカー（天喰）「……はい」

本部に戻った東海達は元帥たちのいる会議室に呼ばれた

元帥「……なるほど、了解した……まさか彼がセイレーンに堕ちるとは……」

「セイレーンはKAN—SENを操る技術を持っていたのか!？」

「しかし、彼が裏切った可能性があるぞ!？」

「この際だ!!あいつを沈めてしまおう!!」

「だが、操られているなら解放ができるはずだ!!貴重な戦力を失うことはできない……」

部屋の中では救出に出たKA—SENと指揮官がアルバード元帥の前で立っていて近くに幹部らしき人たちがいた

東海「・・・申し訳ございません、勝手に行動をして」

元帥「いや、仲間を思つて助けたい気持ちがあつてのことなら私だつてする・・・とりあえず、そのことは置いといて・・・彼にも聞いたがああ、あの緋色のメンタルキューブは何なんだ？」

海上自衛隊「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

元帥「・・・やはり、彼も言つていたが知らないほうがいいと語つていたから無理もないd「いいえ、言いましよう・・・」・・・なんと!!」

曇天「いいののか？東海？やっぱり教えないほうが・・・」

東海「いいいさ・・・それに天喰も持つているそのキューブの危険性もわかるはずです・・・」

元帥「・・・確かに彼も危険だとは言つていたが・・・具体的には？」

・・・ここで言つたほうがもしこの人たちがあのキューブを手に入れても捨てるだろう・・・

東海「・・・指揮官、一つ質問をするが哨戒から天喰が帰つてくるたびに出ている割には燃料の消費が少ないと思つてないか？」

指揮官「……ああ、なんかやたらと少ないな？　って思っていたけどあれって原子力空母だからなのか？」

東海「……まあ、大体正解だ……天喰の原子力空母は航続距離はほぼ無限で燃料は核っていうのを使っているんだ……」

「航続距離がほぼ無限!?　すごい!?!」

「しかし、かくとはいいたくないんだ?」

「だが、航続距離が無敵なら脅威になるぞ!!沈めるべきだ!!」

元帥「……ふむ、しかしなぜそれを今?」

東海「……だからこそ沈めたら危険なんだ……」

元帥「……危険?」

東海「……原子力空母の原子力っていうのは核をエネルギーに換えて動いているんだ……核は少しでもとつもないエネルギーを出しているんだ……もし、もし核っていう殻が破けて中の莫大なエネルギーが出たらどうなると思う?」

元帥「……どうなるんだ?」

東海「爆発するんだ……核っていうのはとつもないエネルギーを放っていてその威力はこの世界のどの爆弾よりも強力でもし天喰を沈めたら地図からあの海域の名前が消えるほど……つまり……天喰は彼自身が特大な爆弾でもあるのです……」

元帥「なら、爆発しても被害がない場所に誘導して爆発すればいいのでは？」

曇天「つていうわけにもいかないんだ・・・核つていうのは放射線つていう目には見えない光線みたいなのが放っているから・・・まあ、近隣住民ができるだけ離れば被害はないが放射線は人体にとつてもなく有害なんだ・・・」

東海「この中でKAN—SENに乗せようとか兵器に転用しようつと思つている人がいるかもしれないけどやめたほうがいい、技術的にも無理でKAN—SENは少しの間ならいけると思うけど出たらもうそのKAN—SENも兵器も処分しないといけないんだ・・・」

・・・これでこの世界で兵器にしようつて思つた人がいなくなるはずだ・・・

東海「・・・なのでここにいる皆さんは約束してくださいあのキューブは絶対に使わないつて・・・」

元帥「・・・わかつた、今ここでドナルド・アルバードの名に懸けてその技術並びに赤いキューブの使用を禁ずることを誓おう・・・」

東海「・・・ありがとうございます」

元帥「・・・よし、しかし同時に問題ができてしまったな・・・」

・・・そう、それはどうやって天喰を止めるかだ・・・

あの時はオブサーバーが何故持っていたのかわからないがEMPを使つて足止めを

してきたが俺たちでさえあれは持っていない
沈めるわけにもいかないし・・・

指揮官「・・・いいえ、一つだけなら可能性がります」

全員「「「「「ええええ!」「「「「「」」」」」」」」

・・・え、ドコト? 指揮官?

指揮官「実はアーセナルバードたちがうちの基地に出てきて天喰に案内を任せた後
だったんです・・・」

回想シーン

指揮官「・・・よし、天喰はいったな。ちよつと明石になにか知らないか聞きに行く
か・・・」

建造所

明石「にゅふふふ……さつきは初めて見たKAN—SENに会ってびっくりしたニヤが……まあ、東海を拷問……じゃなくて聞けばいいニヤ……この明石特性対KAN—SE用超強力睡眠剤を東海にもれば何か聞けるかもしれないニヤ……最悪、ずつと眠つてしまいかもしれニヤいが……東海なら（多分）大丈夫いいニヤ」

指揮官「……ほう、大丈夫か」

明石「にゅふふふ、大丈夫……つて指揮官!?!いつの間にかいたニヤ（バツ!!）……あ!?!」

指揮官「さくして明石君？これは何に使おうとしたのかな？」ニコニコ

明石「にやくあ……えくと……」ダラダラ

指揮官「（プルプル）……あ、天喰？ちよつと用事できたから本当は案内終わつたら二人の戦力確認してから歓迎会をしたかったけどしばらく自由行動をしていいよつて言つといて!!そんじゃ!!（ピツ）」

明石（そくと）

指揮官「……さて、明石？こつそり逃げようとも逃がさないよ？」

明石「（ビクツ!!）……ニヤ、にやああああ……」ビクビク

指揮官「ちよつと平和的にO☆HA☆NA☆SIしようか？」につこり
回想終了

指揮官「・・・つてなことがあつてその明石が東海のいたずらに作った睡眠剤を使つて天喰を無力化ができるかもしれません」

いや、何やつとるん明石・・・

元帥「わ、わかつた・・・ならそれで行くか・・・ちなみに何個睡眠剤はある？」

指揮官「二個です」

元帥「よし、なら陸軍から一流の狙撃手を呼んで麻酔弾にして遠距離から隠れ狙撃をしてもらい無力化をしよう・・・一応、後の一つは万が一無力化して本部に運んでいる途中で起きないように持つといてくれ」

全員「「「「了解!!」」」」」

そして、会議室を出たが・・・

東海「・・・すまない、指揮官と皆・・・少し工房に来てくれないか・・・」

指揮官「?わかつた？」

建造所の一角にある工房、そこにて・・・

明石「ん?ニヤ!!指揮官に東海達!!どうしたニヤ?」

指揮官「……ああ、そうそう明石……お前の特性睡眠剤が天喰無力化作戦に使われるようになった」

明石「ニヤ!? ……まさか、あれが使われるニヤんて……」

明石に今回の作戦を説明した……

明石「ニヤるほど……しかし、おそらく失敗したら東海達がやるのじゃ? 聞いたところ

ころ天喰の艦載機のミサイルを対処するだけで精いっぱいって聞いたニヤ?」

東海「ああ、それについて明石の腕を見込んで頼みがある」

明石「ニヤ? 明石の技術力にかニヤ?」

東海「……指揮官、僕たちの基地と本部に金の改造設計図と資金と資材はどれくら

いありますか?」

指揮官「……えっと……確か、空母が結構あつて巡洋艦と駆逐艦がうちには少な

いけど本部と合わせばそれなりにあると思うよ?」

東海「……よし、多分足りるかな……明石……」

明石「な、なんニヤ……顔を近づけないでニヤ……」

東海「……自分が今もっている技術を全部渡す……その代わり

．．．即席のいい、俺たちの改造を頼んでいいか？」

．．．俺はだれだ？

．．．ここはどこだ？

そこは空が燃えるように赤くなり海が血のようになった場所だった．．．
そこにはかつての仲間がいた

（申し訳ございませぬ、相棒．．．先に逝きます．．．）

（おう、旗艦さんや．．．お前は沈むんじゃねえぞ．．．）

(君には守るべきものがある!!ここは僕に任せて先に行け!!)

(・・・囿はやろう・・・なに、アメリカに一番呼ばれたくないって言われた潜水艦だ・・・生きて戻っていきさ・・・)

・・・しかしその声の主は今日の前で血だらけで浮かんでいた
そして・・・

(・・・○○・・・あなたが無事でよかつた・・・ごめんなさい・・・約束を破つて・・・)
髪が黒く、瞳が赤い女性が目の前で爆発して倒れていった・・・

・・・なんでだろう・・・俺はこの女性に覚えがないのに何でとても愛おしく思えて・・・
「・・・泣いてるんだ?」

?? 「悲しいでしょう? 大切な人を守れなくて悔しいでしょう?」

・・・だれ?

?? 「こんなことになったのもすべて戦争っていう物のせいなのよ?」

・・・戦争のせい・・・どうすればなくなるの?

?? 「ふふ、それは原因となりものを壊せばいいのよ?」

・・・壊せばあの人たちも助かるの?

?? 「ええ、全部破壊すればいいのよ? ブレイカー?」

・・・ぶれいかー? それが俺の名前?

?? 「ええ、そうよ。私のことはオブサーバーって呼びなさい♪」

・・・はい、オブサーバー様

目が覚める・・・

そこには自分の主であるオブサーバー様が敵の兵器に囲まれていた・・・

助けようと背後から攻撃をした

ブレイカー（天喰）「・・・デルタ隊処分開始」

こうして敵の空母と戦闘を始めたがなぜか敵の艦隊に見覚えがあった

そんなはずはない・・・自分はオブサーバー様に作られたセイレーンなんだから・・・

・・・敵が撤退を開始して追撃しようとする自分の召喚した艦載機に乗り追いかけたら周

りに謎の光がでし追撃に失敗してしまった・・・

そして今、とある作戦を開始しようとした

ブレイカー（天喰）（自分の使命はこの世界を平和にすること・・・だから・・・戦争

の武器になるこの世界の兵器と戦争を作る元凶の人類を破壊（滅亡）させる・・・）

・・・それが自分の使命・・・

そして周りにはオブサーバー様が使っていていいといった大量の量産型と人型セイレーンがいる

ブレイカー（天喰）「・・・全艦に告ぐ、ただいまより侵攻を再開・・・目標・・・

アズールレーン本部」

この作戦が成功すればこの世界から戦争の原因が消えて平和になれる・・・

r e p e n t a n c e

ブー！ブー！ブー！

元帥「・・・どうした!？」

通信士「セイレーンが集結している島の監視員からの報告!!セイレーンの艦隊が突如本部に向けて侵攻を開始!!」

元帥「なに!？」

指揮官「申し訳ございません、遅れました。何があつたのですか？」

元帥「セイレーンが突然進撃を再開したらしい」

指揮官「・・・旗艦は？」

通信士「は、はい!! たつた今監視員から先頭に弓を持った男性がいます!」

指揮官「・・・やっぱり来たか、天喰!!」

放送が鳴り、KAN—SENたちが会議室に集められて指揮官から報告があつた

指揮官「・・・現在、セイレーン化した天喰率いるセイレーンの残存艦隊が本部の侵

攻を再開した……」

ざわざわ

エンタープライズ「……ほかの海上自衛隊は？」

指揮官「今ちよつとお取込み中でこれない」

そう、現在海上自衛隊は明石と技術担当の東海と一緒に改造案を考えている

指揮官「よし、敵の現状を説明するぞ……敵、天喰は先ほど一時間前に残存セイレーンを率いて侵攻中……しかし、ここからが重要だ……彼に攻撃はするが殺してはダメだ」

時雨「それってどういうこと？」

指揮官「……これはさつき海上自衛隊が隠していた秘密でくわしいことは省くが天喰自身が超巨大な爆弾で倒してしまつたらそのあたりが消えて最悪本部まで巻き込んでしまつてことだ」

ザワザワ

如月「そ、それって勝ち目がないんじゃない……」

指揮官「ああ、だから前に明石がふざけて作つた睡眠剤を陸軍の狙撃手が天喰を狙つて投与することになった。なのでみんなの任務は狙撃手が天喰を狙いやすいようにできる限りその場にとどまらせておくことだ！」

「プリンスオブウェールズ」……つまり狙撃手が狙えられるまでの時間稼ぎという事か……」

ウォースパイト「了解したわ……」

指揮官「……よし、皆理解したな？最後に一つ、みんな無事に帰ってきてきてそれこそこの作戦は完全に成功だ!!天喰を連れて帰ってきてみんなであいつを殴るぞ!!」

全員「「「「「おとおおお!!」「「「「「」

……なぜだ

……なんであの艦隊のことを気になっているんだ？

……自分はオブサーバー様に作られた存在

……オブサーバー様と仲間のピュリファイヤー様とあと何体かの人型以外は知らない

いはずなのに

・・・特にあの黒髪の和服をきた女性

・・・なんであの人だけは頭から離れないんだ？

・・・なんであの人だけは絶対に死なせないって思ってしまったんだ？

・・・この作戦が終わったらオブサーバー様にキューブの点検をお願いしよう・・・

その時・・・

バチツ!!

ブレイカー（天喰）「ウツツ!!」

（相棒！朝練行きますか？）

（いや、だから兄貴じゃねえって!!）

（天喰!!ちよつとこの変態をどうかしててください!!）

（・・・なあ天喰、お前もロ・・・小さい子を愛でたいクラブに入らんか？）

（・・・ふう天喰、執務手伝ってくれてありがとう・・・今夜、飲みにも行かんか？）

（ニヤ々天喰々天喰の艦載機・・・少しでいいから分解させてニヤ々？）

（天喰!!天喰!!また対抗演習で天喰たちと戦おうよ!!・・・あ、昇龍の対レーダー無効化

装置は無しね!!)

(天喰!!)

(天喰い〜?)

(おーい!!天喰!!)

・・・天喰??・・・それが俺の名前なのか?

・・・でも、自分はブレイカーというはず・・・

そして・・・

??(・・・天喰・・・今度、一緒にお食事でもよろしいでしょうか?)

・・・また、あの黒髪の女性だ

・・・やっぱり、自分はこの女性を覚えている

・・・なんでだ?自分の赤いキューブの影響か?しかし、オブサーバー様はそのキュー

ブさえ壊さなければ強力な代物だっていつていた

・・・自分が覚えていないだけかもしれないが、恐らくさつきフラッシュバックで見

た女性や他の人達もあつたことがあるはずだ・・・

・・・それならなぜセイレーンの自分がこんなにも人間と仲良く話しているのか?

・・・まあいい、自分の使命は全人類とKAN—SENをすべて破壊しこの世界を平

和にすることだ、それは変わらない

ブレイカー（天喰）「……全艦、対空対潜を厳となせ……」

セイレーン達「「「「「……」」」」」

しかしなぜだろう少しくらい反応をしてほしい……

ブレイカー（天喰）「……偵察機、発進」

弓を引き偵察機を飛ばした……

ぐおおおおおん!!

上空を天喰が持つていた偵察機が通りすぎていく

エンタープライズ「……来たか」

水平線のかなたから黒い点が少しずつ見えてきた……

……仲間はこの武器を向けるのは本望ではないが今やらなければこちらがやられる。

助けるが今は天喰を味方だとは思わずに敵としてやるしかない

エンタープライズ「……エンタープライズ、エンゲージ」

天喰の発艦のように自分も弓を引き艦載機を発艦させた

天喰の詳細は前に東海に聞いたのである程度の対処ができる

……しかし

ドカアアアン!!ドカアアアン!!

発艦した瞬間、艦載機が爆発し近くを高速で飛行体がすれ違っていく

エンタープライズ（あれは天喰のゼア隊!!・・・東海が・・・

東海「天喰のゼア隊は制空ステルス戦闘機で水面すれすれで奇襲攻撃をするでしょう・・・」

・・・って言うていたが本当に来るとわな)

しかし、ゼア隊は制空権の獲得を目的とした部隊、現在上空では味方機がほとんどいなくなり制空権が確保できた状態・・・なら!!

エンタープライズ「全員、対空に集中しろ!!対艦ミサイルがくるぞ!!」

そういつているうちに

エンタープライズ「・・・来た!!」

上空をI-0機のキャット隊がやってき対艦ミサイルを放つ

エンタープライズ「対空砲火、開始!!」

全KAN—SENが機銃、主砲や副砲まで使い空に向けて放つ

ドン!!

ドキュウウン・・・

ドカアアン!!

キャット隊が放つた一機二発、合計二十発がきたがこちらは主砲までも打ち落とすの
に使っていて陣形を輪形陣でできるだけ隣とは近づいて敵本隊を目指す

打ち落としこそねたミサイルはシールド系スキル持ちのKAN—SENを二人以上
で確実に防ぐ

エンタープライズ「・・・よし、今だ!!」

キャット隊が再び攻撃態勢に入る前に全速力で移動する

それに海上自衛隊が前にいた世界は接近戦を考えていないので近づく!!

こうして、亀の甲羅戦法であまり被害は受けずに本隊に近づけたものはいいが・・・
エンタープライズ「・・・くそ!! どうすれば!？」

敵は天喰を中心にして周りを前の作戦で見た超大型艦三隻を盾にして攻撃をしてくる。制空権が取ればあの超大型艦はあまり脅威ではないが今となれば目標の天喰に攻撃できずに膠着状態になっている・・・

エンタープライズ「・・・空を制する者は戦場を制するつてよく言ったものだな!!」
こちらにも負けじと何隻かは隙をみて攻撃しているが時間はかかりそうだし

しかし・・・

ブオオオオオン!!

エンタープライズ「・・・やはりいるのか!!」

天喰の艦載機に混ざってセイレーンの艦載機もやってくる

そうするとさっきまで隙を見て攻撃していたKAN—SENの数は減ってきて一方的に防戦状態になった

ホーネット「・・・しまった!？」

エンタープライズ「ホーネット!!」

防戦状態になってしまったため被弾するKAN—SENが増えてきた・・・

エンタープライズ「大丈夫か、ホーネット!？」

ホーネット「ううう……ごめん姉さん、被弾しちゃった……」

エンタープライズ「……東海が言ってたが天喰は味方だと心強いが敵だと脅威になるな……」

そして……

エンタープライズ「くそ!! キャット隊が帰ってきた!! 対空戦闘用意!!」

ホーネット「……!!、姉さんあれ!!」

エンタープライズ「ボルト隊!? 飽和攻撃か!？」

一方をキャット隊で攻撃を固め、反対側からボルト隊が機関砲を撃ちながら爆弾の投下の開始してうち一発が傷ついたホーネットの命中ルートに入っていた

??「危ない!!」

そう身を挺して守ってくれたのは

ホーネット「大鳳!? なんで!？」

大鳳「大鳳は装甲空母です!! 大鳳は装甲が重いのでホーネットは後ろに下がって!!」

ホーネット「あ、ありがとう……」

大鳳がかばっているうちにホーネットは下がれたが

エンタープライズ「大鳳!! 魚雷だ!!」

大鳳「こんな時に!？」

ホーネットを庇っていたのでその場から動かなかったからセイレーンの雷撃機の恰好の的だ

雷撃機が大鳳に進行方向を合わせ投下しようとした

その瞬間・・・

曇天「伏せろ!!大鳳!!」

キイイイイイイイイ!!

大鳳の頭上を赤い光線が通って行つた

・・・そこに立っていたのは

持っていた銃と装備が近未来的になりそこからレーザーを放っている曇天と三連装砲にしては威力のありすぎる艦砲を放ちながら格闘をしている東海と謎の電撃を放ちながら沈めていく月影、そして急に消えて現れて奇襲を続けている昇龍がいた

大鳳「曇天!!皆!!」

曇天「・・・よく耐えたな!!さあ、反撃の時間だ!!」

東海「よし、三連装砲型レールガン「パラディン」発射!!」

バリバリ!!バシユウウウウ!!

エンタープライズ「たった一回の砲撃で三隻の戦艦級人型セイレーンを一気に!!」

東海「エンタープライズさん!!けが人は!？」

エンタープライズ「こっちではホーネットと大鳳が被弾した!!」

東海「了解!!修理ドローン達!!行ってください!!」

ブイイイイイイイイ!!

ホーネット「え!?!ナニコレ!？」

ブイイイイイイ

大鳳「・・・すごい、けがをした所が治っていきます」

東海「・・・うし!!治療完了!!」

エンタープライズ「あ、ありがとう・・・他の場所に行ってくれ」

東海「了解した!!」

コロンビア「姉ちゃん!!どうしよう!?天喰の艦載機が邪魔でセイレーンの艦載機が艦隊の内側に入り込み始めた!!」

クリーブランド「わかったけど!少しでも油断したら対艦ミサイルが来るからそっちも!!」

モントピア「クリーブランド姉ちゃん!!そんなこと言ったら対艦ミサイルが来た!!」

クリーブランド「ええ!?もう!?」

ミサイルが来るが・・・

曇天「どつせええええええい!!」

キイイイイイイイ!!

クリーブランド「あ!曇天!!その姿って!？」

曇天「急造だが改造してきた!!・・・ほんじゃ、もうひと頑張り行くぞ!!」
クリーブランド「ああ!!対空戦闘用意!!」

曇天「対艦対空両用レーザー砲「カリバーン」照射開始!!S M—2発射!!」

ドン!!

ドン!

キイイイイイイイイ!!

コロンビア「うわあ・・・綺麗・・・」

モントピア「でもすごい発射音だね・・・」

ウォースパイト「なぜかしら、セイレーンの動きが悪くなっている気がするわ・・・」
アークロイヤル「ああ、空は変わらないままだが海にいるヤツだけ悪なっている・・・」
ザパア

月影「・・・それは俺だ」

アークロイヤル「ぬ？そんなのか同志月影？」

月影「・・・ここはどこぞの社会主義国かよ・・・そうだよ、オブサーバーが使ってもしかしてと思つて東海と明石が作った潜水艦用EMP発生装置「電磁波2型」だが、名前の割には思いのほか効いているぽいな・・・」

ウオースパイト「なら、今が倒すチャンスね!!」ダツ!!

月影「・・・あ、ちなみに」

バリイ!!

ウオースパイト「きやあ!?(びりびり)」

月影「・・・味方のそばだと感電するから行くなつて・・・ていう前に行きおつた・・・」

東海と合流した瞬間、劣勢が一気に優勢になりアツという前に

東海「・・・たどり着きましたよ、天喰」

ブレイカー(天喰)「・・・敵の接近を確認」

曇天「・・・やっぱり、姿も気配もまんま別人だな」

ブレイカー(天喰)「・・・全機、ウエポンズフリー殲滅せよ」

天喰が艦載機を発艦させようとするが・・・

東海「ライダー隊!! 迎撃!!」

ライダー隊と天喰のデルタ隊が交戦しようとするが・・・

ブレイカー(天喰)「・・・なに!?!」

デルタ隊のほう撃墜される数が多いのだ

高速で打ち落とし離脱していったのは・・・

天喰「・・・!?! S u | 5 7 !?!」

東海の艦載機は F | 3 5 J B から S u | 5 7 J に変更され・・・

ドドドドド!!

ブレイカー(天喰)「．．．く!?!」

攻撃してきたのは．．．こちらも改造されたときについてきたVTOL機「SB-3B」が対艦ミサイルを発射している

その時．．．

昇龍「ここ!!」

ブレイカー(天喰)「!?!」

何も無い空間から昇龍が現れて攻撃をしてきた

ブレイカー(天喰)「．．．敵を発見、攻撃を．．．!?!」

そしてそのまま昇龍は陽炎のごとく消えていった

ブレイカー(天喰)「．．．空間転移!?!」

ドカアアン!!

ブレイカー(天喰)「．．．く!?!」

東海「ふう．．．ようやく攻撃が当たりましたね。しかし、セイレーン化したなのか装甲が硬くなってますね」

ブレイカー(天喰)「．．．前提を置き替え結論を予測．．．完了」

東海「．．．さあ、天喰。今度こそ助けますよ!!」

こうして、
本当の決着をつけるべく戦闘を開始した・・・

j u d g m e n t

ブレイカー（天喰）「・・・殲滅開始」

東海「させるか!!ライダー隊!!交戦許可!!行ってこい!!」

東海達と天喰の間では激しい攻防戦が行われていた・・・

東海はS u r 57に変わったとしても搭載量は変わらないので数の差で負けるが・・・
キイイイイイイイイ!!

曇天のレーザー砲と対空ミサイルがいい感じに援護をしているので五分五分の状態であつたが

昇龍「・・・はあ!」

ブレイカー（天喰）「・・・ぬう!!」

昇龍が透明化して天喰の死角から90式対艦誘導弾を放ちながらヒットアンドウエイ戦法で攻撃をしていく

ブレイカー（天喰）「・・・逃がさない!!」

透明化中の昇龍を刀を抜き切ろうとするが

月影（・・・えい）

バチッ!!

ブレイカー(天喰)「う!?!」

月影のEMPで動きを妨害する・・・

ホーネット「す、すごい。私たちでさえ近づくことが難しかったのに・・・」

エンタープライズ「・・・ああ、・・・なら、全員!!今のうちに他のセイレーンを倒し

て東海達のところに行かせるな!!」

全員「「「「了解!!」」」」

そのころ・・・東海が戦っている場所から近くにある孤島

狙撃手「・・・よし、ターゲット確認」

陸軍から選ばれた狙撃手がセイレーン化した天喰に標準を合わせて狙っていた・・・

狙撃手「俺も長い間、陸軍に身を置いていたが・・・KAN—SENを狙うなんて初

めでだぞ・・・」

そういいながらも今回の作戦で専用に開発された(元:対物)ライフルを構えて狙い

そして・・・

バアアアアアーン!!

轟音がなり明石特性の睡眠剤が放たれた・・・
そして、そのまま天喰の首元に吸い込まれるかのように飛び・・・

たああああああん!!

・・・命中した

あれから何十回かの攻防戦が行われ・・・

ブレイカー(天喰)「はあ!!」

昇龍「・・・うわあ!?!」

昇龍の奇襲攻撃が読まれ初めて対処されるようになり

曇天「くそ!!」

曇天のほうはセイレーンの艦載機を囮にし、まだ曇天のスキルのシールドで守られているが当たりだした・・・

容赦ないな・・・

セイレーン化しているからかわからないけど、前の天喰より冷酷なやり方で攻めてきた

多分だけど、元の天喰の優しい部分を失くしたら最強かも・・・

東海「・・・天喰・・・いや、ブレイカー!? キミは何のために戦うのですか!？」

ブレイカー（天喰）「・・・自分の使命はオブサーバー様の命令に従うこととこの世界の兵器とそれを作る人間をすべて破壊することだ・・・」

東海「・・・確かに人間が滅べば戦争がなくなる・・・だけど!!・・・もし、ブレイカーが勝つて人間を滅ぼせたとしよう!!・・・だが、平和になって喜ぶんだ!？」

ブレイカー（天喰）「ッ!？」

天喰の動きが一瞬止まった

ブレイカー（天喰）（・・・確かにこの世界が平和になったら自分が見たあの夢に出た人たちが死なずに済む・・・だけど、その人たちも人間だ・・・あれ?俺は何のために戦っているんだ?）」

その時・・・

たああああああん!!

よし!!天喰の首元に睡眠剤が命中した!!

ブレイカー（天喰）「・・・しまっ（くらっ）」

睡眠剤が首から注入され動きが鈍くなり無力化されるか思ったが・・・

ブレイカー（天喰）「ふん!!」

東海「なに!？」

なんとブレイカー（天喰）はあまり効かずに戦闘を続けた

曇天「おい! どういうことだよ明石!?! まったく効いてないぞ!？」

そう、全員に配られた無線に問いかける・・・

明石（ザザツ）「ニャ!! 東海達!! たった今、天喰をスキャンしてわかったにやが、天喰の体内に二つメンタルキューブを確認したニャ!! 多分、そのせいで睡眠剤があまり効かないニャ!!」

東海「・・・恐らく、赤いメンタルキューブ!!・・・どうすれば効くようになりますか!？」

明石「一瞬でいいニャ!! 一瞬だけ油断させてその時に睡眠剤を注入すれば効くと思うニャ!!」

一瞬か・・・昇龍が適任そうだが・・・

昇龍「言つとくけど、天喰がこちらが攻撃する前に攻撃し始めているからもう効かないと思うよ」

現在は自分と曇天が空を相手している間に昇龍と月影だけが近づけている・・・

それに今の天喰は自分たちを殺すことしか考えていないので精神がちがちに固まっているだろう・・・

猫だましとか効かないだろうし・・・

大鳳「・・・それなら、大鳳に一つだけあります」

昇龍「お！大鳳さん!!どういう方法？」

大鳳「・・・無線で聞いてましたが一瞬だけでも油断させればいいのですね?・・・なら、大鳳を天喰の近くまで行かせてください!!」

東海「・・・よくわからないけど了解した、リバティ!!聞こえるか!!」

リバティ「こちら、リバティ!!どうしたの東海」

東海「えつと、今から大鳳を援護する。今から天喰に飽和攻撃で大鳳に攻撃させるな

!!
」

リバティ「了解!!行くよ!!ジャステイス!!」

ジャステイス「・・・わかったUAV発進」

東海「・・・頼みましたよ、大鳳・・・」

ブレイカー（天喰）「・・・身体の有害物質の除去完了・・・!!、多数の飛行体を確認」

空から大量のリバティたちが出したUAVが天喰に襲うが

ブレイカー（天喰）「・・・エンゲージ」

天喰の艦載機で対応されるが・・・

東海「いまだ!!」

ズドドドドド!!

ブレイカー（天喰）「・・・飽和攻撃か!?!」

周りから大量のミサイルや砲弾が来るが

ブレイカー（天喰）「・・・はあ!!」

ミサイルは戦艦を盾にして凌ぎ、砲弾は刀で切っていく

ブレイカー（天喰）「・・・!?!、砲弾は煙幕か!?!」

そして、煙幕が周りに広がりすっぽりと包まれその中から

東海「くらえ!!」

煙幕の中から東海がレールガンを構えながら迫ってきたが

スツ

東海「はあ!?!これを避けるって!?!」

昇龍「・・・もう、天喰はKAN—SENやめてませんか?」

・・・いた

東海「・・・でもまだまだ!!」

煙幕が晴れて周りにいたのは東海のVTOL機が囲っていてミサイルを打ってくる
が

・・・キン

音を鳴らすと迫っていたミサイルが爆発した

東海「いや、ミサイルを刀で切るって・・・」

曇天「・・・多分、赤いキューブが二つだからできるんじゃない?」

・・・今はなんとか防いでいるが何が目的だ？

そうすると東海が離れてレールガンを構えた・・・

ブレイカー（天喰）（くるか！）

東海がレールガン放つ

しかし、弾は来ないで風圧と音だけがきた

・・・なに？

東海「・・・残念ですが、弾は装填せずにチャージして放つただけです!!・・・行つてください!!大鳳!!」

そういわれ上を見上げると

・・・あの黒髪の女性が降ってきた

回避が間に合わない!!

大鳳「許してくださいね・・・天喰・・・」

そういわれ手を顔に添えられ・・・

ちゆ
♡

東海「…………え」

昇龍「…………あら、やだ」

月影「…………oh」

曇天「…………え、それ？」

…………自分の唇が黒髪の女性の唇でふさがれた
 ブレイカー（天喰）（……………）

…………今現在、大鳳は天喰に接物（キス）をしている

本当は指揮官様に初めてを捧げるつもりでしたがまさかここで使う羽目になると

わ・・・

・・・で、でも天喰になら別にいいかもしれませんね／／／／
しかし、なぜキスなのかつというと・・・

こんな緊迫した戦場で急に女からキスされて動揺しない男性なんかいませんもの♡
ブレイカー(天喰)「・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

天喰が動揺し隙が生じた

大鳳「もらいました!!(トス・・・)」

そして、天喰の胸にめがけて睡眠剤を投与した

ブレイカー(天喰)「う、あ、が!？」

天喰が苦しみだしそして倒れた・・・その瞬間・・・

天喰「・・・・・・・・・・・・・・・・た・・・い・・・ほ・・・う・・・?？」

ピュリファイヤー「あらー無力化されたね?おたくの天喰?」

オブサーバー「・・・まさか、それで来るなんて・・・私の予想では彼が沈められる
と思っただけ・・・」

ピュリファイヤー「それでどうする？あのキューブがあつちのほうにわたつてしま
うけど？」

オブサーバー「使われることはないでしょう・・・彼の仲間が危険性を説明したでしょ
う・・・それに・・・彼のアレ見てみたいしね♪」

ピッ

ピュリファイヤー「ん？今何したの？」

オブサーバー「なにつて・・・」

元の彼の記憶を編集して元に戻したのよ♪

ブレイカー（天喰）「・・・た・・・い・・・ほ・・・う・・・」

「？」

大鳳「天喰!?!戻りましたか?」

ブレイカー(天喰)「・・・俺は・・・なにを・・・」

ピッ

ブレイカー(天喰)「・・・なんd・・・う、うわあああああああああああああああ
ああ!」

大鳳「どうしたんですか!?!天喰!?!」

ブレイカー(天喰)「・・・東海・・・曇天・・・昇龍・・・月影・・・大鳳・・・み
んな・・・なんで」

東海「相棒!?!僕たちはここにいますよ!?!」

ブレイカー(天喰)「・・・返せ」

曇天「……え？」

ブレイカー（天喰）「死んでいった東海達を返せ!!」

東海「どうしたんですか!?! あいb（ドスツ!!）……ごふう!?!」

目の前で東海がいなくなったと思った瞬間……東海は血だらけで倒れていて近くには血まみれになった刀をもつ天喰がいた……

昇龍「東海!?! ……天喰、何を!?!」

ブレイカー（天喰）「はあ……はあ……はあ……はあ……殺す!!」
ドゴツ!!

昇龍「え、消え（ガツ!!）う! あ……が……」

昇龍が身構えた瞬間、天喰は高速で動き昇龍の首を掴み上げた
ビィィィィィィ!!

ブレイカー(天喰)「ちい!?!」

月影「・・・大丈夫!?!昇龍!?!」

昇龍「げほ!?!げほ!?!・・・助かったよ月影・・・」

曇天「しかし、どうしたんだ!?!天喰!?!」

オブサーバー「うふふ♪聞こえるかしら?海上自衛隊の皆さん?」

昇龍「オブサーバー!?!どこに!?!」

オブサーバー「あ、悪いけどこの放送は遠隔だから探しても意味ないよ?」

大鳳「セイレーン!!天喰に何をしたの!?!」

オブサーバー「なについて特にしてないわよ?・・・でも

彼の大切な人たちが君たちによって殺されたって、記憶の改ざんはしたわ♪」

大鳳「え、記憶の改ざん？・・・でも、大鳳たちの姿とかは!？」

オブサーバー「ああ、それも編集して存在は覚えているけど姿を忘れさせてあなたたちを殺そうとするってことにしたわ」

曇天「・・・なんつうことを」

オブサーバー「まさか、私の天喰が負けるとは予想しなかったけど新しいものが見れるわね・・・それじゃ、彼の本当の本気を味わいなさい？あ、私が離れて放送しているのは彼の巻き添えを食らいたくないからね♪それでは・・・(プチ)」

曇天「・・・天喰の本気？」

ブレイカー(天喰)「はあ。はあ・・・」

スキル発動
殺戮の鬼

・・・天喰の詳細が更新されました、確認しますか？

はい
いいえ

原子力空母【天喰】
レアリティ
測定不可能
スキル1

(あの頃なりの覚悟)

ユニオン・重桜の戦艦・正規空母の火力・航空値を20%上昇する

スキル2

(罪のまなざし)

敵のスピードを50%遅延する

スキル3

(殺戮の鬼)

東海・曇天・月影・昇龍が行動不能になった(天喰が認識した)ときのみ発動

敵の戦艦の砲撃・空母の航空攻撃・前衛の魚雷攻撃・敵の支援スキル(発動中でも)をすべて240秒間使用不可能にする、スピード・火力・回避率も60〜90%の割合で遅延

さらに天喰は240秒間、常時無敵になり、5秒に一回で特殊弾幕を確定で発動する
敵からデバフのスキルを受けているときは強制的に無効化する

しかし、240秒経過後回避地・航空値がゼロになり行動ができなくなる

天喰（暴走）「はあ、はあ、あああああああ!」（ドカアーン!!）

苦しみだした天喰は爆弾が起爆したが如く地面をけり曇天に切りかかった・・・

曇天「あぶねえ!?!（がきいいいいいん!!）」

迫ってくる刀を曇天が銃の腹で受けるが・・・

曇天「・・・なんだよこれえ!?!なんていう馬鹿力だよ!?!」

受けていくうちに地面が陥没し体制が崩れだし・・・

曇天「（ザシユ!!）・・・あ・・・」

曇天の銃が切断され肩から腰に掛けて切られてしまった・・・

月影「・・・曇天!?!・・・天喰!! 落ち着け!! EMP発動!!」

なるべく気絶させるつもりで天喰に張り付きEMPを展開させようとするが・・・

ごう!!

月影「・・・ぐふう!?!・・・なんで、展開されないんだ・・・（ドサツ）」

天喰（暴走）「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リバティ「二人とも!?!・・・くそ、行って!! フギン!! ムニン!!」

ジャステイス「・・・・・・・・PLSL発射!!」

アーセナルバードたちが援護するが・・・

リバティ「・・・え、何か投げて・・・(バキイイイイ!!) きゃああー!」

ジャステイス「・・・嘘でしょ・・・戦艦の残骸を投げて落としてくるなんて・・・」

こちら!!ジャステイス!!姉さんが落ちそうだから一回離脱する!!」

仕留めたのを確認し次にターゲットにしたのは・・・

大鳳「・・・・・・・・・・」

大鳳だった

昇龍「次は大鳳さんを!?・・・やめろ!!天喰!!」

そういい、透明化を発動して止めようとするが・・・

バシユ!!

昇龍「(ドスツ!!) あぐ?!」

透明化したが見破られ矢を放たれ肩に刺さったまま岩に刺さり宙づりになっ
た

それを確認しスキルの威圧か動けない大鳳に近寄り切ろうとした瞬間・・・

バリバリ!!バシユウウウウ!!

天喰（暴走）「……………!?!」

東海「ふう、ふう、ふう」

片膝で体制を保ちつつレールガンを放った東海がいたが弾は外し……

東海「ごほ!?!」

吐血して倒れてしまった……

東海（……………そうか、今の僕たちは急造で作られて無理やり装備とチューニングした状態……………だから、下手に損傷したらダメージもデカイ……………）

そう、思いつつも大鳳を切るべく歩み寄る天喰……

大鳳「……………なんですか……………天喰……………」

東海「や……………め……………ろ……………あ……………ま……………く……………」
い……………」

そして無常にもその刀が大鳳を……………切る……………

大鳳「っ!!」

ザシユウウウウウウウ!!

ポタポタ・・・

大鳳「……………え？切られていない？」
大鳳を切ろうとした刀は大鳳ではなく・・・

天喰「ごふう……………あぶな……………かつた……………」

天喰のキューブのある心臓に刺さっていた……

大鳳「天喰!?!なんで!?!」

天喰「よかった……君が無事で……(ドサツ)」

大鳳「天喰!?!天喰!?!」

血を吐きながら助けるべき大切な人は倒れていった……

A t o n e m e n t

それは天喰の救出作戦中に起こった・・・

とある監獄

「おい！150703番!!点呼の時間だぞ!!さっさとでろ!!」

シーン

「150703番!早く出てこい!!」

シーン

「まさか!?(パンツ!!)」

収容室の扉を開けたが・・・

「くそ!!脱獄だ!!」

看守が電話で報せる・・・

「緊急事態発生!!B級牢獄で脱走者を一名確認!!番号150703番!!名前は・・・

豚田 太郎だ!!」

不審な雲が立ち始めたのであった・・・

・・・天喰の救出作戦は成功した・・・だけど成功したけど失敗でもあった・・・

エンタープライズたちは東海達がセイレーン化した天喰と戦っていて、その間は東海の邪魔をさせまいと周りのセイレーンたちを処理していたが・・・突如、敵が撤退。東海達から緊急の救護要請があり急いでいったが地獄絵図だった・・・

東海と曇天は全身を切り裂かれて血だらけで倒れており、月影は外側は傷は目立たないが全身を折られており、昇龍は肩を矢で貫かれて岩に空中に浮かんでおり降ろした・・・

エンタープライズ「大丈夫か!?!?!はやく!!本部に戻るぞ!!」

指揮官「どいてくれ!!急患だ!!」

エンタープライズたちから事前に連絡があつて治療室に運ぶ準備をしていたがひど

い有様だった・・・

全員が血だらけになっており戦闘の激しさを物語っていた・・・

医師「こちらです!!早く!!」

指揮官「あとは頼むぞ!!」

ぷしゆううううう

指揮官「無事でいてくれよ・・・みんな・・・」

扉が閉まり手術中の明かりがついたのを確認し祈る気持ちでその場を離れようとしたが・・・

指揮官「ん?・・・どうした?大鳳?」

扉の前で大鳳が立っていた・・・

指揮官「・・・天喰のことか?」

大鳳「・・・はい」

・・・やっぱりか、大鳳はエンタープライズたちが救援に来るまで必死にみんなの治療をしていた

指揮官「・・・大丈夫さ、この医師は一流だし何より明石がついてるからさ・・・」

大鳳「はい、指揮官様・・・」

・・・まっつてくれ!!天喰!!

そこにはセイレーンに連れ去られそうになっている天喰がいた・・・

あと少し!!少しだけでも早く異変に気付けたなら!!

そして・・・

・・・なんで・・・天喰

帰ってきたかつての相棒はセイレーンにさえていた

・・・相棒を助ける!!

一回は負けて撤退したが即席の改造をして再び挑んだが

・・・やめろ!!天喰!!

大鳳に刀で切ろうとした瞬間・・・

東海「・・・・・・・・・・は!!」ガバツ!!

明石「ニヤ!?!急に起きるなニヤ!?!」

東海「・・・・・・・・明石?」

そこには自分に繋がれている点滴を交換しようとしていた明石がいた

明石「と、とりあえず目が覚めてよかったニヤ・・・」

東海「ああ、!?天喰は!?他の皆は!？」

明石「あ、まだ起きるなニヤ!？」

東海「い!?!いてててて・・・」

明石「まったく・・・まだ治りかけだから起きたら傷づちが開くニヤ・・・あと、曇
天たちは東海より先に治って無事ニヤ」

・・・そうか、よかった。でも・・・

東海「天喰は？」

明石「まだ、起きていないニヤ・・・」

話によると天喰の胸に刺さった刀は抜け、赤いキューブも取り出せたが天喰本人がま
だ目覚めていないらしい・・・

東海「・・・ちまみに今、キューブは？」

明石「・・・キューブは本部の地下最重要隔離保管庫で厳重に守られているニヤ」

ガラガラ

昇龍「東海!?!起きたのか!?!」

リバティ「よかった・・・」

病室の扉が開き曇天たちと指揮官が入ってきた

指揮官「・・・よく生きてたな」

東海「いや・・・ほんと・・・今回は自分の運に感謝ですよ」

明石「・・・東海!!明石がせっかく作った改造兵器を壊すなんて!!」

東海「・・・仕方ないだろ、急造だし。でも明石ができなかつたことだ・・・あり
がとう」

明石「な、ならいいニヤ!!・・・無事でよかつたニヤ」

東海「指揮官・・・あれからどうなった?」

指揮官「・・・本部近郊の海域からセイレーンの反応は消え鏡面海域の現象も同時に
消失した。・・・アルバード元帥も作戦終了をさつき出したばかりだ」

・・・そうか、作戦は成功したのか

東海「・・・でも」

指揮官「・・・ああ、天喰がまだ目覚めてないだろ?」

東海「・・・」

指揮官「・・・見舞いに行きたいのか?」

東海「・・・はい」

指揮官「・・・わかった、じゃこの車いすに乗れ・・・行くぞ」

自分の体はあちこちに傷口があるので包帯でぐるぐる巻きにされている
痛む体に鞭を打ちながら椅子に移動し、天喰がいる病室に向かった・・・

く天喰の病室く

中に入りかつての相棒の状態を確認すると・・・絶句した

所々に管が繋がれていて前進は包帯やらで肌が見えないほどだった・・・

指揮官「・・・天喰の体はセイレーンに近い組織に換えられてもとに戻すだけでもかなり危険なんだ・・・それに天喰が自分自身を止めるときに胸部に刀を刺し止めたがそれが決め手で普通なら死んでもおかしくない状況だった・・・だから、天喰はこの時からいつ死んでもおかしくない状況だ」

東海「……そうですか……ん？」

天喰が寝ているベットの隣で悲しそうに見ている女性がいた

大鳳「……天喰」

東海「……大鳳」

大鳳「あ、東海……指揮官様」

指揮官「……大鳳、今日も来ていたのか」

どうやら、大鳳は天喰がここに運ばれてから毎日のように演習や休み時間の間はずつとここにいららしい……彼が起きるまでずっと……

大鳳「……はい」

ポタ……ポタ……

すると彼女は静かに涙を流し始めた……

大鳳「……大鳳のせいです……もし、あの時装置からセイレーンの触手が出てきたのを気づけたなら！」

東海「……それなら僕たちにも非があります……なぜ、まだ鏡面海域なのに本部

と通信ができるのか」

指揮官「……でも、こっち本部ではあまりにも簡単にコアが見つかったから罠ではないという声もあつた……指揮官としてみんなに警告するべきだった……」

……本当、あの時ああしていれば……

曇天「あああ!?!もう!!今、そんなに暗くなつてたら起きた天喰が心配するだろ!!とにかく今は天喰が無事に目覚めるのを祈るしかないだろ!?!」

指揮官「……そうだな!!皆も暗くなつていたら天喰が心配するぞ!!」

大鳳「……はい」

東海「……了解しました」

……早く起きてください、相棒……みんながあなたの帰りを待っているんですよ……」

元帥「……田中少将、少しいいか？」

天喰がいる病室を後にしみんながいるへやに行こうと向かっていたらアルバード元帥に声をかけられた

指揮官「はい？ どうされましたかアルバード元帥？」

元帥「……すまないがここでは話せない……私の部屋に来てくれ」

指揮官「……わかりました」

指揮官「……それでどうされましたか？」

元帥「……とりあえず作戦の成功、おめでどう」

指揮官「……ありがとうございます」

元帥「・・・さて、いいニュースと悪いニュースがある。まず、いいほうからだ・・・君の中將昇進が決まった」

指揮官「ツ!! ありがとうございます!!」

元帥「それで悪いほうだが・・・君たちが救出作戦中に起きた・・・」

豚田 太郎が脱獄した」

指揮官「な!? あの豚田が!？」

元帥「ああ、もしかしたら君たちに復讐してくるかもしれない・・・用心しといてくれ」
指揮官「・・・肝に銘じておきます」

ここはアズールレーン本部のある都市から離れた郊外

?? 「ふう、ふうここまでくればあの人間どもは来ないだろう・・・」

そこにはぼろぼろの服をきて逃げる・・・豚田だった・・・

豚田「・・・くそおおお!!あの老害と無能どもがあ・・・この高貴な僕をあのような牢獄に叩き入れるとわあ!!・・・今に見ているがいい・・・特にあの空母が・・・力が・・・この神になる資格がある僕に力があればああああ!!」

・・・実をいうと豚田は生まれてから子にとても甘い親からすべてを与えられた

豚田の父親がアズールレーン所属の元大将であった

親から今食べたいもの、着たいもの、手に入れたいものすべてをすぐに与えられた、そのせいか自分はこの世界では選ばれた人間で神から祝福されているのだと勘違いを生んだまま成長してしまった・・・元ではあるが中将という地位も彼の功績とかではなく、単なる親の推薦という名のコネであった

・・・親が甘過ぎたら子供が駄目になるとはこのようなものだ・・・

?? 「ふふ♪なにやら力が必要なようね？」

豚田「だ、だれだ!？」

?? 「ふふ♪こんばんは？脱獄中の罪人さん？」

豚田「せ、セイレーン!?!なぜこんなところに!?!」

?? 「それより・・・あなたはあの空母を倒すくらい力が欲しいのでしょうか?！」

豚田「・・・あ、ああ!!僕は今すぐにあの汚らわしい空母に制裁をくだし、この世界の神になってすべて僕のものにする!!」

??「・・・なら、あなたにこれを授けるわ♪」

素晴らしい取り出したのは黒く濁っているキューブだった

ズブツ!!

豚田「ぼ、僕の体に何を・・・う、うがああああ!!」

ぼきぼき・・・

ぼきぼき・・・

??「・・・どうかしら?生まれ変わった姿は?」

豚田「な、なんだこの姿は!?!ち、力がみなぎる!」

豚田の体はおぞましくなり、右腕は肥大化し、肌は灰色になり、目は黄色に輝いていた。

豚田「しゅー!しゅー!素晴らしい!!素晴らしい力だ!!これがあればあいつを・・・くつくつく・・・あははははははは!!」

??「それじゃ、見せてね?どういう結果になるのか♪」

そういい、タコのような装備をうねらせながら微笑んでいた……

……あれから数か月たった

僕たち天喰を除く海上自衛隊は傷は治り体調は回復した……
そして今どこにいるのかというと……

明石「……それじゃ、行くニャ……せーの!!」

ガチン!!

東海「痛い!? 明石!? すげえ痛い、一端弱めて!?!」

明石「まだ足りないかニャ!?! ……もつと強くするニャ!!」

東海「逆だあ! 弱くしてくれ!!」

建造所の一角の改造所で改造した状態の整備をしていた……

明石「・・・どうかニヤ？」

東海「・・・すごいな、砲身の一本一本が指先のように動く・・・」

明石「すごいのは東海達ニヤ・・・あれ間に合わせで使ってあまりチューニングをせ
ずに行つたから動かすだけでも難しいのにニヤ・・・」

みんなの装備は・・・

東海は服装は帝国人が着そうな服にマントがついてアームも背中一本生えてそこ
に前のより伸びたS u r 57の飛行甲板になって右のアームにレールガンが付いた

曇天は恰好は・・・なんか、ガ○ダム・・・いや、ア○アンマンの少し軽装になった
感じ?になっていた。武装は前のから変わらないが持っている銃がスタ○ウォーズの
ブラスターになって周りに式神みたいなのが浮かんでいた

月影はもつとメカらしくなりマジで（前に天喰が言っていた）オーバ○ウオッチのゲ
ンジに似ていた。武装のジンベエザメみたいなのも少し大きくなって腹部あたりがピ
ルピリと光っている

東海「・・・月影、ちよつと「龍神の剣を食らえ!!」（V C : 川原慶久）っていつてく
れませんか？」

月影「・・・なんでですか（呆）」

昇龍はフード付きの服が白くなり身長も少し伸びていた・・・武装も対リーダー無効
化装置もバージョンアップした

・・・そして

東海「・・・これが相棒の新しい装備ですか・・・」

そこにあつたのは袴が新しくなり武装もF/A-18JとA-10Cはとある機体に
に換えられ、そして腰の装備には奥の手としてあるものを載せている

東海「・・・早く相棒起きないかな・・・」

そうつぶやくと・・・

瑞鶴「た、大変よ!!東海!!皆!!」

改造所の扉を蹴破る勢いで来たのは今日の秘書艦の瑞鶴だった

昇龍「どうしたんですか?瑞鶴さん?」

瑞鶴「・・・きたのよ

天喰がたった今起きたのよ!!」

バタバタバタ!!

ヴェスタル「こちら！医務室の前では走ってはいけません!!」

医務室の担当をしているヴェスタルに注意されようが急いで走って天喰がいる部屋の前で止まる

大鳳「東海!!」

東海「大鳳!!あなたも!?!」

大鳳「はい!!彼が起きたと聞いたので!!」

東海「・・・よし、開けるぞ」

ガラガラガラ

そこにはベッドの上で座っている天喰がいた・・・

曇天「天喰!!」

大鳳「よかった・・・天喰・・・目が覚めて・・・」

天喰「あ、えつと・・・」

東海「・・・無事でよかった・・・どうしたんですか?相棒?」

天喰が目覚めて皆喜んでいたが次の言葉で一気に落とされてしまった・・・

天喰「・・・スミマセン」

あなたたちは誰なんですか?」

記憶を失くした破壊者

天喰「・・・あなたたちは誰なんですか？」

・・・え？いま相棒なんて？

大鳳「・・・な、何を言っているんですか？天喰、私ですよ？・・・」

天喰「・・・えつと・・・天喰って自分のことですか？」

曇天「・・・なあ、天喰・・・お前、起きる前のこと覚えているか？」

天喰「あく・・・すみません、なぜか思い出せないのです・・・」

昇龍「ま、まさか・・・」

ガラガラ

指揮官「天喰!!目が覚めたのか!!」

天喰「(ビクツ!?)・・・え、えつと・・・あつと・・・」

指揮官「皆、心底心配したんだぞ!!あんなにポロポロだったのに・・・無事でよかつ

た」

天喰「あのお・・・すみません、ここの責任者でしょうか？」

指揮官「・・・何言ってるんだ？お前、もう何回も秘書艦しているからわかるだろ・・・」

東海「・・・指揮官、少しいいか？」

指揮官「お、おう・・・いいぞ」

東海「みんなも一回出るぞ・・・すみません、天喰さんすこし外に出ますね？」

天喰「はい、私は構いません？」

指揮官「東海どうしたんだ？相棒って呼ぶお前が「さん」付けなんて・・・」

東海「・・・指揮官

多分、天喰・・・昔の記憶を失っている」

指揮官「記憶喪失!？」

東海「そう、天喰の様子・・・気配も全くの別人のように感じた・・・明石・・・今いるか？」

明石「・・・話は聞いたニヤ」

東海「……今からでもいいから天喰の身体検査してくれないか？……」
明石「わかったニヤ……」

数日後……

この日は特別に東海が秘書艦になり、明石の報告を聞いた

東海「……明石、それでどうだった？」

明石「……東海、これは重大問題ニヤ……」

報告によると……

1、身体の損傷

問題なし

しかし、後述では問題が発生する

2、精神や体調の状態

問題あり

記憶が医務室のベットから起きたところからしかなくこの基地に来た記憶もない

3、今後の勤務に安否

出撃の禁止を願う

さらに新たに判明した三つ目のスキルの発動の封印を願う

指揮官「……なあ、明石、この「出撃の禁止を願う」ってなんだ?……」

明石「それは昨日、天喰のKAN—SENの能力に問題は無いか確認しようとした時にや……」

昨日……天喰の病室にて

明石「……それじゃ、天喰!!最後はこれをはいてニヤ!!」

天喰「……これは?」

明石の手には大きめのブーツがあった

明石「何って訓練用に作ったKAN—SENの航行用ブーツニヤ!!」

天喰「……私は本当に何も覚えていないんですね……」

明石「……ってそんなことより行くニヤ!!」

そういわれ連れてこられたのは……

明石「さあ!!天喰!!さっきのブーツを履いてリハビリを兼ねて海に出てみるニヤ

!!……天喰?」

天喰(カタカタカタ……)

そこには顔を青ざめて立っている天喰がいた・・・

明石「天喰？ どうしたかニヤ？ 具合でも悪いかニヤ？」

天喰「あ!? い、いえ!! 大丈夫です・・・」

明石「なら行けるかニヤ？ 心配なら明石も手伝ってやるニヤ！」

天喰「あ、ありがとうございます・・・」

地面に置かれている訓練用ブーツをはこうとすると・・・

かちつ

天喰「ひツ!？」

明石「ど、どうしたんニヤ!? 天喰!？」

天喰「い、いえ・・・今、何か嫌なものが」

明石「嫌なもの？」

天喰「だ、大丈夫です・・・なんとか行けます・・・」

明石「・・・無理しないでニヤ」

おぼつかない足取りで海に向かっていくが・・・近づくほど・・・なんか・・・海におびえている感じだった・・・

明石「(大丈夫かニヤ・・・天喰・・・)・・・それじゃ行くニヤ？」

天喰「・・・よろしくお願いいたします・・・でも、これどういう原理何ですか？ 人

間が海の上に立てるわけありませんよね？」

明石（・・・）「やっぱり、天喰は自身がKAN—SENであることを忘れて、なるで自分人間であるかのようになっているニヤ・・・」

沖まで連れていって海上につき手を離れた・・・しかし・・・

ザパアアアアアン!!

天喰の体は海の上に浮かぶことはなく沈んでいった・・・

明石「天喰!? 明石の手を掴むニヤ!!」

天喰「げほお!? ごほっ!? ごほっ!」

明石「そのあとなぜKAN—SENとしての力の一つである海の上に浮かべれないのかって思っって精密に検査してみたんにやが・・・」

・ ・ ・ 現在の天喰はKAN—SENとしての力と記憶を失っているニヤ」

指揮官「・・・そんな・・・つまり・・・今の天喰は人間と何ら変わりはないと？」

明石「・・・残念ながらそうだニヤ」

・・・現実とは悲しいものだ

もう、相棒とは二度と共に戦えないとは・・・

指揮官「・・・なら、天喰には悪いがここを辞めてもらって街で普通の一般人として暮らしてもらえないな：：この基地はいつ戦場になるかはわからないからな：：」

明石「・・・残念ながらそれは危険ニヤ・・・」

指揮官「危険？」

明石「KAN—SENとしての力は失っているが天喰の持っている赤いメンタルキューブはまだ機能しているニヤ・・・」

それってつまり・・・

明石「・・・街の中で暮らして何らかの事件や事故で内部のメンタルキューブが割れてエネルギーが外に出てしまったら・・・」

指揮官「・・・なんの前触れもなくその街が消えるのか・・・なら次のスキルの封印については？」

明石「・・・天喰のメンタルキューブがまだ機能しているならどうか復帰できないかって考えてキューブ内の残留情報を読み込んでいたらとんでもないことが分かったんニャ・・・」

指揮官と東海の前に出された資料には天喰の詳細と三つ目のスキルだった・・・

東海「発動条件が僕たち海上自衛隊の行動不能・・・仲間思いな相棒らしいですね・・・これが何故？」

明石「天喰を助けに行った時天喰はこのスキルを使って東海達と戦ったニャ・・・」
指揮官「ああ・・・でも、東海達は行動不能になっていないのに東海達に対して使った・・・」

明石「・・・多分あのセイレーンは天喰に東海達は目の前の奴らに殺されたって嘘の記憶を埋め込ませて無理やり発動させたと思うニャ・・・恐らくそのせいで天喰の記憶がなくなったニャ・・・だけど、それが仇となつて・・・次、本当に東海達が行動不能になってこのスキルが発動してしまつたら・・・」

・ ・ ・ 体がスキルの反動に耐え切れずに死んでしまふニヤ」
東海「 ・ ・ ・ そんな! 」

指揮官「 ・ ・ ・ いったいどうしたのか ・ ・ ・ 今、天喰はどうしている? 」

明石「 : : 海に沈んだのがトラウマになったのかとてもおびえさせてしまったニヤ : :
いまは一人にさせているニヤ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ここ本当にどこだろう?

目が覚めたらベッドの上で寝ていて体は包帯が巻かれて動いたら痛む、不思議に思い
回りを見渡すと木製でできた部屋で窓からは綺麗な空と ・ ・ ・ 青い海だった ・ ・ ・

何故だろう ・ ・ ・ 海に近づきたくない ・ ・ ・ そう感じる ・ ・ ・

しばらくすると部屋に五人の人が入ってきた

そのうちの一人から「天喰」って呼ばれたけど ・ ・ ・ それって自分のことなのかな?
・ ・ ・ 起きる前のこと? ・ ・ ・ だめだどうやっても思い出せないな ・ ・ ・

そのあと扉からなんか白い服を着たとても偉そうな人が来た ・ ・ ・ この責任者かな
んかなのかな?

その人からも心配したとか言われるけど ・ ・ ・ 自分ってどれくらい寝たんだろう?

そのあと緑の髪をした人(なんで猫なんだ?) から記憶喪失って言われた

それから数日が経過してある程度傷も治って包帯も全部とれた

その日あの緑の猫（あとで明石って名前だった）から手に持っているブーツを持って外に出るよう促された・・・どこに行くんだらう？

連れこられたのは・・・海だった

ナンデだろう・・・なんで、こんなにも手の感覚が薄くなって血の気がなくなっているんだ？

明石さんから心配をされつつも一緒に海に出るそうなのでブーツを履いて準備しようとして履くが・・・

バチツ!!

な、なに!?

なんか一瞬、悲鳴のようなものが聞こえた・・・

怖かったけど明石さんに迷惑かけたくないから、誤魔化した

そして意を決して海の上に立ったけど・・・

ザパアアアアアン!!

案の定、沈んでしまった

なんとか海面に出ようと水をかくが・・・体が動かなかった・・・
・・・なんで!?

すると、頭の中で突然……
赤い海と赤い空にいて周りに赤くなっている人の死体が浮かんでいた

そして、さっきの人たちが沈んでいくところが見えてしまった

天喰（ごぼお!?)

それから明石さんに助けられたけど……正直もう二度と行きたくなんかない……なんでかはわからないけど……忘れないでほしい、置いてけぼりになりたくないって思った

あれから海が怖くなって指揮官さんからくれた部屋に引きこもったけど気分転換に基地の探索にでた

歩き回っているうちに何人かに声をかけられて話を聞いてたけどみんな悲しい顔をしていた（あと、なんでこの基地には女性が多いんだ?）

……記憶を失う前の自分はとも頼りにされていたのかな?

あと、さつきから視線を感じるんだけど……

周りを見渡すと……いた……

さつき病室でみた赤い着物に黒い髪をした女性だ……

なんかさつきからずっと遠くのほうからついてきているんだけど?……どうしたん

だろう?・・・あと、そんなに露出して寒くないのかな?

・・・さっきの海のとは違う怖さを感じて人ごみに紛れてそこから一気に走った・・・
・・・どうしよう迷子になっちゃった

なるべく広い道を行ってたけど、知らないうちに暗い小道に来てしまった・・・

?? 「ふふ♪こつちよ?」

・・・誰だろう?どこからか声が聞こえたんだけど・・・

?? 「こつちの道が大道りに出る道よ?」

うゝん?姿が見えないけどそれでもありがたいや

声が聞こえるほうに進んでいく・・・しかし・・・

天喰 「あれ?行き止まり?」

?? 「うふふ♪ごきげんよう、私の天喰?」

振り返るとそこには黄色の瞳にタコのような足を動かす少女がいた・・・

天喰 「だ、だれ!」

知らない、知らないはずなのに体が

今すぐこいつから逃げろ

って言ってるのを感じる

?? 「あ、逃がさないわよ?」

逃げ出そうとしたらタコのような触手に捕まってしまった

天喰 「離してください!？」

?? 「ふくん．．．どうやら本当に記憶が消えているようね．．．さすがに偽の記憶を埋め込んで強制的に発動させたら障害が出るけど可能性があつたけど低かつたから気にしてなかつたわ．．．慢心だつたわね．．．でもなんか子犬みたいになっているからこれはこれで悪くないわね♪」

天喰 「偽の記憶!? どういうこと!？」

?? 「まあいいわ．．．そろそろあなたの仲間が探しているから長居は禁物ね．．．これ、あなたにしたことのお詫びね？」

そういうい、少女は天喰の頭を自身の腕で包み手を天喰の額に乗せ撫でた．．．

天喰 「あれ?．．．なんで．．．眠く．．．」

?? 「ふふ♪天喰? あなたはまだ楽にできていいわ．．．今回は私にも非があるから記憶を戻すの手伝うわ♪．．．ついでにオマケもしておくわ♪」

東海 「．．．天喰さん!? ．．．天喰さん!? ．．．大丈夫ですか!？」

天喰「う、うん．．．あれ？東海さん．．．私寝てましたか？」

東海「寝てたというか倒れてましたよ．．．自分の名前言えますか？」

天喰「え？えつと．．．私は原子力空母【天喰】です？」

東海「よかった．．．言えま．．．待つてください．．．天喰さん．．．自分が原子力空母つて言いませんでしたか!？」

天喰「あ、あれ？本当だ？なんで自分のことは思い出したんだ？」

東海「じゃ、じゃあ!!僕たちのことは!？」

天喰「．．．すみません、それはまだ思い出せません．．．」

東海「そ、そうですか．．．しかし、なんでここで倒れていたんですか？」

．．．あれ？自分．．．さつき何していたんだ？

誰かとあった気がするけど．．．だれだっけ？

そう呼ぶ理由

指揮官「……そうか、KAN—SENとしては記憶も力も戻ったが……」

東海「……僕たちの思い出は覚えだせないそうだ……」

天喰「……スミマセン、指揮官さん」

指揮官「……いや、いいんだ。断片的にも思い出たらいい……少しずつでいいよ。」

天喰「……ありがとうございます」

天喰が路地裏に倒れていた事件から天喰はKAN—SENの記憶は戻ったがまだ基地の皆のことは思い出せていなかった……

明石「……ならこれからはまた東海達と一緒にに行けるニヤ!!」

天喰「はい……そうですね……」

昇龍「……どうしたんですか？天喰？……もしかして、不安ですか？」

天喰「あ、いえ……大丈夫です」

指揮官「ならいいが……だけど天喰はしばらくリハビリで演習海域で訓練してくれ、来週の哨戒は天喰を除く海上自衛隊とエンタープライズと大鳳に頼む」

全員「「「「了解」」」」

集まりが終わわり皆はそれぞれの持ち場や行く場所に散っていく

天喰「あの!!指揮官さん!!」

指揮官「ん?どうした、天喰?」

天喰「あのお・・・実は聞きたいことが・・・」

当日の夜

哨戒組

大鳳「・・・・・・・・・・」

エンタープライズ「・・・・・・・・どうしたんだ、大鳳?今朝から元気がないぞ?」

大鳳「あ、いえ・・・大鳳は大丈夫です・・・」

なんか今回の哨戒組暗いな・・・

・・・最近、あの作戦が成功したおかげかセイレーンが支配海域や安全海域さらには

遠征組によると警戒海域でさえ一隻も見当たらないらしい・・・平和だからいいけど・・・

あと、相棒・・・いえ、天喰さんは前の天喰からがらりと変わってしまった・・・

今朝なんか・・・

エイジャックス「・・・・・・・・ふふ、ねえ?天喰?私の足舐めてくれないかしら?」

って言われていつもの天喰なら・・・
 「ははあ!!女王様あ!!・・・ってやらんわ!!」って言う感じでノリ突っ込みするけど今は・・・

天喰「えっと・・・舐めればいいんですね？」

って答えて本当に足を舐めようとしたから振った本人でさえマジで止めたくらい・・・

昇龍「・・・あれはヤバかったな」

曇天「ああ・・・マジで天喰が変態になったのかと思った・・・」

昇龍「・・・ほんとだよ・・・あ、スクリュー音探知、敵の潜水艦をはつけn（精神的に）駄目だ!!」「（空気を読まない敵だから）駄目だ!!」「（めんどくさいから）駄目だ!!」・・・えええ（困惑）」

・・・昼間も購買部のある大道りでお金を失くしたKAN—SENに返さなくつていからとお金をあげたり、いたずらのターゲットにされてはめられても、元の天喰だったら叱って注意するのに怒ることのなく・・・

天喰「あなたたちが楽しいなら私はいいですよ？」

つて笑っている……

東海「なんか……天喰さんは……無理してみんなの願いを聞いている気がする……」

月影「……あと、なんか俺たちを避けている気がする」

それから哨戒は終わって基地に戻った（敵は東海のVTOL達が倒した）

東海「指揮官、哨戒終わったよ」

指揮官「おう、おかえり」

天喰「おかえり!! えつと……東海達!!」

……あれ? 「さん」付けじゃなくなっている?

大鳳「……天喰、記憶が戻ったのですか?」

天喰「お、おう!! だ、断片的にだがな!!」

大鳳「……よかった……では、指揮官様に東海、先に失礼します」

指揮官「……ああ、いいぞ」

パタン

天喰「……さてと、俺たちも戻ろう」

東海「……相棒……いえ、天喰さん……少しいですか?」

天喰「おう、なんだ? つて記憶が戻ってきているからさんはいって……」

東海「なんで戻ってきているって嘘をついたのですか？」

天喰「な、なにをいって・・・」

東海「・・・今までずっと一緒に支えあつてきた仲間ですよ？・・・あと、記憶が失つてもクセは残るのですね・・・」

天喰「・・・やっぱり無理でしたか・・・はい、戻ってきているふりをしました」

曇天「そんな・・・どうして・・・」

天喰「・・・私は記憶を失い、この基地で目を覚ましました・・・今の私では前の私みたいにみんなから頼られてきた存在らしいので・・・少しでもいいからみんなが知っている「天喰」に近づけたらいいなって・・・少し頑張りました・・・」

・・・どうやら、前に指揮官やそれぞれの陣營のトップに以前の自分はどういう人格だったのかを聞いて真似て皆を安心にしたりはしたかったらしい・・・

天喰「・・・ごめんなさい、皆を騙すようなことをして・・・これはみんなには言わないでくれますか？」

東海達「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

ても厳しい人で学校でなんでも一番をとれなかったらよく殴ってきました

僕が生まれて頃はそれほどでもなかったのですが幼稚園、小学校、中学へ進め連れに過激になってきました・・・母も最初は僕を庇ってくれましたが徐々に母も暴力の対象にされ庇え切れなくなりました・・・

幼稚園から中学に入るまで僕はまるで父の商品のようにされました・・・小学校でできた友人との遊ぶ時間もくれずに時間があるなら勉強をしろって言われてました・・・まあ、テストで一番をとっても褒められたことがありませんが・・・

本当に子供のころは孤独で人付き合いもへたくそでした・・・でも、四年生のころにあることが起きました・・・

下田「・・・ただいま、母さん・・・あれ？母さん？」

その日は母の仕事が早く終わる日で帰ってきているはずですが「おかえり」が聞こえなかったんです・・・もう、母にさえ愛想を尽かれたのかなって思いリビングに入ったんですが、そこには・・・

天井から紐で首を縛り宙吊りになっているかつての母がいました・・・

すぐ病院に連絡しましたが死亡が確認されました・・・

父は母が死んだという連絡を出しましたが連絡には出ませんでした・・・

母が死んで数か月後葬式も終わり一人で家に待っていると・・・

父が別の女を家に連れてきました・・・

どうたら、新しい再婚相手らしいですが自分にも合わせずに結婚するなんて・・・

新しい母はひどい人でした・・・金銭感覚も、人間的にも・・・

自分の前の母が残っていた遺産もすべて親に取られてお金に換えられ遊びに使われました・・・

五年生に入っても相変わらず親はそのままです入学しましたがその時から自殺願望がありました・・・

下田（・・・今日こそ死ねばお母さんに会えるかな？）

そう思いながら登校を続けたある日・・・

?? 「お前・・・いつも一人だけど、つまらないのか？」

下田「・・・誰なんですかあなた・・・」

?? 「あ、おれ？」

俺は上月 穂村！よろしくな!!」

・・・その時にあなたと会ったんですよ・・・

その日を境にいろいろとかわりましたねえ・・・

上月「おーい!! 下田!! 昼休み遊ぼうぜ!!」

下田「いやです、僕は勉強をするので」

別の日には

上月「下田!! 寄り道しよぜ!!」

下田「いやです、お前も早く帰れ」

それから毎日昼休みや放課後に自分のところに来ました

下田「・・・お前暇なんですか? なんで毎日ここに来るんですか?」

上月「え? だつておれら友達じゃん?」

下田「・・・お前とは友達になる交渉をした覚えがないんだが?」

上月「え、友達つてどちらが話しかけて話が盛り上がればなるんじゃない?」

下田（盛り上がるつてお前だけがなのでは・・・）

そこから会話の長さの回数も増えましたね・・・

上月「下田あくこれわかんねえ!!」

下田「・・・まったく・・・これはこうで・・・」

上月「・・・おお!! ありがと!!」

下田「どういたしまして・・・つていうかお前これ前に先生が言つてたろ・・・」

上月「ふ、ぐつすり寝てたわ……あと、お前つてなんだよ……名前で呼べよ……」
下田「あ、いえ、そのお……人の名前を呼ぶのが恥ずかしくて……」

上月「ドユコト？」

この時初めて自分以外の他人に自分の家の事情や今の気持ちを伝えた……

上月「……最低だな、その親……でも、下田……死にたいのか？」

下田「……はい、母さんが死んだのは自分が失敗作で父に怒られっぱなしだったから……」

上月「……たとえば死んであつちでお前の母親に会えたら……お前の母さんは喜ぶか？」

下田「……うれしくなんかありません」

上月「……ならさ、今から俺んちに来ない!？」

下田「え、でも……」

上月「お前は親の言いなりになるのか?……別にたまには反抗してのいいじゃん?自分が成りたいものになつたらいいじゃん」

下田「そう、そうですね……」

上月「うし!!なら今から俺んちで遊ぼうぜ!!」

下田「な、なあ!!」

上月「ん？どした？男の先生に結婚してくださいって言いに行くのか？」

下田「違うっていうかダメだろ！？・・・お前のこと「相棒」ってよんでいいか？・・・やっぱり、人の名前を呼ぶのが慣れていないので・・・」

上月「おう！いいぞ！！これからよろしくな！！俺の友達！！」

下田「ああ、相棒」

そこからよくこっさり家から抜けて遊びました・・・中学、高校も一緒の所にいつてその間に他の三人が仲間に入りましたね・・・

回想終了

東海「つてなことがありましたね・・・だから、無理して前の「天喰」になるよりありのままに新しい天喰になっても僕たちは受け入れますよ！！」

天喰「・・・なんで」

東海「・・・え？」

天喰「・・・なんでみんなは私のことを優しくするんですか？」

東海「なんでって・・・」

・・・執務室で天喰が吠えた

天喰「あの後から私が記憶が消える原因となったあの作戦の詳細を教えてくださいました

が・・・私はあなたたちを殺そうとしたんですよ!?!普通、かつての仲間が殺しに来たのに恨んでもおかしくありません!!・・・なのに何でですか!!」

東海「もしかして、僕たちを避けていたのって・・・」

天喰「・・・私はあなたたちを殺しかけたんだ・・・だからあまり会わないほうが良いと思つてな・・・すまん、少し外で頭を冷やしてきます」

昇龍「あ!天喰!?!」

天喰は静かに部屋を出ていった・・・

番外編1 天喰のシヨタ化事件 前編

・・・これは本編の鏡面海域攻略作戦と水着回の間であつた話です・・・
それは何の変哲もない晴れた日にありました

時はハロウィン!!

駆逐艦などの小さい子が指揮官にお菓子をくれないといたずらされたり・・・

指揮官大好き勢が過激な服を着て指揮官にいたずら（意味深）をしにきたりするイベントだ!!

コンコン!!

駆逐艦ズ 「コン指揮官!! トリックオアトリート!!」

指揮官 「おお、来たか!! はい、お菓子だぞ」

執務室で待機していた指揮官がお菓子を配る

東海 「指揮官、トリックオアトリートだ」

指揮官 「いや、お前はもらうほうじゃなくてやるほうだろ!」

東海「・・・くねなかったらベッドの下にある薄い本を・・・」

指揮官「OK、やるから秘密にして」

いろんなところで仮装したりお菓子を分けたりする中・・・

赤城「指揮官さくま〜? どうですか? 赤城の仮装は?」

赤城が執務室に顔を出して自分の仮装はどうか聞いてきた。赤城は監獄の看守みたいな格好だが・・・やはり、指揮官大好き勢の一角・・・いろいろと露出している・・・

指揮官「お、おう。えr・・・じゃなくて・・・き、綺麗だぞ?」

赤城「はい♡ありがとうございます♡」

バン!!

指揮官と赤城の甘い空気の中に突如赤城を小さくしたような少女が乱入した

??「子分! 子分! あたしのはどうよ!! あと、お菓子よこせ!!」

指揮官「扉はノックして返事が来てから入るように言っただでしょう? 赤城ちゃん・・・あと、よこせじゃなくてトリックオアトリートな?」

赤城ちゃんは少し前に建造できたKAN—SENで他にもベルちゃんやリトル・ばk・・・サンティアゴがいる

来たときは(大人の方)赤城が指揮官様の子だと母港中を騒ぎ建てた

赤城ちゃんの仮装はミニスカートの魔女っ娘みたいな感じだ

赤城「……お菓子くれなきやベッドの下にあった……」

指揮官「OK、やるから内s y「指揮官様？それはどういうことですか？」……ヒエツ」

赤城「……今夜、楽しみにしててくださいね？」

指揮官「……ウィツス」

そして執務室の一角……

月影「……あれは食べられる系のコースだな」

東海「……そうだな……指揮官……明日は昼くらいに寝室から赤城さんと一緒に出てくるな……」

月影「……ちなみになんでおれとアークロイヤルはお前とエンタープライズに縄で縛られているんだ？」

アークロイヤル「そうだぞ？東海？私たちはただお菓子を配りつつ写真を撮ろうとしただけであつて……」

エンタープライズ「……とりあえず、私たちはこいつらを見張らないとつて思ったからだ」

月影「……なら、アイツはなんで捕まえないんだ？」

東海「あれは近づいてるのではなく近づかれています……」

そこでは・・・

曇天「ええい!?ちよつと!?お菓子は逃げないから一列で並べ!」

ユニコーン「・・・曇天お兄ちゃんが作ったマカロン、おいしい!!」

ゆーちゃん(こくこく)

モントリピア「このクツキーもおいしい!!」

コロンビア「うん!サクサクでいい香りがする〜!!」

曇天「どういたしまして!?・・・え、なに?これのイチゴ味出してほしい!?いやいや、

む r・・・わかった!わかったから泣かないで!」

たくさんのKAN—SENに囲まれつつもお菓子を配っている曇天だった・・・

東海「・・・にしても重桜の人ってこういう日って楽そうですね?」

アークロイヤル「なんでだ?」

東海「いやだつてさ?重桜の人ってケモミミ生えてんじやん?アレもうすでに仮装し

て n(すばあああああん!!)」

音が鳴り東海の横の壁に万年筆が刺さっていた・・・

赤城「・・・東海?次、そういうのしゃべったら喉笛を失くすよ?」

東海「・・・ウイッス、アネキ」

大鳳「……どこにいるでしょう……天喰……」

部屋の中で仮装した大鳳が天喰を探していた……

大鳳「指揮官様に見せに行こうとしたらあの女狐に邪魔で見せれないし……天喰……どこかな……」

大鳳の仮装は墮天使のような感じで全体的に黒く所々肌が見えている
そんな平和(?)な日に事件が起きた……

明石「た、大変にやああああああ!!」

廊下から走ってきて扉を破壊し来たのは明石だった……

指揮官「どうした明石?……またなんかやらかしたのか?」

明石「あ、天喰がああ……」

……?、相棒がどうしたんでしょう?

ヒョコッ

そこに現れたのはいつもの天喰……ではなく……
目がくりくりとなつて髪は短くなりそして身長が低くなつていつていた……

ニヤ・・・もう一つの薬品を入れないとニヤ・・・」

「素晴らしい、明石は奥のほうに行つた時に・・・」

天喰「おいしい、明石？みんな集まつてるぞ？」

入れ替わるように天喰が入つてきた・・・

天喰「どこにいんだ？・・・あれこのにおい・・・指揮官が好きなた茶葉の匂いだ？」

天喰はここ最近、指揮官とのボーイズトークが増えて指揮官が好きなた茶が好きななつてしまった・・・

天喰「待つとけば来るかな？・・・まあいいやこのお茶でも飲んで待つとくか・・・」

ゴクツ

天喰「・・・うん相変わらずおいしい・・・ごほっ!？」

な、なんだこれ!?!体が熱い!?

明石「♪、早く指揮官に飲ませないとニヤ♪この小さくなつても記憶はそのままになる薬を入れないといろいろとめんどくさく・・・あれ？これは天喰の服ニヤ？なん

でここにあるンニヤ?」

ごそごそ・・・

明石「ニヤ・・・ニヤンニヤ?・・・服が勝手に・・・」

ひよこっ

天喰? 「うゝ?」

明石「ニヤ、にやああああああ!!?」

回想しゅうりよおおおおおう!!

明石「つてことがあつたニヤ・・・」

指揮官「・・・明石・・・少しいいか?」

明石「にや、どうしたんにや? しきかn」

☆明石、お仕置き中☆にや!?!ほどいてニヤ!?!なんで亀甲縛り何ニヤ!?!・・・ちよつと!?!
や、やめ、やめるニヤ♡目の前でマタタビの匂いを嗅がせるにやあ♡にや、にやめ・・・

にやあああああああ♡ (R—18ではありません)

東海「うわ、えぐ・・・」

指揮官「・・・もうしないな？」

明石「は、はいにやあああああ♡」

曇天「しかし、天喰？・・・お前だいぶ変わった(？) 仮装をしてきたな？ (思考放棄)」

東海「いや、仮装ではなくマジなんですって・・・ちなみに僕たちの名前言えますか？」

天喰？「言えなあい!!」

東海「えつと・・・東海です」

天喰？「とーかいお兄ちゃん!!」

曇天「曇天だ!!」

天喰？「・・・どーてえ「待て、天喰！伸ばすな!!んを入れろ!!」・・・てんどん？」

曇天「ちげえええええ!!」

月影「・・・なにしてるんですか・・・月影」

天喰? 「ちゆきかげ!!」

月影 「ぬう、おいしい・・・」

昇龍 「昇龍だよ!! しょ・う・りう・う!!」

天喰? 「しょーりゆーお姉ちゃん!!」

昇龍 「お姉ちゃんじゃない・・・お兄ちゃんや・・・」

それから瞬間に母港全体に天喰が小さくなったのが広まり執務室に集まった・・・

ちなみに「天喰くん」と名付けられた

加賀 「天喰くん・・・私のことは?」

天喰くん 「えっと・・・かがお姉ちゃん!!」

加賀 「そうだ、間違えないようにな・・・ふふ、お姉ちゃんか♪」

クリーブランド 「天喰くん!! 私の名前は!!」

天喰くん 「・・・アニキ(ドヤツ)」

クリーブランド 「・・・なんで小さくなっても兄貴ってよばれるのおお・・・」

そして最後に大鳳の番になった・・・

大鳳 「天喰くん? 大鳳ですよ?」

天喰くん 「ちや、ちやいひよう!!」

大鳳「うくん、もう一回!! た・い・ほ・う」

天喰くん「にゆう・・・たいひよう!!」

指揮官「・・・もう大鳳だけすきな呼び方で呼んでみたらどうかかな？」

天喰くん「うくん・・・」

：しかし後の指揮官のインタビューで「あの子、特大爆弾を落としていったわ・・・」

と言っていた

何故なら・・・

天喰くん「うくん・・・」

お・か・あ・さ・ん!!」

指揮官「えっ(困惑)」

東海達「えっ(錯乱)」

他のKAN—SEN「「「「「え?」」」」」

大鳳「・・・天喰くん・・・今なんて?」

天喰くん「にえ?・・・おかあさん?」

大鳳「・・・」

ダッ!!

指揮官「ちよ、待て!!大鳳!!どこに連れていく気だ!」

大鳳「・・・どこって役所ですが?」

指揮官「なに、自分の子供にしようとしてんじやああ!」

指揮官、大鳳を説得中・・・

指揮官「・・・よし、落ち着いたな・・・しかし、どうすんだよこれ・・・」

明石「幸いにも薬は少ししか飲まなかったから一週間以内にもとに戻るニヤ・・・」

東海「いや、少いで一週間って全部飲んだらどうなるんだよ・・・」

明石「そ、それはその時に考えるニヤ・・・でもこの一週間どうするにや?」

大鳳「それは当然、母親(仮)になつた大鳳が・・・」

東海「いや、だめですからね?こちらで引き取らせてもらいます・・・」

シヨックする大鳳は置いといて・・・部屋に移動する・・・しかし・・・

天喰くん「・・・おかあさん・・・」

小さくなつた天喰くんが涙目になつてきた・・・

全員「ニニツング!? (尊死)ニニニ」

東海「し、仕方ありません。今回は特別にこちらから許可します」

大鳳「ええ!この大鳳に任せてください!!」

こうして、一週間の戦いが始まつた・・・

ちなみに本部にこのことを電話越しに報告すると・・・

元帥「・・・了解した・・・しかしだが、田中少将・・・本当なのか本人の声を聴いていいか?」

指揮官「は、はあ・・・いいですよ?・・・おーい天喰くん!!来てー!!・・・呼んで

きました」

テチテチ

天喰くん「あい！かわりました!!げんしりよくくーぼの天喰です!!」

元帥「・・・よし、本当のようだな・・・そこで天喰くん・・・」

・・・ちよつと私のことを「じいじ」って呼んでくれないか？」

天喰くん「ふえ？じいじ？」

元帥「・・・ちよつと田中少将に変わってくれないか？」

指揮官「変わりました田中です・・・いや、アルバード元帥・・・なに言わせたんですか？」

元帥「田中少将・・・実はな・・・今朝、たまたま本部近くの浜辺で見つけた虹の武器BOXを見つけてな?・・・せっかくだし、田中少将に日頃仕事頑張っているから全部上

げようかなーって思っているんだけど……」

指揮官「いや、どんな偶然ですか!？」

元帥「……だから、もう少しだけ天喰くんと大切な話をしたいなくっておもっているんだがいいかね？」

指揮官「いや、ちよつと……ええええ？」

つてなことがあつたんだとか……

番外編1 天喰シヨタ化事件 後編

天喰がシヨタ化してからいろんなことがあった・・・

ここからは天喰くんが戻るまでの主なこと（作者の精神が死んでしまうから）で送ります・・・

朝

まだ、朝日が昇ろうとしているとき一人の女性が起きていた・・・

大鳳（じいじいじいじい・・・）

・・・なんか勝手に母親認定された大鳳だった

そんな彼女は現在、息子？になった天喰くんの寝顔を自身の胸に包み込んで拝んでいた

天喰くん「にゅうううううう・・・」

大鳳「はあああああああ・・・（尊し）」

天喰くん「にゅうううう・・・にゅ？」

大鳳「おはよう♡私の天喰くん♡」

天喰くん「にゆうう．．．おはよう．．．おかあしやん．．．」

．．．彼女は天喰くんが起きる数分前に起きて天喰くんの寝顔を見るのが日課になり
つつある

大鳳「さ、朝ご飯食べに行こ？」

天喰くん「．．．うん」

食堂

東海「ちよつと!?昇龍?!いい加減自分で歩け!!もう、食堂に着いたぞ!!」

大鳳「あ、東海に曇天と昇龍．．．おはようございます」

曇天「ふあああ．．．おう、おはよう大鳳と．．．天喰くん？」

天喰くん「．．．ううう、眠い」

食堂の前であつたのは東海達とそれに引きずられている昇龍だった

昇龍「(⊠ ⊠) 眠す．．．」

天喰くん「．．．月影お兄ちゃんは？」

曇天「ああ、えつと．．．今朝、メイド長のおかげ(?)でお屋さまになったよ．．．」
月影はまたしても彼のエンジェル(ユニコーン)の所に行ったのだがゆーちゃんと警

備にメイド長から頼まれていたフギムギに見つかり犠牲となつてしまった

東海「・・・また、性懲りもなくロイヤルの所に行ったんですか・・・あと、昇龍・・・起きなかつたらメイド長に頼んで天王星まで飛ばさせるぞ？」

昇龍「・・・天喰くんもまだ眠そうだし・・・もう一時間だけ寝ていい？」

東海「ダメだろ・・・天喰くんもなんか言つてくれ・・・」

天喰くん「・・・うん・・・昇龍お兄ちゃん・・・僕も・・・ふおあ・・・頑張つて起きたから・・・すやあ・・・起きて・・・ぐう・・・」

そういいながら天喰くんは立ったまま寝てしまった

東海「・・・一時間だけな」

昇龍「・・・感謝する・・・」

朝食後

がしいいいいい・・・

曇天「またかよ!?!放せや大鳳!?!・・・おまえ今から出撃だろ!?!」

ここは学園にある保育園的な施設ここでは吾妻とフリードリッヒ・デア・グローゼ（闇

ママ」と曇天が担当している

大鳳「嫌です!!大鳳の息子である天喰がけをしたらどうするんですか!?

曇天「しないし、させないわ!!というか出撃させたほうが怪我すんだろ!?

大鳳「あ、それについては大鳳に天喰を装備(?)させたら航空値と回避値が300%アップ(気合で)しますよ?」

曇天「いや、装備って・・・んなこといいからさつさと行ってこいや!!」

そういういさつきから出撃開始時間から結構立っているのにまだ出撃をしていない(毎日である)

天喰くん「おかあさん!!おかあさん!!」

曇天「ん?どうした天喰くん?」

天喰くん「えつと・・・僕、ここで待っているから!お仕事頑張つて!!」

大鳳「ちよつと、本気出してきました(即答)」

曇天「えええ・・・」

大鳳が出撃した後はいろんな遊びや学びを過ごし昼の遊び時間・・・

その保育園に一体の人外が潜入した

??「ふう、意外と監視が硬いわね、この基地」

そいつは黄色の瞳に深海のような髪色・・・そしてタコのような艀装を装備していた。そう、皆大好き「オブサーバー様」である

彼女の目的は海上自衛隊KAN—SENの情報収取で潜入していた

オブサーバー（・・・こういうのはピュリファイヤーやテストターにさせるものだけどピュリファイヤーは前に哨戒中の例の空母KAN—SENの天喰に切られたし、テストターは赤いメンタルキューブの回収に向かっているから・・・なんかこういう時に量産型や下位のセイレーンじゃなくて専用の部下が欲しいわ・・・）

ツンツン

オブサーバー（しまった!?見つかった!?)

しかし、振り返るが・・・

オブサーバー（いない?自分の初めての潜入で硬くなりすぎたかしら?・・・まあ、いわ。移動をして・・・）

ツンツン

??「お姉ちゃん、だあれ?」

オブサーバー「やっぱり!・・・くそ、静かに・・・あれ?」

見つかったと思ひ振り返るがいなかった

ツンツン

?? 「なにこれ!! たこさん？」

オブサーバー 「いや、どこに……え？」

下を見るとそこには銀髪に袴をきた子供がいて監視対象である天喰を小さくしたものだ……

オブサーバー (なにこいつ? ……まさか、もうアイツのリトル系が出たのかしら? しかし、あいつがこの基地に来たのはまだ一年もたっていないのに……運命(運営)の仕業? ……でも……)

そうオブサーバーが推理していると……

?? 「お姉ちゃんはさつきから何しているの?」

オブサーバー 「えつとねえ……」

……現在オブサーバーはこの基地に潜入中だ。堂々と潜入していますといえれば警備に呼ばれかねない……仕方ない、こいつは今すぐにここで抹殺を……と言おうとしたら……

?? 「もしかしてタコのお姉ちゃん……」

かくれんぼしているの!!」

オブサーバー「え？」

なぜか予想の斜め上の質問が来た

??「僕知ってるよ!! あ! おねえちゃんが見つかりだめだよ!!」

オブサーバー「ま、まあね・・・ところであなただけの名前は？」

??「あ! おかあしちゃんから初めての人は自己紹介してねって言われてたんだ・・・僕、げんしりよくくーぼの天喰です!!」

オブサーバー「・・・え? あの?・・・でも、データでは高身長のはず・・・ぼく、ちよつといい?」

オブサーバーの手を天喰くんの額に乗せる

オブサーバー「・・・確かに、あの空母の情報があるわね・・・でも、なんで見れないのかしら?・・・えつと・・・いや、何しているのよ・・・あの重桜の工作艦」

今回の事件の原因を知ったオブサーバー

オブサーバー「うーん? これは一旦ここを出てまた次の機会に掛けるしかないわね」

この基地から出ることを決めたオブサーバーは自分の艀装と遊んでいる子供に話しかけた

オブサーバー「ねえ天喰くん？わたし今から海に行つて大事な用事を済ませないといけないの・・・鬼さんがここに来てもないなかつたつて秘密にできる？」

天喰くん「わかつた!!なら僕が案内するよ!!」

オブサーバー「あら？いいの？」

天喰くん「うん!!ロイヤルのエリザベスおねえちゃんから「レディには紳士に相手をするのよ」つて言つてた!!えつと・・・こつちからならあまり人目につかないよ!!」

オブサーバー「あら♪ありがとう♪」

こうして天喰くんの紳士な案内により警備のKAN—SENや憲兵に見つからずに海に到着した

オブサーバー「ふう、着いたわ・・・ありがとう天喰くん♪」ナデナデ

天喰くん「どういたしまして!!」

オブサーバー「・・・この子、私の直属の部下にしたいわね・・・ねえ、天喰くん？」

天喰くん「うん？なあに？」

きよとんと首をかしげる天喰くんにオブサーバーはこう提案する

オブサーバー「あなた・・・いつか私の天喰にならないかしら？」

天喰くん「うん？わからないけど・・・いいよ!!」

オブサーバー「そう♪なら、楽しみにしているわ♪・・・また、いつかお話をしましょ？それじゃあね？」

天喰くん「うん!! バイバイ!! タコのおねえちゃん!!」

曇天「あ! いたいた! 天喰くん! どこ行つたの? 探してたぜ?」

天喰くん「えつと・・・秘密!!」

曇天「・・・なんじゃそりゃ」

そのころ大鳳たちは・・・

大鳳「せいやああああああああ!!」

ドカアアアアアアアア!!

ジャベリン「な、なんか今日の大鳳さん張り切っているね・・・」
ラファイ「・・・セイレーンを全部倒してる」

綾波「・・・なんか大きいほうの天喰の戦い方に似ているのです」

ジャベリン「そうなの？綾波ちゃん？どんの感じだった？」

綾波「・・・見てはいけないタイプの鬼神です」

ラファイ「・・・よけいわからなくなつた」

そう、前衛組が会話している間に大鳳は頑張っていた

大鳳「セイレーン達!!今すぐに基地に帰って指揮官様（と天喰くん）に会いたいから
さっさと全滅しなさい!!」

そして本来はそこそこの時間がかかる艦隊を大鳳一人で全滅させた・・・

夕方

曇天「おゝい、天喰くん！そろそろ帰る時間だぞおゝ」

天喰くん「あい!!」

そしていそいそと帰る準備をすると・・・

ドンガラガツシヤアアアアアアアアアン!!

壁を破壊してやってきたのは……

曇天「うおおい!? 大鳳!! また壁を破壊して迎えにくんな!? 前は窓ガラスを破壊してきたろ!!」

大鳳「このほうが早く着くからいいんです!!……お迎えに来たよ天喰くん!!」

天喰くん「あ! おかあしやん!! おかえりなさい!!」

大鳳「ただいま♪ ご飯食べに行くよ!」

食堂

エンタープライズ「く、しまったな……」

赤城「どうしたの? エンタープライズ?」

エンタープライズ「ああ、赤城か……エセックスに先に食堂で私の分も頼んどいてくれって言ったんだが……まさかこれとは……」

エンタープライズの前には唐揚げがあつた……しかし、その淵には大量の黄色いす

つばいものが……

昇龍（あ、そういえばエセックスが

エセックス「先輩にレモン嫌いを治してほしいのでこれにします!!」

……つて言つてたけど、あの人割と鬼畜じゃね？

……と思いながら隣で天喰くんと一緒にエビのグラタンを食べている昇龍
すると隣の天喰くんが……

天喰くん「昇龍お兄ちゃん……エンタープライズお姉ちゃんはなんでレモンを食べないの？」

昇龍「ああ……ええ……まあ……あの意味極度のレモン恐怖症なんだよ……」
天喰くん「……嫌いな？」

昇龍「……うん……あの人にレモンのレでも見えたら失神するくらい」
天喰くん「……どうにかできないかな」

昇龍「……いや、無理だろ……待てよこれなら……ちよつと天喰くん耳貸して」

赤城「そ、そう……あまり無茶はやめてよ？前に東海が暴走したときレモンぶつけられて倒れたんだから……」

エンタープライズ「……ああ、あの時は本当にあの世が見えた」

そう懐かしい会話をしていると近くで昇龍と天喰くんの声が聞こえた

昇龍「天喰くん？レモンおいしい？」

そういいながらレモンをかじる天喰くんがいた

天喰くん「うん！おいしい♪おいしい♪」

エンタープライズ「……すまん、赤城。厨房に行つてくる」

赤城「え、何を……まさか、厨房にあるレモンをすべて食べる気!?」

エンタープライズ「……ああ、そうさ」

赤城「やめなさいエンタープライズ!!あなたの体(内臓的に)が持たないわ!!」

エンタープライズ「離してくれくれ赤城……なんか、今ならいけそうなんだ……」

そして厨房に走り出したエンタープライズ……

数分後

そこには満足な笑みを浮かべ、白く燃え尽きたかつての英雄がいた・・・

後にこのエンタープライズのレモン事件を唆した昇龍と天喰くんは

天喰くんは赤城にデコピン一発を食らい

昇龍は正座されて膝の上に漬物石を置く罰を受けた・・・

昇龍「なんか僕だけ罰が重すぎませんか!？」

夜

大鳳の部屋

大鳳「それじゃ、お休み天喰くん？」

天喰くん「……うん……お休み……おかあしやん……スヤア」

大鳳（ああ、本当に可愛い♡天喰と子供ができたらこんな感じなのかな？……つて
ちがうちがう!!し、指揮官様との子よ!!け、決して天喰が好きだとかは違います!!）
……と誰も聞いていないのに否定をする大鳳だった

翌朝

大鳳（さてと……そろそろ天喰くんが起きる時間帯ね……早く拝まないと……あれ？なんか大きいわね……）

日課になった天喰くんの寝顔を拝もうとしたが胸にはいつもの天喰くんの頭ではなくいつもの大きさをした銀髪の青年だった

天喰「く、くるしい……」

大鳳「天喰!?!もとに戻ったのですか!?!」

そして廊下に移動させて言う

大鳳「皆!天喰がもとに戻ったわ!!」

東海「本当ですか!?!相棒!!起きてますか!?!」

曇天「なに!? 本当か!?! いや、誰?」

昇龍「. 天喰ってこんな顔でしたっけ?」

月影「. 天喰くんのほうがよかった」

東海「ちよつとみんな!?! って相棒! 起きてください!!」

天喰「う、うゝゝゝん は!?! 俺はいつたい何を!?!」

東海「よかった!! 無事なんですわね!!」

天喰「ああ、なんか柔らかいものに包まれる夢を見たんだが天国のような地獄のよう
な場所だったな」

曇天「なんだそりゃ」

天喰「. あと、東海。俺のここ数日の記憶がないんだが知らないか?」

東海「. いえ、知っていますが知らないほうが身のためですよ」

天喰「え、なんか逆に気になるんだが」

大鳳「えつと 大丈夫ですか? 天喰?」

天喰「あ、ありがとう」

母さん」

東海「え……」

曇天「ちょw……母さんってw」

大鳳「天喰……／／／／／／／／／／」

天喰「え、ちよつと!!俺、今なんて言った!?!」

・ ・ ・ ちなみにあとで天喰が月影にこの数日間何があったのかを聞き理解すると

天喰「こ、殺してください……／／／／／／／／／／」

・ ・ ・ しばらくあまりの恥ずかしさに部屋から出れなかったそうなの

迫りくる魔の手

大鳳「・・・天喰、記憶が戻ったんですか？」

天喰「お、おう！だ、断片的にだがな!!」

大鳳「・・・よかった・・・では、指揮官様に東海、先に失礼します」

指揮官「・・・ああ、いいぞ」

パタン

大鳳「・・・天喰、なんで」

・・・指揮官様の執務室から出てぼつりと眩いてしまった

指揮官様の様子からして何か隠しているのでしょうか・・・それに天喰のあの癖は嘘をついているときの・・・

もう最近はずっと天喰の行動を陰から観察をしているので行動や癖がわかってきたのである

部屋を出たふりをして執務室の扉に耳を立てて聞く

東海「・・・なんで戻ってきているって嘘をついたのですか？」

・ ・ ・ やはり、東海も相棒って言うほどの仲だからなのか気づいていたようだ
天喰「 ・ ・ ・ やつぱり無理でしたか ・ ・ ・ はい、戻ってきているふりをしていました」
扉を隔てた向こう側の部屋で天喰が打ち明けた

・ ・ ・ なんて嘘なんかを

大鳳「 ・ ・ ・ そんなに大鳳のことが信用できないのですか？」

・ ・ ・ 今朝だつてそうだった戻っているふりをして食堂で他のKAN—SENと仲良
く話していた

自分も羨ましくて話に加わろうとしたけどあなたから話しかけてくれた ・ ・ ・

・ ・ ・ うれしかったのにアレは全部演技だったんですか？みんなをずっとだましてい
たんですか？

そう思いながら執務室の扉から離れて自分の部屋に戻っていった ・ ・ ・
頬に自身の瞳から出た水滴を流しながら

アズールレーン本部

地下倉庫

・ ・ ・ ここは本投にある倉庫

普段は作戦の資料やそれぞれの基地にいる指揮官の詳細が書いてある紙がある
そんな重要書類がある倉庫だが・・・

「…………ぐふつ…………なぜ、投獄されていた貴様がここに…………」

…………それがぼろぼろに破壊されたいた

部屋にある棚や書類を収めたフォルダーは無残に破かれ、壁や床は大理石でできていたがひびが入っていた

?? 「くく、意外と弱いですね人間って…………あ、僕が神に近い存在になったからか
！」

…………そこには右腕が肥大化しそこからKAN—SENが装備しているような長い筒が生えていて、瞳が爛々と黄色に輝いた異形の怪物がいた

その怪物は今、右手で倉庫の警備を担当していた本部所属の精鋭の警備部隊の体調を
掴み上げていた…………

周りにはその怪物との戦闘で負けた警備員が地に伏せていた

隊長「き、キサマ……どうやってここに入ってきた……」

豚田 太郎!!」

豚田「くつくつく……それは秘密だ……あと、お前……」

ぐしやあああ!!

警備隊長を掴んでいる右手を思いっきり床に殴りつけた

隊長「ごはっ!?!」

豚田「ニンゲン風情があああ!?!この神である僕に人間だったころの腐った名前で呼ぶなあああ!!……今の我が名は創造神 キニコス様だぞおおお!?!」

隊長「……がはっ!? ……知ったことか!! ……神様か何だか知らねえがお前は豚箱に入つとけ!!」

豚田「ふん! ニンゲン風情が神の前で喚くな!! ……まあいい、特別に貴様らには使命をやらう……」

隊長「なにを……な!? やめ!? ……ぎやあアアアアアア!?」

バキツ……

ボキツ……

豚田「……くつくつく……実に美味だったぞ……」

そこにはさつきまでの戦闘の後はなかったかのように豚田以外の人間は消えていた……

豚田「……んか」

警備隊を全滅させまでここにきたのはなにか情報を得るためではなくモノを手に入れるためであった・・・

書類の入った棚をなぎ倒しある重そうな扉の前についた

ぎぎぎぎぎいいいいい・・・

・・・その部屋の扉に書かれていた名前は

「地下最重要隔離保管庫」

豚田「・・・これがか!!」

部屋の真ん中にあつたのは・・・

赤く光るキューブだった……

豚田「さあ、準備は整った!!……待ってるよ……あの空母？」

天喰「……はあ」

今、私は海岸の防波堤の上で一人黄昏れていた
……ますますわからない人の心って

カツン……

天喰「いて……なんだコレ？缶コーヒー？」

一人ぼーつとしていたら後ろから缶コーヒーが当たった

指揮官「ここにいたんか」

天喰「あ、指揮官さん……」

後ろに指揮官さんが缶コーヒー片手に話しかけてきた

指揮官「それ、やるよ」

天喰「あ、どうも……」

指揮官「……やっぱさっきのことか？」

天喰「まあ……はい、そのとうりです」

指揮官「いやあ、あの時急に「前の天喰ってどんな人でしたか？」って聞いてきたからさ？」

……前に指揮官さんに今回のことで聞いてみたが正直にいうと

成れそうでなれない感じだ

天喰「なんだか……わからなくなってきたやいました……別に前の自分になろうとしなくていいって……」

指揮官「……なんで、そこまで前の自分にこだわるんだ？」

天喰「……前の自分になりければみんなが安心して笑顔になれるかなって思ったからなんです」

指揮官「……笑顔つか……みんなを笑顔にすることはいいことだが、戻っているって偽ってできた笑顔なんて嬉しいか？」

天喰「……犠牲は少ないほうが良いです……知っているには指揮官さんと私だけでいいんですから」

指揮官「それってさ……結局は自分は幸せになれるのか？」

天喰「なれませんが、私にはなる資格がありません……仲間を殺そうとした人殺しなんか……」

指揮官「……そうか……大鳳にも言わないのか？」

天喰「……はい、どういふのかはわかりませんが……彼女の笑顔だけは絶対に守りたいんです」

指揮官「……優しく悲しい嘘か」

天喰「……ところで大鳳さんは今何しているんですか？」

指揮官「ん？ああ、今朝に外出許可書を出していたからどこかに行っているんじゃないか？……しかしなあ」

天喰「どうしたんですか？」

指揮官「……噂で聞いていたんだが、最近この基地から近い都市で謎の失踪事件が起きているらしいんだ」

天喰「……なにも起きなければいいですね」

指揮官「……ほんとだよ」

大鳳「……グスツ」

……現在、大鳳は基地から一番近い都市にいた

ただ、自分の天喰が嘘について自分を苦しませているのと誤魔化されている心がなんとも言えないほどつらいものだった

・・・現在の空はまだ太陽が下がらだしたぐらい。探すだけなら時間はある
こうして探すことになった

大鳳（・・・でも、この子を見ていたら思い出しますね・・・天喰が小さくなつてしまつた事件で・・・あの頃は本当にかわいらしかつたですわあ・・・急に母といわれたのは驚きましたが、大鳳の母性が東海みたいに暴走したわけではありませんが解放してしまいました・・・でも、それも今の天喰は覚えていないんでしょうね）

子供？「・・・どうしたの？おねえちゃん？悲しい顔よ？」

大鳳「あ！いえ、大鳳は大丈夫ですよ!!」

子供？「・・・相談になら乗るよ!!」

・・・そういえばあの時の対抗演習の時もそう言われましたね

大鳳「・・・実は大鳳の仲間の一人が記憶・・・昔の思い出が消えてしまつたんです」

子供？「・・・そう」

大鳳「・・・その人が無理に嘘をついて大鳳たちを安心させようとしたのですがそれを知つてしまつた大鳳は少し悲しくて・・・」

そうつぶやきながら迷子になつた子供と手をつなぎながら歩いていた

子供？「ふくくくん、そっか・・・なら・・・」

この僕が慰めようかあ？」

大鳳「……え？……きゃ!？」

……突如として子供のつないでないほうの手が肥大化して大鳳の首を掴み壁に打ち付けた

大鳳「う……ぐ!?!?……貴様……誰なの!?!?……それにこの腕は!?!？」

掴み上げた腕は禍々しくなり所々からKAN—SENという主砲がむき出しになつており、それはまるでセイレーンの特徴と一致していた

子供？「ひひっこれかい？……これは神である僕が特別に下さった力だよ!!」

すると声と体の形が変わつていき声はまるでねつとりとしたような声になり姿も肥えた豚のようになっていった

大鳳「な、なんでここにいるの……」

豚田!!」

豚田「なにつて上司が部下の迎えに来ただけだよ？」

大鳳「誰が……誰が最低なことをした貴様の所に戻る物ですか!!」

豚田「貴様……今、なんて言った？」

ガシツ!!

豚田はもう片方の腕で大鳳の首を絞めた

大鳳「あ……が……い……き……が……」

豚田「下等生物に作られたもの風情があ!?!今の我が名は「創造神 キニコス」様だ

ぞおお!?! 調見でき触れるだけでも感謝しろおお!?!」

大鳳「い……や……だ……あ……の……と……き……の……思いでなんか……」

それにキレたのか絞めた首に力を入れていく……

大鳳「た……す……け……て……天喰（カクツ）」

首を絞められ大鳳は意識を手放した……

豚田「ふん、もうくたばったか……まあいい……元は僕のものだったんだ……お前にはまだ頑張ってもらおうぞ？……あの空母に対してな？」

指揮官「……にしても遅いなあ」

赤城「どうしたんでしょう？指揮官様？」

指揮官「……大鳳が外出許可書を出していたんだけどいくら何でも遅くないか？」

執務室にある窓からは空は真つ黒になっており星が見えてきた

あれから黄昏れていた天喰と別れて執務室で残りの仕事を終わらせた

外出許可書をだして何かしらの理由でこの基地の門限より遅くなる場合は事前に申請するか電話をかけたたりするんだがそれがさつきから来ない……

赤城「そうですね……まあ……赤城は指揮官様の害虫が減るのでいいんですが……じゃなく……さすがに心配ですね」

……今、聞いてはいけないのを聞こえた気がするが気にしないでおこう
しかし、突然……

ジリリリリリリリリリン!!

指揮官「誰だ？こんな時間に？」

赤城「がいty・・・大鳳ではないでしょうか？」

指揮官「・・・もう、隠す気ないやん・・・はい、田中中将です」

「田中中将ですか!?今すぐにテレビをつけてください!!」

指揮官「え、ちよつと!?どうs「いいから、早く!!つければわかります!!」・・・お、おう」

そう言われいそいとテレビをつけたすると・・・

指揮官「な!?豚田!・・・なんだあの姿は!」

テレビをつけるとそこにはどこかの倉庫だろう・・・暗い場所に豚田は映っていた

そして豚田に担がれていたのは

赤城「・・・大鳳!」

気を失っているのかぐったりとしている大鳳だった

すると豚田は犯行声明みたいなのを発した

豚田「全世界に宣告する!!我が名は「創造神 キニコス」!!全世界の首相や王に告ぐ!!今すぐに行政権や国庫の資金を我に収めよ!!従わないまたは我の名を汚したものはアズールレーン本部の新型爆弾をその国に投下する!!それに我には世界のどの軍隊より強い兵を所持している!!嘘だろうとおもうなよおお!?こちらには本部の元帥と一体のKAN—SENにそれぞれの国の役員を人質にしているからなあああ!!・・・解放してほしければ例の空母がいる艦隊をよこせ!!それで交換しよう・・・反抗すればお前たちにとって困る情報を世界に暴露する!!タイムリミットは六時間以内だ!!」

指揮官「新型爆弾って・・・」

「・・・実はアズールレーン本部の地下最重要隔離保管庫内にあった赤いメンタルキューブと警備隊を紛失しました」

赤城「・・・じゃあ東海達が言っていた核つとこののですね・・・恐らく例の空母がいる艦隊というのも海上自衛隊のこと・・・しかしこちらが困る情報って・・・」

指揮官「・・・天喰がセイレーンになったことだろう・・・もし暴露されればアズールレーン本部の世界からの信用はガタ落ちだ・・・これはなんとしても阻止しなければ!!」

赤城「了解しましたわ!!至急、天喰を含む海上自衛隊の招集を開始します!!」

・・・指揮官と別れて一人で考え事をしていた

天喰「・・・なんでこの戦争は終わらないんだろう・・・みんなもセイレーンも武器を捨てて話し合えばもしかしたら戦わなくていいのに・・・」

すると基地内放送で・・・

「全KAN—SENの皆さん!!至急、グラランドに集まってください!!」

天喰「ん?どうしたんだろう?」

とりあえず言われたとうりグラランドに向かうか・・・

グラランドはすでに全員集まておりしばらくたつと指揮官さんが前にたつた

指揮官「・・・さつきまでテレビを見ていた人は知っているかもしれないけど・・・さつき

豚田がうちの鳳やアルバード元帥を人質に取って犯行声明を出した!!」

高雄「な!? 指揮官殿!? それなら今すぐにもそいつの所に向かうべきでは!」

指揮官「確かに助けに行きたいってみんな思うかもしれない!! 特に重桜の皆は!! しかし、あちらは海上自衛隊を要求してきた!!・・・上層部はいま、元帥がいらないから幹部が判断しているがあちらの要求を呑むことになった!!」

ホーネット「でも、それって海上自衛隊の皆が危険じゃ!」

指揮官「だけど俺たちもはい、わかりましたって行くわけではない!!そこで海上自衛隊の皆は特令をだす!!大鳳たちを人質に取っている豚田を無力化及び赤いメンタルキューブの回収を命ずる!!あとで執務室に集合!!・・・他の皆は現場でやし馬ができるかもしれないから警備を頼む!!では解散!!」

く執務室く

曇天「・・・にしてもこれなんだ?」

月影「・・・なるでセイレーンの一部を移植した感じ」

指揮官「すまない、こんな重役を押し付けて・・・」

東海「いいんですよ、この状況では僕たちしか動けないので・・・しかし、セイレー

ンなら月影のEMP効くかな？」

昇龍「効くんじやないかな？あの作戦でも急造とはいえ人型にも効いたんだから」

東海「だといいですけど・・・天喰さん、大丈夫ですか？」

天喰「あ、いえ・・・なにも・・・」

東海「・・・まだ、根に持っているんですか？」

天喰「いえ、大丈夫です・・・これは私たちにしかできないことならなおさらやらないと!!」

指揮官「・・・よし、みんな頼むぞ・・・」

・・・こうして私たちは豚田のいる現場に向かった

復讐

「工房」

ここは建造所の一角にある工房・・・

そこにはいろんな機械が設置されており明石がよくいる場所であった

しかし、今は大鳳が人質にされた事件が発生しておりみんなは現場の野次や交通整理の手伝いに行っており誰もいなかった

そのなかに一つだけ違うことをしている人がいた

?? 「・・・これね」

その人物の前にあつたのは天喰専用の改造後の装備があつた

これは本来なら怪我を完治しリハビリを終えてから改造を行う予定だったが天喰の記憶喪失と心神的外傷（トラウマ）により改造計画は先送りになり工房で保管していたものだった

?? 「・・・さてと私の天喰の手伝いに行こうかしら♪」

その人物はタコのような臙装をうねらせながら微笑んでいた

豚田が犯行声明を出して私たち海上自衛隊の皆は現場に到着した

東海「海上自衛隊たたいま到着しました!!」

トーマス「ああ、来たか」

昇龍「トーマスさん・・・状況は？」

トーマス「キニコス・・・豚田はアズールレーンの管理下にあった大型倉庫の一つを占拠した・・・君たちが来るまで何名かの対KAN—SEN鎮圧部隊を潜入させたが通信がつかまらない状況だ」

倉庫の周りには憲兵の人が監視していて周りにはテレビ局の人が報道に来ていた

トーマス「・・・重大だな・・・君たちの役は」

月影「・・・ごもつともだ・・・んで自称創造神は今何してる？」

トーマス「・・・今の所動きはない。それに豚田の要求に対して各国のトップは要求を呑まないそうだ」

東海「しかしどうやって本部にあった赤いメンタルキューブを手に入れたんでしょう？」

トーマス「・・・俺も怪しいと思つて本部にいた役員に監視カメラなど見たが豚田の

姿なんて写っていないかった。あんな特徴的な格好だ普通目立つはずなのに一ミリも入っていないかった」

「……ますますわからなくなってきた

セイレーンの技術か？ オブサーバーだつてEMPができたくらいだし光学迷彩とか作れそうだしな……でも、セイレーンが関わっているなら無理にアズールレーン本部に忍び込んで赤いメンタルキューブを手に入れるよりもらうほうが楽だしリスクもない……

天喰「……それより大鳳さんたち人質の救出を優先しましょう」

トーマス「そうだな……こちらからでもできるだけサポートをする」

こうして海上自衛隊の皆は中に入っていった

中は気味が悪いほど静かだった……

曇天「……盛大なお出迎えを警戒したけど来ないな……」

東海「そうですね……月影と昇龍は二人でそれぞれの部屋の中を探索してください……

曇天と僕と天喰さんは道の確保と念のため退路の確保を……」

全員「「「了解」」」

臨時の旗艦になった東海から命令をもらいそれぞれスタンバイする

天喰「……………」

東海「天喰さん……怖いですか？」

天喰「い、いえ！大丈夫です!!」

東海「虚勢は張らないほうが良いですよ……大丈夫ですよ僕たちを信じてください」
そして、部屋の中に突撃するが……

月影「……だれもない」

鎮庄部隊との通信が途切れるくらいだから警戒したが誰もいなかった

その代わり……

東海「……なんで銃の葉莖は落ちているのに戦闘跡がないんだ？」

……戦闘があつたなら血痕などがあつてもいいのに綺麗にない

東海「……全員警戒を」

そして最後の残っていた豚田がいるであろう倉庫の部分の部屋に入ろう

としたが……

「あ、天喰？……」

東海「な!?人の声!？」

入ろうとした扉の近くにあつた暗い通路の向こうから

大鳳がふらふらと出てきたのだ

大鳳「天喰！助けに来たんですね!!」

天喰「大鳳さん!?無事だったんですか!？」

大鳳「はい！あいつの隙をみて逃げ出してきたんです!!」

曇天「そうか……じゃあ、あとはおっさんだけだな……すまんが豚田がいた場所まで案内してくれるか？」

大鳳と思しき人物に近寄つた曇天……

しかし……

「ニンゲンって本当にバカですね・・・」

曇天「なんどカアアアアアアアン!!」

突如、曇天の体が吹き飛び入ろうとした扉を突き破り壁に食い込んだ

東海「曇天!？」

??「やつぱり、人間ってバカだよねえ?大切な仲間がいたら助けたくなくなるっていうのはさあ!？」

・・・大鳳が何食わぬ顔で歩いてきた

東海「お前、何者!？」

大鳳?「誰ってひどいじゃないかあ?僕だよあ!

キニコス様だよおおお!?」

大鳳だった体の形が崩れそこから一人の男性の形になった・・・

昇龍「ええ!?豚田!?なんだよソレ!」

豚田「くつくつく・・・これは神が私に下さった力の一つだ・・・」

東海「・・・セイレーンですか」

豚田「ん?あんな海臭い奴らと一緒にするでない・・・まあ、いい・・・お前たち・・・
やれ」

ザザザツ!!

するとどこからか手下であろう物体が現れた

しかし、その姿は・・・

天喰「な、なんですかその姿は・・・」

それはまるで人間の各パーツをつないでできた生物の様だった

そしてその生物から・・・

タスケテクエエエエ

コンニチハ!!コンニチハ!!

オカアサン!!タダイマ!!

キヨウノテンキヲオツタエシマス!!キヨウノテンキハ・・・

東海「・・・まさか僕らの基地の近くであった失踪の噂って」

豚田「そうさ!! ああ、可愛そうな人間たちだなあ!! お前たちがそこにいるせいで僕がこいつらをこのような形でやらないといけないなんてねえええ!!」

昇龍「何を言っているんですか!?! あんたもその姿に換えたのが悪いんですよ!?!」

豚田「・・・なにを言っている? 人間なんて勝手に勝手に増えていく生物だから別に何をしてもかまわないだろう? ・・・あ、そうそうお前たちに特別いいもの見せえやる」

バキ!! ポキ!!

すると豚田は形をかえ少年の姿になった・・・

月影「・・・うそでしょ」

豚田「ここで本部に入った方法を教えてやる・・・僕は喰った人間に変身でき、さらに自分の手下にでいるのさ。つまりさつきやってきた愚かな人間たちも僕がさつきの手でやったらまんまとまんまと引つかかってさ!! あの顔は傑作だったよ!!」

だからさつきまでの部屋は葉莖があつたけど戦闘の跡がなかったのか

・・・こいつ人間の心も捨てたのか

天喰「じゃ、じゃあ・・・さつきの大鳳さんは・・・」

豚田「ああ? これのことかい?」

さつきのキューブを見せるときみたいに豚田の体がうごめき豚田の体から

大鳳「あ……ま……く……い……」

大鳳が苦痛な表情で埋まっていた……

天喰「……この外道が」

豚田「さてと私のネタを知ってしまったんだ……代償としてお前たちの命をもらおうよ」

東海「くそ!!くら(ドカアアアアアン!!)……ごはっ!!」

豚田が構え東海達が警戒した瞬間、突然豚田の姿は消えてその代わりに東海が立つていた場所に豚田が立つており東海は吹き飛ばされていた

昇龍「なんだそれ!? セイレーンでもできないぞ!」

豚田「ああ、それはこれだよ」

豚田の体が形をかえ中から赤いメンタルキューブが埋め込まれていた

豚田「ひひっ!! どうやらこのキューブはとも素晴らしいものらしいから神である僕がわざわざセイレーンになって使っているんだ!」

なるほど……だからか……今の豚田はセイレーンになっているからあのキューブも使える……それであるスピードとパワーを得たのか

曇天「うらあ!!」

キイイイイイ!!

豚田に飛ばされた曇天が「カリバーン」で攻撃するが・・・

豚田「・・・くつくつくなんだあ？今のはあ？」

曇天「・・・おい冗談じゃねえぞ」

曇天のレーザーが効いていなかった

・・・正確には効いていないというより吸収されているといえいいだろう

東海「くらえ！」

東海もヤケクソ半分でレールガンを打つが

豚田「ふん!!」

当たってダメージは与えた・・・

しかし当たって抉れたところから再生していった

豚田「くつはっはっはっは!!お前たちの未来の兵器はそんなものか!!しかし、相手が

悪かったな・・・なにしろ神だから!!」

昇龍や月影も攻撃するがまったく効いていなかった・・・

月影「・・・E M Pを使いたいけど取り込まれた人質に被害が及ぶかもしれな

いから使えない」

豚田「さてと・・・芸は尽きたか？ならこちらから行くぞ？」

そうして豚田は手下である異形に指示を出した

東海「くそ！キャスター隊！エンゲージ！」

今回の鎮圧用に改造した隊を発進させて応戦する

「きゃん！」

「あつはははは？！こんにちは？」

「さようなら！タスケテクエエエエ」

曇天「・・・こいつら!? もろいけど数が多すぎる!?!」

さつきまでは見た感じ六体しかいなかったのにいつの間にか大量に攻めてきた

それもそのはず・・・そいつらが出てきているのは・・・

豚田「ほれほれ? こつちは無限のエネルギー源があるからいくらでも出せる

ぞおおお!? 確か君たちは演習の時言ってたよねえエ!? 数できたら危険だつて

さああああ!?!」

豚田は体中を肥大化させ肌から異形を生み出していた・・・

東海「・・・このままじゃ!? 手数が欲しい!・・・天喰! 援護を!」

東海は天喰に援護を求めるが・・・

天喰「・・・つはあ!?!・・・つはあ!?!・・・つはあ!?!」

天喰は弓をひいて艦載機を出そうとするが手が震え引けなかった

異形の顔に出ているのが人間に似ておりあの時のトラウマが出てきたのだ・・・

豚田「ぶはははははは!! ざまあないよねえ!? だつてえ君が言っていた「海上自衛隊は人には攻撃せずに助ける」つてねえ!」

東海「こいつ!?!? ……ごほお!」

しかしとうとう東海達は数を捌き切れずに押し負けてしまった……

東海達は異形に纏わりつき拘束されて身動きが取れなくなつた

豚田「くつくつく……さてと貴様らも我が力の一部にしてやりたいがその前に……」
豚田はいまだに震えている天喰のところに向かつた

天喰（動いてよ! お願い動いて! 私も戦わないといけないのに……なんで……体がちつとも動かないんだ……）

豚田「あひやつひやつひやつひやつひやつ!! みつともないよねえ! あの時の面影は全くなくまるでおびえている子犬みたいだな!! そんなんじやその弓も刀も引けないとおお!!」

天喰「う……だ、黙れ!」

豚田「……さてとそろそろ始めるか」

豚田は自身の腰部分から枝のような触手を伸ばし天喰を捕まえた

天喰「……うぐ!」

豚田「さてとカメラは回っているな?」

天喰の近くに三脚をたてカメラを載せて起動させた

そして豚田は演技かかったように始めた

豚田「れーでいーすえんじえんとるめーん!!世界中でこれを見ている人間ども!!只今より大罪人天喰の裁判をはじめまーす!!そんな天喰の罪名はー!」

ゴキツ!!

天喰「ごふっ!?!」

豚田は天喰の罪名を言うのと同時に顔面や体をセイレーン化した腕で殴りだした

豚田「神である僕に殴ったこととー」

バキイ!!

豚田「僕にー反論したこととー」

ボキツ!!

豚田「僕よりーイケメンであることとー」

ガンツ!!

豚田「お前がー僕の周囲からの評価をー下げたことでーす!!これにより大罪人天喰の判決はー死刑に決まりました!!」

ヒュン!!

天喰「あ!?!?.....が!?!?.....」

豚田の触手がいつかやったオブサーバーが天喰のメンタルキューブに触るかのよう

に侵入してきた・・・

しかし、今回は触るのではなく握り潰しに来ているが・・・

豚田「ああ！いい顔だなあ！安心しろコレが破壊されても私のエネルギーになるだけだ・・・さつきもレーザーを受けたがエネルギーに変えたのさ・・・しかし、我は神だ・・・死なないチャンスくらいはろう」

素晴らしい・・・体から排出したのは

大鳳「ごほ!?げほげほ!」

豚田「けけ、大鳳・・・お前にこいつを助けるチャンスをやろう」

大鳳「こいつつて・・・天喰!?・・・天喰を開放して!」

天喰「た・・・い・・・ほ・・・う・・・さ・・・ん・・・」

豚田の体から解放された大鳳はメンタルキューブを破壊されそうになる天喰をみてやめるよう請う

豚田「・・・ああ、綺麗な顔だ・・・それはなあ・・・」

大鳳「……神である私の妃となれ!!」

天喰「お前!?!なにを!?!」

大鳳「……………なれば天喰達を無事に解放しますか」

豚田「もちろん、アイツらがちよつかい掛けない限りなのもしい……………」

天喰「だめです!大鳳さん!言ってしまったら!!ウグツ!?!」

豚田「喚くな!負け犬の遠吠えが!」

大鳳「……………ります」

天喰「た……………い……………ほ……………う……………」

大鳳「私……………大鳳は……………偉大なる創造神 キニコス様の妃に……………なります」

豚田「……………く……………くはははははははは!!まあ、当たり前だよなあ?モノが本来の

主人の所に戻るのは当たり前だよなあ？」

天喰「大鳳さん……」

大鳳「……いいんです、天喰……これは大鳳のあなたがそうなってしまったせめての償いです……あなたが無事ならそれでいいです」

天喰「ツ!？」

豚田「……では……我が妃よ……誓いに……我に接物を……」

そう言いながら豚田は顔を大鳳の顔に近づけさせた

大鳳「……さようなら天喰……幸せに生きて……」

大鳳のあなたがそうなってしまったせめての償いです……

……さようなら天喰……幸せに生きて……

……まただ……また、自分のせいでこうなってしまった

大鳳さんのせい？

ちがう

自分がこの世に生まれてしまったからこんなことになってしまったんだ……

罰なら大鳳さんより自分が受けたほうが良い私が死んだほうが彼女は自分より幸せになれるはずだ

自分なんか・・・

自分なんか彼女達と会っていないほうが・・・

ピキ・・・

天喰のメンタルキューブは豚田の触手の握力に耐え切れずに少しずつヒビが入って

きた

もう自分は死ぬのを予感しそつと目を閉じた

．．．ふふ♪本当にそれでいいの？

(いいんじゃないかな？自分と一緒に居るよりほかと一緒に居たほうが彼女にとっては幸福だ)

．．．あいつに取られてもいいの？

(多分大丈夫でしょ．．．きつとあいつは見た目はアレだけどきつといいやつかもしれないわい．．．)

．．．でも、アイツは彼女をモノとしか見てないわよ？

(それでもこんな自分よりあつちにいたほうが良い．．．)

……本当は、誰かが彼女を幸せにするのを見るんじゃないやなくて自分には彼女とずっと一緒に居たいんでしょ？

(……でも、もう遅いよ……もうあっちの物になったんだから)

……あら？あきらめちゃうの？

(ちがうんだ……この……なんだろう……気持ちかな？……あの時ベッドから起きた時に彼女を見てからずつとあるんだ……これがあるから……なんか……彼女と一緒に居たいけど……近づきにくいかな？)

……彼女にはそれを伝えないの？

(どうやってなんだ？……もう、いなくなるのに?)

……簡単よ、奪っちゃえばいいのよ

(奪う?……それって罪なことじゃ?)

……ああ、もう!……今!あなたが大切に思う相手が取られようとしてるの!今更、悪いだとかどうとか気にしてる場合!?

(……違うな)

……大切なものを守るためなら少々の罪も犯さないといけないときがあるものよ? (できるかな……)

……最初から失敗を考えたなら余計失敗するよ?……こういう時こそ勝利への予測

をしないよね？

(・・・やってやるよ)

・・・ふふ♪これだからいいわ♪私の天喰？・・・あとこれ、あげるわ？

天喰「・・・返せ」

体に鞭を打ち触手を引きはがそうとする

ひびが入っているキューブが動いたことによつて痛もうが関係なくただ目の前の現実を塗り返すためにただ動く・・・

天喰「……大鳳を……返せ」

豚田の顔がもう目の前に迫っている

他の皆は豚田の触手に捕まっており何か叫んでいるがもう聞こえない

大鳳「……天喰……もし、KAN—SENにも来世があつたら……また、会えるかな？」

豚田（くつくつく……勝った！ようやくあの空母に一矢報いでやったわ!!）

豚田は勝利を確信した

天喰は記憶喪失とトラウマで戦える身でなく他の海上自衛隊も拘束に成功した

豚田（さあ！大鳳！我と接物をし永遠の所有物になるのを誓え!）

もどかしくなったのか豚田は大鳳の体を掴み無理やりしようとした

斬!!

豚田「は？」

自身の大鳳を掴んでいた触手は消え血があふれていた
そして大鳳もその場から消え離れたところにいた

大鳳「・・・え、なんで？」

自分はあと少しで豚田とキスをするところだったが突然衝撃を感じて気が付いたら
豚田から離れたところにいた

しかし、その衝撃を加えた正体はすぐに分かった

??「あつぶねえ・・・ギリギリだったわ・・・」

そこには銀髪に改造で新しく新調した袴と弓と刀を持ち、新しく白い布地に背中に三
本の足の生えた黒い鳥の刺繍された上着を着る青年がいた

大鳳「……え、天喰なのですか？」

天喰「……おう、ただいま……大鳳……」

第四章 帰るべき場所

告白

天喰「……ただいま……大鳳」

あつぶねえ……あと、少し遅れていたらマジでクソ豚野郎に所有物宣言されるところやったわ……

大鳳「……本当に、本当に天喰なのですか？」

天喰「おう、そうだが？」

豚田「き、キサマあ!? どうやって戻ったんだ!？」

天喰「ふふん! わかんねえだろ! ……ごめん、俺もわからん。なんでかはわからな
いけど急に頭の中で弾け飛んで思い出した感じ?」

豚田「何をふざけたことを!」

豚田の腕から生えた主砲から光線が来るが天喰は大鳳を抱えたままひらりと避ける

天喰「あーらよつと!」

斬!!

離れるついでに東海達が捕まっている触手を刀で切る

東海「ごほ！ごほ！．．．いてて．．．えつと、本当に相棒ですか？」

天喰「ああ、そうだぜ？」

東海「．．．どうやら本当のようですね。いつぞやの嘘ではなく」

天喰「う．．．それはごめん」

東海「はあ．．．ま、今はうれいですがとりあえず目の前の自称創造神をなんとかしないと．．．では、行きます．．．あ、でもこれにしよ．．．一回言ってみたかったんですよ．．．」

「戦う理由はできたか．．．相棒？」

天喰「．．．ああ！」

こいつは俺から大切なものを奪おうとした．．．だから！

今、ここでこいつを!!

天喰「．．．．．殺す!!」

・・・どうしてだ!! どうしてあと少しで勝利の果実を掴めたのにあの空母があ!?

豚田「死ねえ! 下等生物があ!?

豚田は怒りのままに光線や触手で攻撃するが・・・

天喰「・・・はあ!!」

天喰が刀を振るい衝撃波で跳ね返す

曇天「・・・いや、レーザーを刀で消すって・・・何してんだよ天喰」

天喰「なんか・・・今体がすごく軽くて、力が湧き出るんだ」

・・・うん、どういうわけか体が戻ったからかわかんないけどすこぶる元気が出てくるんだ

天喰「ま、そのの考察はあとにしておいて・・・どういう状況?」

東海「ざっくりいうと曇天の「カリバーン」が効かない・・・僕のレールガンも効くけどすぐ再生される・・・しかもそね再生に使われるエネルギーも奪った赤いメンタルキューブから取っていてアイツの体内には人質がまだいるって言う感じですよ」

・・・あれ? 割と詰んでね? アイツから赤いメンタルキューブを回収しつつ人質回収してあいつをブチ止めさないといけないんだよな?

あと、豚田に近づくにも・・・あの・・・人間の慣れ果てを倒していかないとな・・・

天喰「・・・じゃ、東海・・・ごめんけどあの異形の相手を頼んでいいか?・・・やつ

ぱり少し殺しづらい」

昇龍「え、天喰……一人で立ち向かうの？」

天喰「おう、まずこの倉庫であいつが大人数相手に暴れて壊れたらこつちが困るし：：なにより人質がどうなるのかもわからんからな」

東海「……了解、異形の相手はお任せを」

そう言い東海達は異形の相手をしながら天喰の邪魔にならないよう外に誘導していった

俺は大鳳に隠れるよう促し怨敵と向かい合った

天喰「さーてと……ようやくお前と差しでできるな」

豚田「ふざけるな！ふざけんな！我は認めんぞ！こんな現実を!!」

豚田がまたしても触手やレーザーで攻撃してくるが……

天喰「はあ、学習しろよ……キャット隊、エンゲージ」

天喰は懐かしく思う弓の感触を思い出しながら新しく作られた艦載機を放った

放った矢がその新たなる機体に変わり触手とぶつかりそうになった瞬間・・・
機体が一つになるよう集まりそして・・・

バリバリバリ・・・

ズドオオオオオオオオオオン!!

その機体から雷鳴が鳴った・・・

豚田「な、なんだと!?!」

天喰「・・・改めてみるとすげえ威力だな・・・E・M・L」

それは下部に専用のレールガンを乗せ飛び回る機体

機体名称「X-02s」 ストライクワイバーン

・・・うん、どうやって出たんだよこの機体

東海の主砲レールガンほどの威力ではないけど束になったらいけるな

でも、東海が攻撃したときみたいに再生を始めているな・・・

ぼこぼことなりながら破壊した触手は再生するのを観察しながら撃つてきたレーザーを避ける

豚田「ええい!? 避けるなあ!?! . . . 我が神兵よ! 向かうがいい!!」

天喰「. . . ゼア隊 . . . 発艦」

豚田から出た異形に向かって別の新しい矢を放った

キイイイイイイ . . .

その機体から赤いレーザーが出て

出てきた異形を切り裂いた

機体名称「A.D.F.X-01」モルガン

. . . うくん

なんだろう、アイツは戦いに関しては自分の力に狂信して自分自身は素人だから普通によけられているけどこっちの決め手もないから決着がつかんな . . .

. . . あいつはセイレーン化したんだからどこかにキューブがあるんじゃない? 私のこと天喰?

天喰「……………え？」

豚田「よそ見とはいいい度胸だなああああ!?」

あつぶな!?今、顔ストレスをレーザーが通つていったわ……

それより今、声が聞こえた気がするけど……現状、突破案がないからやってみるか……

天喰「全機、飽和攻撃!!」

豚田の全方向からミサイルやレールガンやらが飛んでくる

豚田「ふん!!効かんわあ!!この神の体にそんな攻撃……」

天喰「……………見つけた」

艦載機が攻撃している間に天喰は豚田にすれ違いさまに切った

豚田「あひやつひやつひやつひやつひやつ!!残念だったなあまだ生きている……」

天喰「あ、ごめんけど……これ、もらうよ?」

……天喰の手にあつたのは

豚田「な!?!それはあ!?!」

赤いメンタルキューブではなく黒いメンタルキューブだった

そしてそれを……

バキイ!!

粉々に粉碎したその瞬間……

豚田「ぐ!?ごほ!?ごほ!」

黒いメンタルキューブが破壊された・・・

つまり、豚田はセイレーン擬きではなくなり普通の人間に戻った

人間ではあの赤いメンタルキューブは有害だからな!

豚田「お、おのれえ!?よくも神に対してえ!」

天喰「うっせえ!!・・・大切なものを守るためだったら神だろうが殺してやんよ!!」

豚田「こ、このお!!・・・ごほ!?おええ・・・」

うわ・・・こいつゲロみたいに元帥などの人質たちを出しやがった

豚田「く、くそお!!」

そう言いながら少しずつ人間の面影に戻りつつある豚田は人質が全員出てしまっ
危険と判断して窓ガラスを破り逃げた

天喰「あ!待てやごらあ!!・・・つくそ!!おい、大丈夫か!」

逃げた豚田を追いかけたがひとまず人質の安否を確認する

元帥「ぐほ!?ぐほ!・・・あ、天喰か?・・・私は確か・・・自室で仕事をしたら部
下に化けた豚田に食べられて・・・」

天喰「おお!おっさん!無事か!ここはアズールレーン管理下の倉庫だ!外に憲兵が
いるから逃げろ!」

元帥「……だからおっさんって……わかったってこい」

天喰「……感謝します……大鳳！人質の避難誘導を頼む！」

大鳳の名を叫び倉庫の陰に隠れておいた大鳳に頼む

大鳳「了解しました！……天喰！早くあいつを！……これ以上アイツの手ごまを増やすのも！」

天喰「わかった！」

そうして豚田が割った窓から出てゼア隊の一機のADFX-01を召喚していつの間にかできるようになったバーサーカー乗りで追う

天喰「指揮官！指揮官！聞こえるか!？」

指揮官「え!?!この声って天喰!?!記憶は!?!ってそんなことよりどうした!?!」

天喰「豚田から人質と赤いメンタルキューブは回収できたけど、本人が逃走中している！今、俺が追いかけているけど……このあたりの住民って避難している!?!」

指揮官「ああ！万が一のために全員避難してる！……ちなみにこっちは東海が倉庫の外に連れてきたなんか変な形の肉塊の処理をしている!!」

天喰「了解！そろそろ大鳳が人質を連れて外に出てくるから気を付けてな!!」

指揮官に久しぶりに連絡を取りつつなお豚田を追いかける……そして

天喰「……いた!!」

ボロボロになった体を無様に引きずりながら逃げている豚田を発見した

豚田「はあ!?・・・はあ!?・・・な、なぜ神の僕がこんな目に!!」

一度セイレーン擬きになって人間に戻ったせいなのか体のほとんどがぐちゃぐちゃになったおり唯一形を保っている右手を使いながら逃げていた

天喰「見つけたぞ!豚野郎!!」

空から豚田の進行方向を塞ぐように天喰が降り立った

豚田「ひ、ひいい!!」

情けない顔をした豚田はまるで蚊を追い払うかのように必死に右手を振り回した

豚田「な、なぜだ!?なぜ武器が出ない!?」

??「あく、やっぱりこういう結末になるのね♪」

豚田に止めを刺そうとした天喰と豚田の前に一人の少女が何も無い空間から現れた

天喰「・・・オブサーバー」

豚田「ひ、ひいい!?・・・お、おい!セイレーン!どういふことだ!僕に神の力をく

れるんじゃないのか!？」

オブサーバー「・・・あなたはいつから自分を神様でも思ったの?・・・それにその赤いキューブってKAN—SENにしか使えないのよ?」

豚田「そ、それはどういうことだあ!？」

オブサーバー「まあ・・・馬鹿なあなたにもわかるように言ったら・・・人間でもあの赤いメンタルキューブを使えるかっていう実験よ♪」

・・・なるほど・・・彼女らしい

豚田「じ、実験!？」

オブサーバー「そうよ♪っていつでも赤いメンタルキューブは人間でも使える可能性が少しだけあったからその可能性を潰すためにあなたを利用しただけよ?」

豚田「バカな・・・そんな馬鹿なあああああ!？」

あまりのショックか豚田は頭を地面にこすりついたり打ち付け始めた

天喰「・・・おう、えぐいな・・・ところでこの改造の奴だけど・・・どうやって持ってきたんだ?」

オブサーバー「簡単よ♪あなたの中に転送して体内で改造を始めたのよ♪」

・・・ん?え、体内で?

天喰「・・・それってお前が体内に出てきたってこと?」

オブサーバー「正解よ♪・・・それよりさっさとそいつを殺したら？私帰るから」
・・・そうだな・・・早くやらんとな

そう思いちよつと体をいじられた感覚にショックを受けながら腰から刀を抜き豚田の脳天を切ろうとする

豚田「ふぎ、ふぎけるなあああ!!?・・・お、お前さえいなければああああ!!?・・・あの女は僕のものになったのにいいいいいい!!?」

天喰「・・・お前、まだそんなこと言うのかよ・・・あと、一つだけ言つとくわ」
そして刀を握ってないほうの手に力を込めて・・・

ゴキヤア!!

豚田「ふぎや!!」

思いつき殴って言った・・・

天喰「……さつきからうるさいんだよ……大鳳は俺のもんだ!!」

そして刀を振りかぶり切ろう

しかし、あと少しだけ早く気づけばよかった

豚田の右手の中に小さな機械があつたのを．．．
豚田「ひ、ひいいい!? ．．．あひやあ」

ピッ

天喰「しまった!?!」
自爆か!?

豚田の体が光った．．．

は全員回収できたけど大鳳がまだ倉庫の中にいる!!」

嘘だろ!?

天喰「・・・すぐに向かう!!」

指揮官「あ!おい、天喰!？」

指揮官の止めを聞かずに倉庫に向かった

く倉庫内く

・・・あの子は大丈夫でしょうか

大鳳は天喰に頼まれたとうりに人質の避難をしていたがまだ倉庫内にいた異形がおり大鳳が殿を務めて人質を逃がしていた

しかし、突如倉庫が爆発し一瞬体制を崩れたが大鳳も人質たちも何とか立て直し外に出たが出口の近くで豚田の子供の変装の材料にされていたあの時の少年が転び、運悪く上から瓦礫が降ってきた

危険に思いつ射的に子供を投げ大鳳が下敷きになってしまった

大鳳「う・・・く・・・」

どうやらさっきの振動で振ってきた瓦礫が異形にもあたり潰れていた

しかし・・・

大鳳「動きませんね……」

大鳳も下敷きになり奇跡的に目立った怪我はないが体が瓦礫に挟まってしまい身動きが取れなかった

無理して動けば体が持たないし瓦礫が崩れて異形たちみたいに潰される可能性があった

大鳳「……これは罰かもしれませんね」

大鳳は諦めかけていた

これは天喰がああなつてしまったこと、アイツの基地で邪魔者を排除したように汚いことをしたことによって本当の神様は大鳳に罰を与えたんでしょう

大鳳「……最後に聞けばよかったですね」

それはいつも頭の中で出てくるあの空母の顔

彼は頼りにもなり面倒見もよくみんなの人気者だった

それなのになぜこんな状況でも思い浮かべるのか？

大鳳「……もしかして、大鳳……」

しかし、神様は優しくないんだろう

大鳳の頭上に大きめの鉄骨が降ってき大鳳に当たる

ことはなかった……

大鳳「……え？」

そこには先ほどまで思っていた銀髪の青年が鉄骨は弾いて大鳳を守った

天喰「……ごめん、遅くなった」

大鳳「……天喰」

天喰「豚田のヤツ……とんでもないもん残していったな」

大鳳「……なんで来たんですか？」

天喰「なんでって……大切な人だから？」

「……大切な人……でも、好意ではないんでしょう」

大鳳「……ありますが大鳳はもう無理です……天喰だけでも脱出を」

大鳳の体はもう出れない……出そうに思っても、もう時間がないでしょう

天喰「……大鳳」

大鳳「……いいんです、これは私が大鳳に対しての罰なんでしょう」

天喰「……大鳳……覚えてるか？……あの作戦前に約束したこと」

大鳳「……え？」

天喰「ほら、言っただじやないか……約束だつて……そのお……なんだ、どうせなら最後に聞きたくてな」

それはあの作戦前にロイヤルメイドのベルファストから聞けといわれたものだった

大鳳「えつと……天喰は大鳳のことをどう思ってますか？」

天喰「え、殺すとかじゃなかった……でも、今なら……そのお……き、綺麗な女性だと思つたよ？」

大鳳「そ、そうですか／＼／＼／」

ほ、本当になぜなんでしょう……

指揮官に言われたらうれしいのは当たり前ですが

なんで……周りの炎ではないのに

天喰に言われたらこんな火照ってしまうんでしょう……

天喰「……ねえ、大鳳……俺も……一つ約束していいか？」

大鳳「?……はい、いいですよ」

天喰「……逆に聞くけど……大鳳はさ……俺のこと……どう思ってる？」

……え?

大鳳がですか?

大鳳「大鳳は……天喰のことは……みんなの人気者で頼られて……か、かつ

こいい人物だと思います／／／／／／」

天喰「……そ、そうか……なら、これを聞いても大丈夫そうだな」

燃え盛る倉庫の中……

彼はそつと大鳳に聞いた

天喰「……大鳳……俺と付き合ってくださいませんか？」

大鳳「……え？」

天喰「そのお……実は俺、大鳳に初めて会った時一目惚れして……ずっと言おうと思っただけど……ようやく言えた」

大鳳「……でも、こんな……こんな、アイツの物になろうとした女ですよ？」

天喰「……んなら、こんな人殺しても付き合ってください」

大鳳「本当に……本当になんですか？」

天喰「……断られたら反省の意味を込めて大鳳と一緒に死ぬ……でも、大鳳は俺に死んでほしくないんですよ？……だからさ」

……本当にずるい人ですね

でも、大鳳もずっと天喰のことを考えていたんです
答えなんか決まっています……

大鳳「……これからも大鳳を愛してください……」

天喰「……うん！あ、これはみんなには秘密な？めんどくさいことになるから……なら、早くここから出ないと……大鳳、今から俺がこの瓦礫を破壊する……破壊した瞬間俺の手を掴め……いいかい？」

大鳳「……はい！大鳳はどこまでも!!」

天喰「よし、なら行くよ!!」

天喰は大鳳が挟まっている瓦礫から離れて刀を抜く準備に入った

天喰「せーの!!」

斬!!

刀が煌めいた瞬間瓦礫は吹き飛び大鳳は天喰の手を掴み天喰は大鳳をお姫様抱っこした

それを確認した天喰は艀装の一部を開放した腰にある甲板が縦に割れ中から砲身が見えた

天喰「収納型電磁迫撃砲……発射!!」

バリバリバリ!!

放たれた砲弾は壁を突き破り外につながった

そして天喰は全速力で走って脱出した

・・・あぶねえ〜一発で成功できてよかったわ

外に出た瞬間、倉庫は轟音を出して崩れた

一安心したところに東海達が駆け寄ってきた

東海「相棒!!無事ですか!!」

天喰「お!東海!こっちは無事だ!・・・他は?」

指揮官「異形は殲滅できた・・・死傷者はゼロだ」

天喰「・・・でも、すまん・・・豚田は逃がしてしまった」

指揮官「いや、いいさ・・・みんなが無事ならさ」

元帥「そうだ、おめでたいことがたくさんできたからな」

あ、おっさん・・・生きてたんだな

．．．それよりなんで周りのみんなはニヤニヤしてんだ？
元帥「赤いメンタルキューブを取り戻せまし、天喰の記憶も戻ったし、あと．．．それ
れに．．．」

新・しい・カ・ツ・プ・ル・が・で・き・た・し・な・!!
ガハハハツ!!と笑う元帥

．．．ん？ちよい待ち．．．なんでもうバレてんだ？

指揮官「・・・そんななんでもうバレたんだ？ っと言う顔をしている天喰に答え

天喰さあ・・・俺との通信のあと・・・通信切ってないだろ？」

・・・oh

まさかと思い通信機を確認するが・・・通信オンになってました

・・・拝啓、おかあさん

私は彼女ができて皆には内緒にしたかったのに数秒でバレました☆

心配になり自分の彼女になったばかりの大鳳を見ると・・・

大鳳（／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／）

すっごい赤くなっていた

大鳳「し、しかし！ 指揮官様！！ 大鳳は指揮官様のことも・・・」

指揮官「大丈夫だよ大鳳？・・・俺は君の幸せな顔が見れたらそれだけでも俺もうれしいさ！！」

うわ、あのおっぱいタッチで逮捕されかけた指揮官の顔じゃねえ・・・

大鳳「・・・指揮官様」

指揮官「そういうことさ・・・だから・・・」

はやく、キスしろおおお!!」

・・・前言撤回やっぱり、うちの指揮官だわ

「「「キース!!キース!!」」」

あと、周りウルサイ!!

どこのクリーニング屋ですか!?

・・・あ、待てよ

確か、大鳳は俺に睡眠剤を入れるときキス（無許可）したよな？
なら、いいかな？

そう思い慌てている大鳳に近寄る

大鳳「あ、天喰!!ど、どうすれば・・・へ？」

右手を大鳳の瞳に目隠しみたいに被せて・・・そして・・・

番外編2 operation name : ☆ユニコーンの初めてのお使い大作戦☆ 前編

これは天喰がシヨタ化事件の二か月後の話・・・

バキイ!!

アルバコア「ひぎやああああ!?こ、来ないでえ!?!」

ここは執務室

執務室の扉だとある攻防が起きていた

逃げるもの・・・アルバコアは執務室の扉を閉め鍵をかけてその追いかけるものから逃れようとしたが追いかける者は斧で扉を破壊して中に入ろうとしていた

そして、ある程度破壊した穴からその鬼は顔を出した

月影「・・・イツ、ジャア〜ニイ〜!!」

と月影が映画館で公開される最新のホラー映画チケット二枚片手にアルバコアを追いかけていた

アルバコア「いやだよ!? ぜつつつつたいいや!!」

どうしてこうなったかという月影は実は大のホラー映画好きでたまたまチケットが二枚手に入ったのでせっかくだからアルバコアを誘おうとしていた（本人はデートではないです、とのこと）

指揮官「いや、その前に執務室の扉を破壊しないでくれる!」
執務室で仕事をしていた指揮官が注意するが

月影「僕は悪くないもんアルバコアちゃんが悪いもん（棒）」

指揮官「・・・棒読みで許されるわけではないぞ?」

するとどこからか可愛らしい足音が聞こえた

ユニコーン「え、えつと・・・お兄ちゃん・・・いる?」

指揮官「ん? どうしたユニコーン?」

グググギと扉を破壊した月影に十字固めをしながら指揮官は聞く

ユニコーン「実は・・・お願いがあるんだけど・・・」

ユニコーン、お使いを試してみたい!!」

指揮官「……てなことがあつたんだ」

天喰「……はい？」

ここは会議室

ここでは指揮官が部屋を暗くして某ネルフ総司令みたいなポーズで話した

天喰「あの……指揮官?……つまり何がしたいんだ?俺たち全員を集めて……」

会議室にはイラストリアス級姉妹にメイド隊、女王陛下が来ていた

指揮官「……そこでだ。皆には緊急ミッションをしてもらおう」

全員「「「「!?」「「「「」」」」」」

部屋が一気に緊張が走った

な、なにをやるんだ!?

指揮官「……では作戦を始める……作戦名は

☆ユニコーンのはじめてのおつかい大作戦☆

・・・だ」

・・・なんだろう

やっぱり俺らの指揮官だなんて思ってしまった

指揮官「作戦の詳細を説明しよう・・・ベルファスト、頼む」

するとベルファストがどこからか持ってきたホワイトボードに詳細を書き始めた

ベルファスト「只今から約26時間後・・・つまり午後2時にユニコーン様はこの基地を出発し近くの商店街で目標の物を買収し近くのケーキ屋でケーキを買いこの基地に帰るという予定です・・・ここまで質問は？」

天喰「護衛つてシリアスがやるのが妥当ほいけど？」
ベルファスト「・・・その本人が今回のお使いリストにティツシュをいれた犯人で

先日、ドーナッツを作ろうとしたら間違えてティツシュをあげてしまいアークロイヤル様が犠牲になってしまった犯人です

・・・ちなみに本人は現在、反省の意味を込めてアークロイヤル様を看病中です」
・・・えええ？（困惑）

あの、ドジメイド・・・なにをしたらティツシュを揚げるっていうスーパープレイをするんだ？

天喰「あと、なんで俺ら？」

指揮官「いやだつてさあ・・・ユニコーンつてさ美少女やん・・・んでこの基地にいるKAN—SEN全員さ美女やん？・・・護衛で出してもしユニコーンに何かあったときに護衛のKAN—SENがナンパとか受けてたらいやだからね!!」

あ、そういう理由・・・

指揮官「・・・では、これにて解散・・・ユニコーンに最高の思い出にしておう!!」

翌日

指揮官「・・・よし!! 忘れ物は無いな!!」

ユニコーン「うん!! 行つてきます!! おにいちゃん!!」

指揮官「おう、行つてら!!」

初めまして・・・ユニコーンです・・・ちよつと恥ずかしいな・・・

今日はユニコーン初めてのお使い!!

実は・・・お使いをしたいって思った理由はね・・・前にテレビで子供が初めてお使いをするっていう番組なんだけど・・・それにユニコーン・・・すつごくあこがれてね・・・おにいちゃんに褒められたいから思い切つておにいちゃんに頼んだの!!

だから! 今日 ゆーちゃんと一緒にお使いを頑張る!!

・・・と白いワンピースに白い帽子を被り片手にゆーちゃんを抱えて張り切つて出発したのを指揮官は見て、そして呟いた・・・

指揮官「(ピツ)・・・作戦開始」

基地近くの街中

ユニコーン「えつと、まずはお店に行つてリンゴを買わないと!!」

商店街に続く街中にある道を進んでいるユニコーン

・・・そこへ

モブA「ふう、ふう・・・か、可愛いなあの子・・・こ、声をかけてみようかな・・・」
角からイケメンな心を持っていない普通のキモデブがのぞいていた

モブA「ふう、ふう、む、紫色の髪にロリつて僕の完全に趣味に一致している!これは声をかけないと!」

そしてモブAはユニコーンに近づいていく・・・

モブA「ね、ねえお嬢ちゃん?・・・ちよつと僕とお話をs(シユバ!!)」

ユニコーン「あれ?ねえ、ゆーちゃん・・・今、誰かいなかった?」

ゆーちゃん(ふるふる)

ユニコーン「・・・気のせいだったかな?」

一方モブはと・・・

モブA（もごおおお!?もごおおお!?）

「ふう、気づかれてないな」

下水道の中で誰かに拘束されていた

月影「・・・本部、こちらエージェント ムーン・・・マイエンジェルの邪魔をしそうになった障害は排除・・・護衛対象には気づかれていない」

指揮官「・・・こちら本部・・・了解・・・引き続き護衛せよ」

そう、（もはやこいつのほうがヤバイ奴ではと思ってしまう）月影だった

現在、彼とモブがいるのは近くにマンホールのある下水道だった

・・・護衛隊の海上自衛隊と月影はあらかじめユニコーンの通過ルート調べユニコーンから離れたところから監視・護衛をしている（ストーカーではない）

月影はマンホールの下や電線の上から護衛をしモブが危害を加えそうになったのでマンホールから出てモブを下水道に引きずり込んだ

指揮官「あ、月影・・・そいつは警察に出すなよ?・・・俺たちが今やってること自体が犯罪みたいなもんだから」

月影「じゃあ・・・処す？」

指揮官「・・・ダメです」

・・・そんなことも知らないユニコーン

ユニコーン「ついた!!・・・えつと野菜屋さんは・・・あつた!!」

商店街につき八百屋からリングを買ったが・・・

ユニコーン「・・・どうしよう、ゆうちゃん・・・お使いリストを失くしちゃった・・・」
サーっと顔が真っ青になり慌てました

どうやらどこかでメモを落としてしまったらしい

店員「おや?いらつしやい!!可愛いお嬢ちゃん!・・・今日は何を買いに来たんだい?」

店員の男性が店の前であたふたしているユニコーンに声をかける

ユニコーン「・・・え、えつと・・・買いに来ただけど・・・お使いリストを・・・
落としちゃって」

店員「そ、そうか・・・残念だな・・・うお!?!?!?!あ、はい」

ユニコーン「どうしたの店員さん？」

店員「あ、いや・・・何でもないよ」

店員（かわいそうだな・・・でも、メモがないから無理に買わせるのもなあ・・・）

ユニコーンがお使いリストを失くし落ち込んでいた・・・

その時・・・

するするする・・・

ユニコーンの後ろに彼女に気づかれなくらい静かにメイド服を着た女性がスパイ

○ーマンよろしくワイヤーで逆さまに下りてきた

・・・その手にはカンペがあり

「彼女の護衛です。この子は初めてお使いをします。あと買うものはリングゴ5個です。

どうにか5個買わせるよう仕向けてください」

あ、はい・・・

了承すると周りの変な目で見られていても気にせず

また。するすると戻っていった

ユニコーン「どうしたの店員さん？」

店員「あ、いや・・・何でもないよ・・・ところでお嬢ちゃん・・・えつと・・・好きなものって何かある？」

ユニコーン「・・・おにいちちゃんとイラストリアスおねえちゃんと一緒に食べるアツプルパイ・・・」

店員「・・・ならさ、今とてもおいしいリングがちょうど5個あるからさ・・・ただでいいからもらっていくかい？」

ユニコーン「え！いいの!?!店員さん!!」

店員「ああ、美人な大人の笑顔は格別だからな!!ほれほれ!持っていきな!!」
ユニコーン「ありがとう店員さん!!さようなら!!」

八百屋からユニコーンが出ていくのを確認している人影があった

曇天「・・・こちらエージェントクラウン・・・護衛対象はミッシヨンの25%の達成を確認・・・引き続き護衛をする」

指揮官「了解・・・護衛を続ける」

曇天「ふう・・・やつとだよ・・・メモを失くしたと知ったときはヒヤヒヤした・・・あと、シェフィールド・・・御宅だいぶアクロバットに店員にカンペ見せてきたな」
店の上からシェフィールドはワイヤーを足に巻いて曇天に吊ってもらいカンペを見た（ちなみに指揮官からスカートの中には下着とズボンを履くように強制された）
シェフィールド「・・・こんなのはメイド隊では当たり前前にはできません・・・しかし、あとであの店員にはお詫びを渡さなければ」

曇天「・・・え、メイド隊って全員暗殺者？（ちがいます）」

八百屋を出たユニコーンはそんな実は後ろに出たカンペに助けられたことを露知らずスーパ―へと向かって行った

番外編2 operation name : ☆ユニコーンの初めてのお使い大作戦☆ 後編

・・・八百屋でリンゴを買いスーパーでティッシュとジャムを買いに来たユニコーン
しかし、中では

わいわいがやがや

人がごった返していた

ユニコーン「す、すごい人の数だねゆーちゃん?・・・なにかあったのかな?」

スーパーの中では休日ではあるがたくさんの人がレジに向かって行った

ユニコーン「これ・・・向こう側に行けるかな・・・」

ちょうど人ごみの向こう側にティッシュが置いてある棚があるのだが人が邪魔で通れなかった

ユニコーン「で、でも!これはユニコーンのお使いなんだからこれくらい頑張らないと!!」

意を決してゆーちゃんを抱える

ユニコーン「ゆーちゃん!ユニコーン、いくよ!!」

ゆーちゃん「バナージ・リンクス、出ます!!」

ユニコーン「……?、ゆーちゃん、何か言った?」

ゆーちゃん「……ふるふる」

「……一瞬だけ間があつたゆーちゃんだがユニコーンは人ごみの中に突っ込んでいった」

ユニコーン「……行くよ!!」

人ごみの中に入つていったユニコーン……

だが、小さいのが功にでたのかすんなりと抜けようとしていた

ユニコーン(もうすぐで抜けられる!!……あ!?)

しかし、あと少しで出ようとしたが誰かの足が絡まつて転びそうになつたが……

シユバツ!!

ユニコーン「きゅあ!?!……あれ?……ユニコーン……倒れてない?」

「……どうやら倒れそうになつたところを誰かが肩を掴んで阻止してくれたらしい」

しかし、誰が起こしてくれたのか探そうとしたが人ごみの中にいたのでわからなかった

東海「ぬおおおお!?こ、こちらエージェン イースト!?・・・現在、人ごみの中に入った護衛対象が転倒しそうになったが阻止に成功したあああ!」

指揮官「え、はい。こちら本部、了解した引き続き護衛を・・・って東海何してるの?」

先ほどの人ごみでユニコーンの起こしたのは護衛(笑)の東海であった

東海「・・・先ほど手に入れた情報によるとおお!・・・どうやら現在一個十円のおにぎりが大セールで売られていて近所のおばさんたちがごった返しているそうだああああ!・・・ちよつと抜けるのに時間がかかりまあああああす!!」

指揮官「・・・一個十円って大丈夫なのソレ?・・・あく・・・了解、怪我がないように出てね・・・」

一方ユニコーンは・・・ティツシユを回収しあとはジャムだけになったユニコーン「えつと・・・ジャムは・・・あつた!!」

ジャムのある棚までは人ごみがいなかったのですんなりで行けたが・・・ユニコーン「・・・届かないよ」

ジャムのある列は一番上にありユニコーンでは届かなかった

試しにゆーちゃんを抱えて取らせようとするが・・・

ユニコーン「ゆーちゃん・・・取れそう?」

ゆーちゃん（ふるふる）

ギリギリ背が足りずゆーちゃんの手は空を切った

ユニコーン「ううう・・・どうしよう・・・あと、少しなのに・・・」

すると・・・そこに・・・

「・・・あら? キミ・・・どうしたの?」

振り返るとそこには自分より少し高いくらいの少女(?)がいた

ユニコーン「えつと・・・ジャムを取りたいんだけど届かないの・・・」

「ふ、ふくん・・・じ、実はね・・・私、間違えてジャムを取ってしまったけど・・・いい?」

ユニコーン「え!?!いいの!?!ユニコーンうれしい!!」

相手の少女(?)は間違えて取ったジャムをユニコーンに渡しユニコーンに感謝を述べられた後、別れたいった

ユニコーン「・・・さっきの子・・・とてもいい子だったね! ゆーちゃん!!」

ゆーちゃん(こくこく)

ユニコーン「ユニコーンもあんな子みたいになりたいなあ・・・」

少女? 「・・・こちら・・・エージェント・・・ドラゴン・・・護衛対象のジャム回収の援助完了・・・あと、ケーキだけです・・・モウヤダワコレ・・・」

指揮官「ぶほおwwwwwwww・・・りよ、了解wwwwwwww引き続き護衛を・・・いやあwwww昇龍wwwwいい演技だったねえwwwwwwww」

昇龍「・・・帰ったら覚えてろよ指揮官」

少女の変装を解きながら昇龍が報告をしていた

昇龍「・・・海洋研修の時といい・・・なんでみんな僕を女装させたがるんだ・・・」

指揮官「もう、昇龍さ……女で生きてみたら？」

昇龍「死んでもごめんだ……」

スーパーで目的のものを買えあとはケーキだけとなった……

ユニコーン「ケーキ屋さんは……こつちだね!!」

スーパーから出た後

指揮官が前もって作ってくれた地図に従い進んでいく

そして住宅街を抜け大きな通りにでた

きよろきよろと探しているとケーキ屋を見つけた

ユニコーン「着いた!!……えつと……おにいちやんたち……どれを食べるか
な?」

ケーキ屋さんにつきゅーちゃんを片手に皆がどれを食べるかを悩んでいた

しかし、丁度ユニコーンの上では不吉なことが起きていた

キイ……キイ……

・・・そこにはボロボロになったどこかの会社の看板であった
その看板の留め具が風化して今のも取れて落ちそうだったが・・・

パキーン・・・

・・・留め具が折れてユニコーンの頭上に落ちてくるが本人はみんなはどのケーキを
選んだら喜ぶかと必死に考えていたので気づいていなかった

すごいスピードで落ちていく看板がユニコーンに当たる・・・

スパアアアアアアアアアアアアン!!

ユニコーン「・・・?どうしたのゆーちゃん?」

ゆーちゃん(ぶんぶん!!)びくびく・・・

ユニコーン「なんでもない?・・・大丈夫!ユニコーンはKAN—SENでゆーちゃん
んはナイトだから!!」

そう言いケーキ屋からケーキを買い基地に向かつて歩いて行つた
その上に落ちてきた看板があつたが真ん中に弓矢が刺さつていた・・・

上
・・・ここはユニコーンのいたケーキ屋のある建物から向かいの遠くにあるビルの屋

そこに自慢の弓を抱え放つた矢で看板を刺した人物がいた・・・
白い服を来て銀髪の髪をしている人物・・・原子力空母【天喰】・・・

ベルファスト「ふう、当たりましたね」

天喰「・・・オレノユミガ・・・」

・・・ではなくベルファストだった

ベルファスト「申し訳ございません天喰様・・・勝手に貴方様の弓矢を勝手に拝借し

てしまい……」

天喰「いや、結果ユニコーンが無事で気づかれない（ゆーちゃんは気づきました）から結果的にオーライだったけど……メイドって……なんだっけ？」

ベルファスト「??……なにを言ってますか?……メイド長だったらこれくらいで
きない?」

天喰「（諦め）」

まさかベルファストから命を救われたことを知らないユニコーン……

ユニコーン「えつと……確か……お兄ちゃんが……帰りはバスで帰ってきてね
?……つて言つてたからバス停に行かないと!」

最後のケーキ屋は基地からスーパ―より離れていて歩くより市内バスで帰ったほうが早く着くのだ（最初からバスに乗ればよかつただろつて?んな細かいことは気にしたら負けだよ?）

大通りを進んでいくとバス停を見つけた

ユニコーン「あ！みつけれ（ドン!!）・・・きゃ!..」

「どわ!?!.. おい!なにすんどよ!..」

バス停に小走りで向かっていたが角から結構ぼろぼろな服を着ている青年4人が出てきてユニコーンとぶつかってしまった

こいつらは地元でも有名（悪い意味で）なDQNであった

DQN1「いつてえええよ!!骨が折れたああああ!!」

DQN2「おい!なに仲間にしてきてくれたんだよ!!」

DQN3「そうだ!お前が前、見てねえからこいつがぶつかったんだろ!!」

・・・わざとらしく下手な演技をしているがもちろん嘘でワザとぶつかったのである
悪いのはDQNであってユニコーンが先に出てDQNは回避や止まることができた
がユニコーンは先に出たのでDQNに気づけなかったのである

ユニコーン「ご、ごめんなさい!!..ユニコーンが前を見てませんでした」

自分が悪くなくてもとりあえず心を込めて謝るユニコーン（いい子、偉い）

しかし、DQNはそれでも仕掛けてくる

DQN4「あああ!?!ごめんなさいで許されるとはおもうなよ!?!慰謝料を払え!慰謝料を!今すぐに!!」

ユニコーン「ご……ごめんなさい……ユニコーン……初めてお使いをしている途中で……お金は持ってないの」

DQN3「ぶはははは!? お使いイ? 偉いでちゆえ? ……でもお!! 大人つてねえ? その理由では許してくれないよお!? 親に言いつけちやうぞお?」

ユニコーン「や、やめて! おにいちゃんに迷惑かけたくないの……」

DQN2「じゃあ……ユニコーンちゃんにいいこと教えてあげようか? ……大人つてねどうしても許してほしかったらね? ……体を使つて許してもらうんだよ?」

ユニコーン「か、体?」

DQN1「お♪どうやら無知系らしいな♪……そうだよ? そんなじゃ! 服を脱いでくれるかい?」

ユニコーン「い、いやだよ!」

DQN2「うつせんだよ!! (ばっ!!)」

ユニコーン「あ! ゆーちゃん!! 返して!!」

ゆーちゃんは人前では指揮官以外には動かない人形としてふるまっているので動けず奪われてしまいユニコーンはDQNに手首を掴まり体を触られ始めた

ユニコーン「や、やめ! ゆーちゃんを返して!!」

ユニコーンの咄嗟に出した手がDQNの一人の顔に直撃した

DQN4 「てめえ!? ふざけんよ!」

するとどこからか持ってきた鉄パイプでユニコーンを殴ろうとしていた

ガン!!

しかし、ユニコーンには入らず間に入ってきた乱入者の頭に当たった

ユニコーン「・・・だれ?」

その姿は全身黒い服で覆われていてなぜか顔は兎と戦車のお面で見えなかった

?? 「・・・good night」

プシュー

ユニコーン「え・・・ユニコーン・・・眠くなって・・・くう・・・」

ユニコーンの顔に謎のスプレーをかけられユニコーンは可愛い寝息を立てて謎の人物に優しく撫でられながら眠った

DQN1 「だ、誰でお前!? なんだそのふざけた姿は!」

しかし、その謎の人物が次に発したのは「警察を呼びますよ」や「もう、やめましょ？」ではなかった……

?? 「……オーバーフロー」

指揮官「おーい……ユニコーン……起きろー」ゆさゆさ

ユニコーン「ん……うん……あれ？ユニコーン……なにしてたっけ？」

起きるとユニコーンは執務室のソファで横になっていた

横ではゆーちゃん静かにユニコーンを見ていた

ユニコーン「あ、おにいちゃん……おはよう／＼／＼／＼」

指揮官「おはようさん、初めてのお使いだし寝てたんだろ？」

ユニコーン「う、うん？」

しかし、さつきまでのことが起きたばかりなのか思い出せない
でも・・・

ユニコーン「ユニコーン・・・とてもおもしろかったよ!!・・・えつとね!!」

指揮官「おお!そうか!んじや続きは食堂で聞くぞ!!」

ユニコーン「うん!・・・おにいちゃん・・・ユニコーンもご飯作るのは手伝う!!」

指揮官「ユニコーン・・・成長したな(泣)」などで

ユニコーン「えへへ♪」

↳ 食堂 厨房内↳

ユニコーン「ユニコーン!料理、頑張る!」

ベルファスト「はい!では、買ってきたジャムをこの鍋の中に入れてください!」

ユニコーン「うん!わかった!」

厨房内ではユニコーンとベルファストと何人かのメイドが夕食を作っていた(夕食の

内容は皆様のご想像に任せます)

他のメイド(シリアス除く)は順調に進んでいく中・・・

ユニコーン「うん・・・このジャムの瓶のふた・・・開かないよ・・・」

ユニコーンは瓶のふたを開けるのに苦戦していた

ゆーちゃん（ちよいちよい）

ユニコーン「どうしたのゆーちゃん？・・・え、窓の外に何かいた？」

ゆーちゃんが窓の所で何かあったといいユニコーンが確認しに行った・・・その瞬間

ゆーちゃんは・・・

ムキムキムキ・・・

ゆーちゃん（グッ・・・パカッ）

ユニコーン「なにもなかったよゆーちゃん？・・・わあ！ゆーちゃん、その瓶のふた

開けてくれたの!？」

ゆーちゃん（こくこく）

ユニコーン「ありがとう！ゆーちゃん！」

ユニコーンはゆーちゃんが一瞬すごいことになったのを知らずに感謝した

・・・しかし

昇龍「（。 ㊦。）ハア？」

・ ・ ・メイド長に招集（強制）でメイド服に着替えさせられジャガイモの皮むきを手伝っていた昇龍は見てしまった

ゆーちゃんの体が巨漢並みの筋肉質になったのを ・ ・ ・

昇龍「え、ユニコーン ・ ・ ・ ゆーちゃんって本当に人形？」

ユニコーン「何言ってるの昇龍おにいちゃん？ ・ ・ ・ ゆーちゃんはお人形さんだよ？」

昇龍「お、おう ・ ・ ・ （ムキムキムキ）え、ちよ!? ユニコーン後ろ!？」

ユニコーン「え？」

しかし、後ろを振り向いてもいつもどりの可愛らしい人形のゆーちゃんだけしかいなかった

昇龍「え？ ・ ・ ・ 今、ゆーちゃんの体 ・ ・ ・ ムキムキに ・ ・ ・」

ユニコーン「昇龍おにいちゃん ・ ・ ・ 大丈夫？」

昇龍「え、は？ ・ ・ ・ え？」

しかし、ユニコーンがゆーちゃんに背を向けた瞬間 ・ ・ ・

ムキムキムキ ・ ・ ・

巨漢になり手にはカンペがあり

ゆーちゃん？（ ・ ・ ・ ・ お静かに）

・ ・ ・ と書かれていた

それと同時に今日は護衛に集中し過ぎて疲れたのかな？ っと思考を捨てた昇龍だった

く夕食後

夕食を食べた後のユニコーンは指揮官たちと一緒に買ってきたケーキを食べながら今日の出来事を楽しく話していた

ユニコーン「それでね!!・・・あ、でも・・・これはいいかな？」

指揮官「どうした？ユニコーン？」

ユニコーン「な、なんでもないよ!!」

言いかけたのはバス停で変な男4人に絡まれたとき黒い服の人物から助けられたことを言おうとしたが・・・結局誰だったのかがわからなかったので言わないことにした
すると扉から・・・

月影「・・・すまん、まだケーキある？」

指揮官「あ！遅いぞ月影!・・・安心しろケーキはある」

月影が扉からヒョコリと顔をだしてうかがってきた・・・

頭に包帯を巻いて・・・

ユニコーン「……月影おにいちちゃん……あたま……怪我したの？」

月影「え？……ああ、これか？ちよつと頭に棒がぶつかつてな」

ユニコーン「そう、早く治つてね！」

月影「うぐつ(尊)……ありがとう、マイエンジェル……」なでなで

ユニコーン「ツ!!……うん!!」

ユニコーンは月影と別れみんなのところに行つた……あと、指揮官と月影はこつそり話していた

指揮官「いいのか？いわなくて？」

月影「いう必要があるか？……ユニコーンが楽しけりやそれでよしたい」

指揮官「そうだな……まったく……今日はなんて日だよ……看板は落ちてくるわ……近くで銀行で殺人強盗があつてたまたまた君たちが駆り出されるなんてな……」

月影「しかたないさ……でも、急いでユニコーンの所に戻つたけど目立つた傷を得なくてよかつた……」

指揮官「……そういえば……行つた時の恰好は置いといて……あのあとあの人と達はどうなつたの？」

月影「……ご退場させてもらつたよ」

指揮官「……ならいいか……んじや、ケーキ食べてきな」

月影「……そうさせてもらう」

指揮官との会話が終わり自分のケーキがおいてある皿を取ろうとしたが……

月影「えくと……あつた……ん？」

皿の上には月影の分のケーキとユニコーンが選んだケーキの半分がおいてありそのケーキのクリーム部分に可愛らしく

「ありがとう、月影おにいちゃん」

……と書かれていた

月影「……フツ」

ふつと笑いつつユニコーンの皿の近くに本人がいないのを確認したら自分のケーキを半分割り置いた月影であった……

ただいま

・・・豚田の立てこもり事件が解決した後・・・

指揮官や本部の役員さんが必死になってやじ馬の鎮静化した

豚田は今回の立てこもり事件の犯人なので今後見つけ次第逮捕または射殺を許可された

大鳳も人質全員に目立った怪我もなく病院の検査が終わって入院し退院するころには元気になっていた

天喰も東海たちも現在は基地で楽しく過ごしている

天喰「あ~~~~~~~~!!帰ってきたなあ!!」

東海「そうですね・・・ある意味で・・・ですが」

天喰「そうだな・・・みんな変わったな・・・ここに来た時より・・・とりあえず月影・・・」

月影「・・・・・・なんですか?」

天喰は月影に向けてサツ!!と弓を構えいう

天喰「龍が我が敵を食らう!! (CV: 阪口 周平)」

月影「え!? えちよ!? りゆ、龍神の剣を食らえ!! (CV: 川原 慶久)」

天喰「うん! 帰ってきた感じがするな!!」

月影「……………なんですかそりゃ」

……………しかし、俺の身に面倒なことが大きく分けて三つある

まず一つ目だが……………これは……………赤いメンタルキューブのせいかもしれないことだ……………

↳母港内・とある場所

睦月「天喰しゃん!! もう一回やって!!」

クリーブランド「……………天喰……………もう、怪物では?」

天喰「おお、クリーブランド……………怪物はひどいぞ……………」

……………俺たちが何をしているのかと

天喰の右手にはスイカ一個がありそれを……………

天喰「……………ふん!!」

パキパキパキ……………ぐしやああああああ!!

右手に力を籠めたらスイカがぐしやぐしやに割れてしまった

天喰「……………おかしくね?」

明石「……………確かにおかしいニヤ」

隣にこの案件で検査にきてくれた明石が言う

・・・はい、一個目の問題が「天喰の握力・スタミナ・ジャンプ力などが普通のKAN—SENより高くなっていることだ」

気が付いたのは今朝のリハビリついでの朝練をしていたんだけど、割とキツイメニューでしたんでけどまったく疲れを感じなかった

・・・久々すぎて体がアホになったのかな？ っと思ってもう一周したけど二周してようやく疲れを感じた

おかしいと思い明石の所にいって調べてみると・・・なんと俺の赤いメンタルキューブの出力が以前より上がっているらしい

試しにリングを渡されて片手の握力のみで破壊してほしいと言われたのでやってみると・・・

ぐしやああああああ!!

半分くらいの力を入れてだけで粉碎された

(作者：噂で聞くとリングを実際に片手で破壊すると果汁が指の爪に入り込んで痛いと感じたので皆さんは天喰みたいなことはないと思いますが控えてください?)

・・・それで現在は見世物みたいにいろんなものを粉碎するのをしている

次に二つ目だが・・・これは元帥がやりやがった

あの事件のあと各国から「アズールレーン本部の困る情報とは何だったのか!？」って

問い合わせがあつたけど本当は俺がセイレーン化してしまったことらしいけど・・・あの元帥・・・手紙で送られたけど

(以下その手紙)

田中中将・天喰へ

まず、君たちが無事でよかった

私も無事だが今回の責任で今後、このようなことがないように監獄の警備の強化などをする事になった

それであとは各国の対応何だが・・・

すまない天喰君・・・

君がセイレーン化したことがばれたら困るから君と大鳳が付き合っていることを困る情報として流しちやつた!!テヘペロ♪

いやあ・・・あんどきこそ「あのクソじじいいいいいいいいいい!!」って叫んだよ

天喰「あのくぞZZI・・・あの時助けずに倉庫に放置すればよかった」

んで、それを知った世界各国のトップから「リア充タヒね」「未永く爆発しろ」ってあ

りがたい言葉をいただいた

そこまですらよかつたんだ……そこまでは……

指揮官「……天喰……まただ」

天喰「またかよ……」

指揮官の手には大量の手紙が……

その内容は

「いつ結婚するんですか？」

「式場は決まりましたか？」

「……私が神父になりましょう」

「もう、その基地に式場を立てましょう」

天喰「だからああああああ!!……なんで結婚する感じになつとんねんんん

んんん!!……」

そう、大量の手紙には（この世界にもこのネタがあつたんだな）完全に俺と大鳳が結

婚するフラグを建てまくる内容だった

まあ、最初は「KAN—SENの人権が!!」とか「ふつう指揮官になつた人とだろ!!」つ

て非難する内容だったけど……あんどきよりある意味で悪くなつた

最後に三つ目だけど……もしかしたらこれが一番問題かも……

天喰 「あ！大鳳！」

大鳳 「・・・・・・・・・・（プイ）」

天喰 「え!?ちよ!?大鳳!？」

・・・・・・・・そう、めでたく自分の彼女になった大鳳から無視をされる・・・・

それもここに戻ってきてから

↳廊下↳

天喰 「大鳳!!」

大鳳 「・・・・・・・・・・（ススツ）」

天喰 「ウソン!？」

ばったり会っても俺を避けるように逃げていくし・・・

↳食堂↳

天喰 「大鳳く一緒にたべよ」

大鳳 「ごちそうさまでした」

天喰 「・・・・・・・・・・」

前まで俺が食べてたら大鳳から遠くから見られていたり、たまにだが声をかけられていた

しかし、彼氏彼女な関係になったから自分から声をかけたんだけど・・・

俺が声をかけたらさっさと食べて速足でどこかに行く

・・・という感じ

天喰「俺が何をしたって言うんだ」(↑原因を作った張本人)

・・・本当は二人だけで話したいんだがなあ

って言っても自分が前まで殺されると思ってたのが悪いのだが・・・
・・・とどうやって大鳳を逃がさずに話そうかと悩んでいると

「ふふっ!!お困りのようね!!」

天喰「だ、だれだ!?!」

どこからか声をかけられてあたりを見渡すが見当たらない

カツ!!

すると急に周りが暗くなりどこからかスポットライトが一か所に照らしそこから穴が開いて赤城さんと赤城ちゃんがへんな決めポーズを捕りながら上がってきた

天喰「・・・・・・なにやってるんですか」

赤城ちゃん「ふふん♪どこからか悩みを持ったKANSENがあるって聞いてこの赤城が参上したわ!!」

天喰「いや、それはブレマートの役割でしょ・・・相談って・・・あと、

その登場についてなにか一言」

赤城「あ、安心しなさい・・・これは只単に私が一回でいいからやってみたかったのよ♪まさか、明石のネタがここで使えるなんてね・・・」

天喰「・・・いつも何やってるんですか・・・あの重桜工作艦」

赤城「それより・・・天喰・・・あなた・・・大鳳のことで悩んでるでしょ？」ニ

ヤニヤ

ニヤニヤしながら聞いてくる赤城さん・・・正解だよ畜生!!

天喰「・・・そうですよ・・・どうすれば彼女が逃げずに話してくれるかを悩んでいるんですよ」

赤城「話してくれないのは天喰が悪い気がするけど・・・でも、大鳳も変わったわね・・・あの時の指揮官様争奪戦していたころの顔じゃなくて恋した乙女の顔になってるわ・・・まあ、赤城は指揮官様の物にするときの邪魔ものが一人減っただけですし♡」

天喰「・・・ソウスカ」

赤城「それよりそんな悩める天喰にアドバイスよ」

天喰「アドバイス？」

赤城「・・・大鳳ってね・・・攻めには強いけど受けにはすごく弱いだよ♪」

天喰「え、ちよつと!?いります!?その情報!?興味はあるけど同時に知りたくない情報

だった!？」

「……でも、あのヤンデレの権化である攻めでは最強な大鳳が受けには弱
いって……ちよつと可愛いかも

赤城ちゃん「あ!天喰の顔少し赤くなってる!へんたい!!」

天喰「ちよつと!?!赤城ちゃん!?!それは言ってはいけない言葉よ!?!」

赤城「……そんな天喰にいいところを教えるわ」

「そう言われ受け取ったのは……なんだコレ地図?……場所はユニオン寮の一室
に印がついている

「これが何なのか聞こうとしたがでてきた穴からスルスルと降りて行って聞けなかつ
た

「……大人しく行ってみるか

「ユニオン寮」

天喰「ここか?」

書かれたところに行ってみただけ……扉に……「ブレマーントンの何でも相談室」

「……うん、本家相談屋じゃん

「とりあえず入るか……」

コンコン

「どろろ」

カチャ

中に入ると・・・

中はシンプルに机と向かい合うように椅子がおいてあり向かいには一人の女性がスーツを着ていて座っていた

ブレマートン? 「ようこそ、相談室へ。今日はどのようなご用件でしょうか?」

天喰「・・・ブレマートンだよな?」

ブレマートン? 「いえ、私は相談員です」

天喰「・・・でも、そのピンクの髪はどうみて m 「相談員です」 いや、ブレ m 「相談員です」・・・え、でも入るときにこの部屋の持ち主の名前の入った札 g 「相談員です」・・・ア、ハイ」

相談員「・・・それでないか悩みはありますか?」

天喰「え? 続けないの?・・・えつと・・・自分にとある事情で彼女ができたんですけどその彼女が話を聞いてくれないんです」

相談員「いや、それ天喰が悪いんじゃない?・・・なら、いつそ当たって砕けてみては?」
そう言い机から取り出したのは二枚のチケツトだった

天喰「そ、それは!!」

相談員「あととはもうわかるでしょう? . . . さ! また他の男に取られる前に行つてきなさいな!! あ、あげた代償に一つ質問いいかしら?」

天喰「ん?なんだ?ブレマートン . . . じゃなくて相談員さん?」

相談員「 もし、普通の人間として大鳳がそいつに寝取られたらどうすんの?」

天喰「え?そんなの当たり前だろ . . . 寝取った奴を殺して、大鳳を監禁する」

相談員「そうだよね! 取った奴を怒る . . . え、ちよつと待つて . . . 今、すごく危険なこと言わなかつた!」

天喰「それじゃ、ありがとな!!ブレマートン!!大鳳の所に行つてきまーす!!」

ブレマートン「待つて!!天喰!!あなたヤバイことを言つたよね!」

相談員の静止を聞かずにそのまま部屋から出ていった

ブレマートン「えつと これでいいのよね? 指揮官」

指揮官「 いい いいのかこれ?」

天喰が部屋から出たのを確認すると柵や窓から指揮官や赤城、ベルファストが出てき

た

赤城「前々からあの二人を見てもどかしく感じて指揮官様と今回の作戦を立てたんですか・・・」

ベルファスト「・・・取った人を殺害するとは・・・天喰様・・・違う意味で変わってしまいましたね」

指揮官「・・・と、とりあえずブレマートンが渡したアレで二人の距離が近くなったらしいけどな」

一方大鳳

大鳳（・・・・・・）あああああああああああああ！！！！また、大鳳はやってしまいましたかあああ！？た、ああああああ、その彼氏になった天喰から会うたびに声をかけられるようになりましたが会うたびに・・・みんなにバレてしまったことと・・・あ、あの時のき、キスの記憶と天喰の唇の感触を思い出しそうでええええ！！・・・こ、これが人間でいう口から心臓が出そうつという者なんですわね・・・本当は天喰と二人で話したいんですが・・・その前に大鳳のメンタルキューブが崩壊しそうです・・・次、天喰にあつて近くに来られませんでしたらあまりの恥ずかしさに悶絶して死んでしまいそうです・・・／／／／／／／／

／／／／／／／／

そう思いながら一人静かな廊下で顔を赤くなりながら歩いていた
・・・しかし、運命（運営）のいたずらかここでも発揮した

天喰「大鳳!!」

大鳳「ひゃ、ひゃい!!」

背後からその本人から声をかけられた

天喰「大鳳!!今、大丈夫か?」

大鳳「え、え・・・た、大鳳はい、今から少し用事が・・・／／／／／／／／」

天喰「あ、すぐに終わるから」

ズンズンと大股で天喰がやってくる

大鳳「あ、えっと・・・い、急いでるんで!!」

ほ、ほんとに次近くで匂いなんか嗅いでしまったら死んでしまいそうです!!

天喰「・・・・・・・・・・逃げがさん!!」

ドン!!

天喰はまた逃げようとした大鳳を今度は逃がさないと言わんばかりに大鳳を壁に追

いやり逃げ道を塞ぐために体で覆い左右は手を立てる

・・・俗にいう壁ドンである

大鳳「こ、これって巷でいうか、壁ドンでは!？」

混乱する大鳳

大鳳「あ、天喰!!こ、ここは廊下です!!さすがに誰かに見られたら・・・／／／／／／

／／／／

天喰「大丈夫さ。この時間帯は誰も通らないのは事前（赤城さん調べ）に知っておいたから」

そして壁ドンしたまま天喰が一息おいて喋る

天喰「大鳳・・・明日・・・用事は？」

大鳳「え、えつと・・・ないです」

天喰「・・・ないな?なら・・・・・」

明日、デートに行かないか？」

・・・と片手にブレマートンからもらったチケット片手に迫ってきた

デート!! 午前の部

天喰「・・・まだかな」

ここは俺たちが所属している基地から遠くにある大都会

その待ち合わせ場所になっている兎の像の前で自分は待つていた

天喰「恰好も大丈夫だよな?」

そう心配になり近くにあった売店の鏡を借りて確認する

上はネイビーのステンカラーコート。下は白の細身パンツにレザーのレースアップ

シューズ

・・・正直、なんでもいいかなって思つて普通に黒一色のジャージで言つたらメイド長に見つかつてすぐ怒られた

そしたら執務室に連行されてしばらく着せ替え人形された

・・・一時間してようやくベルファストが納得してこうなつた

ソワソワ

・・・約束の時間まであと30分・・・

え?なんでそんなに早く来たのかつて?

集合の時間を一時間間違えたんだよ!! だって! 「ごめん遅れた!」って彼女を待たせるなんて・・・無理ですね!!

ソワソワ

・・・大鳳・・・どんな格好で来るんだろうな?

流石に前世のアズレンで見たすぐく布地が少ないドレス「禁断の宴」とか黒ビキニが逆にエロいレーススカーフ「恋慕のコンパニオン」とかではない・・・よな?

まあ、マジでそれで来たら速攻で自分のコートを着させて着る前の大鳳の姿を見て発情した人間がいたら殺せば・・・いいかな? (彼は無自覚です)

ソワソワ

・・・待ち遠しいな

速く来ないかな

時計を見るとあと20分・・・

一秒がまるで一時間のように感じる

すると背後から

?? 「あ! おうい!!」

天喰 「!!大鳳!」

ようやく自分の彼女が来た!! と思い振り返ると・・・

天喰「……………え？誰？」

そこには見知らぬ三人の女性がいた

「え、誰ってひどーいw」

「おにいさん、絶対逆ナン待ちでしょ？」

「そっだよね？ね！ね！私たちと少しお茶しようよ!!」

天喰「……………え？……………逆ナン？……………ドユコト？」

……………なんか逆ナンされた

前世の俺だったら恋愛系とか無縁の関係だったしされたら滅茶苦茶喜んでいたと思

うけど……………生憎でな……………

天喰「……………すみません……………俺、彼女待ちなんです……………」

「えー！彼女いるのー!?見えなーい！」

「そっだよ！おにいさん、けっこうかっこいいし逆ナン待ちでしょ！」

……………そうなのか？

今朝、メイド長に着替えさせられたとき「……………天喰様は足が細いし、お顔も整って筋肉もあるから絶対街では声かけられますよ」って言ってたけど……………

一応周りを見てみるとほとんどの女性が俺をチラ見したり中にはこっそり写真を撮っていく人もいた

「じゃあさー!じゃあさー!彼女が来るまでお茶でもしようよ!!」

天喰「……あ、いや……本当にあと少しで来るんで……」

「大丈夫だつて!すぐ終わるから!」

……お茶をしたらすぐには終わらないだろうつと言いたかったが両脇にナンパしてきた女性がサンドするように手を回されて身動きが取れなくなつてしまった

天喰(……どうしようかな……もうここで殺してしまおうかな?うちの彼女の大鳳よりブスだし……俺は大鳳の物でもあるから邪魔なんだがな)

……ちなみに街中でKAN—SENは特別な理由がない限り装備の展開は禁止されている

しかしそんな心配はすぐ終わった

大鳳「……大鳳の天喰になにか用ですか?」

ナンパしてきた女性の背後にゴゴゴゴゴゴ……つて擬音が聞こえそうなくらい血相を変えた彼女である大鳳が立っていた

「ひ!? あ、あんた誰よ!？」

大鳳「誰って・・・装甲空母・・・ってそんなことより退いてください・・・天喰がせつかくデートに誘ってくれたので一秒たりとも時間を無駄にしたくないので」

大鳳はナンパしてきた女性をはねのけ俺の手を掴み言った

大鳳「天喰は大鳳の物です・・・もう話しかけないでください」

天喰「あく・・・てなわけだ・・・すまん？俺、彼女の物だから？」
素晴らしいスタスタとその場を離れた

「彼女の物って・・・あのカップル・・・ヤバイやつらじゃん」

大鳳「・・・・・・・・・・(ぷー)」

天喰「ごめんって・・・大鳳・・・許して」

大鳳「・・・まあ、天喰が他のメスに惚れられるくらいかっこいいのがわかったのでいいです・・・その代わり天喰・・・大鳳の恰好はどうでしょう?／／／／／／／／／／」

天喰「・・・・・・・・・・どうって」

ナンパしてきた女性から離れた俺たちは適当な公園に行った

・・・でだが・・・その大鳳の恰好はというと

天喰（・・・なんでセーラー服なんだ？）

・・・そうドレスでもなんでもなく黒いセーラー服だった

全身を青に近い黒のセーラー服で髪はいつもどりの形で清楚な感じを出しているが・・・サイズがあつてないのかな？ちらりと見えるおへそがいい・・・

大鳳「・・・あ、愛宕が持っている制服の一つを借りたのですが・・・どうでしょう？
／／／／／／／／／／／／／／／／」

・・・正直に言おう

・・・ナイスだ愛宕

天喰「・・・今すぐここでブチ犯〇たい（す、すごく可愛いよ!!）」

大鳳「・・・あ・・・天喰・・・言っていることと思つて逆になつてい

ますよ／／／／／／／／／／／／」

天喰「……………忘れてくれ」

大鳳「ふふ♪わかりました♪……では、いきますか？」

天喰「そうだな……いくか」

こうして俺と大鳳は仲良く腕を組んで目的地に向かって行った

そしてそんなおしどりを見守り隊がいた

指揮官「ふむ、無事に合流できたな」

赤城「……………そのようですね……………なぜセーラー服かは気にしないでおきますが」

東海「相棒……………問題を起こさないでくださいね？」

その後ろに指揮官たちが大学生風に変装して追っていた

指揮官「……………よし……………このままついていって見守るぞ」

つとこつそり後を追っていった

大鳳と腕を組みつつ街中を歩き回った

……んで現在どこかにいるのかというと

(……さようなら……師匠……こんど会うのは戦場なのですね)

(……ああ……もつとお前とは一緒に居たかったのだがな……)

……映画館にいる

天喰「……ブレマートン……あいつ……意外とこういうのも見るんだな」

先日、ブレマートンからもらったチケットはこの映画のチケットであった

見ているジャンルは恋愛系のだが主人公とヒロインの師匠が付き合いそうだったが
国で戦争が起き別々の国で生まれた二人は教会ではなく戦場で再開してしまうつとい
うものだった

天喰「……いい話なんだが」

……俺は現在、目から感動の涙が溜まっていて泣きたいんだが……

大鳳「う、うえええええええええええええええん!!」

……うちの彼女が泣きすぎなんだよな

まあ、それはそれで可愛いんだが

天喰「……大鳳……さすがに泣きすぎだぞ……周りの客も若干引いてる」

大鳳「だ、だってええええええ……あの二人いい……」

天喰「……俺のハンカチやるから……映画が終わるまでにその顔はやめ

とけ」

大鳳「……ぐす……はい」

大鳳にハンカチを渡して映画が終わった

大鳳（……あ……さりげなく……天喰のハンカチ……手に入れ
ました）

そして見守り隊

指揮官「ぐすつ……めっちゃいい話だな……」

赤城「……はい……本当は大鳳の泣き顔も見たかったです……視
界が緩んで……見えませんでした」

東海「……まったくワカラン」

東海以外は涙腺崩壊を起こしており東海はわけがわからない顔をしていた

指揮官「ぐすつ……ようやく涙が止まったわ……東海は響かなかったのか？」

東海「……いやあ……僕、こういうの無縁な生活をしていたので……あと、
なんで「朝起こしてあげる！」って言われて彼氏が毎日起こしてもらうのは申し訳ない
から起こしてもらおう時間より早く起きたら彼女が不機嫌になる理由がわかりませ

ん……僕にとってはいいいことだと思えますが？」

指揮官?「東海……お前、乙女心をわかってないな……」

東海「?????」

??????

天喰「大鳳?少し早いけど昼食にするか?」

大鳳「……そうですね……少し小腹がすきました」

時刻はまだ正午になる前

ちよつと早いけど昼食をとることにした

天喰「あ!じゃあさ……この近くでさすぐく有名なカフェがあるからそこに行く?」

大鳳「はい!」

街中の大通りを抜けて住宅街に入り目的のカフェに着いたが……

天喰「……多いな」

大鳳「……そうですね」

……やはり有名店

すごい長蛇の列だった

天喰「……どうするか?少し時間がかかるかもしれないけど待つか?」

大鳳「……そうしましょうか」

・・・仕方ない、待つとしよう

しかし、前から店員らしき人が自分たちより前の客になんか話しかけた後こっちに
て

店員「あ！その二名のお客様!!お先にどうぞ!!」

天喰「・・・へ？俺ら？」

店員「そうそう!!そのカップルです!!」

・・・なんか先にいって言われた

大鳳「え、でも他のお客様は・・・」

店員「大丈夫です!!店長と他のお客様も許可が出たので!!」

大鳳「天喰・・・ここはお言葉に甘えさせてもらいましょ？」

天喰「・・・せやな・・・では、お言葉に甘えて」

あと、入るときに周りの店員と客から生暖かい目で見られた

東海「指揮官・・・ナイスプレー」

指揮官「ふう・・・我ながらよくやったわ」

・・・なぜ、天喰と大鳳がすんなりと店に入れたのかというと

指揮官が店長を呼び出して土下座をする勢いで「あの二人はカツプルなので優先的に店にいらしてください!!」つとといったがクレームかと思ってきたらしようもないことだったので最初はうけつけてくれなかったが指揮官の交渉力と例の事件のキス映像を見せたら

店長「・・・これは爆発させてはいけないリア充だな」

つと理解をしてくれて店長が店員にこのことを伝達させ許可を得た

赤城「・・・なるほど・・・赤城もこれくらいすげえ!!」

・・・そしてそれを見て何かを納得した赤城であった

・・・なぜか俺たちを先に入れてくれたので早めに席についてメニューを見て注文した
俺はパスタで大鳳はパンケーキを注文した

パクッ

・ ・ ・ うん、さすが有名店

麺の硬さ丁度いい

しかし、なぜか視線を感じる・ ・ ・

天喰「・ ・ ・ 大鳳？」

さつきから大鳳がジツと俺を見てくる

大鳳「・ ・ ・ え!?!? ・ ・ ・ あ!す、スミマセン ・ ・ ・」

顔を赤くし口ごもる大鳳

天喰「・ ・ ・ どうしたんだ？」

大鳳「そ、そのお・ ・ ・ ・ ・ あ、天喰・ ・ ・ ・ ・ あ、あ・ ・ ・ ・ ・ あ、あ・ ・ ・ ・ ・」

／／

天喰「!？」

これは!?

俗にいうカップルが定番でやる女性が男性に対してやる「あ〜ん♪」ではないか!?

いいんですか!?! 俺たちカップル・ ・ ・ カップルか・ ・ ・ じゃあ・ ・ ・ やつていい

んだな？

天喰「あ、あーん（パクツ ・ ・ ・ もぐもぐ）」

大鳳「ど、どうですか?／／／／／／／／／／／／」

・・・どうしょ

このパンケーキの糖分+自分から出た糖分で過剰摂取になって糖尿病になりそう・・・

天喰「お、おいしいぞ? // // // // // //

大鳳「そうですか // // // // // //

それを遠くから見ている見守り隊

東海「どうしよう指揮官・・・口から砂糖吐きそう」

指揮官「俺なんか砂糖がなくなったから塩が出そう(?!)」

天喰と大鳳が座っている席から離れたところから見ていた

天喰がいる場所は甘ったるい空間になっており周りの客もあまりの甘さにブラック
コーヒーを頼んでいった

赤城「・・・なるほど・・・あそこはそうすれば!!」

そしてそんな大鳳たちの様子をつ見て何かを学んでいる赤城であった・・・

午後の部に続く・
・
・

デート!! 午後の部

カフェで昼食を終え外に出た天喰と大鳳

今は何しているのかつといると・・・

大鳳「・・・天喰・・・どうでしょう? // // // // //

天喰「・・・どうしよう・・・すっげえ似合う」

現在、デパートでほしいものがないか来てみた

今、試着室で大鳳がファッションショーをしている

それより恥ずかしがるウチの彼女が可愛い件についてどう思うかい?

・・・しかし、なんて答えればいいんだ

世のカップル持ちの男性は思ったことはあるかもしれないけど彼女と服屋に来てどれが似合うかを聞いてきたがめんどくさくて「どれも似合うよ!!」っていうかもしれないけど

・・・あかん・・・どれも好きすぎる

大鳳は元から和服が似合うし今もセーラー服も似合う

今、メイドの服を着ているけどクソ可愛い

大鳳「天喰……さつきからそれしか言つてませんよ……」

天喰「いやだつて……全部似合い過ぎて決めきれん」

大鳳「……なら、今度は大鳳が天喰の服を決めます!!」

天喰「え、いいよ……」

大鳳「いいから!!」

天喰「あ、はい」

指揮官「……あれはいつか結婚したら天喰は大鳳の尻に敷かれそうだな……」

東海「……そうすね……あと、服なんて着ればいい気がする」

指揮官「……東海」

赤城「……東海……あなた普段着つてないんですか？」

東海「……えつと……作業着ならあります!」

指揮官「……赤城……ちよつと買物しよう」

赤城「……はい、指揮官様……これは深刻ですわ」

東海「え、深刻つて……」

そのあと見守り隊は急遽、服をあまりに持っていない東海の服のセンス改造が始まった……

大鳳「……おいしいですね……このソフトクリーム」

天喰「ああ、思わぬ発見だな」

二人仲良く並んでソフトクリームを食べていた

デパートを出ようとしたが……大鳳がソフトクリーム屋を発見し食べたいといったが「昼にパンケーキを食べたから太るぞ」って言ったが大鳳は必殺の上目遣いを使って負けてしまい仲良く食べている

大鳳「あ、天喰……頬にクリームがついてますよ」

天喰「え? あ、悪い」

天喰の頬にクリームがついており大鳳は指ですくいそれを……

大鳳(……パクツ)

天喰「ん? なんかしたか大鳳?」

大鳳「い、いえ! なにも／／／／／／／／」

天喰に気づかれないように頬に着いたクリームを食べたがやはり恥ずかしかった

大鳳(うゝ! これがカップル! 母港ではこんなことできませんね／／／／／)

すると大鳳がとあるお店の前で止まった

天喰「ん？なんかほしいのあるの？」

大鳳「……あ！いえ……天喰！少し先に行つてくれませんか？」

天喰「え？どうゆうこと？」

大鳳「ふふ♪秘密です♪」

……大鳳に先に行つて待つてくれと言われたのでデパートを出たすぐにある休憩用のベンチで待つことにした

天喰「……一瞬嫌われたのかなって思い心臓が止まったけど……あの顔は何かあんな……」

……ま、楽しみに待つか

しかし……

チラ

チラチラ

……すぐく目線を感じるな

またしても一人になり周りの女性から目線を感じ始めた

……確かに普通の女性が天喰をみたらアイドルか何かと思いどうしても見てしまう

のだ

すると、そんな天喰に一人の女性が近づいていった

?? 「あのお・・・スミマセン・・・」

天喰 「・・・なんすか」

またしてもナンパかと思つた天喰だが今回は違つた

?? 「すみません・・・ここに行きたいんですけど・・・」

天喰 「あ、道案内か・・・えつと・・・どこですか?」

ちらりと女性を見るが大人というより少女に近い身長で黒いワンピースだった

しかし、顔は黒い帽子を目深くかぶつており見えなかった

?? 「・・・ここなんですけど」

天喰 「ここは・・・こういつて・・・こうです」

さて、これで問題は解決したが・・・早く大鳳帰つてこないかなと思つていと・・・

?? 「うふふふ♪ありがとう」

私の天喰？」

「……ん？今、私の……って言わんかったか？」

いやな予感がし改めて少女を見ると少女は少しだけ黒い日よけ帽子を上げた

「……その姿は薄紫色の髪色に幼い顔だがこれでもいろいろと干渉している顔……そしてセイレーン特有の黄色い目」

オブザーバー「うふふふ♪ごきげんよう私の天喰？」

天喰「オブザーバー!？」

「……なんでこいつが街中に!？」

オブザーバー「あら？セイレーンでも人間の街に行つて遊ぶくらいあるわよ？」

天喰「何やつてんだよセイレーン!?!……とりあえず、さようなら」

オブザーバー「もう終わり？もう少し話をしましょう？」

天喰「嫌なこつた……お前にセイレーン化されたの忘れたわけではないぞ」

オブザーバー「……別にここで艦装を展開して暴れてもいいのよ？それにどれほど

なのかは知ってるでしょ？」

天喰「……話つて？」

「……仕方ないのでオブザーバーを隣に座らせて話をすることにした

オブザーバー「天喰・・・あなたあの時から体の調子がおかしいと思わない?」

天喰「・・・ああ、あの時からおかしいくらい調子がいい」

オブザーバー「それじゃ、実験成功ね♡」

天喰「・・・実験って?」

オブザーバー「・・・実はね・・・天喰を改造するときついでに前渡したオマケも発動させたのよ♪」

・・・オマケ・・・多分、俺が記憶を失くしている間にあつたな

オブザーバー「そのオマケの内容は改造に成功したら発動するように仕掛けておいて体力増強、筋力増強などだよ」

・・・だから片手でスイカを潰せるほどの握力とまったく疲れな体力がついたのかしかし、よくもやってくれたな・・・人が結構ピンチのときに改造ついでに実験って・・・

オブザーバー「あ、あとついでに夜の営みをする体力もとてつもなく高く・・・あ、ごめんねピュリアイヤーがやらかしたから行くね♡」

天喰「・・・ん? おいちよつと待て最後に言ったのはなんだ!?! 絶対いらんのを入れたろ!?!」

オブザーバー「じゃあね私の天喰♡」

天喰「おい待てゴラアアア!?!」

止めようとしたがオブザーバーは器用に人ごみの中に消えていった

天喰「やっぱセイレーンは人類の敵だわ」

・・・にしてもオブザーバーと結構話したけど遅いな大鳳？

大鳳が天喰のに行ってももらうよう促したところまで戻る

店員「いらっしやいませー」

大鳳「えつと・・・これとこれをください・・・」

大鳳はとあるもの買っていた

大鳳「・・・天喰に初めてのプレゼント♪」

それは天喰にプレゼント用だった

今日は天喰に映画や服を買ってくれたが大鳳から何もあげていないのでなんでもい
いのであげたかった

大鳳「はやく天喰に会いたいな♪」

そして大鳳がウキウキとデパートの出口から出ようとしたが・・・

「ちよいちよい、そこのお嬢さん！」

大鳳「・・・つち・・・大鳳のことですか？」

「そうそう、そのセーラー服の別嬪さん!!」

そこにいたのはアロハシャツを着て金ぴかの腕時計をつけ肌が焼けている男性だった

大鳳「……大鳳になにかようですか？」

「いやあ！お姉ちゃん！すごく可愛いね！ねえ？僕とお茶でも……」

大鳳「……ナンパですか……結構です……私には天喰という世界で一番の彼氏がいるので」

「え〜いいじゃん！そんな彼氏より僕と付き合おうよ!!」

大鳳「……失礼します」

「あ〜！待って！待って！わかったから！もうしないからその彼氏に絶対好きにさせてどんな時でも自分の物にさせる方法を教えてあげて帰るから!!」

大鳳（ピクツ）

「え〜、だめかあ……じゃあ帰るk「すみません、その方法を詳しく……お！本当かい!」」

大鳳「はい……天喰を他のメスに取られたくないので」

「他のメスって……わかった！じゃあ、そのカフェに行こう!」

大鳳「……教えたら関わらないでくださいね?」

「わかってるって！僕はその相手に幸せを送ってほしいだけだから!!」

こうして金ぴか男性と大鳳は近くにあつたカフェに入つていった

大鳳「・・・それで方法とは？」

「その前に！水でも飲んだら！長く話すから!!ほらほら!!」

大鳳「・・・いいえ、大丈夫です」

「いいから、いいから!!」

大鳳「・・・本当に大丈夫なので」

「いいじゃん！いいじゃん！ささー！」

大鳳「う・・・わかりました・・・一杯だけ」

速く天喰に会いたいのとこの男から方法を聞いてさっさと離れたいので渡された水をがぶ飲みした

大鳳「・・・ふう・・・それで方法とは？」

「クツクツク・・・そうだねえ・・・あ、ちよつと待つてね仕事仲間に電話してくるか
ら♪」

そういう金ぴか男は席を立ち外に向かつて行った

大鳳「・・・なんですか電話つて・・・大鳳は早く天喰に会いたい・・・
かし・・・なんかも眠くなってきましたね・・・」

しかし、こんな見知らぬ男性の前で寝るなんて無防備すぎる・・・でも睡魔がどんど

ん押し寄せてくる

・・・そして、気が付いた時には

大鳳「・・・すうー・・・すうー・・・すうー」

可愛らしい寝息を立てながら寝てしまった

「たっただたいまゝ・・・うしうし・・・寝てるな?・・・それじゃよっこいしよつと・・・」

金ぴか男は大鳳を担ぎ店から出ようとした

店員「お客様!お連れの方のお手伝いをしましょうか?」

「あ!大丈夫です!僕の彼女なので!!」

そして男は店を出ていった

「・・・まさか本当に引つかかるなんて・・・馬鹿だねえ・・・」

ここはとあるアパートの一室

そこにはセーラー服のままぐっすり寝ている大鳳と何かの機材を準備している男がいた

「・・・まったく・・・お嬢ちゃん?・・・普通彼氏と別行動したら知らないおじさんについていくとか渡された水を飲むなんて駄目だよ?・・・あの水にはこつそり睡眠薬を入れてちやっつたから♪」

「……実をいうとこの男は最初から大鳳に方法なんて教える気なんて皆無で大鳳自身が目的だった」

「……お嬢ちゃん……セーラー服着ているからどこかの女子高校生かな？ 実は援○が目的だったりw……あ、でも彼氏いるからNTRになるな♪……まさか本に書かれてたとうりにやったら本当に成功するなんてな♪」

「そう言いつつカメラの準備を進める」

「さてと……ヤツてその証拠映像で脅して今の彼氏君には悪いけど別れてもらって自分の彼女にすれば……よし！ 準備完了！ さあ……お嬢ちゃん？……準備はいいかい？」

男の手が大鳳のセーラー服に手が届く……

バコオオオオオオオオオン！！

突然アパートの扉が爆発……否、蹴破られた

「だ、だれさ!？」

?? 「え、誰って……」

その青年は埃を払いながら名乗った

天喰 「彼女のカレシⅡセコム（天喰）ですが？」

「嘘つけ!?!この子は僕のだぞ!!イイから早く出ていけ!警察を呼ぶぞ!!」

天喰 「……今なんて言った?」

天喰の瞳から光が消えた

「は?だからこの子は僕の中から!今からいいことするから邪魔……ふが!？」

この子は僕のといた瞬間、天喰は思いつきり男の顔を殴り男の台所から持ってきた

包丁を勢いよく男の口に向かって突っ込ませ男の歯で止めるようにさせた

「ハギ!?!ハガ!?!」

天喰 「ふうくん……大鳳が君の物つか……いい度胸だね?」

ばきいいいいいい!!

「ハガ!?!」

天喰「ほらほら♡今、悲鳴を上げたら包丁が君の喉に刺さっちゃうよ？」

天喰は男の腕の骨を一本ずつ丁寧に折っていつて包丁にも足で体重をかけていつた

天喰「いやゝあの時あまりにも遅かったからデパートの管理室に襲撃・・・じゃなく
て平和的訪問（物理的）で訪れたら管理の人、優しかったなく監視カメラの映像を見せ
てくれたの!!」

ばきいいいいいい!!

ぼきいいいいいい!!

ばきやああああ!!

「ひぎいいいい!!ひぎいいいい!!」

天喰「んで君が来たお店の店長に殺そうと脅して聞いてみたら君が大鳳を担いでどこ
かに行ってしまったて・・・あ、次は足の骨ね♡」

そこから天喰は男の足の骨、肋骨、背骨などの骨を折ったり脱臼させたり粉碎して
いつた

「やめ!?やめてえええ・・・」

天喰「にしてもさあ・・・めっちゃかわいいよねえ・・・大鳳の寝顔・・・♡」

左足と体重で器用に骨を折りつつ右足を包丁に体重を落とすつつ両腕でまるで宝物
のように大切に大鳳を抱えた

大鳳「くう……くう……くう……」

こんなサイコパスな現場でも大鳳は男から盛られた睡眠薬で寝ている

天喰「はあ♡ほんと可愛い♡……そうと思わん？」

「ふう?!ふう?!」(くくくくくく!!)

全身の骨のほとんどを破壊されて悲鳴を上げたいが口を開けた瞬間包丁が迫ってくる恐怖から一刻も早く逃げたいので一生懸命に肯定する男

天喰「だよねえ♡……あ、折る骨がなくなつたな……じゃ、次は内臓ね♪」

「!？」

大鳳について肯定されようがお構いなしにぶちのめしていく天喰

グチャアアアアアアアアア!!

「げほお?!ゴメンナシヤイ……ゴメンナシヤイ……」

男はもう二度としないと誓いを込めて許しを請うが

天喰「あ、ちよつと待つてね……もう少し大鳳の寝顔を拝むのと俺が大鳳の好きなどころを全部言つてからやめるから……それまで耐えてね♪」

割愛!!

天喰「でねく大鳳、ずっと俺の後ろから見てきたんだけどくこれ、俺が悪かったなく早く話しかけとけば．．．ありや？」

「コロシテクダサイ．．．コロシテクダサイ．．．」

天喰「．．．ちよつとやりすぎたかな？まあ、うちの決まりで人間を殺してはいけないつてあるけど死ななきやいいし．．．死んでもバレなきやいか！あらよ!!」

ぐちゃ！

「ふぎぎ!!．．．ぶくぶくぶく．．．」

この男の相手をするのがめんどくさくなつた天喰は男の股間部分を思いつきり踏みつぶして大鳳を背中に抱え部屋から出ることにした

大鳳「くう．．．うふふふ♪天喰♡．．．むにやむにや．．．」

大鳳は夢の中で幸せそうな夢を見てるのか可愛らしい寝顔をしている

天喰「はあ（尊し）．．．反則だろそれは．．．でも、もう安心して寝ていいよ大鳳?．．．」

もう、あの豚野郎に所属していたころみたいな悲惨な事なんて二度と味合わせないから……だから……オレダケヲアイシテネ? オレノタイホウ?」

大鳳「……は!? ……大鳳は何を!？」

天喰「あ、おはよう……大鳳」

大鳳が起きたのはどこかの部屋のようにだった

大鳳「あれ? 大鳳はたしかへんな男と一緒に居た気が……」

天喰「ああ、ここはホテルさ……指揮官に確認したらどうやら東海のことです。手が離せないから泊っていつてくれ……だつてさ」

どうやらここはホテルの一室らしい……

天喰「あ、あと……その男性ならちよつとO☆H A☆N A☆S Iして俺が回収した……つてか何してたんだよ」

大鳳「えつと……天喰をずつと自分のものに……あ! な、なんでもありません!!」

天喰「ん? そうか?」

……聞きたがつたがいけないのなら仕方ない

大鳳「あ! そういえばプレゼント!!」

天喰「ん? プレゼントつてこれか? 一応、中は見ないでおいだが」

天喰が取り出したのは小さな紙袋だった

大鳳「あ、えっと・・・それは・・・天喰にプレゼントです」

そういわれ中から取り出したのは

天喰「おお！」

中には首に巻くチョーカーで中心に小さな鎖がついた黒いものだった

大鳳「・・・そのお・・・大鳳とおそろいです・・・」

大鳳の手首には天喰に渡したチョーカーと同じ柄のブレスレットだった

天喰「・・・そっかあ・・・ありがとう大鳳」

大鳳「!!//////////」

ドキ!!と彼の微笑みに胸が鳴った

・・・そして一つ気が付いてしまった

大鳳(あ、これなら一番早くできますね・・・)

・・・そして大鳳は

大鳳「・・・天喰♡」

天喰「ん? どうした? たいh・・・むう!？」

チユ
♡

・・・大鳳から天喰にキスをした

しかし、今回は唇だけではなく天喰の口の中に舌を入れこんでいった
そして、天喰をベッドに押し倒した

シユルシユル・・・

そしてセーラー服を少しずつ脱げるように緩めていった

大鳳「・・・大好きですよ天喰♡」

天喰「ふえ!?!」

現状が理解できない天喰とその彼氏の上に馬乗りする大鳳・・・

・
・
・その影がベッドの上で一つになった

翼の生えた一角獣

「……ここはどこだろう」

そこはどこかの建造ドックだった

そこにはとある国が三番目として作っている途中の船……潜水艦だった

「……これがあの潜水空母の三番目か」

「ああ、でも上も無茶言うよな……特に空母機能の奴とか」

「確か……空母の発艦を電磁推進器にするか蒸気カタパルトにするか？だっけ？」

「そうそう……他の二艦は片方はヘリコプター甲板でもう方は方はUCAVだったはずだ」

「……そうか……はあ、なんで上はオーシア連邦となんかと張り合うんだよ」

「……だな……休みが欲しい」

「……どうやら私には二人の姉がいるらしい」

「……さすがにずっとこのドック？つていうのかな？でジツとしておくのも嫌だな」

「……それにしてもオーシア連邦かあどんな国かな？」

「……なるほど、オーシア連邦と私の祖国ユークトバニア共和国が……喧嘩してい

るって!!

．．．それで私はこの国の人たちを守るために作られた．．．なら、期待に答えられるよう頑張らないと!!

．．．でも、なんかベルカっていう国がなにか悪いことをしているって聞いたけど何だろう？

．．．どうやら私の国の偉い人とオーシア連邦の偉い人があつて喧嘩は終わって仲直りをするって!!

．．．いいことだけど．．．海に出てみたかったな．．．もう、ずっとドツクにいるし

．．．お姉ちゃんたちには一回もあつてないからなあ．．．あつてみたい．．．

．．．それで私の国の偉い人とオーシア連邦の人が仲直りをして一緒にベルカっていう悪いことをしている国をやっつけに行くって!!

．．．え？ 私たちの出番なの？（ ・ ω ・ ）

．．．あれからベルカ戦争っていう喧嘩が起きちゃったけど私たちの国側が勝ったって整備員のおじちゃんが言ってた!!

・・・それで・・・ユークトバニアとオーシア連邦はすごく仲良しになってお互いの危ないもの・・・ロケットとか大砲を捨てるってことになったんだ・・・

・・・私たちは・・・解体されるかもって言ってたけど・・・私は皆が笑顔になればどんなことにも頑張れるからいいよ!!

・・・でも最近は整備員のおじちゃんじゃなくて怖い顔をした「ぐんぶ」っていうところの人たちが多く見るけど・・・どうしたんだろう？

・・・うーん？眠い・・・どうしたんだろう？整備員のおじちゃんたちがあわただしく動いているけど？

・・・え？ユークトバニアとオーシア連邦が戦争を始めた？

・・・どうして？どうして仲直りをしたのに喧嘩をするの？

・・・喧嘩すれば皆が家に帰れなくなるかもしれないのに

・・・私だって戦わないでオーシア連邦の皆と話してみたい・・・本当は喧嘩せず
手と手をつなぎあえば戦争なんてなくなるのに・・・

・・・うーん、でも私はこの国に生まれた以上、私とお姉ちゃんはすごく強い潜水艦らしいから先頭に立って皆を守らないと!!

・・・あれ？ぐんぶの偉い人だ？どうしたんだろう？

「……これが例の三番艦か」

「は、はい！そうです！」

「……それで間に合うのかね？もうすでに一番艦は実戦投入されて先ほどオーシア連邦の空母二隻を轟沈させた」

「……え、お姉ちゃんがもう戦いに行っているの？でも、すごいなあお姉ちゃんはどう空母を二隻倒しちゃったもん

「……いえ、まだ不可能です……まだ、甲板の問題が解決していません」

「そうか……この艦が完成すればオーシアの豚どもは犬死するだろう……間に合わせるように」

「……そんな……私……まだ出られないの？」

「……私だって！早くみんなと一緒に戦ってみんなの希望になりたいのに」

それから数日経った

「おい、聞いたか？例の一番が轟沈したってよ」

「……え、お姉ちゃんが……死んだ？」

「え？マジでか？そんなのこっちには流れてないぞ？」

「俺も噂で聞いた程度だがなんでも上層部が戦意損失を防ぐために極秘にしたらしい」

「おいおい……そんなの嘘に決まってるだろ」

「……確かに整備員のおじちゃんか一人の言う通り嘘でお姉ちゃんが生きてるに決まっている……だって私のお姉ちゃんだもん……」

「……でも本当らしいぜ？なんでもアークバードにやられたとか」

「アークバードってあの!?!」

「あれの使い用途違うだろう……」

「……なにか整備員のおじちゃんたちがしゃべっているが私は早く海に出たい早くお姉ちゃんが無事か確認したい」

「……早く……早く……海に出て皆を守らないと」

「……もう、私みたいな家族を失って悲しむものを少なくさせないと……」

「あ、でもよ……もう一隻……二番艦だっけ？……そいつは沈まないだろうって上のやつら言ってたぞ」

「たしか……らー……なんだっけ？」

「ラーズグリーズだ……たしかなんかの童話から持ってきたそうぞ」

「……たしか二番目のお姉ちゃんかな？おじちゃんが言うには「しようこー」っていう人が最強艦隊って言った」

「……わたしもそんな名前が欲しいなあ……だってかっこいいもん……」

．．．私の名前なんて．．．確か．．．なんか悪いことだった気がする!!．．．意味忘れちゃった．．．

．．．あれから結構経ったなあ．．．まだ、海に出れてないけど
すると整備員の一人がドックに飛び出して叫んだ

「おい！大変だ!!二番艦がラーズグリーズ海峡に沈んだそうだ!!」

．．．そんな．．．なんで．．．

「おいおい．．．この国大丈夫か?．．．」

「今のうちに逃げる準備とか．．．」

「馬鹿野郎!!逃げたら軍部の奴らに殺されるぞ!!」

．．．なんで戦争なんか．．．人間ってなんで戦争なんて続けられるの?

．．．戦争したら．．．みんなが悲しむことしかできないのに．．．

．．．私はみんなを守るために生まれたのに．．．

．．．あれから私の国は作戦に失敗を続けたらしく戦争に負けてしまった

．．．私は生き残れた

．．．でも、戦って生き残るじゃなく．．．ずっとこの中で

．．．自分が許せなかった．．．みんなが必死に戦っているのに私は暢気に安全なところにいる

．．．そんな自分が許せなかった．．．もつと私の開発が早ければ．．．もつと早く戦場に立てていたら．．．

．．．お姉ちゃんたちも．．．ユークトバニアの船も．．．兵士さんも．．．

．．．死なずに家族の元に帰れたのに．．．

．．．私は母国とオーシア連邦の融和政策の一環の条約でスクラップになるそうだと

．．．でも解体にお金がかかるからポートエドワーズのGRトレーディング本社って

いう会社に売られるそうだと

．．．私は何もできずに．．．なにもやらずに終わっちゃうのか

．．．会社に売られた後、エルジアっていう国が私を買うことになったらしい

．．．エルジアに着いてから．．．マティアス・トーレスっていう人が私の艦長になるらしい

．．．何でも．．．こんびーふ．．．じゃなくて「コンベースの英雄」って呼ばれているって

．．．でも．．．私には関係ない．．．それはそのエルジアの人のことで．．．祖国の人じゃないもん．．．

．．．あと、エルジアの人から艦装工事が行われたあとに試験航海でスプリング海方面に行くって!!

．．．やった．．．ようやく海に出られる!!

．．．もう、所属している国は違うけど．．．今度こそ．．．今度こそは絶対にこの国で悲しむ人を失くす!!

．．．もう、私みたいにお姉ちゃんたちを失って悲しむのは．．．終わりにする!!

．．．見てお姉ちゃんたち．．．国が違うけど．．．私、皆の希望になってみせるよ!!

しかし、2016年11月10日にトウインクル諸島から南南東1300kmのスプリング海海上で消息を絶った。

・・・う、うううん？こ、ここはどこだろう？確か私はスプリング海海上を航海してたはずじゃ・・・

．．．どうやらここはどこかの海底みたい．．．でも．．．動けないや
．．．15度も傾いちゃってるし．．．これは救助を待つしかないかな？
．．．一応救助信号を出したから．．．いつかは来ると思うけど
．．．でも！乗組員さんと一緒なら大丈夫！！

一週間後．．．

．．．うくん？まだ、来ないのかなあ？
．．．艦内の乗組員さんたちもお互いに励ましあって頑張ってる！！
．．．特にあのトールレス艦長っていう人が一番頑張ってた！！
．．．私も挫けずに待たないとね！！
．．．でも、忘れられたりしてたら．．．だ、だめよ！！そんなネガティブな考えを持つ

てちゃ！！

一か月後・・・

・・・遅いなあ？

・・・搜索・・・難航しているのかなあ？

・・・乗組員さんたちも頑張っているけど

・・・私は・・・少しいやかな・・・ずっと暗い中で独りぼっちだもん

しかし、エルジア海軍は必死に搜索したが結局見つからず事件はお蔵入りされてしまった

そんな事実を知らない乗組員はそれでも無駄な努力をしていた

三か月後……

その夜、とある夢を見た

(夢の中)

……うううん？あれ？ここはどこだろう？私……たしか海の底にいたのに？

そこはどこかの海の上であつた

海底のように暗くはなく青い空が見えた

すると水平線にある一つの影が見えた

……おい！○○○○！こっちにおいでよ！！

見覚えのないはずなのに直感ですぐに分かつた

……お姉ちゃん？お姉ちゃん！！

……そうよ！！早くおいで！！

沈んだはずの自分の姉だとわかり最大速度で向かつて行つた

死んだはずなのになぜ今、目の前にいるのかはわからないがそんなことはどうでもいい急いで向かつて……もう、目と鼻の先になつた

……お姉ちゃん！ようやく……ようやく会えた！！

……うん！そうだね！……これでようやく……

・ ・ ・ あなたを地獄に落とせるわ

・ ・ ・ え？

気が付くと周りは青い空が赤くなり

海も血のように赤くなってきた

・ ・ ・ え!? なんて!?

・ ・ ・ ねえ? なんであなただけ生き残ったの?

すると自分の周りから何かが浮かんできた

・ ・ ・ みんな

すぐに直感でわかった ・ ・ ・ かつて自分の祖国の仲間だと

しかし ・ ・ ・ どれも所々崩れたり錆びていた

・ ・ ・ 『ねえ? ○○○○○? なんて、あなただけ安全なところにいるの?』

・ ・ ・ 『熱いよ ・ ・ ・ 海に沈みたくないよ ・ ・ ・ 』

・ ・ ・ 『君が来ていたら ・ ・ ・ 私たちは死なずに家に戻れたのに ・ ・ ・ 』

・ ・ ・ 『死にたくないよ ・ ・ ・ 死にたくないよ ・ ・ ・ 』

・・・は!!?

気が付くと先ほどの見覚えのある海底だった

・・・な、なにあれ・・・夢・・・だよね？

・・・あれって・・・お姉ちゃん・・・だよね？

今さっき見た夢が事実なにかわからなくなってくる

・・・そんなはず・・・ないよね？・・・お姉ちゃんは・・・私を恨んでなんか・・・

しかし、その日を境に毎晩あの悪夢を見ることになった

再臨する救済者

半年後・・・

・・・はあ・・・はあ・・・また・・・あの夢・・・夢だよな？・・・夢に決まつてるよね？・・・そうだよな？・・・そうに決まつてるよね？

・・・乗組員さんたちも少しずつだけど衰弱している・・・早く・・・お願い・・・タスケテ・・・

しかし、どんなに願っても助けは来なかった

一年後・・・

少しずつだが・・・精神が壊れだし・・・そして・・・

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

・・・許して・・・もう、許して

完全に壊れてしまった

誰もいない空間に向かって必死に謝るが誰もいない

・・・私が・・・私が悪かったから・・・

・・・お願い・・・だれか・・・コロシテ・・・

さらに半年後・・・

・・・『・・・・・・・・・・・・』

もう、夢と現実の区別がわからなくなり早く死ぬのをずっと願っていた
艦内でも死者が出ており希望が完全に失っていた

・・・ただ一人・・・英雄を残して

事故発生から二年後・・・

沈んだと思われていた艦が見つかり中から330名が生存を確認した

生存者の証言によるとトーレス艦長のおかげだそうな

・・・結局、死ねなかった・・・みんなの元に行けなかった

・・・いや、でももう死んでいるのでは？今見えている世界も夢でまだあの海底にいるのかな？

それはエルジアのドックにいた

・・・なんで死ねないのだろう？

・・・はやく死にたいのに・・・

それから一年後

エルジアとオーシア連邦の戦争が始まった

・・・また、戦争か

・・・結局、平和なんて・・・夢物語か・・・

・・・昔、言ったかな？・・・手と手をつなげば平和になれるって・・・

・・・そんなのなかったな・・・あの時に見てしまったもん・・・人間の愚かさが・・・

．．．でも、トールレス艦長は本当に英雄だ
．．．あの人についていけば生き残れる

．．．あと、どうやらエルジアの主力艦隊が三本線つていう奴らにやられて私は即応予備艦隊（ラーン艦隊）に新設された特殊戦闘艦部隊に配属されるらしい

．．．でも、私には関係のないことだ

．．．艦長のことだけを信じればいいのから

．．．この世界で平和になるには犠牲だつて必要だ

．．．あと、どうやらオーシア連邦は私を大量破壊兵器と見て拿捕しに来るらしい

．．．つくづく人間ていうのは愚かな生物だよな

水平線のかなたからオーシア連邦のシンボルを掲げながら攻めてきた

．．．あれがオーシア連邦の艦隊．．．あと、それでへんな動きをしているのが．．．
あれがか．．．

．．．でも、三本線？それで救える命があると思つていいのかい？

．．．君は上の言うことを聞いて虐殺をしているだけでそんなのじゃ戦争は終わらない、ただ殺された人たちが恨むだけだ

すると通信が入る

「命令だ!!自沈しろ!!」

・・・上層部のお偉いさんか・・・自沈?なんで?

・・・確かに自沈すればお姉ちゃんたちに会える・・・でも、それで皆が喜ぶ?

・・・悪いけど私は反旗を翻すよ・・・私は私なりのやり方で戦争を終わらせる

その日、トーレス艦長を含む全乗組員がエルジアを離反した

・・・さてと・・・例の目的の砲弾は手に入った・・・あとは撃ち込むだけ

・・・目標は首都オーレット・・・計画開始は9月19日・・・これが成功すれば戦

争が終わって皆が平和になって・・・お姉ちゃんたちに許してくれる・・・

・・・後はこのPX80443味気のない海域名海域を越えればいい・・・でも、艦長が待ち伏せをされてるって言うってたな

・・・やはりいた・・・ソノブイを落としてきてる・・・見つかったら厄介だ・・・落

としている機体を破壊するか・・・安心して・・・あなた達の死は無駄じゃないわ・・・
だって今から私がこの戦争を終わらせるもん。でも、やっぱりいるのね・・・三本線・・・
邪魔だよ君・・・

・・・くそ・・・ソノブイの投下が完了して場所がバレた!!

ドガアアアアアアン!!

・・・あと、少いでピアニー海溝だったのに・・・バラストタンクが破壊されて長時
間潜水ができない・・・

・・・いいだろう、三本線・・・そんなに私たちの計画の邪魔をするなら・・・今こ
こで!!

しかし、激戦の末・・・トーレス艦長は降伏を言い出した

・・・これがお姉ちゃんたちが戦った人間の力・・・すごかったなあ

・・・これで・・・もうあの夢から逃げられるかな？

船体のほとんどの武装が破壊され敵も国際法で攻撃を辞めた

．．．でも．．．本当にいいのかな？

．．．このまま戦争が続いたら．．．もつと悲しむ人がでる．．．

．．．なら．．．せめて!!

．．．1000万人をまもらないと!!

船体から巨大なレールキャノンが出てきた

それに気が付いたのか一機の戦闘機が急速に接近してくる

．．．邪魔をしないで三本線!!これは．．．これは!!．．．私なりの救済虐殺なんだから

!!

しかし．．．

ドカアアアアアアアアアアア!!

レールキャノンにミスイルが当たってしまった

そしてそれが合図か先ほど止んだ攻撃が再開され．．．

．．．ああ、負けちゃったな．．．また、あの暗いそこに沈んでいくのね．．．

．．．結局、救えなかったなあ。私はみんなを守るために作られたのに．．．

．．．でも．．．これで．．．許してくれる?．．．お姉ちゃん?

船体が二つに割れてそのまま海の底に沈んでいった

?? 「・・・う、まぶしい・・・あれ？」

目が覚めるとそこは床も天井も白い部屋にいた

?? 「おかしい・・・私は確か沈んだはずじゃ？」

?? 「あ！起きたようだね！！」

可愛らしい声が聞こえて振り向くとそこには小さな少女がいた

?? 「・・・あなた・・・誰？」

?? 「わくたしの名前はあ！！神です！！」

すぐくノリノリな感じで自己紹介したこの子・・・

?? 「へえくかみちゃんって言うんだね？お母さんたちはどこ？」

神 「えつとねえ・・・私、迷子に・・・じゃなくてえ！！GODのほう！！」

?? 「・・・神様」

神 「そうよ！これでも神さmぐええ！！」

その子は神の首を絞めつけた

神 「ちよ!!? 苦しい!? 苦しい!？」

?? 「なんで・・・なんでお姉ちゃんたちを殺したの？なんで私をもつと早く出してく

れなかったの？・・・なんで・・・なんで」

船なのになぜか涙を流しながら訴える

神「ちよ!?! 話すから!! 一端落ち着いて!!」

・・・そして一度落ち着きここに呼ばれた理由を教えてください

神「えつとね? 実はあなたはここには来ないはずなんだ」

?? 「・・・なら早く殺してください。神様ならできますよね?」

神「最後まで聞いて：私はここに来た者たちを「転生」させるのが私の仕事なの：
それで実は君が来る前に二人ここに来たの」

?? 「そんなの知ったことじゃありません・・・」

神「・・・話の途中だけどき・・・なんでそんなに死にたいの?」

?? 「・・・私が死ねばお姉ちゃんたちは私を許してくれるって思うから」

神「・・・そう、なら尚更君を転生させないとね!!」

?? 「・・・え?」

なにを言っているんだこの神は?

自分は生き残ってしまったから償うために地獄に落ちないと

神「・・・さつき言ってた二人って君のお姉ちゃんなんだ」

・・・なんで

?? 「なんでお姉ちゃんが・・・」

神「これはね・・・」

神「・・・本当にいいのかい？キミたちは転生して新しい生活ができるんだよ？」

シンファクシ「いいんです・・・転生する権利を妹にあげてください・・・いいよね

？リムファクシン？」

リムファクシン「うん！私たちは十分あつちで楽しんだから後はアイツにも世界のすばらしさを知ってほしいしな!!」

神「・・・わかった・・・じゃあ、あの子を転生するね？」

シンファクシ「・・・はい・・・あ、あと一つ・・・あの子・・・自分だけ生き残つて苦痛を得ているけど・・・私たちは恨んでいないよつて言っておいてください」

・・・てき」

?? 「・・・お姉ちゃん（ポロポロ）」

涙が頬をつたり下に落ちる

神 「それでどうする？・・・死にたい？」

?? 「・・・いえ!!お姉ちゃんがチャンスを私のためにくれました・・・無駄にはし
せん!!」

神 「・・・そうかい・・・なら、その穴に入りな・・・そしたら転生するから・・・
あ、転生先はランダムね」

?? 「はい!!ありがとうございます!!かみちゃん!!」
神 「だからあ!!GODの方たい!!」

こうして緑色の土管をくぐりながら転生していった

・・・う、うくん?ここどこだろう?

そこはなにかの容器の中らしく暗くて少し自分には小さかった

?? 「・・・でもやっぱり暗いところは苦手・・・どこかに出口が・・・」

すると容器が・・・

ぶしゅううううううううう

蓋が開きそこから白い軍服を着ている男性と銀髪に黒い羽織りを着て弓を持っている男性が見ていた

?? (この人白い軍服を着たのがここの指揮官かな?)

とりあえず自己紹介をする

アリコーン「初めましてシンファクシ級改めアリコーン級原子力潜水航空巡洋艦アリコーンです!!・・・さあ、助けられたい人はいm(プシユー)・・・あれえ?」

・・・なんか銀髪の男性がギョツて顔をした後、そつ・・・と閉められたんだけど?

なんで？

デートその後!!

・・・あれから大鳳と基地に帰ったけど

遅すぎてメイド長と指揮官にめっちゃ怒られた

指揮官「・・・なにか言うことは？」

天喰・大鳳「連絡もせずに楽しんでしまい申し訳ございませんでした」

指揮官「うむ、よろしい・・・あ、あと天喰？明日、秘書な」

・・・解せぬ

もつと大鳳を一緒にいたかつたのに・・・

休んだ日の次の日に面倒くさい係だと聞いて落胆する天喰だった

え？夜はどうしたのかって？・・・流石に理性が保てないから別々の部屋で寝たよ

次の日!!

東海「ふう・・・疲れた」

曇天「はあ・・・はあ・・・死ぬ」

昇龍「お、起きて月影・・・ようやく休めるよ・・・」

月影「(⊠ ⊠ ⊠) スヤア」↑力尽きた

その日の朝

天喰が異常なほど体力が上がったので朝練のメニューを三倍にしてやったが天喰以外はヘロヘロになっていた

東海「・・・本当に相棒・・・あなたどこからそんな体力が出たのですか？」

天喰「え、おぶＺ・・・じゃなくて・・・なんか知らんうちになつてた」

・・・言えないわな

だつてまさか敵が送ってきた力だとか言つたら即分解治療とかありそうだもん

天喰「まあ・・・そのうちわかるさ」

東海「む・・・そうですか・・・」

そつと話をはぐらして更衣室で着替えに行く

曇天「いやあ・・・濡れたわ・・・」

「流石にいつもの三倍もしているので練習で使っている薄着も絞ると汗が大量に出
てきた

昇龍「ほんと・・・寝たい・・・ん？」

担いでいた月影を適当な椅子に放り投げた後、昇龍は天喰を見て何か思ったようだ

天喰は前まで記憶喪失で運動もできずに今はリハビリ・・・リハビリ？ ついでに運動

しているので前の体より筋肉のつきがよくなり益々ゴリマッチョ……っていうほどではないがムキムキになっていつている体……だが、背中に気になる物があった

昇龍「……天喰」

天喰「ん？なんだ？」

昇龍「その背中にある引つ掻き傷はなんですか？」

天喰「……ナンデモナイヨ」

東海「え、どれ……あ、ほんとだ」

曇天「なににやられた傷なんだ？前の検査ではそんなの無かったよな？」

天喰「……ちよつとデカイ猫と

戦ってたわ」

東海「……ならこの二日間……えつと確か昨日は大鳳とデート……あ（察し）」

曇天「デート……引つ掻き傷……昨日遅く帰ってきた……oh（察し）」

昇龍「え……つまり昨日は大鳳さんとセックス（ズ

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!）」

昇龍が何かに気が付いて喋ろうとしたが気が付いた時には天井に埋まっていた

天喰「ハア……ハア……ハア……ハア……お、お前ら次その話題振ったら

マントルまで沈めるからな／＼／＼／＼／＼／＼／

東海「ういつすボス」

曇天「いや、マントルって・・・まあなんだ・・・今度ゼク〇イでも買って・・・あ、ごめんそんな沈めさせるのを決意したような顔で来ないで」

天喰の大人への仲間入りを祝いつつ、もう詳しくは聞かないでおこうと決めた海上自衛隊組であつた

食堂

大鳳「・・・・・・・・・・(ぼけー)」

加賀「・・・・・・・・赤城姉さま」

赤城「あら？何かしら？加賀？」

加賀「・・・・・・・・うちの大鳳が朝からずっとあれなんだが・・・どうしたんだ？朝の食堂にて赤城と加賀はいつもどうり一緒に食べていたんだが・・・なぜか虚空を見つめたいるような目で食べている大鳳がすごく気になった

赤城「・・・・・・・・本当だわ・・・それにいつもならどつかの彼氏空母と一緒にのはずなのに」

加賀「まさか・・・もう？」

赤城「いえ、別れては無いでしょう……一昨日のデートであんなに甘い空間を作ってたから無いでしょう……でも、なんで帰ってきたのが昨日の夕方なのかしら？」

こそこそと推測しあっている狐姉妹……一方

大鳳「……………(ぼけー)」

山城「た、大鳳さん？起きてますかー？」

ゆさゆさと通りかかった山城が摩るが……

大鳳「……………天喰とお♡……………これって実質♡……………デイフフフフフ♡」

いつもは可憐で鳳凰のような大鳳がこの時だけだらしない顔をしていた

山城「……………」

もう仲間が末期であることを理解し自分の姉がいる席に戻った

扶桑「……………どうだった？」

山城「……………ダメです……………なにか悟りを開いたような顔をしていますと言っている

ことが意味不明です……………」

プリンツオイゲン「……………一応なんて言ってたの？」

山城「えつと……………天喰が何とか……………って」

プリンツオイゲン「天喰……………いや、まさかね？」

オイゲンは何かを悟ったが……まさかあの大鳳が？っと思いとどまるオイゲンであつ

た

しかも・・・

アルバコア「むふふふ!・・・わーい!大鳳!さぷらあーいず!!」

大鳳「・・・(ぼけー)」

アルバコア「え?あれ?大鳳?さぷらあーいず?」

いつもなら悲鳴を上げて驚くのが定番なんだがなぜか反応がない

大鳳「・・・は!?!・・・あ、アルバコアおはよう」

アルバコア「へ?お、おはよう?」

大鳳「今日もいい天気ですなー」

アルバコア「う、うん? (困惑)」

なぜかいつもとは違い少し淑女に似た雰囲気を出して怒るのではなく挨拶をした大鳳にどういう反応をすればいいのかわからないアルバコア

ホーネット「ヤバイって!姉ちゃん!大鳳が大鳳じゃなくなってる(?)」

エンタープライズ「どうしたんだ大鳳・・・まさかあのクソ野郎豚が何かしたのか!?

食堂内で様々な憶測が飛び交う中・・・

いつもの大鳳の反応ではなかったのどトボトボと席に戻ろうとした瞬間・・・とつて

も元気の良く大きな声でしゃべった・・・

アルバコア「大鳳？」

首元にある噛み傷はなに？」

エリザベス・ウオースパイト「ゴッつぶう!？」

ベルファスト「え? (ガシャーン!!)」

プリンツオイゲン (ガタツ!!)

あるロイヤル女王は盛大に口に含んだ紅茶を嘔き

またあるメイド長はあまりのパワーワードに皿を落とすという珍しいミスをしたり

またある鉄血重巡洋艦はまさか正解だったとは驚いて席を立った

大鳳「ななななななな・・・なにを言ってるの!？」

ようやくいつものどりの大鳳に戻ったことを察知したアルバコアはさらに弄って畳

みかけようとする（噛み傷は何を意味しているのかは分かっています）

アルバコア「なにになに♪なにか大きなワンチャンでも飼っているの？なら今度会ってみて「きやあああああああああああああああああああああ!!」

弄ろうとした瞬間、大鳳はあまりの恥ずかしさにアルバコアを天井にめり込ませた

大鳳「はあはあはあ・・・は!!」

何とか未然には防げたが嫌な予感をしギギギギギ・・・と周りを見ると・・・

プリンツオイゲン「・・・・・・・・・・」

山城「・・・・・・・・・・」

エンタープライズ「・・・・・・・・・・」

加賀「・・・・・・・・・・」

全員が固まったように動きを止めていた

大鳳「・・・い、今の聞きましたか？」

全員「「「「「・・・・・・・・・・（コクリ）「「「「」

大鳳「／／／／／／／／／／／／／／」

これだけは秘密にしておこうと昨日の夜決めていたが朝起きて完全に忘れていた
しかも食堂にいる他のKAN—SENに聞かれてしまい涙目になっていた

赤城「はいはい!!これ以上はウチの大鳳が可哀そうだから哨戒組と受託組は早く行きなさいな!!」

しかし赤城が割り込んで手をたたき気まずい空気を破った

そしてぞろぞろと駆逐艦や哨戒・受託組は食堂から出ていった

大鳳「赤城・・・ありがとうございます・・・」

赤城「いいわよそんなの・・・」

大鳳「この恩はいつか必ず返します」

赤城「あ、じゃあ今返してもらおうかしら?」

大鳳「え?」

赤城「その話・・・詳しく♡」

大鳳「ひえ・・・なんでですか?／／／／／／」

赤城「大丈夫よ・・・駆逐艦の皆は今はいないし・・・あ、決して指揮官様とのデー

トの参考にしようとか思っていないわ」

半分脅して大鳳から聞き出そうとしていく一航戦^{赤城}

ガタツと大鳳の前の席に座るって準備は完了した

赤城「・・・いいわよ♪」

大鳳「はい・・・では・・・」

いざ話そうとしたが・・・

大鳳「あの・・・なんでみんな集まってくるんですか？」

周りには大人系のKAN—SENがぎゅうぎゅうに集まっていた

フツド「何やら甘酸っぱい話が聞けると聞いて」

コロランド「私たちは姉ちゃんについてきただけだし」

クリーブランド「え!? わ、私は本当にたまたま席がなかったただけだ!!」

エリザベス「私はロイヤルの女王として聞き入れる「あ、女王陛下はダメです」・・・

なんでよ!!」

ベルファスト「私は皆様に紅茶を配っているだけです・・・決してご主人様との夜戦の活用しようとは思ってません」

・・・今一瞬間聞いてはいけないものが聞こえた気がするが気にしないことにした

赤城「それじゃ大鳳? 詳しく?」

フツド「どうでしたか？」

ぐいぐいと聞いてくる

大鳳「えつと・・・そのお・・・す、すごかったです／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

こうしてなぜか食堂で大人な話が始まった

赤城（・・・今夜は赤飯でも焚こうかしら？）

・・・なんだあれ

指揮官のいる執務室に行く途中で食堂を通りかかったけど食堂から出てきたKAN
— SENの顔が赤くなっていて俺を見た瞬間逃げるように去っていったけど・・・なん
だったんだ？

なぜかと悩んでいるうちに執務室についた

天喰「失礼します!! 原子力空母【天喰】です!!」

指揮官「どうぞ〜」

天喰「指揮官来ましたよー」

指揮官「ん、来たか・・・そんじゃ行くか」

こうして俺と指揮官は執務室を出たとある場所に向かった

く建造所く

明石「ニヤ！指揮官来たかニヤ!!」

指揮官「おう、来たぞー」

ここは建造所

何故来たのかというと

天喰「・・・やっぱやるんか？」

指揮官「・・・まあ・・・上層部の命令だからな・・・」

KAN—SENを建造するときを使う機械の前にあつたのは・・・

天喰が持っているのと同じ赤黒いひびの入ったキューブだった

・・・これはアズールレーン上層部が決定したことだが

「これ以上、例のメンタルキューブの盗難を防ぐためにKAN—SENにし仲間をせよ」
つていうもんだったけど

行けるのこれ？

明石「……まあ……天喰つていう赤いメンタルキューブで動いているKAN—S ENがいるから行けると思うニヤ」

天喰「……てかなんで本部でせずにここに任せるんだよ」

指揮官「……なんか本部は復興で忙しいからここに任せるって」

そう言いながら機械の中に赤いキューブと資金を入れてスイッチを入れる

しかし、例によってキューブは一個でいいが資金がおかしいほど必要だった

指揮官「ああ、うちの基地の資金が溶けていく……」

天喰「……今度俺も手伝うから」

建造時間も一か月というとんでもない時間だったので高速建造をした

指揮官「さてさて……どんな子かな？」

ぷしゅううう……と開けるとそこには……

大鳳よりかは背は低いが持っている武装は何やら巨大で銀髪ツインテールで競泳水着のような恰好をした少女だった

アリコーン「初めましてシンファクシ級改めアリコーン級原子力潜水航空巡洋艦アリコーンです!!……さあ、助けられたい人はい m (プシユ)……あれえ?」

指揮官「え、ちよつと天喰?なんで閉めた?」

天喰「………指揮官………今すぐにコイツを解体しろ」

指揮官「え?なんで?せつかく仲間増えるんだぞ?」

天喰「……やめとけ……救済(物理的)されるぞ」「ちよつと!!なんで閉めるの!!」……

うお!?なんで開けるんかい!?!」

こいつ……無理やり扉を破壊して出てきやがった

指揮官「あー……とりあえず天喰……この子知ってる?」

天喰「………こいつはな……」

少年すごくわかりやすく説明中……

指揮官「やば」

天喰「・・・シンファクシンって聞こえて時点で嫌な予感でしたが・・・当たってしまうとは・・・」

アリコーン「ちよつと!!私はまだそんなのしませんって!!」

・・・でもなあ

なんかコイツ・・・本能的に好きになれないんだよなあ・・・

指揮官「・・・とりあえず・・・母港案内を頼んでいいか?天喰?」

天喰「・・・あいよ・・・ほら、行くぞアリコーン」

ため息を吐きながらも行くことにした

アリコーン「うん!わかったよ!!ママ!!」

・・・ん？

指揮官「え？お母さん居るのか？・・・誰なんだい？」

アリコーン「え？ママはママだよ!!」

そういう指を指したほうにいたのは・・・

天喰「・・・え、俺？」